明治四十四年十月八日印刷納本(毎月廿五日印刷納本)
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇

第七年第十三號
第三増刊



娘時代

十月十日増刊

東京女子文壇社發行

最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦痛なく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して治療を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不妊娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡便に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進步は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて治療の目的を達するなり

獨乙の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は是等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尚梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其効最も大なり

定價
八球入金五十錢
十八球入金一圓〇〇
四十球入金二圓〇〇
特製百十球入金五圓〇
內地遞送無料

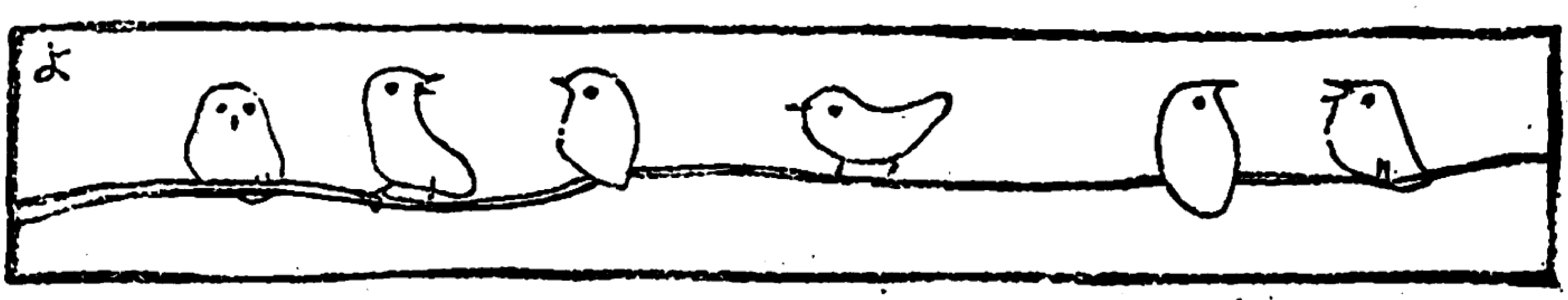
東京市本鄉區湯島天神町壹丁目五拾參番地
唯一丸發行所　中西葆光堂藥局
振替貯金東京口座千五百番（電話下谷五四七番）

◎全國到る所の有名なる藥店にて販賣す

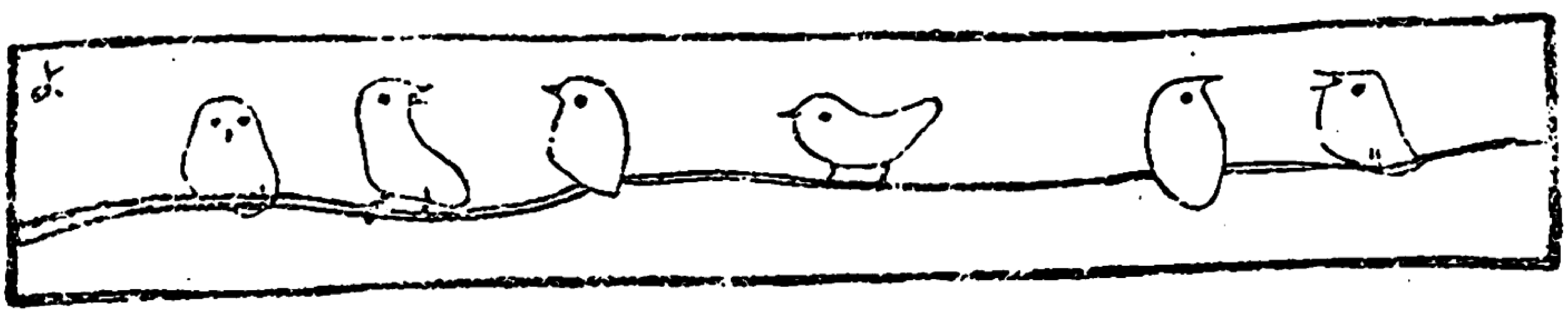
女子文壇 第三増刊

娘時代

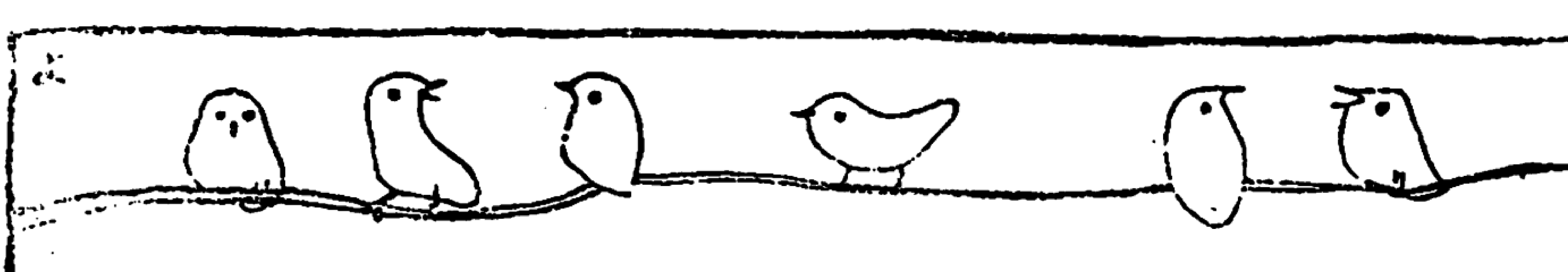
目次



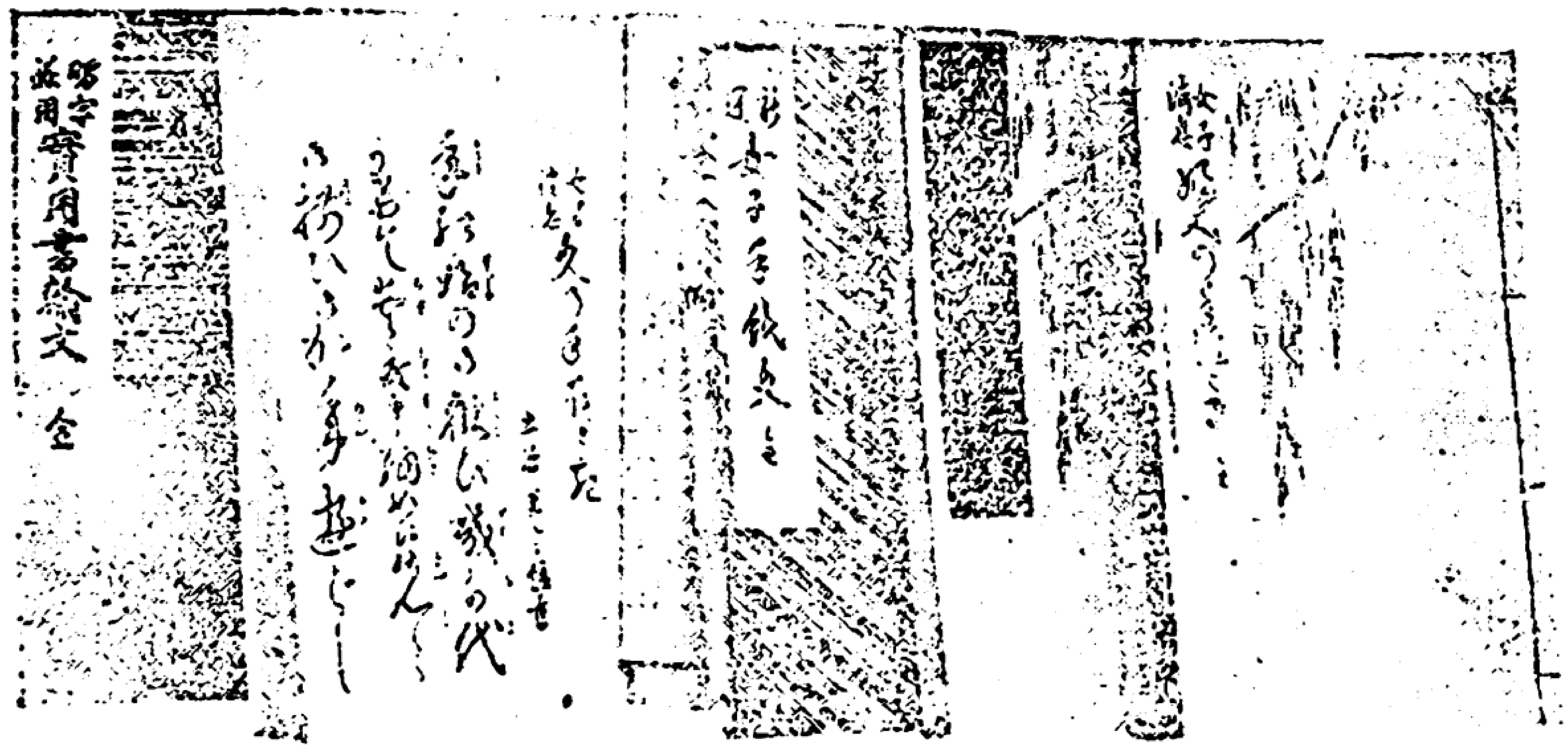
目次



目次



好評如湧



土谷圭堂先生編書
女子消息 文の手ほどき

土谷圭堂先生編書
女子消息 文のかきかた

大野宮子先生編書
新選 女子手紙の文

土谷圭堂先生編書
習字兼用 實用書翰文

いづれも習字兼用に書翰文を練習せんとする者の此上なき參考書にして、用紙は最上等の日本紙を用ひ且つ體裁頗る優美なる和裝なり

各册定價 金三十五錢 郵税各六錢

第五版出來

丘の人作　落合芳麿畫
家庭小説 華嚴の嵐

四六版頗美本 定價三十五錢 郵税金六錢

彼の藤村操が世を悲觀して華嚴の瀧に身を投じたる事實を骨子として描きたる面白き小説なり

東京市淺草區下平右衛門町

岡村書店

電話下谷四二〇四
振替東京壹九〇六五



名倉ちづ子筆

若き婦人の誇

女子文壇 七月十日增刊 好評

新文章

紙數二百頁美装 定價廿錢 送料壹錢五厘

◎一呼吸

△生の斷片
△覺め際の淋しみ
△自ら警める記
△學生の都會
△初夏の人々
△寢息

◎七色の虹

○男子の手紙に迷ふ
○不經緻な私の哀愁
○父と娘が別れの涙
○尼になつた若い女の記
○揚子江畔の新婚生活
○落日のかなた
○私の心は破れてゐる
○更衣室

◎轉宅（小說）

◎淋しい道（小說）

◎溫泉宿（小說）

△梅雨日記
△姉の家
△心の離散
△黑き洋傘
△別れてゐる間

○呪ふべき時代
○年のあぢはひ
○生立のつらさ
○解けし謎
○五月の水遊
○袷筆

◎課題

△顔△髪△浴場△山△海△劇場

◎和歌、俳句

執筆婦人

服部貞子　早川花子　長曾我部菊子　小川夢の女　小笠原ゆり子　太田喜志子　若杉はま子　河野槇子　加藤筆子　高橋りう子　田中港の女　内藤千代子　野村きやう子　山田邦枝子　八代やゑ子　松田梅子　松田妙子　前島優梨子　松村らく子　月照子　江森美子　佐藤滿壽子　佐分靜影　木村あやの　夕はし　三宅やす子　三島よし子　平塚白百合　ひなげし　鈴木春子

●發行所 東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社 (振替口座第七壹貳九番) 全國賣捌書店●

梅どく りん病 ぢ疾症 わきが
生殖器諸病 神經衰弱症 婦人科
中央醫院
東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横●朝八時より夜九時迄

子宮諸病 血の道 ヒステリー 月やくとまりたる病 子なき人
梅どく諸病 りん病消渇 わきが ぢ にきび た蟲等
生殖器諸病 神經衰弱 陰萎 遺精 早漏 發育不充分 記憶力減衰
▲病狀を記し郵券六錢を送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る
東京 淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横
中央藥院

女子文壇九月號十月號とも發行忽ち出版元は賣切れ申候

女子文壇社營業部

東宮侍講本居豐穎先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題詠
國文學士 小森松風先生編

好評
美文作法

▲全一冊大判二百卅頁 賣價貳拾錢郵稅四錢

美文の作り方を最も明瞭に解說し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者中村木公君編

好評
實地精査 女子遊學便覽

▲全一冊中判洋裝 賣價拾五錢郵稅四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

出版元 東京市京橋大鋸町 女子文壇社 發捌 到處書店
（振替口座東京第七貳九番）

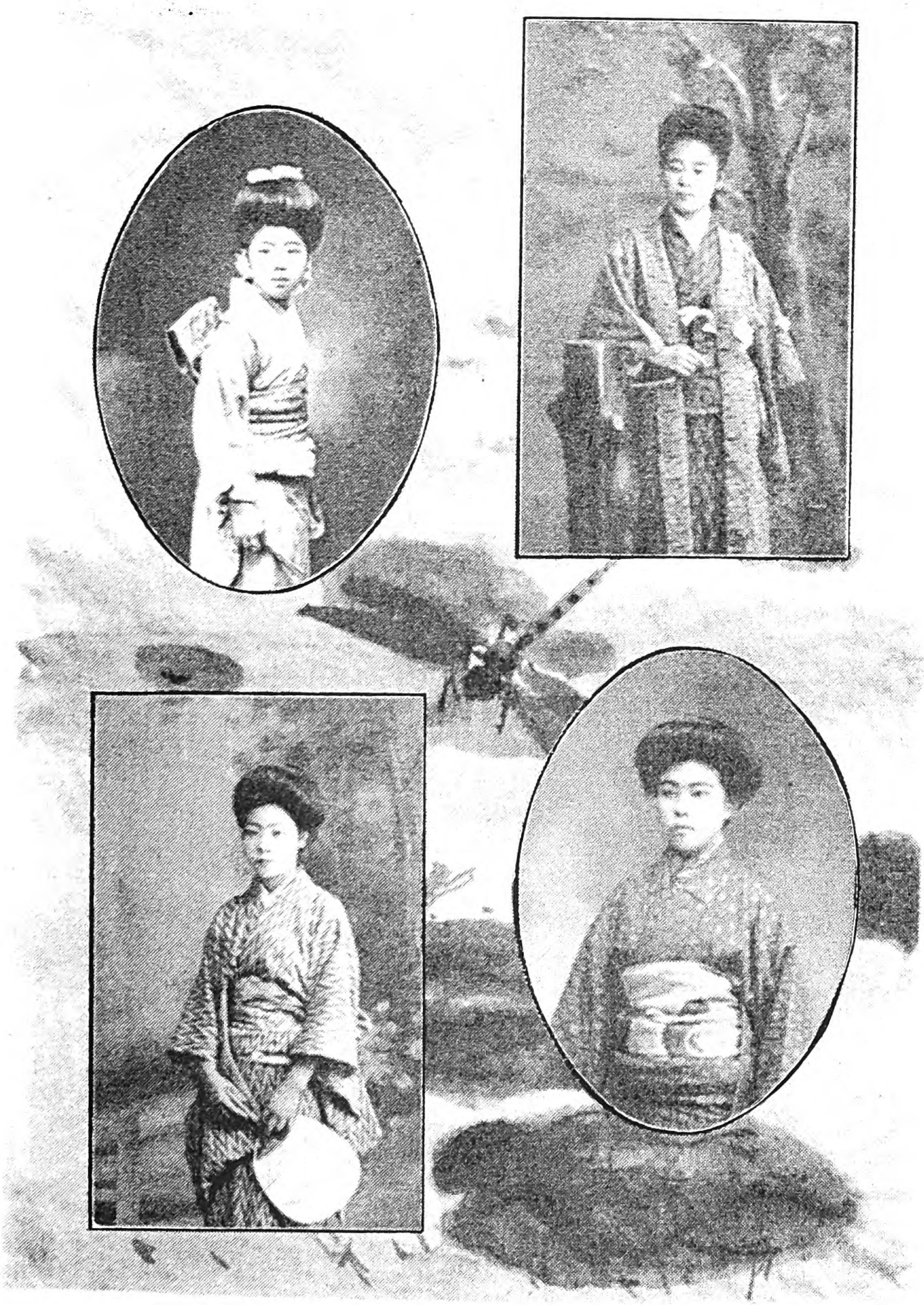
執筆者の面影



望月麗子孃
前島優梨子孃

町田靜江孃

執筆者の面影



要司村福子孃　新免榮子孃

江森美子孃　大鄉米子孃

執筆者の面影



齋川幸子孃
菊田芙蓉子孃　中村美登里孃
阿部秀子孃

執筆者の面影



河崎八重子孃　藤田喜久子孃
田澤みさを子孃　田村はつ子孃

十月十五日發行

秀才文壇 高潮號 秋期大增刊

正價金卅五錢　送料二錢

本誌第四增刊を『高潮號』と名づけ、例により現代青年諸君の傑出せる投稿を滿載する。秋は吾等青年が新らしき思想、感情の最も充實せるの時、抑ふべからざる藝術的慾求と、亢奮せる創作的感興の旺んなる、仲秋海潮澎湃たるの觀がある。諸君が努力の結晶たる詩歌文章の如何に佳作多きかは想像するに餘りあるであらう。

高潮號は特殊原稿として募集したる短篇小說、現代青年の告白、小品、長詩、短歌等を發表し、其他評論文、公開狀、紀行文、表紙畫、口繪、書簡文、小品文、六號文壇、スケッチ、俳句等を發表す。

◎猶附錄として特に當代飜譯界の名家數名に依囑し、露、佛、伊三國の文豪の傑作を飜譯したる左の數篇を添ふ。共に現文壇の一大異彩である。

死の刺（しのはり）　露西亞　フョードル・ソログーブ作

死の刺は現代露西亞文壇に最も異彩を放てる文豪フョードル・ソログーブが最近の傑作にして、枚數八十餘枚の長篇小說である。ソログーブが「死」を讚美するその深刻なる頹廢的思想は、窮迫せる氣分と深森の月光の如き魅力を以て、彼のアブサントの如くハッシシュの如く讀者をして甘醉せしめねば止まぬであらう。

父　露西亞　アントン・チエホフ作

チエホフが冷たく銳利なるメスの感觸を、此小說「父」に依つて味ふことが出來る。

三人　佛蘭西　ギイ・ド・モオパスサン作

蜜の如く甘く芳醇なる戀を描寫せし、モオパスサンの短篇。

題未題　伊太利　ダヌンチオ作

ダヌンチオが傑出せる短篇一篇。

發行所　東京神田旅籠町一丁目　文光堂（振替東京一九五五）

賣捌　東京堂○東海堂○北隆館○良明堂○上田屋○至誠堂

特賣提供

好機逸す可らず

珍無類の廉價也

□都會の婦人

□今の婦人

□地方の婦人

各書一冊二百餘頁口繪挿入大判美裝

各冊 定價金弐拾錢の處 **特賣價** どれでも一冊 **金拾錢** 郵送料壹錢五厘宛にて送本す。

出版元 東京市京橋大鋸町 振替口座第壹七貳九番 **女子文壇社** 全國書店取次販賣

娘時代



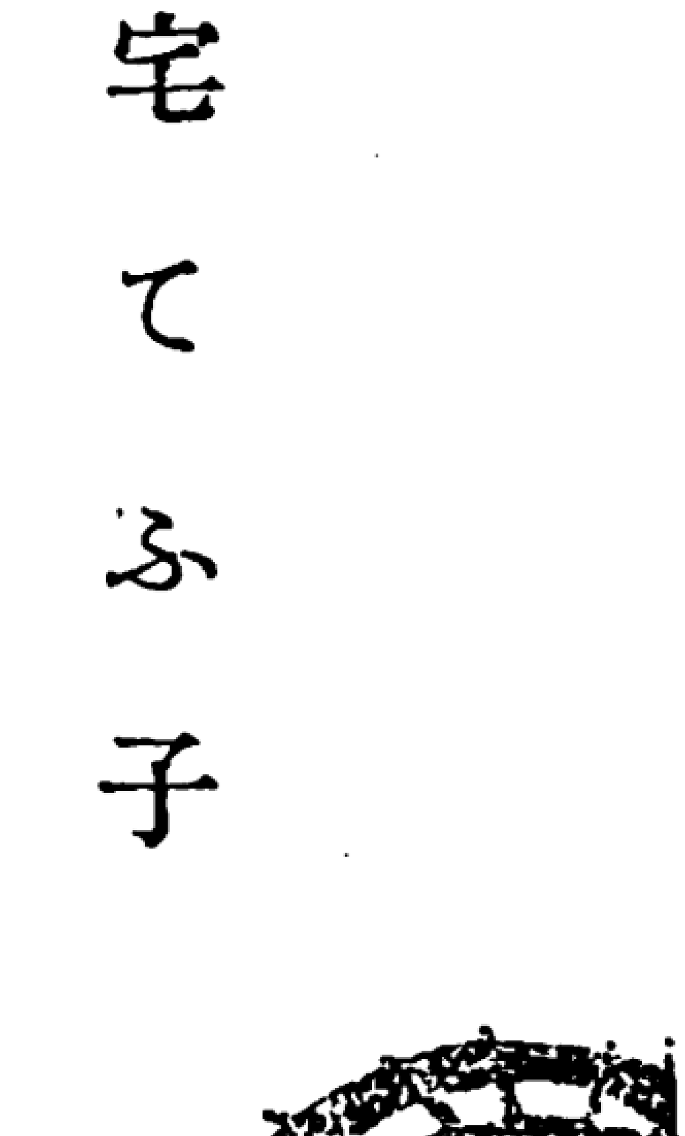
女子文壇第三增刊　十月十日發行



たゝかひの跡

小宅てふ子

初秋の冷たい月の光が、正面の芭蕉布を張りつめた襖の腰のあたりまで射しこんで、蒼白くふるへてゐる天井と室の隅々とに深い隈をつくつて、月光の中におよぐ小さいものゝかげを守るかのやうに默しあつた。亂れた髮、はだけた襟――。パラ／＼と落ちて芭蕉葉をうつわくらばの音が、をり／＼私を冥想の境からひき戻した。私は手をさしのべて、胸のあたりまで被つた毛布を除けると、靜かに起上つて襟をかき合せながら、枕もとの手摺れた桐の古い手文庫をひきよせた。深い蓋を持つた尺ばかりの箱は、やはり開かるゝことなしに私の肘の下にうづくまつた、半生の墓――私の淋しいたゝかひのあとは悉くをさめてこの中にあるのだ。



私の周圍には、弱い心を持つ人のみが多く集つた。私は屢々涙の爲めに殺されやうとした。熾烈なる太陽の光が、個々のものに濃い陰影を與へるやうに、寄りくる人々の一言一句は、少しもまざるゝことなく、みづから淒慘の感にたへざるまで、あざやかにむねに印されてゐる。箱の中の一字一綴は、いつでも一連の絲からぬいて眼前に列べることが出來る。私はとき／＼それを試みて、沙漠の樣に荒れはてたこゝろの奥に、微かな光をうけて咲く花の、ひとつ／＼に頰をふるゝやうな思出を樂しんだ。

「あなたが冷然超然として周圍のものを遇して居られるのには殆ど驚嘆されます。それでお淋しいとはない

のですか。別に身を捧げての戀といふ樣なものでもおありになるのですか。私はあなたのその手文庫といふのを憫みます――」

私とても人の子、殊には母の娘としておとなしかるべくそだてられた身は、髪に油をぬることもひとより早く知つてゐた。身を置く場所のあるかぎり、缺くるところなく生れて來た官能の扉を一杯に開いて、强烈な刺激にも飽いて見たい、芳醇な香ひにうづもれて溶溶とした心持にもなつて見たいと思つたけれども、私は早く造化神から呪はれてゐた。物心づくから私の耳に吹きこまれた敎訓は、狂はんとする私の心をわづかにひきとめて「汝がひとの胸に死ぬるのは、その人を死の穴へ陷れるのだ」と言つた。嘲りながらも私は道の外に足ることが出來なかつた。人を戀ふる力も戀はるゝ資格も私には無いものと、自ら深く思ひあきらめて了つた。

私は獨りだ、獨りぼつちだ！

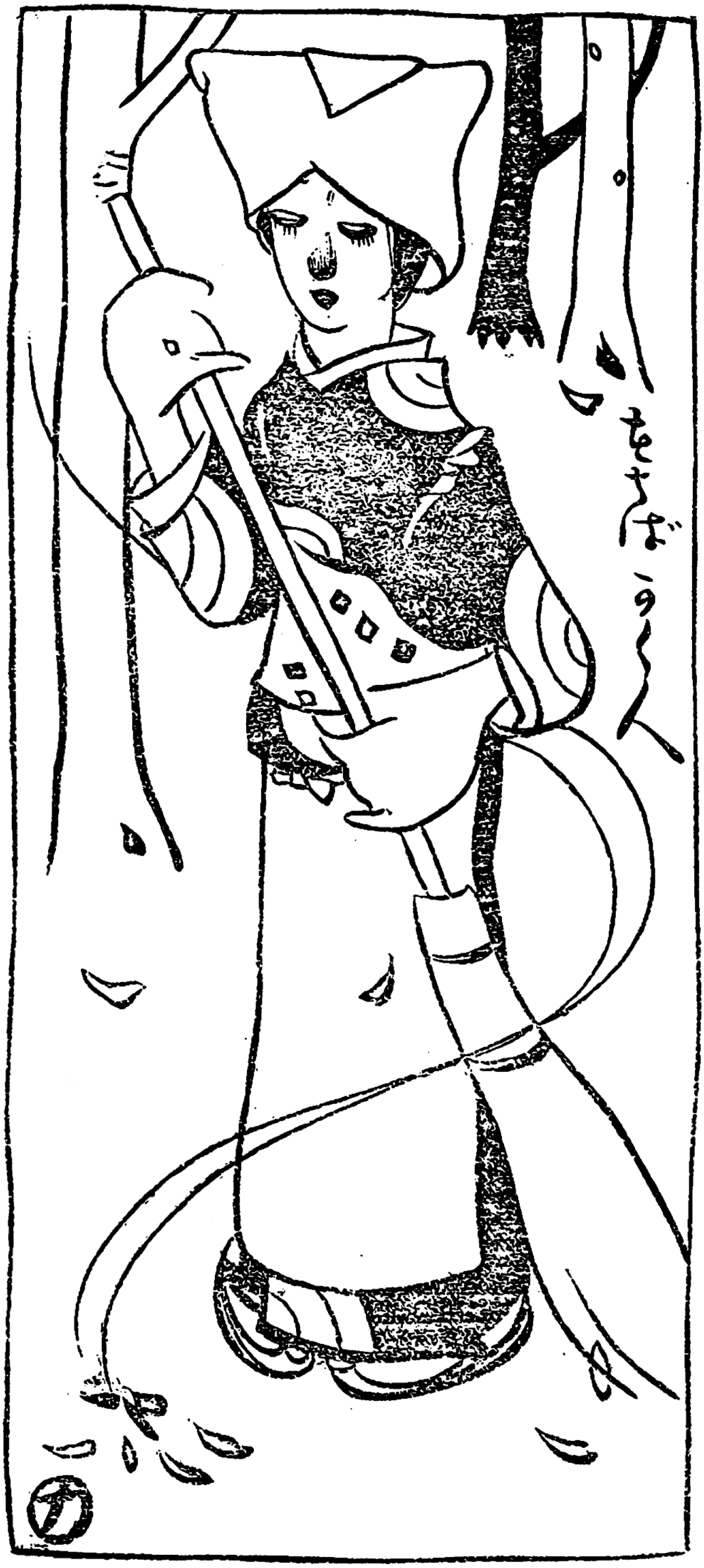
淋しい涙はやがて强い反抗心の爲めに燒き乾かされて了つた。土穴を潛る火焰のやうに、熱をともなつて五體を荒れ廻る血汐は、とき〴〵くえくづさるゝ胸の隙間をえて逃るゝやうに唇をついてほとばしつた。ぴよろ〳〵と氣管をつたつて溢れくる血の雫を袂で押へながら「私は生きる。冷たい人となつて勝ちおふせてみる」と。心の内に叫んだのも幾度だつたか知れない。

「貴女は宛然女王の樣な態度で僕に臨んでる！ 女つてそんなに强いものでせうか。え、女つてそんなに强いものでせうか！ そして僕は――男の僕は、臣下の樣に貴女に縋つてゐるではないか、貴女に悉く胸を開いて訴へてゐるではないか！ 少しは貴女だつて思ふ處を聞かせてください。半死の鯉をまないたの上に乘せて冷やかに眺めてゐる樣な態度はあんまりですよ、ね――子さん、あんまりですよ」

これをよんで私はほこらしく笑つたことを今に忘れない。自らかへりみて嘲つたことも。

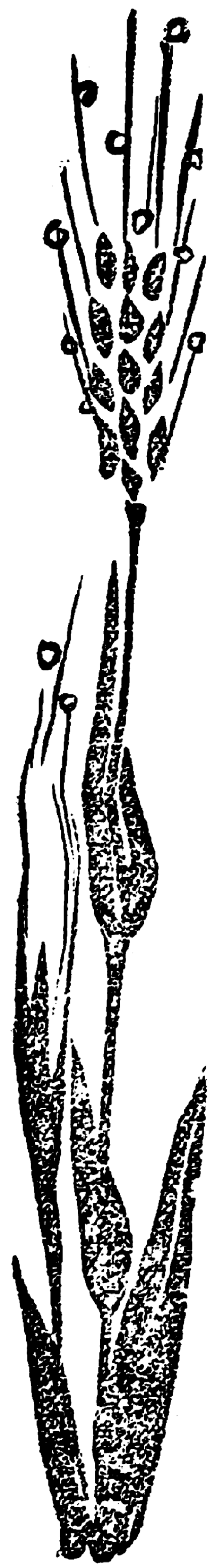
貴女は冷たい人だ、尼僧の樣に悟りきつた、行ひ濟ました人だ、そして自我のまへには自己の感情を犧牲

にする樣な人だ」
「――さんはとても私なぞの捉へ能はぬ人だといふことを知りました。身を護る爲めに遠くへ逃れてゆく樣な人なんですもの、最後の希望として「死」を欲してゐる樣な人なんですもの、まだ徹底しきらぬ凡俗の淺間しい私なんぞが、どうして捉へる事が出來ませう」
「貴女は男の胸に額をうづめて縋り泣く樣な女ぢやない。僕が貴女見た樣に鋼鐵の樣な心がほしい」
「戀くるしさみし一人を戀ひずして逝くべしといふ君をねたみつ」
　かういふ言葉が憫れまれまいとする私をよろこばせた。たえず冷やかにならう、強くありたいと願ふ心は、表面だけでもさう見られるのがうれしかつたのだ。その實、心はたえずわがする事を裏切つて、胸は情火に爛れる樣な中を潜り悩んでゐるのだつた。私は何の希望にも代へて自然に來る「死」の早からんことを希つた、敵は外より内に強かつた、敗けまいとしつゝ弱りゆく心――。次第々々につき崩されて、動搖のはては何となるであらう。不安の念がひし〳〵と湧く。
　けれども戀するのは「自己」を滅ぼす事だ――。この觀念が、ともすれば弱らうとする私の心をひきしめひきしめた。自分から滅びに入るのはいやだ。自分の命は自分一人が司つてゐたい。一飯を惠んでおいて命をくれと言つたところで、乞食もうれしくは思ふまいもの、まして男の心に永久のまことありと何を證に信じやう。私はいやだ。大切に育んだ胸のたからを、むざむざと泥濘になげうつ樣な事がどうして出來やう。こればかりにたゝかひをつゞけてゆかうともした。
「貴女は身體の一部に他人と異つたところでもあるのですか？」と言はれて、その羞恥と憤怒とに燃ゆる樣な額を見上げながら、冷やかに笑つたこともある。
　かうした中にも死の恐怖――生に對する執着が烈しく胸を襲つた。私は自分をごまかして生きる事が出來なかつた。われとわがこゝろをどこまでもむちうち追究して、きはまるところを捉まへうとあせつた。
「自分を自分から引き離して見やうとする程、むづか



しくもあり且つ苦痛なことはございますまい、あねさまはそれを冷やかに見てゐる。私はあねさまにかゝる態度をとらせる樣にした四圍のあるものをにくみますあねさまは自ら醜いといふ、併してその人間の血を遠き祖先からわかち與へられたわれ〳〵であつて見ればそれに仕方がないぢやありませんか？　人間といふ自覺の下に立つわれ〳〵が動いてゐるといふ事實を考へればあねさまの仰しやる事は餘りに自己を沒却した申分ぢやありませんか？　私はさういふあねさまの御心をなつかしみます、さう私に言はれた御言葉にむしろ恨

みを抱いて居ります。
私は今、いつかあね樣が自分の思つてることを、信じる人の前で打明けられないことはないと仰しやつたその言葉を思ひ出しました。私はその力强い決心が、一句一句に波打つてることを思つて、あねさまがどこまでも深く自己を見てゐることがます〱慕はしくなつて來ました、自己を責め、自己を確持してゆくあね樣の固い覺悟を、いかにしみ〴〵と考へて見たでせう、たとへ斷片的ではありましたけれど、あね樣が二日の間にもの語られた、自己の半生の經驗を、私はそのまゝに聞き流すことは出來ませんでした、あね樣が私にどう考へるときかれた時、私が答へなかつたのを、あね樣は單に臆病のためとのみはとつて下さいますまい實際、私にはあまりに大きな問題でしたもの。」
私ははじめて人の前に涙を流して泣く事が出來た。



年下の人は私を姉とよんだけれど、私はその人から多くのものを得てゐた、その人の言葉の中には私の姿の大部分を見出すことが出來た。自分の心の底の底までかみわけて、柔かに慰撫してくれるやうな人の言葉をうれしく思はぬわけにはゆかなかつた。我の强い割合に、臆病な、たえず悸々して涙ぐんでゐる樣な私の魂は、心からの友をいかによろこんで、迎へたらう。そのよろこびをも挾りとる樣に私はこの人とも亦別れてしまつた、それはなま血の通ふ私は女、彼方は男であつたからだ。
哀しい人はまだ他にあつた。
かうした悩みをいだきながらほこるにも足らぬ我を持して、私はどこまで迷つてゆくのだらう。巡禮、亡者、乞食、私は自分を憫れまずには居られなくなつた。

*　*　*　*



現實から離れたい

ふさ子

現實主義の流行る社會、神經質な人の下に、思想の自由を叫んで、反しても見、怒つても見、はてには憤死したとても、世の物わらひとなるばかり、それも忍びはするけれど何の反響もないことにこの一身を投ずるのも愚、複雜な人生の旅路をば女の中の女として亘れと母は敎へたけれど、人の中の人として甲斐あるライフを營めと師の君は誡められたけれど……あゝふさ子のゆくみちは……戀の爲にさゝげた生命、何ものにも犯すを許さない、この處女の權威をば祝つてやつては下さらぬか。

江戸川の水をみつめながら、青葉のかげを朝夕に辿る、目白の丘の赤い煉瓦のあの建物は——何を呪ひの無聲の叫び、つめたい道德の扉を開いてはひらねばならぬと無理强ひする、しかつめらしい立派な言葉、かくせよ、せねばならぬと云ふ、藝術の園に逍遙ふ身は戀の爲には親もすて家も名もすてゝ顧みなかつた昔の人が懷かしい。

現代人の情はさびた美くしい幻想に囚はれて夢のうちに死ぬ熱烈な情は、見出すことが出來なくなつた、都大路を今日もまた惡塵が渦まいて驅つて行く、無格好な水まき車の何と云ふ情ない姿であらう、うめくやうに自動車の去つたあと、電車のきしつたあとなどの夏の日の砂埃、これが日本の帝都なのか、この塵の中に住む若人の胸にどうして清い情が湧かう、あのきたない空氣を吸ふ身になんで激しい血が流れやう。

美くしく戀の炎——パッと燃えてははかなく消える花火のやうなと人は云ふ、葉末の露の散り易い、それにも例へていはれるけれど……あゝ私の願ひは只一つ清い美くしいこの血をば汚れた都會の若人の胸に、湧かしてやりたい、そればかり。

只思ふまゝにさすらひの自由を、與へて欲しいとよばはるのに。

せめてみづく〱しい夏の女神の世を領じます休暇丈は充分に杯を傾けやうとした、それをまた橫合から、「精神修養！　夏季寮！」と云ふ聲も仰々しく、修養風を先立てゝ、どうにかして私たちをまき込まうとするそのあはて方、滑稽がすぎてあはれにもなる。

リーダーの〇〇先生、銳い御目をギヨロ〱と「ほんたうに心から思ふなら形に現はれぬことはありませんまとまつて寄附金も集まる筈です、ほんたうに學校の精神に觸れて、學校の爲を思ふなら――愛校心が強いなら、從つて寄附金も多いわけです。

「ほんたうに」と云ふのがこゝ特有の流行語、何だと云へばほんたうにつて亂用がすぎると、いや氣がさすに！。

わずか十名の一年生、それも二年と合併の授業、存在してるのやら、してないのやら、公に認められぬそれ丈にきまゝもされるが困るのは、さう度々はエスされぬこと。

土曜の午後の大抵は病氣か家事の都合で缺席、三時間に亘る〇〇倫理、我慢して聞くのはつらい。耳にも入れず窓外を見て他の物思ひに耽つて居れば、

「左樣思ふ方は起立して！」

と大きな聲でどなられて一寸まごつくのは氣が利かぬ。一學期の出席數は僅か二三度位のもの、筆記なんぞは一ページもない、自動的に休むんだと口眞似も人がわるい。

でもね、〇〇科の方々は〇〇〇を神樣と崇めて、學校を樂園のやうに思つて、受けうりの言葉を並べ立てゝ、得々としてゐらつしやると友は云ふ、〇〇科！　あゝ思つてもぞつとする、がそれが學校の中心となつて、土臺を造つて行くのだとか。

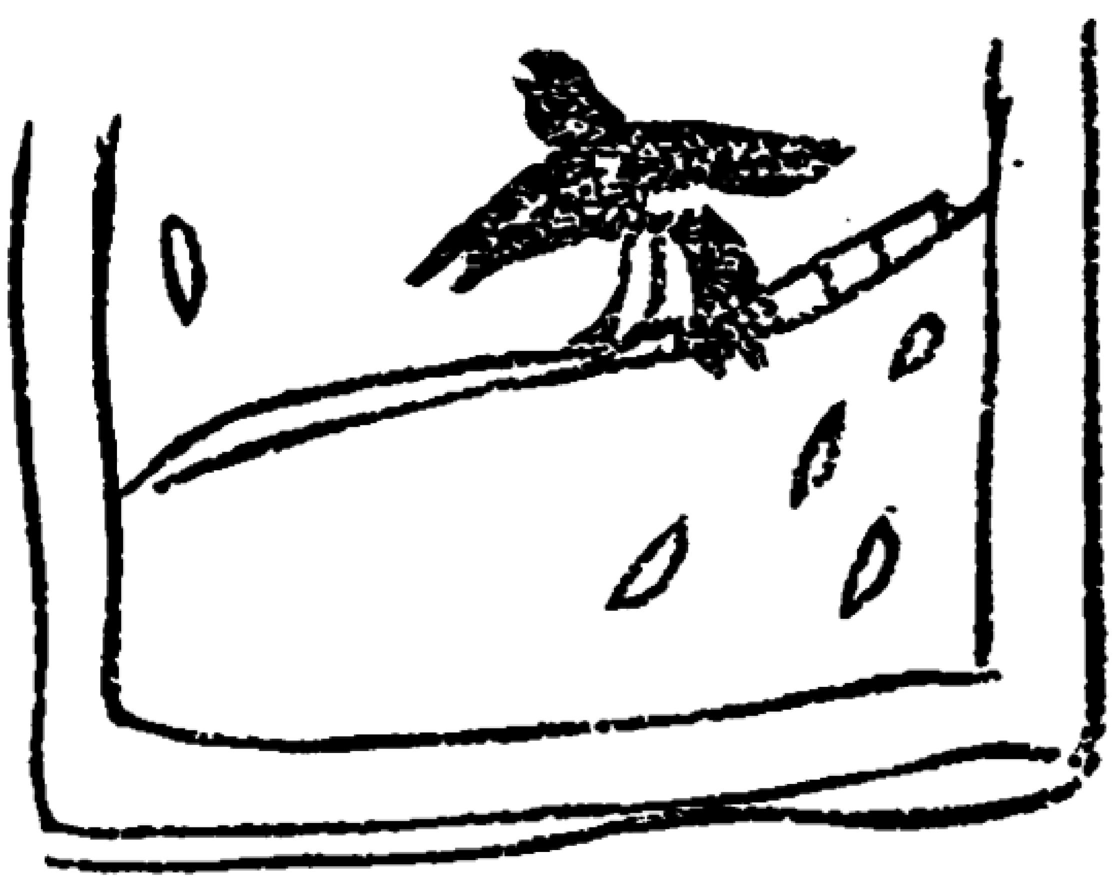
「こゝの學校の目的は學者を養成するのぢやない、藝術家を出さうと云ふのぢやない、只模範となる婦人を造るのが學校の主眼とするところだ、世間で〇〇〇の卒業生に學者がない、藝術家が出ないといはれてもそれは構はない……」

その模範の婦人とは何か、盲從でなく自分の意志から所謂自覺した上で、三從の敎を守るのだと倫理の時間に仰有つた、三從の敎――洋館のベンチに腰かけてこれを聞かうとは思はなかつた。

自覺呼ばはりも久しいもの、私は――そんなものに

だまされて女らしい生涯を送りたくはない、悟りたくもない、覺めたくもない、滿身にみなぎる若い血汐その高調をかなでるだけ……

が一がひに昔をきらふ、新らしい空氣にかぶれた女と思つては下さるな、クラシクッ———私は昔が好きなのだ、あこがれる元祿時代——あの頃に生れたかつた凄じい文明の追風は商人の家にまで吹きすさんで、それも眞のならよいけれど生中色のにえきらない、ドス黒い手で撫でられるやうな、鈍つた空氣の恐ろしい、上品とか高尙とかつておちごになんぞ結はされて白丈長を食ひ合せて油もにぢまぬ淸らかさも二日もたてば見苦しくなる、緋がの子をまいておたばこにして、二尺にあまる袂など





つて踊ても見たかつたのを！

藏の二階の金網窓に微光をたよつて梅暦をよんだ、佳人の奇遇に幽蘭の切な思ひに泣いた私は——あゝ生れつきの感情を現はすまい爲に苦しんだ、出來る丈人を欺いて心にもない事を云ひ、固苦しい文字を竝べて眞面目な人だといはれて來た、左樣僞はつた過去のいくとせ顧みすればほゝ笑みも湧く。

〇〇〇〇の仰有るのは所謂理想的文學なのだ、學校の精神を基礎として——と一と口每に云ふけれども、その模範的な婦人にならうとはうたゝねの夢にも思はない、觸れたくはない、何とか主義に一體學校と云ふものが私には有難く思はれない、何故學校へ行くといはれたら、智識を得る爲と答へてを

き、なぜ智識が要るのかと重ねて質問されたなら他人の思想を知る爲め。手段にすぎぬと云つておかう。「學校の中にもバチルスがある！」と憤激なすつた○○○、私もその一人かもしれぬ、奇をてらふのぢやないけれど只徒らに面白半分にとやかく云ふのぢやないけれど。あまりと云へば形式的な、內容のない現狀でもある。口でとやかく云つたとて冥々のことに流れて通ふ精神のひゞきが何とならう、信ぜられぬものを信ぜよといひ、愛されぬものを愛せよと强ふるはあまりに人格を無視した話。

噫――不平不安の生んだ子が、人として平凡に生を送れ、女らしい女となれと舊師の言葉も御情も仇に思ふのぢやない。

うつゝなやこの夢心地、同情の淚も得たいとは云はぬ、叱られたとて感じもせぬ、自我が强いのか、すてられぬのか、但し何かに中毒されてか？ぢやない、あゝこの我は…………

一つしよに死んでくれるとまで云つた人もあつたけれど、この情は受けられずにみちならぬ………

かなしみぬ戀ふべからざる人を戀ひありける我と思ひしる時。

戀人はあさましきかな、別れてはかたきの如くその君を云ふ。

とも吉井さんは歌つた。

寢亂れ髮のシーツにこぼれ、ぢつと仰げば露にしむ眼に君がみ顏の輝やくやうな、朗々と響く御聲音の海岸の夜に聞く濤のやう。

＊　＊　＊　＊　＊

今となつて過去はいはぬ、なつかしい幼時のローマンス、その繪を再び繰らうとはせぬ、僞はりの女はどこまでもいつはり、眞の自分を知られたくはない、周圍の人にはその時機に應じて、適當な處置をほどこしてゆくが我感情は强く高く、もゆるがまゝにもやしたい、燃えにもえて灰ものこさず、逝く夏の露のやうに潔よく消えて……世をはなれたい。

伊邪那岐、伊邪那美の命の時代から日本の女は侮られてゐた、男子に一步を讓つて居た。

がまた女の大きな權威も昔から認められてはゐる。

今更ではないが濟女のキビ〳〵しい性格がしたはれる。あんな痛快な、大膽な性質を今の女に與へて欲しい。

火事と地震と男の手紙

梨花

娘時代といつたら十五六からでせうか。草深い田舎に、水呑百姓の家の、三女として生れた私は、十六の年まで、のんびりと育てられました、姉達の外出の御供は、いつも私でした、其度毎に、人形の樣に坐らせられて、眞白に白粉をつけられて、紅筆で、目尻と、目の上と、唇と、耳朶と、頬との五處を染められて、伴れて行かれたのです。

十六の春、私は上京した、そして或る學校の寄宿舍に這入りて、それから五年の間、私は一度も白粉をつけた事がなかつた、何故かつける氣になれなかつたのです、「あなた白粉おつけない、女のたしなみですよ」と友は親切に云つてくれた、校長先生も、白粉は毎朝つけるものです、女は素顔で居るものぢやありませんと敎へて下すつた、けれども私はやつぱりつけなかつた、意地の惡い友達は、「私赤い顔してる人大嫌よ、頬がぴかぴか光つてるんですもの、ほんとに見つともないわ」といひました、そんな時でも私は、さうといつて笑つてた、何故白粉をつけない、私には私の考へがあつた、學生時代に化粧する必要はない筈だ、一體人は何の爲にお化粧するんだらう、自分の生れ付の顔よりもよく見られやうと思ふからだ、美人といはれて誇りたいからだ、つまらない、面倒臭い眞似をして、時間を消すなんて、それより寢坊した方がよつぽどいいわ、と思つてゐた。

いつだつたかをかしい事があつた、起床の鐘を一度も聞いた事のない私が、「あれ、起床の鐘でせう」と床の中で聞いた「否御飯の第一の鐘ですよ、早く御起きなさい」といはれて、驚いて洗面場へ飛んで行くと其處には、私の御仲間が二三人にこにこ笑つてゐた。

私は又甘い御菓子をよく食べた、建ちやんと二人で

餅菓子十に、あんぱん二つづゝ食べた事があつた、室長さん目を圓くして驚いて、「まあそんな小さな御腹してゐて？だから御飯が少しきり頂けないですよ、今に胃病になりますから」つていはれた。

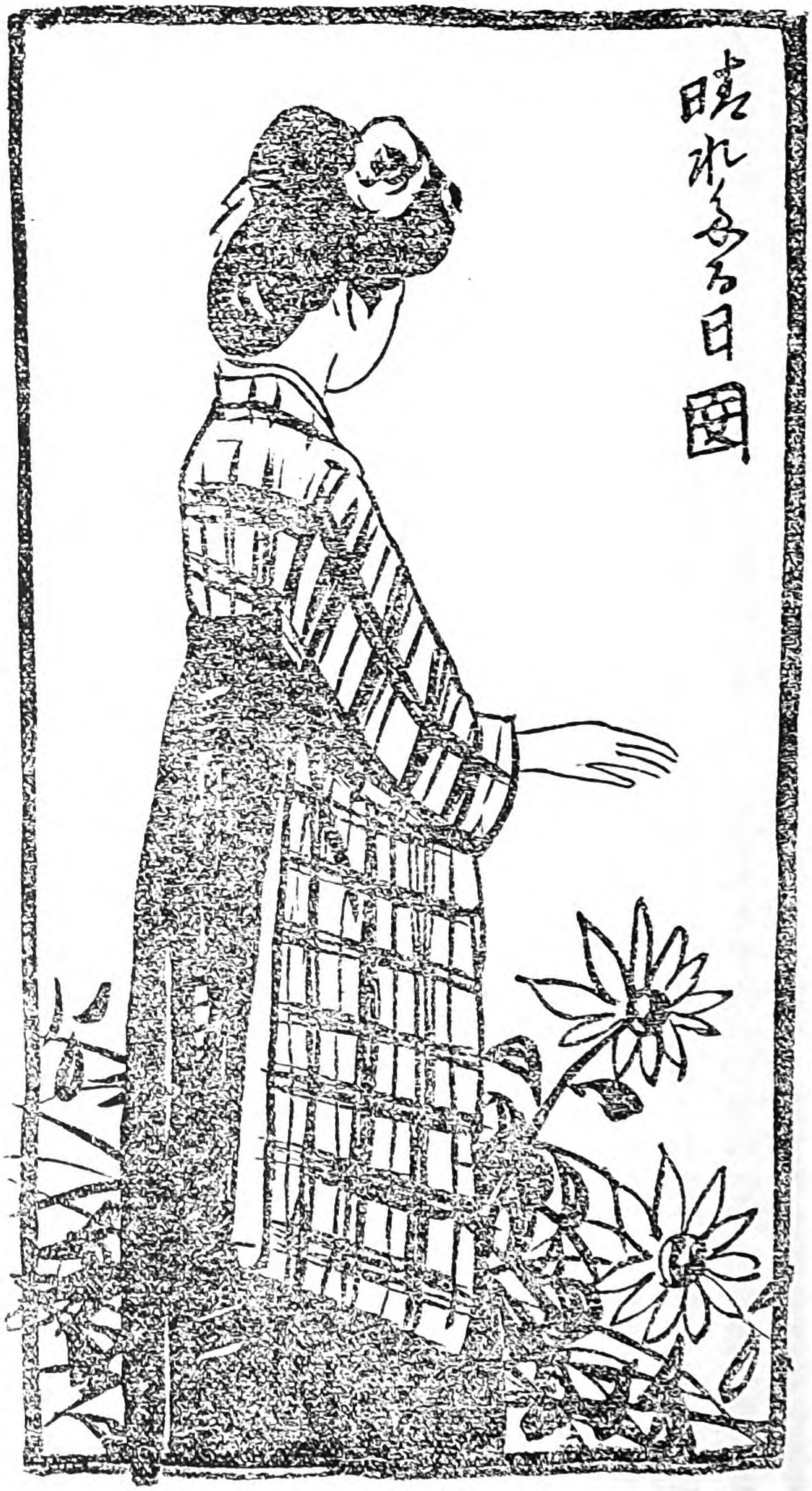
木曜日の間食には、私が當番の時はいつも餅菓子、秀子さんは鹽煎餅、せい子さんはお豆のはいつた大福Hさんは燒芋ときまつてゐた。火曜日の寄宿から出る間食も、待遠かつた、「今日は何でせう？」「さうね何でせう」「私がさつき食堂の側を通つたら御芋の匂がしてゐてよ」「さう、うれしいわ」つて誰かゞ。

外出日には皆羽をのばして飛び出すのだつたけれど私は岡野へ行くつきり、外へはめつたに出た事がなかつた、そして御菓子を食べながら、色鉛筆持つて遊んで居た。

神田に火事のあつた時、火の子が學校まで飛んで來た、其時は丁度自修時間中だつたけれど、寄宿の中は大騷ぎ、氣の早い人は荷物をまとめ始めたりしたけれど私は一度、寮窓へ見に行つたなりで、數學の宿題をやつて居た、人は驚いて「まあ隨分平氣な人ね、此騷ぎに數學等出來るの」といつた、すると私はえゝ出來てよつてすましてゐた。

それからある時、今夜の九時から十時までの間に、大地震があるから注意するやうにと、電話がかゝつて來た、さあ寄宿中は大騷ぎ、ランプと、火鉢の火は消して（其頃まだ電燈にならなかつたので）着物は上から下まで着換へて、死ぬ用意をしてゐた、同室の石川さんは「今夜家でも皆死ぬんでせうね、同じ死ぬなら一所に抱き合つて死にたいわ、私一人別に死ぬのはいや」といつて泣き出した、「さあ今夜は皆死ぬんだから最後の握手をしませうよ」といひ出した、えゝといつて堅く握手をする、今度は外の室へも御別れして來ませうといつて、すぐ御向ひの十一號へ行つて見ると眞中に山が出來てるけれど誰も居ない、皆さん御留守といへば返事はする、をや變だわと思つて入つて見ると驚いた、四人の机を、二つづゝ重ねて、中へ蒲團を敷いて上にも蒲團をかけて其中に抱合つて居た、まあ！つて驚きながら、さあ皆さん握手しませう、最後の御別れよといつて痛いほど強く握る、そして又外の室へ行く、そんな騷ぎをして居る内に、學校から大森博士に電話をかけて聞いて見るとどうもそんな、前兆はないが、そんな說が何處から出たのだか、多分虛說だら

うと思ふ」と仰しやつたそうな、それを寄宿生一同に知らせたけれど、騒ぎ立つて居るのでなかく静まりさうにもない「あらきつと嘘よ、先生はあんな事仰しやるけれどあんまり騒ぐもんだから、氣休めの爲なんだわ」なんていふ人もある、其内に就床の鐘が鳴つたので皆舍監室へ御休み遊ばせに行くと、もう、大丈夫ですから安心して御やすみなさいけれども若しもの事があるといけませんから火はよく氣をつけて下さいと仰しやつた。一同半信半疑で床に就いた、そんな時でも私は用



がなかつたので、騒ぐのは騒いだけれど、少しも悲しくもなければ泣きたくもなかつた、もう死ぬにしても大勢一所に死ぬのなら面白いだらうと思つた。翌朝何の變りもなく、洗面場へ行くと、やつぱり死なゝかつたのね、お目出たう」の挨拶は皆の間に取り交はされた。

私が十九になつた時こんな變人にもやつぱり人並の事はあつた、私が始めて異性から手紙を受け取つたのは此年だつた、それは私の幼な友達で、好きな人の内の一人だつた、始めは只葉書で、謹賀新年と、書いてあ

るばかり、私は返事に迷つた、けれども、異性とはいへ、葉書で年始狀くれたのに、答禮しないのは失禮だと思つて返事を出す事にした、それから手紙でも來たけれど、いつも、普通の友達以上の事はないので私も出して居た。

其頃又別に、某大學の人から、月並の文句を並べて來たけれど、びり〱に破いて捨てゝ仕舞つた。

翌年になると、今度はなか〱むづかしい事が出來てきた、それは、私の學校の近くに〇〇寫眞館がある其處に、小學校の時同窓だつた人が居るのを知らずに寫眞をとつた、すると其の人が、某大學の人にやつた其人は田舍へ歸ると、私から貰つたやうに話すので、村の人は私を疑つて居た、それを聞いて驚いてすぐに寫眞館へ談判に行つた、そして取り返して私の手に渡してくれといつた、其人は頭も上げず詫びた、一週間ほど經つてから手紙を寄こして、寫眞は確に取り返して破いたとある、私は約束が違ふのでもつと責めやうと思つたけれどもう面倒臭くなつたのでやめといた。

其れがすむと又外の人から來た、ある日先生に呼ばれて行つて見ると、此人知つてますかと聞かれたけれど知らない人なので、存じませんと答へた「では〇〇中學は」「知つて居ります、私の村から三十丁しか離れて居りません」「けれども此人は中學生ぢやない、獨逸語も知つてるし、それにこんな事を書くやうぢやどうしても大學生だ、兎に角あなただから此葉書を上げます、然し返事は出す必要はないでせう」と仰つしやつて下すつた、半年ばかりすぎると又來た、今度にTの住所を敎へてくれといふのだつた、先生に相談すると「やつぱり變だ、Tさんに問ひ合はして御覽なさい」といつて下すつたので、すぐに手紙を出すと、

其人は來年大學を卒業する人で、中學時代から哲學の意味を解して居て、數學には天才といつていゝほど發達してゐて一寸並の人とは變つた風の人だ、けれども返事は出す必要がない、私からやるから、といつて來た。二三ヶ月經つと、今度は厚い〱手紙が來た、それは休暇中だつたので兄が受取つて、差し出人の名がないので、開封された、けれども、倫理學の筆記見たやうな手紙だつたので、別に差し支はないけれど、年頃の女の許へ、無名で寄こすのはいけない、お前からよく斷つてやるがいゝと、いはれた。それから二三日經つと又來た、やつぱり倫理學のやうな事ばかり書いてあつたけれど、どうしたのか手紙を持つ手は怪し

ふるへた、端に、まだ顔を見た事もない、聲を聞いた事もない、只名を聞いたばかりだと書いてある。私は一週間考へた末、靜かに筆をとりて返事を書いた、そしてもし手紙は下さらぬやうにと斷つた、其後幾度か手紙が來たけれど、返事は出さなかつた、ある日、葉書で、自分は渡米するかも知れない、あなたも遊學しませんか、そして私の學校の近くのある本屋に、美學の本があるから買つて送つてくれとある。私は驚いたそして全く人並ぢやないと思つた、けれども手紙はやらずに本だけ送つて上げた、それから又手紙がきたのだ今度は自分の境遇を打ち明けて、斷りの手紙を出した、それつきりもう來なくなつた。

後で聞けば、一高に入らつしつた頃、紀念日の切符を、私にといつてTに賴んだ事があるそうな、それを何故がTは私にくれなかつたので、少しも知らなかつた、其人の友達は、いろ／＼の噂をするそうだけれど私はかまはない私の心は潔白ですもの。

ある時、私の友は其人の噂をして、冬の休み等に、雪が降ると、赤毛布を着て、田舍道を、スタ／＼歩く人だといつた、私は一度其人を見たいと思つた。

こんな夢のやうな事をして居る内に、私は段々年をとつて、とう／＼娘といふなつかしい名から離れなければならなくなつた。

私が十六の時から、今まで愛讀して居たものは、女子文壇だつた、けれども、學校に居る内は慰みに見るのぢやなかつた、小學時代から作文が下手だつたので私は女子文壇を、先生にしたのでした、だから投書しよう等とは少しも思はなかつた、私の先生が、記者樣の御仲間に加はりて居らつしつた頃でも、やつぱり、投書して見たいとも思はなかつた、その頃私の心は、淋しくなかつたからだと思ひます。

蘭香

蘭の香や佛にもあらず神にもあらず　黛笠
蘭夕狐のくれし奇楠を炷かん　蕪村
痩せたるを悲しむ蘭の莟みけり　太祇
蘭の香や衰へ初むる日のうつり　青蘿
蜂になれ折る人あらば蘭の花　蓼太
蘭の香やものに譬へゞ薄月夜　乳峰
蘭を愛す賓主の座未だ定まらず　几董
蘭の香や蝶の翅にたきものす　芭蕉
まさ／＼と蘭に古人の句かな　士朗
蘭の香に老も若きも寢覺かな　白雄

面白い月日

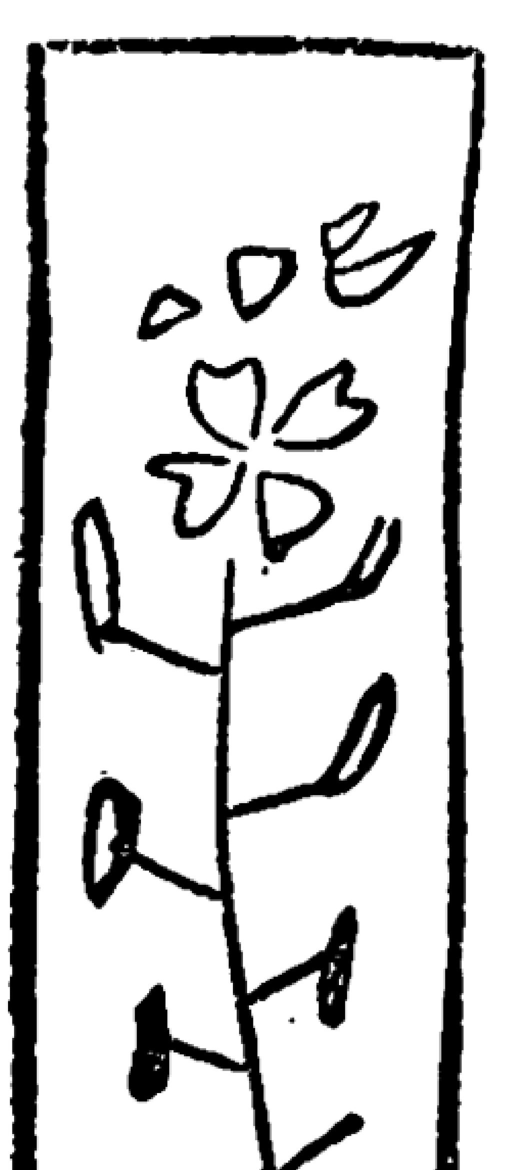
胡蝶

何と云つたつて今が花だよ、せつせと遊んで面白く暮しときなさい、つて私の顔見ると神田の伯母樣がお仰るのよ、私だつてさう思つてるの、だからお稽古の合間には一生懸命遊んでてよ、學校出たらさぞよからうと、女學校に居た頃は思つたけど、扨て出て見るとさほどよい事もないが、自由に遊べるのと試驗のないだけがのんき、其かはりお母樣のお小言はよけいに伺ふやうだ、其れもみんな私の爲めよかれと思つて下さるお母樣の御心だから、と思つて謹しんで承つてるんだけど、時々忘れちやアニ度も三度も伺ふ事もあるの、お小言つてものは然しあまり嬉しいものではない、と思ふ。鬼も十七番茶も出花、こんなお多福でもね、一寸と格好のよい束髪にでもして、ハイカツたスタイルで道を歩くと、振返つて見る人もあるんですよ、虚榮心つてわけぢやアないけど、なんとなく嬉しいもんですのね、電車だつて私大てい立つ事なんかないの、おかけなさいつて若い男が席をゆづつて呉れるのホヽヽ、仲にはね、人ごみにごまかして、そこらにふれてヤツ失敬々だつてホヽヽ、本當に失敬だわ。此の春でしたよ、荒川堤のソラ何とかつて櫻草の澤山咲く處ね、彼處へ友達と行つたんですよ、赤羽の兵營の處でまよつちやつて困つたのよ、私たちの前に年増づれ、矢張道がわからなかつたと見えて、そこに居た兵隊さんに尋ねたの、ソコからまつすぐに行けば好いのだ、なんて怒つたやうに云つたの、私達もそのあとから行かうとしたら、チヨイトねーさん送つて上げませうか、だつて先になつて歩いて行くの、おかしくつてふき出しちやつたのよ、ホラ渡しがあるでせう、向へ着いた時舟から下りる處一寸と路が變になつてたので、船頭に手を取つてもらつたの、それ見てた土方見たいな奴、ヨー別びんの御手引、一錢出してもいゝからオイラがして見たいね、だつていくらおてんばの私でも、顔が赤くなつちやつて一番困るの、工夫や土方の澤山居る處を通るの嫌よ、チヨイトお孃樣、リボンが落ちますよ、なんて耻しいから、いそいで歩くとあいにく石につまづいたりして、ヤアー、なんてはやされる、口惡のおば樣、今の內だよ、私の樣に年取ると云つてもらい度て

も誰れも云ふてくれるものがない、マア澤山云はれておきなさい、つて長ぎせるで煙草スパリ〳〵ニヤ〳〵おば樣なにかつて云へば今の内だよ、私耳にたてが出來て。此間お琴の稽古から歸つて見ると、何時にない母樣のまじめなお顔、ちよいとお出、何んだらう又嫁の話しぢやアないかと、思つてお傍に行くと、お前この人知つてるのか、つて一封の書狀、差出人は男の知らない名、又雜誌で芳名を見たとかつて云ふんだワ、こんな手紙が來る度に、お母樣の御機嫌が斜になるんで閉口よ、私が惡いんでもないのに、母樣立合の上開いたら矢張さうなの、こんな手紙よこしてハイ〳〵つて返事出すと思つてるんだらうか、押が強いのね、初めこそ文學上の交際なんて、仕舞にはアブとかハチとかつて、さうして本當のアブ見たいに金だの着物だの吸つちまつて、オサラバ〳〵、結果がちやんとわかつてるわ、これでもね、そんなヘッポコ文學者（？）を夫に持つ氣はないのよホ……、エッ？、そんならどんなのが好いかつて？、エ……、それアね私だつて二十世紀の空氣を吸つた人間ですもの、兩親がきめたからハイハイと服從はマア　なからうと思ふの、エ、丁度理想にあつて居れば、服從、イエ盲從致しますよ、私の理想は高いだらうつて？、さうね自分ぢやア高いとも思つて居ないけれど人樣が御覽遊ばしたら、何んと思召すやら、どんなのが好きかつて？、エ……さうね、自分の知つてる新家庭も隨分澤山あるけれど、自分もあの樣にと思ふて羨ましいと思ふの、十に一つ位、かたくてお勤大事と道樂もないし安心だと思へば、趣味も面白味もない、一年中こわい顔ばかり、一寸と笑談云ても人格がどうだのつて、ホ……年中胡椒ばかりなめてるんだワ、こんなのもいやよ、趣味もあるしはたらきもあるしつてと道樂であつたりね、品行がよくて、奥樣大切にして音樂だの文學だの園藝だのゝ趣味があつて御酒は二三合位、滑稽趣味もあつて家庭が面白くつて、働らきもあり末に望のある人で、とかうよいづくめなら私の理想に一番合つてゝよ、なか〳〵から三十二相揃つた人は、ありやアしないワ、もしあつたつて私のやうな女はお嫌ですつてホ……、だから私大ていな事は大目に見るとして、まあ家庭の面白い人で末に見込のあるのならよいとしておきます、私だつて殿方から御らん遊ばしたら、おいやな處だらけでせうから、おたがひに讓歩してねホ……、ですけどもまだきまらない内がなんだか樂しみなやうで、前途に春が横たわつ

てるやうな氣がして居ますわ、私丁度神樣のおみくじ引くやうだと思つてよ、こわいやうな、樂しみのやうな、凶?、吉?、引かぬ内がおなぐさみ。獨身の內はどうしても若いやうね、同年の從姉もう二歲の子持なの、ならぶと三つ位私下に見えるの、おば樣、どうしてうちの娘はふけてるだらうつて、それア違ふはずよ、とらはれの身と自由の身とはね、私の今は浮世の苦しみつて知らないの、壽ちやんは仕合せだね、女學校も出るし、お琴だのお花だのつてお稽古して、着物も買つてもらへるし、食べたいものは食べられるし壽ちやんの心配つて、どんな旦那樣もつだらう、位ののだらうつて、例の伯母樣、ホ……まつたく其の通り其の通り、其んなに赤い顏しないでもいゝよ、今におばさんが三國一のお聟樣さがして上げるよ、だつてホ……おやアマア、おば樣を信賴してこの花時を面白く暮しませう。

そんなに面白く暮したり、面白い事ないだらうつて矢張あるワ、學校の友達と一しよに郊外に散步も好き活動寫眞も好き、お芝居は悲劇より喜劇が好き、私不幸にあつた事ないから人情なんてものわからないの、此間本鄕の若竹へ行つたの、先代萩だつて義太夫、伯母樣や母樣淚と鼻と一しよにして泣いて被入るけど、私と和ちやんと太夫の顏が、小さんの落語よりおかしくつて、お腹かゝへて笑つちやつたの、あんまり色々に頭振るもんだから、引込む頃にはいてふ返しが、いいかげんこわれてたワ、よつぽど妙ちきりんな顏だつてよ、顏の事いへば同窓會に行つた時、筑前琵琶があつたのその法師盲なのよ、妙な顏の處へまつかな顏して恰度ボンチの、あんまのやうなの、向に居らしつた吉田樣プーつて吹き出しちやつて、私も我慢してた處だもんで腰かけにつゝぷしちやつたの、あいにく先生に見付られたので、あとで叱られるといやだと思つて、コソ〳〵と二人で歸つちまつたの、年取るとあの顏がおかしくないのかしらん、十七八は木の葉の落るのもおかしいつて、まつたくね、おば樣ぢやアないが今の內だから澤山笑つておこう、こんなにして暮せる娘は幸福なんでせう、だから、私よろこんで樂しく樂しく暮しませう。





見合の前

舞姫

八月一日

午前中に昨日の殘りのネルを仕立上げて、午後少し休んでから帶にかゝらうと思つて居る處へ、時日から休暇になつたからといつて水野さんが御出になる、例の海軍の生活の有樣を形容の出來ない程人をチーヤムさせるやうなスタイルでお話しなさる。

一度乘つてみたいと思つて居たボートの事を話すと「今はまだ太陽が出て居るから、黒くなるのを恐れ給ふ姫樣には夕方の方がよいから今夜乘せませう」と仰有る。お母樣に早速御ゆるしを願ふ。

まあお母樣は――

「もう大きくなつたから若い方とはいけません」

「乳母がまちがいのないやうにお供して行きますからと」何度御願しても聞いて下さらないわ。

八月二日

お松さんが朝早やく來たから、桃割に結ぶ。

乳母もお竹もよく似合ふと言ふ。お下髮の事思へば少し重いけれど、自分ながら――ホホ……。

夕方早くお湯に入り門口に出て居ると、通る人が眺めて行くやうな氣がしてならない。

八月三日

あまり永らく失禮して居たから、と言つてM樣がいらつしやつた。いろ〳〵御話しの末にE兄樣に御手紙を差上げたいと仰有る、是非差上げ遊ばせといつたものゝ、M樣も私の心をよく御存じだのにE樣へ手紙を出すとはあんまりだわ、E兄樣はM樣がなんと仰有つたとて幼い時から可愛がつて下さつた私をすてゝ、まさかM樣をとは思へども心配で〳〵たまらない。

夜山田樣のお聲がお父樣の部屋から聞える。小聲なのではつきりとはわからないが、何んでもこの頃の話に間違ない、靜!、見合、等時々聞える。

「それは、日の日に僕の家へ合孃もともなつて來てくれ給へ待つて居るよ」

をやお歸へりなさるのか知らん、今のお話しがほんたうであつたら私は、私は、E兄樣に何んと申わけすればいゝのだらう。

御門前の方で車の音がするあゝお歸りになつた。

八月四日。

築港へ海水浴に行かうとお父樣が仰有る。昨夜から頭が痛くてならないけれど、一年に一度か、二年に一度より、家内の者をつれて行かうなぞと仰有らないお父樣の事だから、つとめて行く。

海水には一度浴して宿に寢て居る、夕方水族館を見て舟でかへる。舟の中でもE兄樣のことが思はれてならない。お母樣や女中達は舟にでもよつたと思つて大變心配して、仁丹よ、ゼムよと大さわぎ。

家へ歸ると雪樣からお手紙が來て居る、そのまゝ手箱へ入れて床につく。

八月五日

暑いのはあたりまへながら殊に今朝は暑い、朝から筆をとつて何を書くともなく机に向つて居る。雪樣からの御手紙を見る。

御無沙汰致して居りました。毎日遊んで居るのよ、此頃はね毎日御下髮にむぎわら帽、或る人が私を十六だと言ふの、隨分でせう……」

マア二十一だと言ふのにいくらお若くつてゐらつしやつてもお下髮とは……それを思ふと宅のお祖母さんは昔人間だわ、四つ下の私をとらへてお下髮にして居るといつもすぐそんなに大きくなつたにと、いやな事を仰有る。

八月六日。

今朝は珍らしく朝顏がたくさん咲いて居る。

本箱の蟲干をして居ると、お隣のお葉さんが遊びに來て煎餠をのこしたまゝ歸る。

以前宅に居たお梅が來る、まげをあまり面白い風に結んで居るから思はずふき出す。お母樣が氣の毒がつて、彼方へ行けと眼でしらせ遊ばすから乳母やと部屋へ來る三間も間がある茶の室から手にとるやうに聞える大きな聲で、

「お孃樣もはや十七にならつしやいましたか、まあお養子を御もらひ申さねばなりませんがな」

いやなお梅――

午後お母樣のお使で竹と二人で日の出町の藥屋へお藥を買ひに行く。妹娘の無教育な事側に見て居ても腹が立つ。

八月七日。

今日はお母樣がお里へいらつしやつたからお留守番女中を相手にしてお晝の御馳走を作る、とてもお父樣のお口にあふやうなものは出來まいと心配して居た所

が思つたよりもうまく出來た。

午後お松さんが來たからまた桃割に結ぶ、明日寫眞をうつさうか知らん？

M様はこの頃何う遊ばしたか知ん、E兄様の所へ私の事を何んとか言つて手紙を出したのだらうか。

夕方から花香様が女中といらつしやる、萩の下でE兄様の事を言つて、泣いて泣いて二人共眼がはれ上つた。



八月八日。

朝お湯に入り寫眞屋へ竹と行く、いやな書生だわ、お見合ので御座いますかとたくさん人の居る前で言ふのですもの、にくらしい。

E兄様から御手紙が來る、毎もながら親切なお手紙「女のをさむべきもの丶中でも裁縫が一番大切だからしつかり今の中になさるよう」と書いてある、あ丶E兄様は何にも御存じないからこんなのん氣な事を言つてゐらつしやる、もしもこの頃の山田様の話をお聞き遊ばしたら、何んなに驚き遊ばすであらう？

夕食のお馳走に茶碗むしを作る。

八月九日

此頃の山田様のお話を今日はお母様が遊ばすかと明日は遊ばすかと思つて居たら今日まで何んのお話もなかつた。

お祖母様のお部屋へおやつを頂きに行くと一寸御すはりと仰有る、お茶を入れながら山田様のお話を遊ばす。

「毎も言ふ通り小さい〳〵といつてもう十七になつたから女の事故早やく身の方をつけねばなりませんよ、お祖母さんも安心して孫の顔でも見て死にたいからね

他の方がやかましく言つて下さる中が花だからお父樣やお母樣もこの頃中からいろ〳〵心配してゐらつしやるよ、それに嫁と違つて養子はなか〳〵思ふやうにないが、丁度今云ふ山田樣の御話はよいと思ふが、お前は何う思ひだへ、お祖母樣の御言葉の通り好みの通りに醫學士で、年も二十七、なか〳〵秀才との事、私には過ぎた方、何うしていやで御座いませう？けれど私にはE兄樣があるのですもの、はいと何しに言へませう、ハイと言へばE兄樣を一人殺してしまふやうなものだわ、いくら可愛がつて下さる祖母樣でもE兄樣をとは恥かしくて言へないから、一年も後にと御斷りをすると。

「一年たつとすぐこんなよい話しがあるともきまつて居ないから、これできめては何うだへ、お前の氣では醫者よりEさん達のやうな商賣がすきだらうけれど……………」

こゝへお母樣もゐらつしやつていろ〳〵仰有るけれどやはり、お祖母樣に申上げた通りに言ふと、

「一度御前に話さうとは思つて居たが九分九厘まで、まとまつてしまつたから一度明日見合と云ふ事にきめたからお前も山田樣の所まで行くのですよ」と仰有る。

頭が痛くなつて來たから部屋へ行かうと思つて、お母樣に申上げて出やうとすると、

「會社員なんか、何うしたつてもらひませんよ、」と仰有る床へすぐ入つた。あゝE兄樣に相談しようと思つても百里も離れて居るし明日の事、何うしたらよいのか知らん。

うめくさ

▲本年四月に調査した處に依ると、世界最大の都會英國ロンドンの人口數、七百二十五萬二千九百六十三人。

▲明治三十二年から四十三年まで、十二ヶ年の落雷數は千百五十九。雷さんも隨分落ちるものだ。

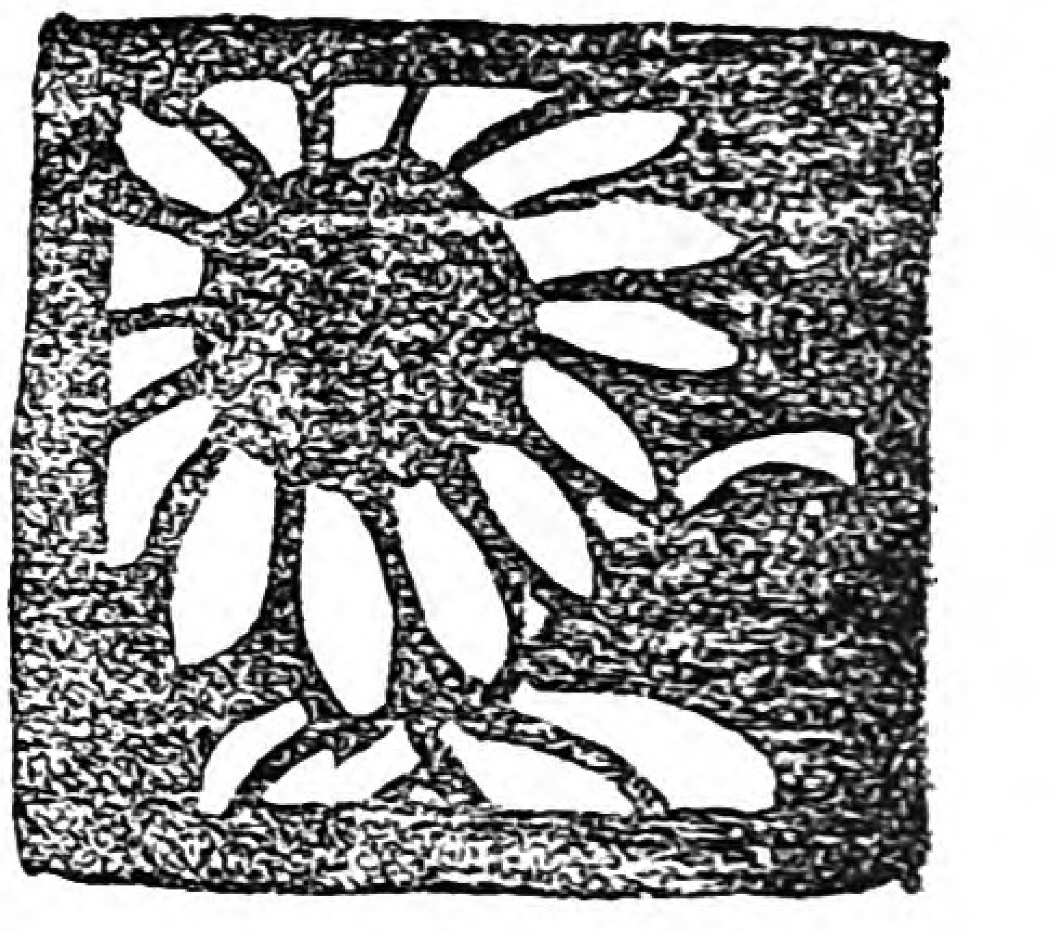
▲人間の白髮になる年齡は、男は平均に十六歲、女は平均五十一歲ださうだ、黑髮を愛する婦人は聊か心を強うするに足る。

▲嘉永年間の遊女の掟と云ふものゝ劈頭第一ヶ條に曰く「遊女勤の義は、第一いつはりを專らとし、かりそめにも誠の心持つまじきこと」とある。

▲誰か來たようだ、垣根の外に、ア、ヨイト〳〵鳴いた鈴蟲、エーコリヤ、音を止めた。これは會津地方の盆踊歌。

▲目白不動、目赤不動、目黑不動は今もあるが目黃不動と云ふのが淺草にあつたさうだ今は無い。

▲現今世界に於ける飛行家の總數は三千人ある、其中に佛蘭西のハーリエット、クインビー孃、ゼームスツイ夫人等は婦人飛行家として其名が聞えてゐる。



十六になった娘ごゝろ

藤田幾久子

雪深い信州から私共一家が上京したのは恰度十年前でした。ビラ〱のある銀の前簪をさして頭いつぱいの大きなつけ髷して、緋鹿子の根掛ふつくりと結んだのがもう〱嬉しくつて、馬に乗つたのは夢中でした。

妹はやつと三つ位でしたらう母様に抱かれて馬に乗りました、シヤン〱と鈴を鳴らし乍ら山道を辿つたり、あの千曲川をピチヤ〱渡つたのもかすかに覺えがありますわ、それから十年後の私は、すつかり都少女に成り澄まして……。

娘十五！まア人に云はせれば蕾ですわね。半ば開きかゝつた紅の蕾、私もそうだらうかと思ふと、いささかお多福に悲觀しちまひます。

いつでしたか、そう〱桃割に結つた時にね始めて合せ鏡して見て、ふつくりした髪のあたりや髷の形が好いなと思ひ乍ら、そうと未だ知らぬ横顔をうつしてみましたの、眞逆、従兄さんの云ふ程でもないと自覺してたんでせう、だからがつかりして終ひましたわ、口惜しいやら悲しいやら……どんな顔つて仰つしやるの？そりや云へませんよホヽヽ矢張自分が可愛いから皆様の内にだつて經驗のある方が一人や二人は居るでせう、女は兎角容色を氣にしますわね、だまつてらつしやる方に限つてさうですわ。

宅の隣りは料理屋だもんですからね、時々意氣な藝妓や雛妓が來ますのよ、昨晩なぞそりや大騒ぎでしたわ、スート抜衣紋して赤い帶、キユツと乳より上に高くむすんで、長い袖に重ねた緋縮緬の振りが舞扇かざす度にハラリとばかりこぼれる艶な姿。あかず見入つたこともありますのよ。私が幼い頃、人から「きいちやん大きくなつたらどんな人になるの」と聞かれると、「私藝妓さんに成るの毎日いゝ着物が着られるから」と云つたものですつて、まあ嫌な……。

去年の夏、高等科二年を中途退學する時の私は……どんなに悲しかつたか！父様はいくらねだつても、終ひにきゝ入れがありませんでした、それからはお恥し

いのよ、自白致しますわ、思ひ切つて！
あのね三月許り被服所の女工になつてましたの、ミシンを教へるときいたものですから。
以前なんて、カーキー色の女工服着てゐる人をみると、隨分けいべつしたもんでしたけれど、あゝ自分がならうとは……勿論、學友には何とも申しません一番親しい幸江さんにだつてかくし切つて居りました。
　まあその頃のつらかつたこと、家に居てもつい母樣や妹に、あらく\しくなつて、毎日夕雲を見て泣かない時はなかつた位でした、世の中の味を知り初めたのもその頃の事……けれども今は御安心あそばして頂戴。靜かな家で針の道にいそしんでゐますから。
　きのふ本町の奥樣（遠緣者）がゐらつしていよく\貞坊も定まりまして……と仰つしやつた、まア十六のお貞ちやんが、酉樣のお嫁さん、十五も違ふわ、嫌ねえ私なら願ひ下げる、然しお二人共、氣が合つてゐるから結構なのよ。同年の人の初々しい丸髷姿が見たいホヽヽ、見る時の私の心持はどんなだらう。聞けばお貞ちやんには一方ならぬ思ひをかけた、番頭さんがあるんですつて、これを知つたらさぞ……さぞ何だか可哀さうになつて終つた、お二人は密月旅行するだらうか、お身丈は一寸酉さんの方が高すぎる、なんてアラ餘計なお世話さま。それよりもお針の上手になる樣、一生懸命に成りませう。
　私の初戀なんて云ふと、あんなお多福さんが生意氣なと仰つしやるかも知れませんが、侮るべからず……
　去年葉月の頃ですのよ、妙に人なつかしい宵でしてね、お向ふの桃代ちやんと大きな胡蝶模樣の浴衣お揃ひに銀座の方へと出掛けましたの玉木とか云ふ店に可愛らしい西洋の少女が書いてあつたので、それをうつとり眺めて居たら、不意に私の肩を叩く人があるんでせう、吃驚して振り向くとかねて見知つてゐる勇樣なので思はず赤く成つてお叩頭して終ひましたわ、そのわけと云つても別に何でもないんですけど、妹からきくと「勇樣はね、姉樣のことをよくきくのよ、で、あんまりうるさいと、知らないわつて云つてやるのよ」と云ふ。
　御目的は美術家ですとか、何となく好ましい氣がしてお慕はしい、それから妹が行く度に雜誌を交換し合つてゐました、女子文壇を貸して下すつたのも勇さんそしていつもお禮だと仰つしやつて御自筆の繪葉書を下すつた事などありましたつけ、そうお上手でもない

がよく夢路さんや與平さんのお繪を眞似てゐましたのお相手だから、ヒヨーキンな事此上なしで、よく落語家の眞似しては皆を笑はせる人でした、私共が本所へ越してからは女名前でレターー下さつたけれど、かたくおことはり申上げた、男子には敬遠主義で交際するに限りますよ、それでもねえこの頃は、又思ひ出す時があつて先日、夢に見ましたよ、文學もお好きだそうで、和歌ーー若き子の血をそそる樣なのを寄されて、御返歌をと云はれたときには如何していゝか分らなかつた。其頃は戀なんぞはさらに知りませんの、餘りお手紙下さるので惡いと思つて心にもない事を面白く書いてやると又お返事の長いものをお寄こしなさる

私は勇さんをそこえらい人とは思やしないんです、唯ゞ文學が好きと云ふのが氣を引いた、ばかりですもの、どうせ妹達のわ、ですが私にも愛して呉れる兄樣があるんですもの勇樣をいやだと思つても仕方がないでせう。



秋に歌へる

☆

埼玉　大郷米子

八月の日はむらさきに野葡萄の小さき玉の一つを染めぬ
木斛の花のあくどさ七月の夕ぐれどきはこころ萎えばむ
夕まぐれ廣葉わくればささがにの巣にとらはれし青き紫陽花
くろかみは我れを粧ひくろかみを我れはやしなふことを忘れぬ
青きもの透き通りたる呼吸を吐く涼しきこころに月草の咲く

☆

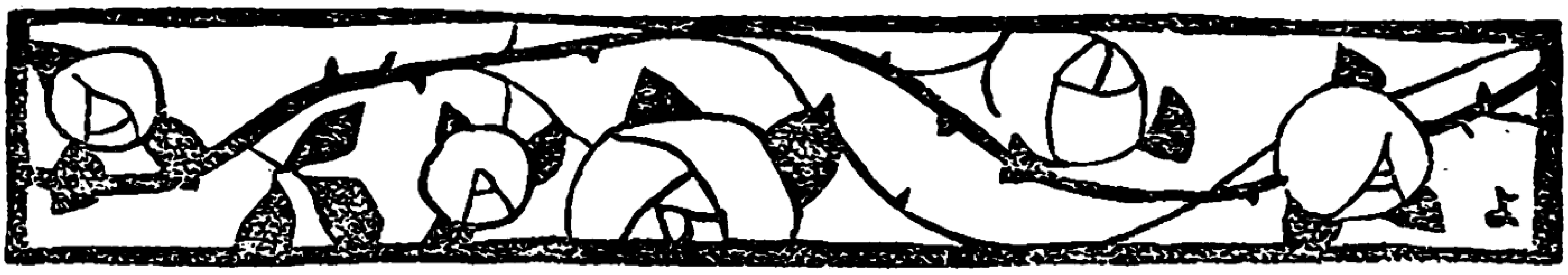
伊豆　加藤爲子

血の色に夕日しづみぬ瀝青の心の影は山にひろごる
吾が胸の古家一つ一つづゝ毀ちゆく見ゆ夢なりしかな
一族はそれ〴〵心ことにする豆のたぐひに似は似たれども
ある時のありのすさびに死を思ひ死にそこねたる此をろかもの

☆

愛知縣　藤井蘇の花

秋來れば泪おほきをよろこびぬ悲しきなかに足らへる心
秋雨の音をなつかしみかなしみぬ湯殿の窓の朝顏のつる
秋來るとよろこぶ心ふと野邊に出づればひかる日沒の雲
霧こむる谷のかはたれ明るみのまだ來ぬしばしなつかしきかな



京都　島本久惠

☆

なが月は鞍馬が岳のいたゞきに稲光りする夜のつゞきけり
草の風七里の道を吹きしきていと小さくもがた馬車の行く
朝風の鈴ふる如き秋の山に別れて來れば男郎花さく
柳みな物思ひ居ぬ初秋の舟多き河うす明りして

豊後　吉良花守子

☆

ひとりねの枕つめたし加茂川の水の上より秋風たてば
いとつよき酒の匂ひに相似たるはげしき性とわれをなげきぬ
いつの世にあはんとすらん春をさへはた夏をさへむなしく過ぬ
すつべきかはためづべきか少女てふ清き名のみを秘しみづから

高尾

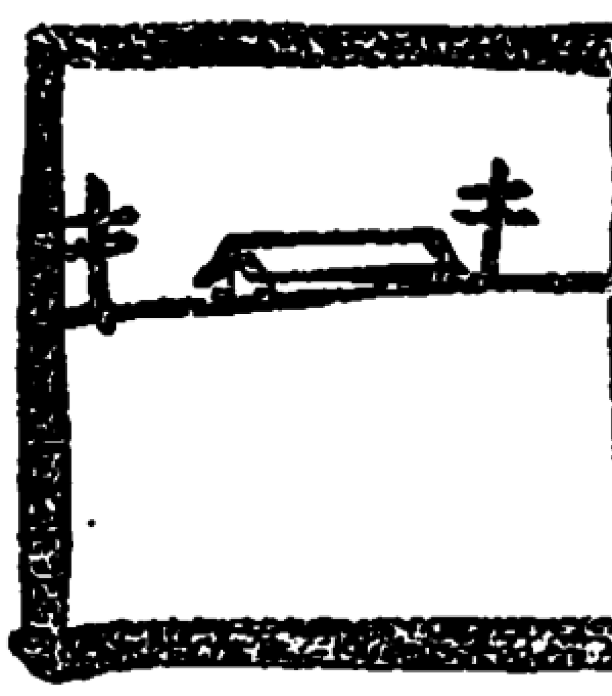
☆

望月の大盃に美酒うけて酔ひ死ぬもよし戀さめぬ中
いと細きこがねの綱にとらはれて泣くになれけり我てまどりは
處女なれば傷のいたさのはかられで刄の下に唯遊ぶかな

ふさ子

☆

をのゝきて君を見むには我あまり强かりしかな邪氣ありしかな
もてあそぶ男いくたり自らをなぐさめんとて悲しめんとて
處女なりかざせし花の一ひらもゆるがせにみることを宥さじ
歩みよる恐ろしき坑運命はつめたき手して我を待ちたる



雜草の花

譽田順子

八月四日。

酸臭い生温いものが胸を蒸してムカ〱する、又胃がわるくなつたらしい。桑の若葉に水色の風がサラサラ鳴つてゐる。葉末の露がパラ〱こぼれる、其音に驚いたのか眠い樣に鳴いてたスイッとがパッタリやんでしまつた。淺緑に煙ぶつた稻田の中の小道をくゞつて堤の方へ草刈女が行く、水色の湯衣の色が、軟かに朝露の中に溶けてゆく。

東の山の峰に、赤黃に濁つた雲がぶく〱湧いた、丁度あの、嵐の前にみる樣な鋭い、いやな色と形だ、とみてゐると、スーッと色があせて、形はくづれた、一寸がつかりするどうも腸胃の工合がよくないので朝飯は、拔きにしてもう小豆の熟れた頃と、母に云はれぬ前に裏の畠に出る、暫く出ぬまに、茄子も芋も、ぎつしり露草にうづまつてゐる、紫の花も姿も優しいが土をしばつて仕樣が無いのでむしり取つておく、小豆にはありまきがついてしまつた。昨年は二俵餘りも收穫けれど今年は二斗がやつとだらう。藤色の柔い、さゝげの花が咲いた、もうあぶがぶん〱甘い囁きを立てゝゐる。

羨しい程大きいかぼちやだの眞瓜、でばう、さては梨、葡萄、桃、ばらカンナ百日紅、しきみ、家の周圍が物はありつたけ、さでいゝ來たんだらう、滿載した籠を荷擔た女が五六人ドヤ〱山を下りて來た。此村邊りでは彼樣、見事な、瓜は出來ない、彼の人達は二里程東の××村から夜露を踏んで町の市場へ出る人達であらう「其瓜は、何程?。」と聞いたら「十五錢」面倒なのか、こんな掛値を云つて、ズン〱行つて終ふ。畠程つまらないものは無いと思ふ。密柑畑にして終ふとちよい〱何やかや收穫つたり、撒いたりする世話が無いからと、わざ〱紀州から苗を取よせて植ゑたのが、大方は枯れたり、ちびけてしまつて物になりそ



うなのは三分の一が鬪の山だ、桃もりんごもだめである、毎年肥料代に負けてばかり、一寸、甘いのが、諸と麥位のもの、それでゐて、畠は田と違つて、始終、鍬を入れてやらなければならぬ、一寸グズ〳〵してゐるとすぐ草だらけのやせ地にして遊ばさなければならぬし。

山の祖母樣が、大きびだと云つてわざ〳〵持つてきて下すつた、きびの皮を一寸まくつてみたら大きびか小きびでも好いがはぶである、山萩が咲き初めた。日が登るに從つて、雲もどこかへ軟かに流れた。青い空からこぼれおちた、鮮明な空氣に、陰の深い綠の濃い木立の色が、しつとり映つて、此頃の山里の晴れた日は明い快さを感ずる。母と布團の、洗濯をして濃い糊をかふ。熱い光はなやましく黒い土に吐んで汗がチリ〳〵滲みでる、河原でも、やつてるとみえて、堤の青草の上に、赤や淺黄や、白なんかの布團をズラリと干してある。湯巻一つになつて銅色の體が、忙がしさうにそちこち動いてゐる。母が魚屋で、田中樣の坊ちやんが危篤だと聞いて來られた、母はをつくうさうな顏をして居られるので、私が見舞に行くことにする遠道が取つて、松並木をくぐると、降りそゝぐ蟬しぐれにぬれて、老人連が俵を編んでゐた、あゝもう收穫にも近い、小川に添ふて北に逆ふ、川の割に多過ぎる程の水はきれいに澄んで綠の深い草の先をヒタ〳〵浸してゐる、錆色の水底には背の黒い小魚がチラ〳〵白い腹をみせてゐる。右も左も一面の稻田で青々とした中にカッキリ黄色づいたのもある、處へポッチリ滴らした樣な木立が群がつてゐる其木間からはきつと黒い瓦屋根が光つてゐる、物干に掛けた洗濯物か何かの純白が遼の綠を貫いて、銳く瞳を射る、熱い稻の香が咽ぶ樣に胸にせまる。逆るに從つて川は谷になり道は爪先上りの石塊道になる、左右に擴がつてゐた稻田がいつのまにか狹くなり、果ては詰つてしまつて綠の濃い山の鼻が、つい目の前にせまる、小くつても山を越えると思ふと、をつくうだ。谷間から流れ落ちる清冷な水を受けて札所廻りらしい旅の母娘がガブ〳〵と飲んでゐた、巓に登つて振り返ると打續いた稻田と、群がつた木立が度の強い直射の光を浴びてチラ〳〵琥珀色に光つてゐる。北の山の山脈はどれが何山と一々指點する事ができる程、はつきり藍青匂ふ山頂を洗つた樣な蒼空に浮ばせてゐた。あゝあの北の空、もう秋の樣な色だ。

妙な物だ、小山一つ隔てゝ此村の稻はまだ、穗の出揃つてゐるのが少い。右手の小山を拓いた赤土の輕い傾斜の畠にはスク〳〵のびた玉蜀黍が障子の樣にズラリと並んで暗綠色の風が、サラ〳〵快い囁きを立てゝゐる。濕つた陰地にはもう、谷間に落ちる冷いしぶきにぬれて、女郎花や、ふぢ袴がうなだれてゐた。稻は遲いが秋草は早い。

夕方門の草を刈る、萱はもう穗を含んでゐる。青々しい匂が軟かに胸を包む。眞赤に燒け爛れた層雲が西の空に蹲まつて鱗の樣な凄い光をみせてゐた。旅行中の父上から私等同胞に小包が届いた。濱へ行つてる妹弟が明日は歸るだらうと、其儘置いておく。

東隣の婆樣がやかましく云つてるので、よく聞くと竊られたと思つてゐた、雌鷄が、薪小屋の隅で七個の卵を溫めてゐたさうだ。私はふと、十日程前、「何樣しても居らん、どうも前の奴にかありません一番卵を産むが、ぢやつたに。」かう云つてゐたのを思出した。此小母樣はいつか書てうと思つてゐた。が、今日を機會に一つ筆を下してみやうと、米を搗きながら腹案を立てる。

萬朝と文壇を讀む。

三ヶ島よし子樣は、我が最も、敬愛せる、未知の友である、あの、落ちついた、忠實な、創作の態度と、自然の觀方とはどんなに、私に引きしまつた感じを與へられたか。あゝなつかしき友よ。夜、祖母の肩を打つ、眠られてから、二階で、田內樣に借りたゴーリキーを讀む、明かつた月光を、ぷいと遮つて黑雲が湧いた！と、思ふと、ザアーッと大粒の雨が來た、驚いた樣に木立がざわめく、山は遠く霞む、ザアーッ、潔い音が北の山の端に消えかゝつた頃、また、ザア！ッ、と野の方からやつてくる、私は霧の樣なしぶきを浴びて緣に立つた。薄曇つた空に黃色月はボーッと投げ出された樣に懸つてゐる、雲も動かぬ、月も動かぬ、絲の樣に光つて降つてゐる小雨は月からこぼれてる樣、思ひ出した樣な電光が青く斜に濡れた地に閃く、シルバーに濡れた青葉からポチリ、ポチリ疲れた樣に滴が落ちる。

西隣を見ると、開け放した窓の明い灯影に、夜風が戰ぐたびに上に差出た、李の枝から落ちる滴が、チラチラ光つてゐる。

すいつちよが、怯えた樣に鳴きだした。



出水

草の門

何とはなしに眠りにくい晩だと寢返りしく〳〵じつと辛抱して、うと〳〵したら、店の雨戸を破れよとばかりに叩かれた、電報かしらと、慌てゝ臆病窓からそつと覗いた、胸は不安におどつてゐる、「電報ですか……」とてわでわいつた。水です、水です、と云ふけたたましい聲が同時に耳に入つた。水、水、とたゞ無意識に繰返して起き合せた人達と顔見合せるばかりであつた。

慌てゝすられたまちの光を辿つて、驚きはしました。一時に凄まじい音をたてゝ山より落つる水の音、雨の音、往來は川となつて流れ流るゝ水の力、すべて自然の作用のまゝに大きなる響をたてゝゐる。慌てゝさわぐ物云ふ人の聲さへ聞とれぬ。

水は膝をぬ没する、雨の中を人々は必死となつて行き交ふけれど傘は破れと降り、はぎは没する水よ。

「疊をあげるように用意なすつたら、如何ですと……注意してくれたは御むかうの主人であつた。

人がたりぬようならおかししませうともいつてくれたけれど、見舞人が手傳つてくれるのでたゞ禮を述べておいた、火事場のやうな大騷ぎして荷物は大方二階へ上げ棚にも積んだ、床をはがして流れ入る水を見守つた、僅かに一寸の空間を殘すばかり器なれば動かせばこぼれよう。

電氣が消えては大へんだからと提灯をつけておく。刻々迫る水のおも――不安と臭氣が胸をおそふ、渦巻をせる汚水の匂ひ……浮きては流れでる物質、夜目にはそれと見きはめがたきも流れ行くは皆人の物ばかりではあるまい。時計を見たら一時三十分であつた。

雨は、小降りになつたのでもう大丈夫……と多くの男達の手によつて疊は引きてんだ。床上に水の浸されたは臺所の一部であつた。水は床とすれ〳〵で止まつたのであつた。

不幸中の幸を述べて人は去つた。寢るに寢れず……三時とまつて假の枕に身を横へたけれど神經がたかぶつたので眠られぬ、眠られぬ。四時もきく五時もかぞへんと思つた時と不安な夢路にさまよつた。七時うち

ましたよ……」と母に起された、頭は重い。

長家から伊達さんの崖が崩れましたから……と云つて來た。あとで見にやりますがいゝでせうか……といつた、そのまゝかへつたのでたいした事もあるまいと兄も伯父も外出してしまつた。

用のひまを見て見せにやつたら崖は五六間以上の崩壞であつた、固くとざされてあつた雨戸も半より折られてしまつた。家といはず奥の半分は目もあてられぬ慘狀を呈してゐると云ふ、被害をうけたは二軒である

幸に一軒は二三日前に空家になつたまゝであつた。

一軒は實に氣の毒であつた。六人の子を抱へて夫は地方出張の留守であるさうな、途方にくれてゐる所である、少しばかりの見舞品を送つて慰めた。

「私ね、H子樣！御手紙拜見して丸で自分のことを見る樣な氣がしてなりませんでした。をかしいやうなわれながら痛ましいやうな――私も物よんでも針もつても頭のしんから引しめられる樣な、いや〳〵な氣分になつてうつぶしのまゝ眠つてしまひますの……それでゐて决して心地よい睡眠ぢやありませぬ……益なきを知りつゝ逡ひ〳〵考へてむせいで御座いませうが？

H子樣！御互に父と母の手に守られて生きる身！慈愛の翼の影に息はく身――わがものにしてわがものならぬわがからだ、そのわが身を思ふ時程悲しい時はありませぬ、わが爲めぢやない――一刻も愛の瞳より念頭より離さずにゐる母のため、母のために自重しなければ濟まないとは思ひますけれど……」と。

津根子樣は仰有る同じ思ひに惱む處女、私は懷しい味方だもの。

夕方美耶さんが入しつた。

君は淸き純なる常少女であらう、桃色紅の帶を小さく結んでゐる。腰紐は燃ゆる紅の色であつた。心持ち洋傘を傾にして夕日をよけて立つたお姿は、浮世畫の好材料にもならうと思つた。塵多き夕ぐれの町にはまことに美しき色彩であつた。友は輕い微笑をもらしながら日比谷圖書館に行くと語られた。私誘はれたが少女は現在疲勞した社會の色彩である――とも思はれた。

夜、ふらりと緣日を見てあるいて、うづ高く青々とつまれてゐた、千なりほゝづきを見た時はたゞわけもなく欲しくなつた。二錢だして手のひらにほゝづきをうけた時はたまらなくうれしかつた。

本郷の兄

前島優梨子

前略――突然ながら至急御面談申上げたき用件出來致し候間、御老體御足勞樣ながら此狀着次第四五日御滯在の御積りにて御上京下され度、伏して願ひ上げ候。

健二

母上樣

珍らしく江戸川の卷紙へ何時もより少し丁寧に書いてある此手紙を受け取つた翌朝、母のお常は不安らしい落着きのない顏をして、矢張り同じ樣な心持ちをあり〳〵と瞳の色に見せて居る娘のお芳に送られて氣づかはしさうなおど〳〵した風をして出發て行つた。

「お母さん、甚麽話かお聞きなすつたらすぐ知らせてお呉れなすつてネ、一言で好う御ざんすから、私氣になつてもう……眞實にネ」と、お芳は母が車に乘らうとする時まだくど〳〵念をついた。そして一人になると猶更兄の事が氣になつて、もう何をする氣にもなれなかつた。

夕方近所のお久米さんといふお世辭の好い婆さんが宿りに來たけれど、何時もの樣に其相手になるのが堪らなく嫌だつた。

至急御面談申上げたき用件？…………終ひにはもういら〳〵する程其言葉が何時までもつき纏

つて忘れられなかつた。

「屹度東京で嫁でも貰ふと云ふんだらうよ」と云つた母の言葉が一番當つて居るらしくは思はれるけれど、確かにさうだとは什麽しても思ふ事が出來ないで、兄の周圍に起りさうな事はすべて色々に思つて見た。隨分暗い嫌な事も考へて見た。そして身震ひする程ぞつとした。

次の日の夕方、兄の亂雜な手筆で、母の安着を簡單に知らせて來た。お芳はそれが何となく物たらなかつた。

それからは郵便！といふ聲の度にはつとしては、母からではないか知らと思つて胸をおどらせて居たけれどそれから四日立つても五日立つても母からは葉書一枚來なかつた。お芳の胸は暗い色が漂よひ始めた。

彼麽に念を押したのに知らせて下さらない處を見れば什麽せ好い事ぢやない、もしかくしたら……と什麽しても、思ひたくない樣な事許り考へられた。

時雨の樣な雨が朝から降つて居て、何となく心細い。秋らしい感じのする日暮れ方である。

――母上御不在にて何かとお困りの事と御推察仕候、母上も暫くぶりの御上京に候へば毎日少し宛處々御案內など致し思ひがけなく御歸宅延引仕り申譯御座無く候、就ては明後二十日二番發にて御歸宅の事と相成り候間一寸御通知申上げ候、御許も來月半ば頃は命の洗濯に御出京なさるべく候、匆々。

と先の摺れたペンで書いた此葉書が格子戸の間からばさりと落ちた。

お芳はいくらか心が明るくなつた樣な氣がした。別に變つた事もないらしい葉書の文句を幾度

も讀み返して見て、さう大した事ではないだらうと獨で定めて、少しは輕い心持ちになつたけれど母の歸りが堪らなく待ち遠しかつた。

次の日も細い雨が歇まなかつた。お芳は幾度か時計を見ながらそこらを氣持ちよくかたづけた。晝間は居ないお久米婆さんも朝から何處へも行かないで待つて居た。

「什麼やら雨が晴れさうで御座んすよ、ヽヽヽなつちよも晴れて呉れると好う御座んすにネ」とお久米婆さんが格子戸を開けて外を氣づかはしさうに見ながら云つた頃から、お芳は車の音に氣をつけて居た。

さうか知ら？と思ふ車が幾臺も通り越した。其度にお芳は時計を見上げて什麼したんだらう？と輕く頸を傾げた。終ひには取次のところに腰掛けて待つて居た。お久米さんの云つた樣に雨は泣き〳〵晴つた。雨雲がまだ低く垂れて居るので晴々はしないけれど、水蒸氣を含んだシットリした空氣が雨上りの生々したすべてのものを包んで、からつとした日より却つてお芳には氣持ち好く思はれた。石の奇麗に洗はれた少し蒲鉾なりになつた道を、傘をつぼめて高い足駄を音させて行く幾人かの人を、お芳は眤と見て居たけれど、待つて居るその母の車は家の前へ止まらなかつた。

「お久米さん什麼したんでせうネ、汽車はもう先刻に着いて居る筈だのに」とお芳はついと立つて勝手で何かして居るお久米さんのところへ行つて噂して居ると、

「お歸り！」と低い車夫の聲がして車の音が止まつた。

「まアさんざ今まで取次に居たのに」とお芳は言譯らしく口惜しさうに云ひながら急がしく驅け

て出た。

お久米婆さんは濡れ手を拭き〳〵そは〳〵と迎へに出た。大きな鞄を車夫が取るのを待ち遠しさうにして下りた母の顔は別に變つて居なかつた。

「什麼もお久米さん留守中は御世話さんでした」ともう何より先に云つた母の顔には、何時も斯うした時と同じ樣な晴やかな微笑みが見えた。

お久米婆さんはのべつにお世辭を列べ始めた。心持ちの好い人なので何時もはそれがさう氣にもならないけれど、お芳は時々後の方で嫌な顔をして、もう好い加減で歸れば好いと思つて居た。母のお常もさう思つて居るらしいけれど、少しも其麼風は見せないで好く其相手になつては、幾度も幾度も留守中の禮を繰り返して居た。そして

「お久米さん、恁麼物だけれどまた絆纏にでもしてお呉れなすつて」と新聞紙に包んだ反物らしい物を鞄から出して遣ると、

「まあ其麼御丁寧な事をしてお呉れなすつちあ」と表面許りさも入らない樣な口振りで云つて居たけれど、其内に、

「左樣で御座んすか、ぢやお叩頭なしに頂戴致します。什麼も有難う御座いました」と兩手で大事さうに丁寧に押し戴くと、間もなく幾つか幾つか頭を下げて歸つて行つた。

お芳はほつとした。そしてそれと同時に急に胸が小さく波立つた。

「まアお母さん彼麼に私が云つたのになぜ手紙を下さらないの？」と元の座へ坐るとお芳は眞先に恨む樣に聞いた。

「あゝ惡かつたよ、私や明日は歸らう〳〵と毎日思つて居たものだからネ、歸つてとつくり話した方が好いと思つて」と落着いた聲で云つて俯向いた母の顏が、何か思ひ出したらしく急に曇つた。お芳ははつとした。
「そして兄さんが什麽なすたつて云ふんですの！」
とお芳は待ちきつて居た事を、わざと落着いて靜かに聞いた。
「えゝ？……」と云つてお常は少し口籠つた。「恁麽事たあ私は思はなかつたよ」と云つてまた昵と俯向いた。お芳は自分の事か何かの樣に胸を騷がせて默つて居た。
「子供が出來たんだつてさ、矢張り山下館に居る女に……………」とお常は低い聲で云つた。
「まア」と云つたきり、お芳は昵とお常の曇つた顏を見上げてすぐ俯向いた。何とも云ひ樣のない、今までに覺えのない變な氣持ちがした。
「それでもう七月位になつて居るので何とかしなくてはといふ話なんだよ」とお常は口重さうに矢張り沈んだ低い聲で云つた。
「それで兄さんは什麽なさるお積りなんです？」とお芳は何か恐しい事でも聞く樣におど〳〵しながらちらとお常の顏を見て云つた。
「兄さんは其子供だけ引き取つて私に育てゝ呉れつて云ふんだがネ……」
「お母さん、それで御承知なすつたの？」とお芳はあはだゞしく言葉までせか〳〵して聞いた。
「あゝ、だつてお前仕方がないもの」とお常は苦しい樣な聲で云つた。そして
「さうなるとお前にもまた大變御苦勞掛けなくちあならないがネ、どうかまあ兄さんを恨まない

で何かの因果と諦めてお呉れよ、武兄さんが彼麼樣だから健二もなか〳〵大抵ぢやないから」としみ〴〵とお芳をなだめる樣に云つた。お芳は何となく胸が迫つて昵と俯向いた。

「武兄さんと違つてあゝして私達にも優しい樣だから矢張り不可ないんだネ、惜しい事をした」とお常は一寸もお芳に強い反抗を起させる樣なことを云はなかつた。お芳もまた平常の優しい兄の仕打ちを思ふと、さう堪らない程いら〳〵する心持ちになれなかつたけれど、胸の中は色々の想ひがゴチヤ〳〵にてんがらかつて居た。終ひには何だか他人の事の樣な氣にもなつた。

「お嫌ひなさる樣な女ぢやないんですか」とお芳は自分ながらはつとする樣な思ひきつたことをわざと落着いて聞いて見た。

「あゝ思はしくないんだよ、それに兄さんももう二三年勉強したいつて云ふから」とお常は矢張り調子の低い聲で云つてそれから少しづゝ句切つては、お芳の胸を色々にてんがらがらせて行つた。そして「武兄さんにはまア隱せる處まで隱して置かう」と云つた。それを聞くとお芳は急に何處までもお母さんと一緒に兄さんを護つて遣りたいと思つた。けれどすぐまた彼の山下館の二階で思ふまゝに放縱な生活をして居る此頃の兄を想像して、堪らなく暗い嫌な氣持がした。そして弱々しく折れて居る母の仕打ちがもどかしく思はれた。けれどまたよく考へるとさうしなければならない母が氣の毒にもなつた。母娘は何時までもさうして凝と坐つて居た。少し沈默が續くと母娘は各々に矢張り同じ事を思つて居た。

外はまた暗くなつて、音のしない樣にそつと雨が降つて居た。



お奈津

さかえ

片割月が斜に、となりの屋根越しに柔らかい光りを茶の間一ぱいに、投込んで居る、直ぐ前の一坪程の庭の竹垣ごしに、となりの燈火がチラ〱見えて、新聞屋の鈴の音が遠くに聞えだした。

お奈津の母は、今歸へつたばかりの疲れた身體を簞笥に凭れて肌脱になつた儘、團扇で風を入れてゐる。其の前に母の方へ、背を向けて兩肌脱に成たお奈津は、湯あがりの濡た頭の毛をやつと解終て、此度はお白粉を手の平に取て、ツーと鼻筋に一本通した。

其れが、鏡臺の直ぐ脇にランプがつるして有るのでお奈津をはさんで鏡臺に向ふ合せにすはつてゐる、母にはよく見えるのである。

「え、どうするの奈津ちやん」と別に心配想な樣子も無く白粉を付けてゐるお奈津を見て、母は堪ら無くいらいらして云ひかけた。

「だつてさ、お母樣、伯父樣家も神田さん家もだめつてなら仕方が無いわ、何うするつたつて、私にもわから無いもの」とお奈津は、投げ出す樣に云つてやつぱり母の方へ背を向けてゐた。

お奈津がやつと頸から、顔へ白粉を付け終へた時。

「今晩は」と玄關で、涼しい可愛らしい聲がした。



「おや花子さんだ、今晩は大へんに早い事」と忘れた樣に立て其處等を片付け始めた。

お奈津は、一番涼しい緣側に座布團を持ち出して、三味線の調子を直して居る、其の前に花子が、小さい手をキチンと、ひざの上に組んで行儀よく坐つてまつて居る。

「花子さん今日は此間の、おさらひよ」

「えゝ」と花子は稽古本を開いて

……夫れ牡丹は百花の王にして——

と連獅子を唄ひ出した。お奈津は、

——……かゝる山とうより強憶ためす親獅子の——……

のあたりを二三度、唄らせて見て、御苦勞樣でした。大へんお上手に成た事、明日から次のをやりましようね」と撥を置いた。

「えゝ」と花子は嬉しさうに頭を下げた。小さい桃割に押した花かんざしがヒラ〳〵ゆれてゐた。

母は花子を玄關から送り出して、小さい草履の足音が聞え無くなつた時分歸つて來て、元のところへ坐つた。お奈津は長く成つて新聞をよんでゐた。

「奈津ちやん彼れで可いの、最少しよく稽古仕て上げれば可いのにちつとも成つてないぢや無いか」としかる樣に云つた。

「えゝ未だよくはかたまつて居無いけど、氣がクサ〳〵するのに、彼那小供なんか相手に仕てゐられや仕無いわ、早く定さんでも來れば可いのに」お奈津は未だ新聞から眼をはなさずに云つた。

「あゝ定さんは今晩は糸政さん家の棟上げでよばれて行くつてたから來や仕無いだらうよ」

「そう」とお奈津は、始めて眼をはなして、失望仕たと云ふ樣子だつた。

「お奈津明日はどうするの」と母は明日の晦日を心配仕て、又云ひ掛けた。「そうねえ」とお奈津は額に手を當てたまゝ横になつた「家業だから晦日〳〵のはらひは、ちやんと仕度いしね」

「そうねえ」とお夏は同じ樣な言葉を無意識に繰り返して云つてゐる內も、しじう目は簞笥の方に注がれてゐた。「え、どうするの」と母は又きいた。

「仕樣が無いわ」とお奈津は、つと立て、重みの無さ想な、一番上の引出しを明けて、ぢきしめると今度は三番目のを明けて、大きな形の縮緬の浴衣と、未だ一度も結めぬらしい一重の帶とを出して、母の前に置いて「秋さん家の、おさらひには要るんですけど、可いわ其れ迄には出せるでしよう、すみませんけどお母さん持てつて下さいな」と、惜しいと云つた樣に云つた。

「今度はお母さんでは少し都合の惡るい事が有るんだけど」「そう、ぢや始めてだけど私が持てつて見ましよう」と立つて、ふろしきに小さくつゝんで、皺に成た通を帶の間に挾みながら

「お母さん何處だつて娘に七つ屋の使ひさせる者は無いでしようね」とさびしく母の顏を見た。

お夏は、袖でつゝみを隱す樣にして、家を出て、二三間行てから振り返へつて見たら、御神燈の横にさびしい笑ひをうかべた母の顏が見えてゐた。お奈津は、ろぢを拔けて通りへ出て小ばしりに横寺町の、何時も母の來る、七つ屋の前まで來ると近所の、顏を知た人が通つたので、ずうつと五六間行き過ぎてから、又後に歸つて人が通らない時、つと横からかけ込んだ。

「三好ですけど、どうぞ、これを」と帶の間から、通を出して、一所に渡した。



「へゝ何時もお母さんが被居るのですねえ」と云つて番頭が受取た。「えゝ」と、お奈津の顏は紅く成つて居た。

　番頭は幾度も返して見てから「おいくら程お入用ですかな」と一寸眼が光た。

「えゝ貳拾五圓程つて云ふんですけど、どうでせう拵らへてから未だ一度しきや着ないのですけど」とお奈津は小さい聲で云つた。番頭は最一度、ひろげて見て、「お氣のどくですが、たいへんちがひますが」とお奈津の顏をヂロリと見た。

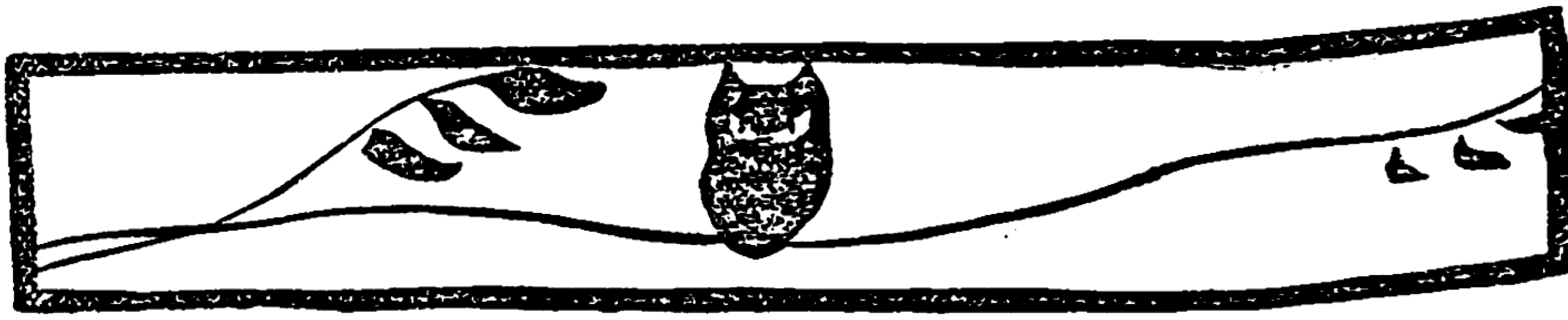
「何の位ですの」「其樣ですな、精々勉強して拾五圓ですな」「えゝ拾五圓最ちつと無爲で仕ようか」と、お奈津はやつとの思ひで云つた。「左樣ですな」と又ひねくつて見て、「ぢや六圓に願ひませうお品も新らしい樣ですし、おなじみなんですから、全く破格です、どちらをお聞合せに成ても拾六圓なんてだす家はありませんからな」「そう」とお奈津はふと母の、何時も云ふ言葉を思ひ出した。

　其れは「七つ屋へ行た時望いだけのお金を出さ無かつたら、居坐つて仕舞はなけりや無爲、其うすりや向ふで根負仕て出すから」と云つた其れだつた。

　お奈津は「せひ貳拾五圓少なく共貳拾圓は無くちや歸られないんですから」と横向きに成て、女持のカマスの煙草入を出して、銀煙管につめてスパ〳〵のんでゐた。

　ガラ〳〵とだし拔に格子が明いたのでびつくり振り返つて見ると夜具をせおつた、男が立て居た。

「どうか之れを五圓」と云て其處におろして番頭と何か押問答仕て三圓借りて行た。



男が歸つて行くと番頭はお奈津の方を向いて、
「とうですなお引に成りますかな」とソロ〳〵意地惡く出て來た、お奈津は未だまつて煙草をのんねでた。

大形のメリヤスのゆかたの衣紋をグツと拔いて、くすんだ色の一重帶を無造作に引掛けたのが思ひ切り長いたぼの束髮と白い頸とによく似合て見えた。

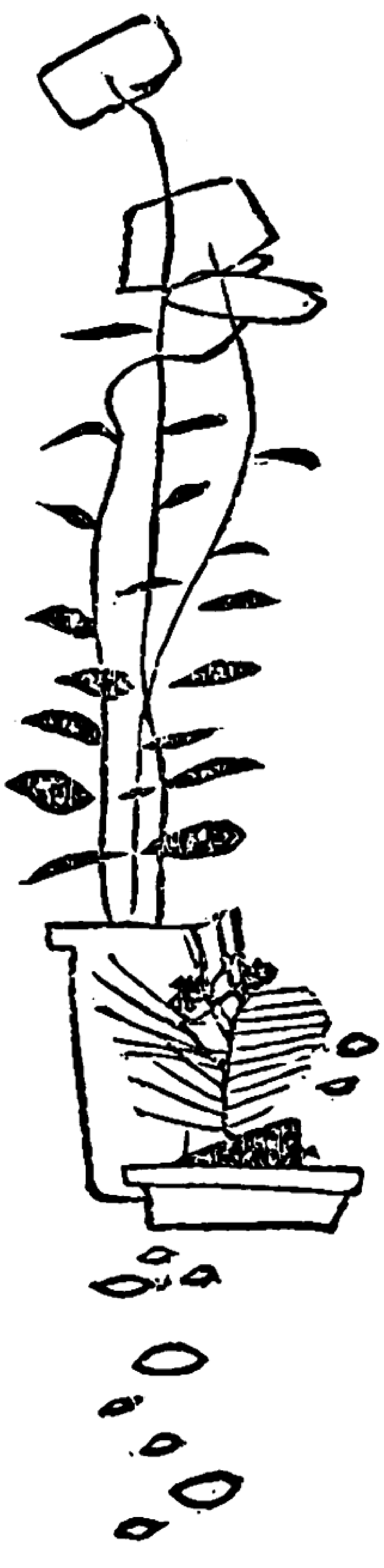
「お考へを願ひましよう」と番頭は、つゝみをお奈津の前に差し出した。

「ぢや拾八圓でも」ニとお奈津は、哀願する樣に云つた。

「困りますな、仕方が無い格外ですが拾七圓でおあづかり申しましよう」「其う仕方が無いわ」とお奈津はたうとう我を折て、拾七圓を受取て外へ出てホツと仕た。

顏が火の樣にほてつて、總身からは油汗が、だら〳〵流れてた。只た貳圓ばかりの金で彼那に爭たのが娘として、あまりはした無い樣に思つた。

お奈津は横寺町の坂を下りて、其の下の氷屋へ入つてアイスクリームを、二盃まで續けてのんだので顏のほてりはやつとさめたが、未だ胸の動氣が高かつた。



伯母

筆子

格子戸に手を掛けた時、例になく妙に躊躇はれた相ですが、母が這入つて行くといきなり、
「あゝ待て居た、善く來て呉れた〳〵」
奥から子供の様に伯父が飛んで來て、
「婆さんが遂々病院へ連れて行かれて了つた」
と顫聲で云ひました、それが全然思ひも懸ぬ事なので母も「えつ」と云つたぎり立往生して了つた處へ、お澤さんが土藏の傍から顔を出して、
「おや叔母様、よく入らしつて下さいました、昨晩から義母が急病で……まあ那麼處で失禮でしたわね、此方へ入らしつて下さいよ叔母さん」
ちつとも變らない語調 奥へ案内をしました。
奥の様子は別に變つた處もありません、伯母が居る時の様に奇麗に片づいて、主の無くなつたメリンスの敷蒲團が二つに折つて壁際に押つけられたほか、塵一つない潔癖家の座敷は居心の善いほど、悠然と朝の日がさし込んで居ました。
お茶を一口飲んで母が
「一體奈何した事なんですね」
「奈何もかうも…………」
と伯父は急き込みながら、
「此間からお前、惡るい様だつたがね……遂々不可なくな了つたんだ、平常丈夫だつたからね俺達だつて、ちつとも婆さんの事なんか考へやしなかつた」
お澤さんの艶のある聲が間に挾まり、
「何しろ叔母さんも御承知の通り、あんなに太つて丈夫々々して居たすもの……本當に吃驚致しましたよ、はあ、元つから心臟の方が惡かつた相なんでしたが、

自分もあの通り氣が勝つて居ますでせう……」

いくら健康だといつても、近頃俄かに腰が曲つたし薄くなつた髪の毛の具合からが、寧ろ滑稽なくらゐ衰頽した老の影を思つた、母は寂しくなつた相です、最もこの四五年の內木の實が落ちる樣に、ほろ／＼と肉身の姉妹に放れられた、母ですもの全く心細くなりませう、其癖此伯母とは氣心も合はず、一時は兩方で詰らない感情の行き違ひから、ぷつゝり出入もせず、お葉樣見た樣な高慢い方とはお交際は出來ませんと向ふで云ふと、母も、あんな道理の不解ない人は仕樣がない、昔は一文商賣して、夫婦で食べる御膳もない始末であつたが、金が出來たと思つて、餘り干涉しすぎるなどと、反目して居ましたが、いつとなく雪消のやうに融和つて、あの强情な母でさへ折々鳥渡姉さんの處へと、てく／＼出掛るのでした。

そんな時私は人生の故鄕といふ事を思ひます、故鄕を出てから樣々な運命に遭遇しつゝ結局は元の出發地へ一緒になつて歸るのではありますまいか……。

閑話休題、お澤さんは流暢に病院行きの一場を語りました。

「何しろ急に容體が變つたもんですから、醫師も入院した方が可いと仰るのですし……當人はどうして强情ですからね、そんな處へは死んだつた行かないなんて、申しましたけれどまあ漸々のことで、釣臺で今朝ほど遣りました……」

「まあ釣臺で!?」

母の眉が鳥渡顰むと、

「ですけれど叔母さん、あれが一番病人には樂ですよ……
……何あちらへ行つたつて、一等室ですし何しろ博士さんや學士方の御手術を受けるのですから、宅に居ますより餘程幸福で御座いますわ、ねえ義父さん」

誰より母の眼鏡で子供の時から貰はれた、怜悧者のお澤さんにまかれてる伯父は唯々と點頭きながら、

「うむ、そりあさうとも、だかお互になあ年をとつちや家を放れるつて事が心細いもんで……俺もら金も何も不用なくなつたから、どうか婆さんだけは死なした

くねえ」
鈍い眼をしばたゝきながら云ふのを、ひよいと笑ひ顔してお澤さんが
「義父さんそんな心細い事を仰有るなよ、大丈夫癒りますとも今日からね私が鹽斷ちして、觀音樣に願ひますからね」
「あゝ有難うありがたう」
伯父はほろ〳〵と涙を溢してゐる、年の加減で、膝頭は殆ど中心がとれない樣に顫えて居る。
「さうですとも、兄樣が力をお落しの事はありませんよ、何有丁度時候の變りめですからね、丈夫な人でも病ふもんですよ、お澤さんもまた、無理な斷ちものなんかおしなさるなよ、お前さんまで身體を惡くすると義父さんが可哀相でさあね」
「えゝ、いゝえ大事の義母さんで御座んすもの」
と顔色を讀む樣な鋭い視線が走つた。
庭の樹蔭からは、頭の底に沁み込む樣蟬の聲がして折々日がかげるかと思ふと、またカッと名殘の暑熱をなげつける。義母さんのよごれ物を鳥渡片附けて、とお澤さんが立つてゆくと、何を思つたか伯父はぎゆつと母の膝を摑んで、
「お葉さん、肉身の子が欲しいなあ、這麼時お澤がせめて、藤さんであつたら、あゝやつて外分の惡い思ひをして、釣臺に乘つてゆく婆さんも、什麼に嬉しいか知れないんだぜ、何故お前はあの子を呉れなかつたいゝよ………」
「………………」
「俺達の血筋つてものは、お前の子だけぢやねえか」
伯父は舊い追憶をまた繰り返し始めて、其時の失望をそれから生じた姉妹の反抗を、斷片に思起して、大分まはらなくなつた重い口で、ぽつ〳〵怨言を並べた
「まあ、兄樣もう過ぎ了つた事なんだから、お互に緣がなかつたといふのでせうから………」
強いことを云つたのは昔の事、現在にかういはれて見ると、母も氣の毒やら、面伏せやられで、適當な返事をし得なかつた。

「何だらうぢやねえや、婆さんと二人でこしらへ上た身代も、いよ〳〵他人のものになつ了ふ、婆さんもそれを云つて居た。

伯父は聲を秘めて云つた、盲目的に世の中を奮鬪した老後の悲しい自覺、姉ばかりでなく、一層頑强な兄からかうした言語を聞く樣になつた朽ちてゆく古木のはかない灰色の生がだん〳〵追ひかけてくる樣な戰きが母に起りました。



暫らくするとお澤さんが、土藏から大豆か何か一ぱいに詰つた紙袋やら、尺巾の緋縮緬などを持出して來て「叔母さん、お邪魔でも持つて入らつしやいませんか義母さんは皆丹念に行李の中へ了ひ込んでありますのよ。」

かうした專斷な行爲をやつたことは、二十幾年來無いと云つても善いどう思つたか、お澤さんは義母の區別して置いた所有物をもう、掻き廻しはじめた。

而して母の歸り際に門口まで一人送つて來た。
「私も永々義母さんの面倒を見ましたけれど……何ですよ、今は私達の代になりますと、叔母さんに失禮ですけれどお詣りのお小使ぐらゐは差上ますよ」
と、諂諛ふやうに云つた處へ何處で聞いたか、全切不沙汰をしてゐるお澤さんの實家の弟が
「お婆さんが御病氣ですつてね」
と元氣のいゝ聲をして門口から怒鳴つた。
年を取ると何だか、周圍から死を急がせられる樣で考へると詰らなくなつて了ふと、母がこの話をば致しました。

……………………

全體なら私が貰はれて行く筈でした。
幾萬といふ財産も地所も家屋も、さうしたら私のものであつたと思ふと鳥渡妙な氣がしました。
私は病院へ見舞ひに行きました時、伯母さんは暗くなつてゆく中に一人で、臥床の上に横はつた居ました而して私が這入つて行くと、暫時解らない樣な鈍い眼をして見つめてゐましたが、
「藤さんかい………」といかにも嬉し想な聲で云はれた時、私は思はず其處に跪いて了ひました。
病院の窓の外には、月の光を浮べて堀割の水が靜かに流れて居ます、向ふ岸の白い土藏も家も、町家も皆伯母の家作です、その多年の努力の結晶を前に見ながら、何の力にそれがなるではなく、病軀を横えてゐる伯母の一生は果して徒勞とでも云ふのでせうか、そして今になつて、狂氣のやうになつてお澤さんに財産を讓るといふ事ばかりを、口惜がつて居ました。老後寂寥を痛切に觀察したらしい母は急に何思つたか、感慨の籠つた聲でかう云ひ出しました。
「何が、老人になつて可いつて、實子を持つたぐらゐ世の中に強いものはない、貧乏しても伯母さんなんかより詰　私は本當のお金持なんだね」

夕されば秋風さむしわぎも子が
ときあらひ衣行きてはや着ん　　讀人不知

きりぎりす夜寒に秋のなるまゝに
弱るか聲のとほざかりゆく　　西行法師

海水浴場の女

千鶴子

「オイ花ちやん、私最早出ちまうよ、澤山巫山戲ておいでよ、人面白くも無い」、

と、帽子からも黒と白の横縞の海水浴着からも、水の垂れたまゝ日に燒けた小石のころ〳〵した道を馳て三橋と大きく書いてある、柿色の暖簾の出てる自分の店に馳込んだ、過度の游泳につかれた彼女の口唇は幽に戰慄へてた、馴染の二三の客が差しつさゝれつする前を通て、葦簾で構成へた湯殿に入つた。

「芳ちやん流しませう？」

「流して置いて其後で……」

「いよ！出齒龜つ」

醉て舌筋の突張た樣な緊縮り無い調子はづれな大聲で騷いでるのが、湯船に沈むでるお芳に手に取る樣に聞えた、然しお芳には何んの刺戟もあたへなかつた。其樣な事常通な事であると思つた。

赤い褌一つでお芳は出て來た。

よく肥えた肩の邊、ふつくりふくらんだ乳、水に濡れてつやの出た髮——半裸體の姿に女と云ふ者を正面に見せ付けられた男の醉ふた心は動いたらしい顏付でお芳を見てゐたが、お芳は何んとも思はなかつた。

圖拔て高い男の笑聲は浮々したお芳の聲を中心にあたりに響いた。

其處へ派手な大柄の芭蕉葉の浴衣に淡紅色の扱をぐる〳〵まいたお花が、どつかと側に坐つた、そして無言でさわがしい酒宴の樣をぢつと見詰てゐた。

「お前の側に坐り度い」と、

猿股一つで酒を吞むでた吉三は、日に燒けてところところ皮のむけた肩で、寄掛る樣にお花の側にぴつたり坐つた。

「知らないよ、實際に此人はいやだよ、私が游泳いでれば側に來て、俺の情女〳〵なんと大きな聲で怒號るんだもの、私幾らみつとも無いか恥かしくつて逃れば逃る程、追馳て來るんだもの」

「だつて實際君は僕の情女だらう、それとも違ふかい、

これでも俺れが、花ちやんは俺れの情女ぢやあ無いと云つたら、立腹るのが當然だらう——二世も三世と誓つた仲ぢやあ…………」

「御馳走樣つ」

お芳は力まかせに、平手でお花の肩を擊つた、そして自分の前にあつた猪口をとつて、冷えた酒をぐつと一杯呑んだ。

「あんまり御馳走過ぎて中毒られちまわあ」と、聞えよがしに云ひ放つた。

「いよ！大出來〳〵花ちやん燒けますよ」

酒勢によつて赤く上氣した五六の人は、筋肉の弛むだしまりのない顏を二人に向けたお花は初心らしく頰をぽーつと染めて遣瀨無さうに笑顏をお芳に向けた。

お芳は反對の方向に視線を移した。

お芳はたてつゞけに三四杯呑んだ、然し平常の樣に浮き〳〵した燥いだ氣分にはなれなかつた、いま〳〵しい樣な立腹たしい樣なので、やゝともすると勢一杯の聲で怒號つて見たい心持である、其中でもお花が一番妬かつた、若々しい血汐の漲つてる樣な顏色、どこか初々しい風姿、ともすると二人——吉三とお花との顏と顏とが觸合ふばかりになつて、絕えず手を握り合つたり、擊ち合つたりしてる親密氣な樣が如何にも見せつけられる樣でいま〳〵しかつた。

憎らしいと思ひながら、漸々ともするとお芳は二人の方に心が奪はれた、何時とも知らぬ間に、お花の燥ぎきつた風姿を羨望的な眼差しで見詰てた、が、ハッと氣が付くとたまらなく腹立たしかつた、お芳は二人を睥睨にかけて、冷笑的な態度で、側の客をつかまへて調戲つて、オホ……と上調子に笑つてた、が、お芳には面白くも、可笑くもなかつた。

何んの反響もない空虛な聲だつた。

早船と書いた小旗を立てた小舟が三隻あがり場についた、ぞろ〳〵と舟から陸に上る人々——派手な浴衣に、髮を大きな桃割に結つて、赤帶を胸高にしめた、純下町式の娘や、突掛草履のいなせな若衆や、白の被ひした學帽の色の眞黑な書生連や、が後になり前になり手を機械的にふつて大股に歩いてるもの、ヂロ〳〵と、新奇なものを見る、好奇心とより良く見ようとする、機敏な眼着をしてるもの、深く物を想考へをる樣な顏してる眞面目な態度の人、其等の違つた人々はそれ〴〵の茶屋に入つた。

其等の人々をお芳はきはめて浮薄な——自分とは何

んの關係も無いと云つた風な、路傍の人を見やる冷やかな眼で見てた。

其後から上陸つた二人の男女があつた、納戸色の夏羽織に、赤い手柄に一番の髷若い女は麥藁帽の男に手を引かれながら危險なさうな足取りで小石の上を渡つてゆく、お芳は何家の若夫婦だなと思つた。

白と黑の辨慶縞の浴衣にしべのよく立つた白縮緬の兵子帶をぐる〳〵と卷帶にして男の姿を、誰れかに似た樣だと思つた忘れられない心持でしみ〴〵と見送つた、男は角から二軒目の鈴木に入つた。



此店にも三四人の男女の客がどや〳〵來た皆嬉しさうな、晴々した面色で、海に面した丸太の手摺の側に陣取つた。

お芳も肩上げのない荒い浴衣をひつかけた、そして赤味の多くかかつた中幅帶を、だらりとした引掛に後でたらしといた、お花がまめ〳〵しく蒲團や、團扇と斡旋してるのをお芳は無言でじつと見

てたそして吉三が漠然と、團扇をつかひながらお花の働いてる後姿を見てる其樣子の如何にも淋びしさうなのでお芳は、いゝ氣味だと思つた。それで少しはせい〳〵した。

「お芳ちやん、いやに眞面目してるね、思出したのかい」と吉三はお芳の肥滿つた肩に手をのせた。

「憚り樣、其れやあおかど違ひでせう！誰れかの事でせうよ」

「大分猛烈だね、だが芳ちやんY座の原田しつてるかい」

「原田？あゝ知つてるわ、丸顏の眼の大きな、よく學生やバイカラになる人でせう！」

「一寸女に待遇る顏付のやつさ、彼人が來て居るよ」

「あら、何處にさ」

「えゝ原田さんが來て居るの？」

何時の間にかお花は二人の中に割込むで來た、そして吉三の手をはらふ樣にしてお芳の肩に手をやつた

「ね芳ちやん先に二人で見物た時、原田は大學生になつてあの松原で、此樣腕をくんで僕の一生………

お花は其當時を思出した樣に、なつかしさうな樣子で見振をしてお芳の顏を今更に見た。

「あゝさう〳〵、あの時の角帽姿が氣に入つて、私なんか繪葉書を五枚買つて、立見に三四度いつたわよ」

「どこか伊井に似てるわね」

お芳は何物かをさがす眼差しで、ぢつと海上を見やつた、日差しはいつか廻つてた、コバルトの空も、暗綠の海も哀愁の色につゝまれ樣としてる、鋭い力を淡らいだ日は、或一部分を赫々となゝめに照して房總の山も水平線下に消え樣としてる汽船も諸てが、淡くなつた、夜釣舟の二三が來た計りで、其他は皆帆を下して川口の方に歸つてゆく、山下からも一日の快樂に滿足して歸る人々を乘せた三四隻の小舟も、皆イギリス病院の角に消えてゆく。

お芳の望む影はつひに發見されなかつた。

夕の鋭い風は戸に立つてない葭簾作りの家の裏から表へと吹きぬける、汐の香がはげしく鼻をつく。

お客も皆歸りつくした、其後に布團やら茶碗やら、其他のものが雜然と取散してある、二人は其等を片附初めた、一時二人は後片附に忙殺された。

ランプに火の點た頃、お芳の胸に淋びしさがひしひしと押寄て來た、お花は寢轉で手摩のした貸本を讀んでた、男氣のないのがお芳にはより以上の淋びしさを

痛切に感じた、するとお芳はバアーの夜の光景を思出さずには居られなかつた、芳烈な强酒の匂ひ、安ピアノに合して舞踊する時の男の熱した手、本能の欲するまゝに行ふ、そうした自由の放逸な生活を思ふ程お芳は孤獨に堪へかねた。

「花ちやん伊勢佐木町へ行かない？」

「だつて女將さんに知れるといけないわ」

「構ふもんか知れたら知れただけの事さ、其變りY座を馳走るわ」

お芳は先程の原田を思出した、そして騷擾たる夜の町を戀ふた、躊躇してるお花をせきたてゝ無理彌理に外に連出した、平常よりお芳の顏は白かつた、幅廣のリボンを大きく結むでゝかけてた。

二人は暗色い外に立つた。お花は弱々しい足付で後から從つた、お芳は弱いお花を冷笑する樣な面色で、見歸り樣先に立つて、大膽に步いた。

最後の日

月草女

三時を打つたが久子は泣き止まなかつた、定められた時はもう一時間を餘すのみである、傍に居る從妹の咲枝は氣が氣でなかつた。

大原の濱邊――此別莊に來た三日目に續いて來た南姉妹と一所になつてから久子の心は平かでなくなつた。

柔かい、内氣な、何時でも水々しい高髷に結て琴でも引いて居る樣な――彼女の心にも刺戟される事が多かつた、と云ふのは、姉妹に逢てから秀樹の素振が全然違つて來たからである、兎もすれば咲枝達を出し拔いて姉妹と濱に散步に出掛ける、後の松林に蟲追にも行くと云ふ風で久子の眼を成可く避け樣避け樣として居るらしかつた。

以前は咲枝に向つても文學上の話だの繪畫に就ての嗜好だのに隨分躍然となつて議論を戰はせたが、今は既其麽事は夢にも思ふ所でなく、振向いても見ないの

で、咲枝は人事ならず口惜しかつた。公然として約婚(例へ主筋にしても)捨てゝ時子に笑を傾けるさへあるに、只、一人の大恩ある養父が事も打忘れて學科を放擲して省みない——九月には豫備試驗を控えて居乍ら——何と云ふ事だらう、其に定つた學費の中で、どう工面したのか、昨日あたりから時子の左の藥指に紅玉入の指環が一つ殖えた。「あれは秀樣からでせう」と目引袖引する女中達に對しても只溫和しい久子が默つて泣いて居るのが苛立しくて成らなかつた。

で伯父母達が祝宴の爲に上京したのを幸ひ、最後の解決を得樣として自分一個の考へから、厭がる久子を無理に得心させ、「四時迄に後の松林まで必らず來て呉る樣に」と云ふ意味の手紙を小間使のお君に持たせて遣つたのであつた。

向ふは二人共確然して居るのに引換へて、肝心の久子が弱々しい丈咲枝自身は出來る丈第三者として虚勢を張らねば成らぬ、そして彼女等が慾望を破壞して此友人を救はねば成らぬと思つた。

「久子さん、どうなすつたの、早く顏でも拭ひて確固やつて下さいな、ね、愈々ぢや有りませんか」帶をしめ直し乍ら自烈たさうに云つた、未だ嗚咽の聲を呑みながら眞赤に腫れた眼を恨めし相に見張つたが、

「咲樣有難う、でも大丈夫、秀樣が聞いたら何とお思ひなさるでせうねえ」這麼場合にも二言目には秀樣が氣に入らなかつた。

「確固なさいよ、既如何したつて今日と云ふ今日は初子さんや時子さんを、凹まさなくちや駄目よ、其麼に弱くて秀樣を取られてもいゝ事？」戯半分に云つた言葉がギックリ胸に答へた樣子、深ゝ決心した樣に胸を押へて立上つた久子は亂れたびんの毛を搔上げて襟をピタリと合せた。

「解つてよ、咲樣、何卒一所に來て頂戴」雖然眼には未だ涙が溢れて居た。

* * * *

海を遮る砂丘に二町許り、別莊からは斜めに常夏の咲亂れた小徑を隔てた松林、八月の日は漸く西に落ち掛けて蟬の聲ばかり喧しい、杣人でも入つたと覺しく生新らしい切株が、其處此處に散らばつて居る、其一株に後向に腰掛けた、白茶の帶をキリヽと御太皷に締めた初子とマガレットに水色のリボンを掛けた若々しい時子の後姿が見えた。

「確固よ、確然よ」久子を後に被ふ樣にしながら、咲

枝は云つた。ざわざわと草を分ける音がすると二人は云合した樣に振返つて莞爾ともせず目禮した。
「御呼びでしたが」と線の際立つた面を擧げた姉の初子の二の句も待たずに、
「は、今日は失禮でしたけど、例の解決をして了ひたいと思ひましてね」後にうなだれた久子の眼には早露が浮んだ、時子は其を横眼で、チラと見るより蔑しむ樣な嘲笑を浮べ



たが、
「其は元より私共も望んだ所でした、ねえ時子」振返ると、
「エヽ私だつて」と莞爾頷いて姉を見上げた時子の面は憎い程美しかつた。
「久子さん何とか仰いよ、お終ひの日ですよ」また泣いて居る、傍の木に凭懸り乍ら唇を噛しめて泣き沈んで居た、「困るのね貴女の樣ぢや」と睨め付けたが、思返して其震へる襟足の哀れな樣子を

見ると此弱い友を苦める姉妹が憎くて憎くて堪らなくなつた。
「指環迄御貰ひなすつたつて云ふぢやありませんか、苟しくも約婚――！久子さんと云ふものがある以上、那麼ものを受けて、其で満足なさるんですかヱ、？」咲枝の面は熱して體はわな／＼と顫へた。
「だつて貴女戀は自由ですわ、有らうが、あるまいが、其は秀樣の御勝手ですわ」勝誇つたやう。
「そ、そりや時子樣、餘りよ、」堪り兼ねて久子が叫んだ、
「幾何、男が何と云はうと友達甲斐に其位拒絶して下すつたつて宜いぢや有りませんか」
「私は其丈の勇氣を持つて居りません」冷然と云つた。
「あゝ、私如何したら………」松の幹に凭すがつて今は倒れ相な久子を支へながら、
「久子さん、靜かに氣を落付けて、ね、熱しちやいけない」と云つた切り途方に暮れて暫らくは向合つたまま、沈默に落ちた。涙の音が聞ゑて來る、もう日も全く暮れて夕暮が迫つて來た。
「寶………來………」綱引く時を知らせる作爺は太い餘韻のある聲で呼ばり乍ら來たが、此體を見て不審相に頭を下げたなり、ゆさ／＼と日に灼けて赤茶けた身體を運ばせて行つて了つた。
「切望手を切つて下さい」と哀願む樣に云つた久子は涙に濡れて眼を擧げて、屹と時子を見守つた瞳の閃きに深い決心が微見えた。
「南樣、相濟みませぬが、明日歸京つて下さいませんか、父には私から申しますから」、咲枝は愕然として久子を見詰めた。流石に二人も顔色を變へたが、初子はクッキリと曲線を引いた樣な眉をぴく／＼動して、
「失敬な事を仰るな、貴女の御干渉は受けません……」
久子は深い嘆息をして俯いた。
「ほう………………ら………………い」長い聲は、だん／＼遠ざかつて行く、村も漸く色付いて來た、子を脊負つて籠を抱へた女房黒光りの皮膚を、心地好さ相に裸體にして、喜びに充ち溢れた樣な土地の漁夫、父親の歸りを迎へに行く男の子など、雜然／＼家々から溢れ出て此松林を横切つたが皆不思議相に目禮しながら過ぎた「人が出て來ました、もう早く決めて了はなければ」と咲枝は嚴かに云つたが、不圖、門の前に何氣なく出て來て此體を見るなり立すくんだ、秀樹の姿を見付けた。

「お、秀樣が…」四人の面は俄に輝きを帶びた。時子は我知らず馳け出した「時子さん！」驚いて呼ぶ頃には、もう秀樹としきりに云ひ爭つて居た。

「貴女、來て助けちや下さらないの、もう〳〵酷い事を云れちやつたんですわ」殊更馴々しく傍に寄つて恨しげに露を貯めた眼で優しく睨んだが斯うなると流石來ない譯にも行かなかつた。

「困るな、困るな、僕は何にも知らんのだから」眉のやゝ迫つた、眼の大きな角張つた顏、屈托面に餘儀無さ相に歩いて來るのを、待兼ねて、

「秀樹樣、あんまりぢや御座んせぬか」いつも打沈んで返事さへ聞取れぬ程の優しさに慊なく思つた久子の此態度には、皆酷く驚かされた、眼は凄い程不思議な光を帶びて鼓動の高いせいか、頰は赤味を帶び、身體は幹に支へて居ながらもわな〳〵と顫へて居た。

「僕は何も知らない」と少し間を置いて、

「エ、リングですつて？あれは伯父樣から賴まれたのですよ、微力な僕が如何して……思つても見給へな」平然と云放つたが、胸の戰き、頭はくら〳〵と眩む樣に思つた。

「眞實、エ、秀樣、其が眞實？」咲枝は稍々張合が拔けた樣、驚いて秀樹の顏を見守つた久子はやがて、俯いて無心に松葉を弄ぐつて居る、此方の姉妹は赫となつた。

「卑怯な事を仰るな、秀樹さん、あの砂邊での誓ひを御忘れなさらないでせうね、よく〳〵二人を欺いて下すつた、這なれば宜御座んす、高村さんの歸濱を待つて勝敗を決して貰ひます」斷固と云切つても戰く胸に靑ざめた顏を、姉の肩に押し當てたが、小さな歔欷を始めた。

「お止しよ時さん、那麽卑屈な男とは別れた方が却つて安全さ、もう忘れた方がいゝぢやないか」、此方は屹となつて、わざとらしう「ホヽ」と笑つたが口許は動かなかつた。

「だつて口惜しいわ、……姉樣……」

咲枝にした處で、這麽結果を見樣とは夢にも思はなかつたのである。其にしても知らぬ一點張りの秀樹の淺墓さも思ひ遣られて如何やら、其口許の人並はずれて大きいのさへ賤しげに見下げ果てた樣に思つた。

「秀樹樣、今の御言葉眞實なの」餘りの意外に呆れたのである、闇は近いて來た、今は各々の面さへ微然と薄白く見える許り「時さん今夜終列車で東京に歸らう

よ」、流石に咲枝も驚いて、「那麽に御急きなさらなくとも」云ひ掛るのを引取つて「否貴女の御干渉は受けませぬ」摘と露が溢れた。

＊　＊　＊　＊　＊

初舞臺

若葉

三枝子は初めての試演の役割が定まつてからもう其日ばかりが待たれて。毎日指折りかぞへては焦れつたがつた。——嬉しいやうな不安なやうな丁度婚禮前の娘のやうに自分にも分らない妙な氣持がして、殆ど其事ばかりに氣を取られてゐた。

其日が來た——三枝子はもう夢中で舞臺を踏んで了つた。此日の出演ものは本朝二十四孝の十種香の場で三枝子は息女の八重垣姫に扮した。

眼がぼうと霞んで了つたやうで薄暗い中に多數の見物の顏の輪郭のみがおぼろ氣に見えた、しかし到底も正視するとは出來なかつた。所作の多い役を只もう夢中で踊つてゐた。——チヨン〳〵と拍子木が心の底までも響きわたるやうに鳴つてずる〳〵と幕が下りるとほつと息を吐いた。何だか長い夢から今醒めたやうな變な氣持がしたどや〳〵と後の方で大道具を片づけにかゝつたので、三枝子は追ひ立てられるやうに立上つた。

「御苦勞樣ね、でも安心したわ、貴女もでせう」と、從姉の芳枝は笑つた眼を三枝子に向けたが、相手がぼんやり考へ込んでるので「どうしたのよ三枝さん？」と白い手を裲襠の肩に乘せた。「何だかもう胸がわくわくしてさつぱり夢中だつたわ」

「だつて旨く演きたぢやないの——さあ行きませう」

三枝子は一寸褄を取ると、二人は薄く埃の着いた裏梯子に足跡を着けていつた。

鏡ばかり光つた樂屋には、大勢の鬘下地が各自白粉刷毛や紅筆を動かせてゐた。

「おはいりなさいな」

「えゝ」といつたが、芳枝は入りかねて扉の外に立つてゐた。

「いゝのよ芳枝さん」三枝子は手を取つて無理に従姉を室の中に引き入れた、皆の視線は一時に芳枝に注がれたが、微笑、含んだ輕薄な眼色が、芳枝には激く可厭に感じられた、ストーブで暖められた生暖い室に白粉の香が溶け込んで、一種の妙な匂が滿ちてゐる拔ぎ捨てた鬘や衣裳がゴチヤ〳〵と入り亂れてゐた



鏡に向つた鬘下地の連中は浴衣の肩をはだけて、白い身體に喰ひついたやうなメリヤスの肌着のまゝで顔を

扮つてゐた、芳枝は嘗て覺えない濁紅色の空氣にむづ痒いやうな心の顫えを覺えた。

「あの俳優が來て居たのよ〇〇が」

「そう六代目の御母さんも來てゐたのね」

「妾〇〇が來るのを皆戲談いつてるのかと思つたら本氣で喜んでる人が隨分あるのね」

「そりやそうだわ菊ちやんなんかまるで氣狂だもの」

「オホ……菊子さんが」

眉筆や刷毛の手を止めて片手を疊につきながら隣同志此麽ことを饒舌つてゐた。

三枝子はいつの間にか鬘や衣裳を拔いで鬘下地を束髮に結び替へてゐた。

「三枝子さん旨く演きたわねえ、」先刻からストーブにあたつてゐた四十恰好の束髮に結つた師匠が、思ひ出したやうに滿足さうな笑顔を振り向けた。

「えゝ何が何だか……もうすつかり夢中でしたの、舞臺に座つた時後の方で御師匠さんが「氣をつけてね旨く演つて下さいよ」つて仰しやつた丈は覺えてゐますが」

「でも始めてゞ彼丈落ちついてゐりや充分ですよ」と師匠も嬉しさうにしてゐた。

「ほんとに三枝子さんは、初めてのやうぢやありませんね」

「大層な評判よ！所作が實に旨いつて、彼れ丈藝の出來る人は此の中にはないつて」

「三枝子さんお奢りなさいよ」

いくらか師匠へ當てつけの氣味もあつたのだらう、賛辭とも冷評ともつかぬことを八方から浴せかけた。

「どうも有難う、もう澤山！またお奢ぐらゐ奢るわ」

三枝子は笑ひながら、手と首とをかはる〴〵振つた、芳枝は物馴れた其態度を驚ろいた眼でじつと見てゐた。

もう自分の役は濟んだので三枝子は芳枝を誘つて觀覽席へいつた。舞臺では今中將姫の雪責の場が初まつてゐる。見物は狹い場内には入り切れないで扉の外までも溢れてゐた。二人は扉の側に躊躇んで見てゐた中將姫は苔の痛さに美しい眉を寄せながら、寒さに顫へてゐた、見物の女達の中には手巾を顏に當てゝゐる人も、大分見受けられた。

「中將姫は誰れ」

「菊子さん」

「えゝ菊子さん」

「貴女知つてゐらつしやるの」
「いゝえ――だけど何だか聞覺えがあるやうな名だから」芳枝は耳の底に殘つてゐるやうな氣がしたので思ひ出さうと焦つた、よく考へて見ると先刻樂屋で噂に出た人だつた。
「いゝ顏ね」
「えゝ平常は其麼でもないけれど舞臺へ出るとまるで見違へるやうになるんだもの、鬘附のいゝ人は一等德だわ」
三枝子は大分俳優らしい事をいつた。
「何麼家の方」と芳枝は立入つて聞いて見たかつた。
「何でも何とかいふ吳服店のお妾の子で、御母さんは元藝妓だつて」
二人は其れつきり默つて了つた、芳枝は餘念なく舞臺を見つめて居たが、中將姬の寒さに顫へる邊や顏の表情などがわざとらしくて泣くやうな氣持にはなれなかつた。
幕が下りると場内は俄かにざわつき出した、廊下をスリツパを引摺つて便所に行く人・休憩室に休む人、此の混雜した中を電話のベルがけたゝましく鳴つた。今まで舞臺ばかり見つめてゐたので氣が着かなかつたが、早窓外は薄暗くなつてゐた。いつの間にか休憩室にも電燈が點いた。
「もう歸りませうか……餘り遲くなるといけないでせう」三枝子は芳枝の顏色を窺ふやうにいつた。
「えゝでも貴女は」
「妾はいゝの御稽古の時に幾度も見たんだから」
二人は並んで外へ出た。邊はもう薄墨を刷つたやうに黃昏れてちら／＼星が瞬き出した。骨ばかりになつた御濠端の柳が寒い風に搖れてゐた。二人は各自別のことを考へながら歩いた。三枝子は先刻師匠や友達のいつたことを思ひ出した。彼の時は嘲弄はれてるやうに思はれて腹も立つたが、彼の人達のいつたことも滿更冷評ばかりとは云へない、――此間或人が、貴人が、屹度いゝ役が着くわ、舊劇だつたら振袖者がねえ、といつたとも思ひ出された。それに師匠もあゝいつて吳れるし、と思ふとそわ／＼した嬉しさが胸に滿ちた。しかしまたよく考へて見ると先日前期の或女優が、養成所ぢや藝ばかり良くつたつて駄目なのよ、誰かさんのやうに彼麼云ふやうにしなくつちや、――彼の女優達は虛榮心さへ滿足すれば貞操なんか何うでもいゝと思つてるんだ、どうせ此麼養成所へ入つて來るものは

虚榮心に違ひないけれど、———強い目をして自ら嘲けるやうに笑つた。そして「貴女なんかも可愛さうだわ今に痛くなつて來るから、———今に分明つてよ」といつたきり口を噤んで、どうしても理由を話して呉れなかつた、それに時々耳に入る裏面の狀況なども思ひ合はされて、何だか空恐ろしくもある。折角芽を出しかけた希望の影が、急に頭を引込めたやうな、暗い心になつた。しかし今更もうどういつたつて追附くものではない、乘掛けた船と云ふが自分はもう船出して了つたのだ。其れを今更齷齪して不安を重ねた處でどうなるものでもない、女優が貞操を守れない者なら其れでいゝではないか、墮落するのならいつそどん底まで落ちていつた方がかへつて不安がなくなるだらう。———無理にも此麼苦しい解釋をつけて暗い影を拂ひ退けやうとした。

「今日はどうでした？」芳枝が餘り默り切つてゐるので促すやうにいつた。

「そうね———まあ面白かつたわ」

「ぢや思つた程面白くなかつたつて云ふの」

「そうでもないけれど———實は驚ろいて了つたのよ、……皆さんがあんまり開けてゐらつしやるものだから」

「えゝ」三枝子は不思議さうに芳枝の顏を見たが、暫くして思ひ當つたと云ふやうに、

「あゝ、あれでせう、先刻の樂屋の話……………あれ位なことは何でもないわ、彼の女優達はおとなしい方なのよ、もつと激いことがいくらも……貴女になんか聞せたら吃驚なさるわ」

「何麼こと？」と芳枝は思はず聲がはづんだ。

何時の間にか停留場へ來てゐた、廣告燈の光で二人の顏はぼうと上氣して見えた三枝子の華美な衣服の色彩が電燈の灯に映えて、活動寫眞で見る舞姫のやうに見えた。電車は中々來なかつた。

三枝子は或女優が古稀に近い某富豪の寵妾になつて驚く程贅澤してゐることや、また初めは堅固な決心で入所つた某女優が、富豪や高官の祝宴なぞの席へ餘興を演ずる爲に招かれて行くことが度重なるにつれ、飮み習はぬ酒を强ひられて、欄に醉を醒ますことなぞもあつたが、遂に某紳士の手折る所となつて、今では內部で墮落の隊長株だと迄目せられてゐる、けれども養成所の監督者達も先方が地位ある人だから知らぬふりして默許してゐる。其れで內部の女優達の間では隨分

不平の聲が高い。其れに名の現はれてゐる女優達に得て斯ういふ醜聞が多いのだと話してきかせた。

「まあ……其麼こともあるもんですかねえ」芳枝は呆れて思はず聲を發したが、三枝子が其麼中にゐるんだと思ふと情なくもあつた。

「其位ならいつそ新橋へ何子と名乘つて稼た方が良さゝうねえ」と芳枝は皮肉なことをいつて笑つた。



三枝子は話の序からつひ口が滑つて、すつかり內幕を打開けて了つたがあとで口惜しいやうな氣がした。

其處へ電車が來た。

「伯母さんには此麼話はきかせないで頂戴ね」と三枝子は幾度もいつて電車に乘つたが、

「あゝ貴女と一所ぢやなかつたのねえ、今晩は家へいらつしやいな電話掛けたらいゝでせう」と媚びるやうにいつた。

「えゝでも今日は………」

「ぢや妾、明日はお休みだから屹度行くわ、では左樣

なら」

「左樣なら」

芳枝は走つて行く電車を見送つてゐたが、やがて線路を向ふへ越して濠端で築地兩國行の電車を待つた。

三枝子が女優になると言ひ出したとき、兩親達は兎角進まなかつたに拘はらず、芳枝は寧ろ奬勵するやうにいつた、いろ〳〵と藝術の尊嚴も說いてきかせた。其頃芳枝は新しい女優と言ふものは從來の踏襲を脫した新しい藝術を開いて行くもので、從來の藝人肌を離れて超然と立つてゐるものだと思つてゐた。其れが今日實際に見聞して、すつかり自分の考への異つてゐたのを知つた。さすれば三枝子も漸々感化されて彼麼風になるのであらう、いやもう此頃では三枝子の態度の餘程變つて來たのに氣が着くやうになつた。何だか自分が墮落の手引をしたやうな氣がする、自分が斷崖へ連れていつて突落したやうなものだ。——

芳枝は此麼ことを考へながら、前に電車の止まつたのにも氣が注かなかつた。

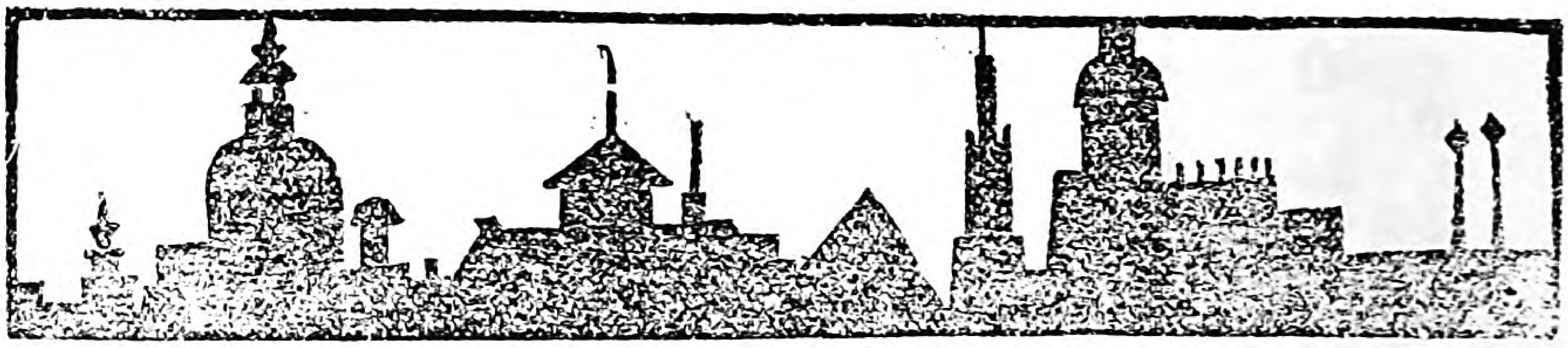
今回の小說は甚だ多數の投稿があつた、約六十篇はあつたでせう、其中から最も傑出したもの六篇を拔きました、此六篇は何れも佳作です、等級はつけてあるもの丶入賞以外の三篇も亦出色の作物だらうと思ひますから諸嬢の批評をねがひます（一記者）

ノートより

オスカア、ワイルド曰く『藝術家と云ふものは、彼自身の面白い所は、悉く作品の中へ注入してしまふから、其結果殘つたものは至極くだらない、人間として面白いやうな藝術家は、平凡な藝術家である、これに反して好き藝術家は、只作品の中に存在して、彼自身は極めて不愉快な人物なり』（若瓶）

「生」そのまゝに物を見得ると云ふ時は、人の一生にとつて、さう澤山はない。それだけ尊い時だ、それだけ自然な時だ。斯ういふ時が一生に僅かしかなくともその人は意味多き月日を送つたといはねばならぬ。諸大家の一生に就いて見ても、ある人の晩年は一種の社會觀といふやうなものに囚はれたし、ある人は道德的になつたし、ある人は病的になつたし。ある人の如きはまた極端に宗教的になつた。しかしすぐれた文學は『生』そのまゝに物を見得るといふ時に產れたものであることを忘れてはならぬ。（藤村）

藝術はたゞ自然の事實をありのまゝに表現するのみだ、證明するのでもない、論結するのでもない。（フロオベル）



大阪より　やゑ子

寝坊の兄さんに頼むやうにして起きて貰つて、朝御飯の後の片付いたのは八時半だ。今朝未だ夜明け前の暗がりで結つたので變な髪だけど、おかしいの奇抜だのと云つてる場合でないから、そのまゝすぐと病院に出かける。

鹽物臭い靱を通つて京町堀に出る。ひる前の赫々と照る日を下半身に浴び乍ら「今日は何う」と心配しいしい狹い路を歩く時は未だ氣が張つてるから宜い。病院に着てお父さんの容態を伺つて、「お母さん御苦勞さまですね少しお休みなさいまし」とはいつたばかりで母さんだつて用がおありだから。二人ででた〳〵してるうちに晝がくる。夕がくる。

氷割る時はあゝすると宜いんだよ。能く見てお置き。と仰有る、お向で看護婦がざるの中に氷を入れて錐でざくざくつつきてはしてゐる。

重たい足をひきずつて、浴衣美しい娘の涼む宵の町を通ると、松の亭では白い顔の女が壺坂を語つてゐるのが見える、呂昇が歸つたら、そして父さんが御全快なさつたら、と幾分樂しい心持ちで千秋橋をこえる

此の邊の商店は日が暮れると店をしまふので、夜通ると道は眞暗だ。やつと中之橋に瓦斯燈がひとつぽつんと見える。上の橋にはじまつたこの川は、紺碧の水もゆるがず、立ち並んだ倉庫は川をはさんで後を向き合つて居る、橋に凭れて涼む人のひとりもないころ橋に來ると、いつもうちの事が痛々しいほど強く思ひ出されるのだ。

もうひとつの橋のかなた。あゝ姉さん。

こんなに晩く歸つて叱られやしないか、叱られるものか親の看護だもの、だけど又ゆふべの姉さんのやうに九時頃になつてざ

ぶざぶ洗濯はじめられても弱る。私になら宜いけど他の方に「ひるまは出來ませんからね」などゝ云はれると側にきいてる私が辛い、心よく親の看護さえ出來ないものかと悲しまずに居られない、厭だなあ、と思ひ乍ら、も妹と云ふ自覺は私の歩みを急がせた。（病院通ひの時）

私はたしかに筆子さんよりさとつてゐる。第一兄さんを私の兄さんだと思ふからして不平もおきる。義理の姉さんの夫だと思へばなんでもないのだ。昔可愛がつて貰つたこと、心おきなく語つたこと、それもすべて忘れてしまへば宜いのだ。そのなんでもない事がなんでもなくなつたが、妬くと思はれちや。あの意地づくも手傳つて、この頃やつと馴れて來た。

かなしい哉。かうして兄妹の間も遠ざかる。（落ぼし九日）

何となくじれつたい思ひがして、ふとい煤煙のたふれて消える方へ歩いて行く。夕涼みの床几持ち出す頃である。

知らぬ町を通つて川口に出る。蒸汽船や帆前船や雑多な舟がむらがつて浮いてる間を渡しの舟が通ふ。日の影うすれて舟の人は皆くろく見える。渡しの上の欄干に凭れて居る私の浴衣が目立つのか、空しく立つて居る時間を惜しんで呉れてか、舟の人も陸の人も私を見る。美しいのでもなく、何のねうちもない私を何だつてあの人たちは見るんだらう。とおかしくてならなかつた。むら雀やかましい木の下を通つて下へ行くと舟の名をかいた札を並べてある店がある、税關の前には琉球人らしい女が二人きよろ〳〵してゐる。

荷揚場にはむしろ包みだの箱だの澤山積んである。隣の舟に語る人夫の大聲や、チエーンの音のさわがしいこと。旅の色や海の匂ひを思はせる。

瀬戸内海を行く舟よ、霧島の灰降る國に再び乘せていつてほしい。芭蕉の花の大きい國、その人はもうおさげの髪を笑ふまい。あゝ南の國へ行きたいな。行く舟歸る舟。川口はせつかちな私にはふさはしい所。せはしい空氣の音調のなつかしさに、ぼんやりながめ

入りました。（十一年振りに川口を見た日）

悩んで苦んでそのあげく、及びがたき望みを棄てた。そして私はどうなつても宜いと思つた。（然し自棄ではない）といふのは私は行く路をえらばない。行く態度をえらびさえすれば宜いと思ふから。それに私の存在は、私に取つてそんなにうれしいものではなくなつたそんなにつまらないなら死んでしまへば宜いぢやないか。と思ふこともあるが、その死だつて、生とどこが違ふんでせう、生きてたつて死んだつて、私はやつぱり在るんだ。生きてゝつまらない人は死んでもやつぱりつまらないから、今あるまゝに續いて行くばかり。このはかなき生存も又何かのためになるならば、それは大きな儲けものだから、その時は喜んで犠牲にもならう。なりたいと思ふ。

卑怯のやうだけどこれでも眞面目なんです。（靜かなあさ）

神戸に行かうと云ふ前の晩、天王寺の納涼博覽會に行きたいと思つたけれどやめてしまつた。（大阪に居ない）と思つて、しつこかつた私も此頃ではもうあきらめる事は平氣になつた。一面賢く、一面すれて來たのだらう。

河岸通りから川のふちまでゆるやかな傾斜もつた廣つぱに規則正しく並んだ材木を見乍ら、大阪の誌友をおもふ。

（淋しさが追つかけるやうだけれど、うちへはまだ橋を二つ渡らねばならぬ）といつた房子さん。雨降る夜處女の淋しさに、よしや糸の切れうとも、と三絃を亂調子でひいた春江さん。何ういふものかこのお二人が思ひ出されてならない。春江さんは安らかな奥樣でおはさう。房子さんは波瀾のおきさうな方らしかつたが氷を食べ乍ら、東京では氷あづき、神戸ではアイスクリーム、京都では宇治の里、大阪ではかちわり、ふと代表的の好みがさうぢやないかと思つた。

あくる日はあつかつた。流しもとをしまつてから出かけた。軌は大掃除につき車馬通行止なので電車通りをくるりとまはる。四つ辻につみ上げた塵芥を燒くのでそばを通るとあつくてたまらない。

廣島行の汽車だつた。見渡すかぎり青い色、でなくば海の鉛色。時々ある能くたがやした土の色はうれしかつた。（大阪を去る日）



火影

若杉濱子

今夕徐に秋は訪る。

白く乾いた公園の大路を、自動車が此方へと走つて來る、其火は猛獸の瞳のやうに、其聲は奇怪なもの丶嘲りのやうに、淸く澄んだ初秋の空氣を攪亂し、夕闇を脅やかして、傲慢に走つて來た。

「人、人を侮蔑したやうな笛だな」と、職人が獨語いた。

「え、似てやしなくて、誰か樣に、ほうら」女は自動車の方を見返りながら、慄へ聲で云つた。男は矢ッ張り見向きもせずに歩いてゆく。

「どうだか。人間も自動車でこんな所へ飯食ひに來るやうぢや、飯も甘かァあるまいな。」見る〱男の面には不快の色が上つた。

女は又、精養軒の木立を分け入つた自動車に、險しくなつた眼を遣りながら、

「平凡な古くさい事をいふやうだけれど、眞個によ、働ける後に食ふ、是より正當な大きい生活の眞理は無いんですからね、其美味を味ふべく與へられた我々は幸福でしたわ。」

女は自らをも慰むるやうに力を入れて斯う云つた。

燈火を點じた許りの黃昏の市街は、火影をうつす湖を臨むやうに、上野の丘から見下された、疲れた弱い心持ちで、私は柵の處に凭り掛つた。

燈火に煙る地平の果て――、其處に淋しい心を追ひ遣つて、半時餘りも茫然と私は立つてゐた。

「彼の地平線と見える處に、一つ光る燈は、淋しい心



の旅――といふ事を味はせられますわ、あんな果敢無い火影があるでせうか、あれは何の灯でせうね。」

「あんな灯よりか、観音崎の燈臺の方が餘ッ程悲しさうに瞬いてゐたぢやないか。」

「あれは違ひましてよ。曉の星のやうな光りですよ。あゝ何だか悲しくなります。」

「よく悲しがる人だねえ。」

「あの燈の色を御覽なさい、秋といふ感じが沁々流れて來たぢやありませんか、あの市街の上に……」

「はあさま、ボロ感想抒べるんぢやないよ。」ピシイリ頰に平手のお見舞を受けたやうな苛立たしい思ひがしたが、が、何故かそれは打ち消して、

「ホヽヽヽ眞個にサ、私つてばねえ。」と微笑んだ。

わざとらしい笑聲は秋の靜寂な空氣を、一搖りゆすぶつて、パッタリとマッチの火のやうに消えて了つた。

――ある夜ふけて――

若杉さん、苦しいとか悲しいとか、其やうな言葉を並べて手紙にしたところで、それが何になりませうそんな事ではまだ〳〵嚴肅な境に至つてゐないといふ事を悟りました、幽ながら自分のゆくべき道が、閃いて見えるやうな氣がします、嬉んで下さい。

友の手紙を讀み返して、暫く私は凝としてゐた。藝術を持てる人は幸なりと、書かうとしたが止めてしまふ。

漸く藝術に曙光を認めて、それを追つて生きやうとすれば、すぐに又撲ち壞しに來るものがあつて、

藝術とか文藝とか、何が一體面白いんだい、あゝ思つたとか、かう思つたとか、自己の狹い見解を披瀝して、それに隨喜してるやうぢやあ、お目出たいもんさな其處まで自惚れが强けりや、絕望でも自覺でもあるまいテ。」何處からか面憎い云ひ態が聞えて來る。

書齋に溢るゝ文學書類を賣り拂ひ、詩筆を投げ打つて飜然と自然科學に趣いた、其人の聲である。かう思ふ、あゝ思ふといふ事に興味を失つたのは、事實だけれども、急にむら〳〵と反抗心が起つて來て、

「ナアニ、斯んな事も凡人の鬪ふさげサ。」と答へた。す

ると耳の傍で。
「はあちやんは思想家で、新しくつて偉けりや萬歳だらう。」と罵つた、私は皮肉なせゝら笑を以て、其罵りの答へにした。――電燈の許にて――

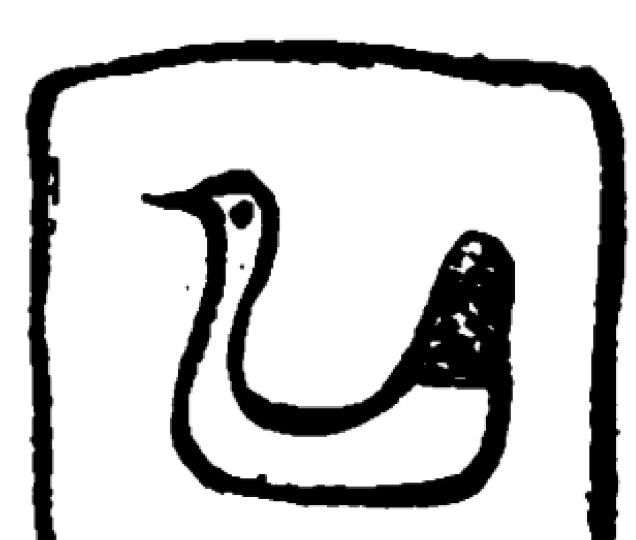
薄暮はいま、私の面を掩はんとしてゐる。限りなく淋しい心が枕から離れてひき耳を立てゝゐたが、何の音もない、時計が七時を報じた許り。
立て籠めた戸のふし穴から、白く覗いてゐる夕ぐれの空を見詰めたせまあい、何にもない世界を。そして又近松の淨瑠璃本に目を遣つた。
向ひ通るは清十郎ぢやないが、笠が能く似た管笠がよう似た笠が、笠がよう似た、管笠がえ、笠をしるべの物狂ひ、物に狂ふも我ばかりかは、鐘に待つ宵鳥には別れ、戀する人の夜なく／＼を……。
暗くなつた、文字が黒く茫として見えて來た、灯をつけなければなるまい、と思つたが鉛筆をとつて。
私はほんの一瞬でもいゝから、お夏のやうな心持ちになつて愛したい、可愛らしいぢやありませんか女らしいぢやありませんか、けれど私は不幸です何にも持つて居りません、それは御存じ？

けれど妻が暗い生涯には、むしろ強烈な愛なんか不用です、何故とお怒りになるか、強烈な愛火に胸を燃やしてゐたのでは、妻といふ機械的な義務的なお役がつとまらぬ許りか、自分自身が覺束ない。
書いて見たが是を出す丈の大膽な心にはなり得なかつた。
「ふん一山百文に見括びられちや迷惑だぜ。」
「御迷惑でも、人間にや餘り大した相違がないから情けないわ。」
ゆふべ放つた言葉が、今冷やかに胸にくり廣げられた、戀する人の反抗的な言葉ほど、悲慘に相手の胸に響くものは無い。
あゝどうかして人間に縋るやうな心になりたくないものだ？、
仰向けに寢たまゝ胸に手をあてゝ、目を瞑つたなり蒼空を描いて見やうとした。
そして其蒼空の中から、人間以外の何ものかを吸收しやう――といふやうな氣分になつて、無暗に空想を走らかして見る。
何にも來ない、唯大空が漠として少しも動かない、見詰めても見詰めても凝としてゐる。――眠りの前――



健康診斷

きりぎりす



いつもむづ痒い吭が今朝は物忘したやうに爽であるが、ちつともあてにならないから思ひきつて醫者へ行くことにした。

どこへもあまり連れ出されない妹に、道をよく知らないから一しよに行つておくれと言つたら、喜んで自分よりも先へ仕度をして下駄を揃へて待つてゐる。この間お土産に買つてきてやつた青いおさげどめに短い毛を挾んで先へ立つて行く。

村と言つてもかなり人家の續いてゐる片側町の形になつてゐる往來には歩いてゐる人よりも渡舟のつくのを待つたり河岸へ立つて楊子を使つたりぢつとしてゐる人の方が多い。

二本の竿を交る交る曲げて漕いでゐる砂船が、舩へ水が乘りさうに沈んで、靜に動くそばを、お客をやつと三人ばかり載せた番舟が、きつきと二人揃つて艫を漕いでは通り越してしまふ。私たちは橋にも舟にも要はない、隣村へ行くのだから、耕田十里と土地の人の誇る景色の中へ入つた、村を背後にしたのである。

稻の葉づれはさら〳〵と聞えても川柳の影は靜である、白蓮の花片はかろく搖れても銀鋲打つたひろ葉の露はまだ乾かない。

圓い葉の一ぱいに浮いてゐる隙間から白や黄の小花を咲かせた水草の若々しさ。

昨日一日干した位の刈草をひろげられて、少し歩き惡くなつた道を、妹が思ひ違をしたために三四町引きかへして、向ふから來る人を待つて聞いた。あぶなく方角違の遠まはりをする所であつたけれど、九つやそこらの妹を叱るのは無理だ、氣の毒さうな、顏をして顏に、一ぱい汗をかいてゐるのが却て氣の毒になつたから、板橋の上へ立つて、しばらく二人とも風を入れながら葦の葉をとつて流した、今道を敎へてくれた人は、すぐそばの人家つゞきへかくれて、朝霧の晴れき

つた空には、遠く筑波山があらはれてゐる。

世間の評判もよい、家の人も信用してゐる醫者の家は、垣根だけ新らしい、その外にびろい朝顔の畑がある、容赦なく照りつける日光に抵抗できないで、見るまにちゞれてゆく幾十種の花は慘である。

門のうちには座つてゐるのが苦しくつて、庭の木影で待つてゐる患者もある、頭中へ繃帶をした男の子のほかにはそんなに、病人らしい人はゐないもつと大勢ゐるかと思つたら、藥とりが多くつて、待つのはたつた四人きりである、それでも待ち遠しい、暑い。

ハンケチをゆすいで顏を拭いてゐる人と、俥の輪を洗つてゐる車夫が涼しさうである。

やう／＼自分の番號を呼ばれたから、ほつとして唐紙を明けて入ると、椅子も寢臺も眞白な診察室に、同じく眞白な消毒服を着た〇〇醫士が待つてゐた。

なるべくある病氣ならばはつきり、見出して貰ひたいと思つたから少しでも病氣になつたことは幾年前のでもかまはず、委しく話して診察にかゝつて貰つた。あいにくそれが目的であつた吭の苦痛が少しも無いのできまりが、惡くなつた、醫者には一番苦しむ時を見せたいのは人情なのであらうか、それにしても一昨日〇〇先生を初めておたづねした時に、なぜあんなに吭がつまつて苦しかつたのか、しまひには聲もろくに出なくなつたことを思ふと、殘念でしかたがないから、そんなことまで話しながら極めて丁寧に診察を受けたけれど、肺だの氣管支だのに些の別條あるわけではない。たゞ慢性の喉頭カタルだけだと言はれたので、ずつと心が輕くなり、帶をしめる時の心地よさは湯上りに劣らなかつた。

散藥を少し貰つて待つてゐた、妹と一しよに、歸には別の道へ出た。片側は家々の生垣つゞきで一方はゆるやかな青い藻の浮いたうす暗い川である、青空の映つたところだけ水が清く見えるけれど、山の方の川を見つけた目には汚く見えてしかたがない。

形のよい松が岸にあるのは海邊らしくつて好きだけれど、無花果の木が多いのが陰氣である、青い心臟なりの實を澤山つけてひろい、厚い葉を、下に浮んでゐる小さな舟の上へ翳してゐる。その間々から幾本もの釣竿が川邊のすすきのやうに參差として絲を垂れてゐたのに一寸驚かされた、面白い無言の業だと思ふ。

再び往きに通つた田んぼ道へ出ると遙に我が家の屋根が見える、そのために近道をとらうとして畔を通る

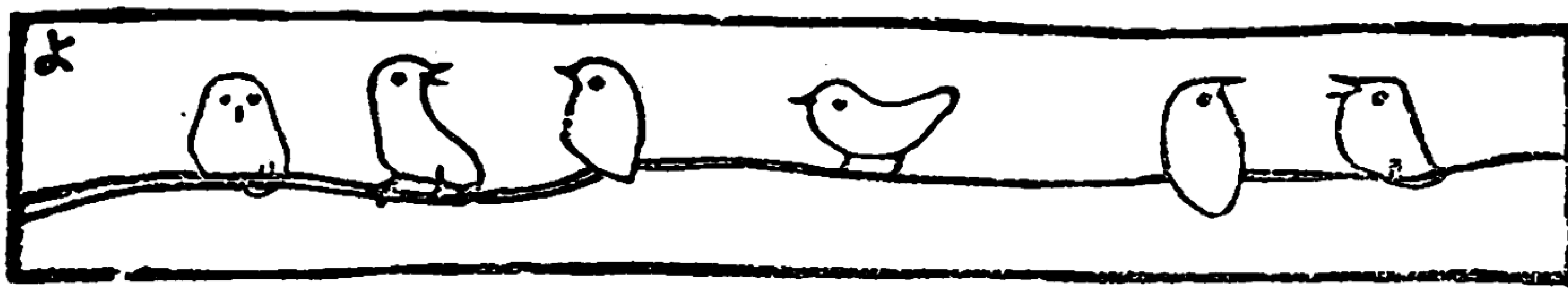
やうになつた、戻るのも殘念だから素足になつて澤瀉の葉などを踏んだ、家の庭へ入ると五つになる弟が、「てら」と言つて二尺に近い鯉を盥の水から出しかけてゐる、まあどうしたのと聞くうちに、ぴちやりと手から刎ね落して顏中水だらけになつたをかしさ、「あのね茂ちやんとこの小父さんが精ちやんに上げるつて、それから、姉さんに上げて下さいつて」。自分の短い釣竿は立てかけもせず軒端へ放つたまゝ、小さな唐辛子浮には砂がついてゐた。まだ拇位のたなごか鮒より外には釣れないのだから、どんなに愉快だらう、夕食事の片づけが終へてから、門口へ出て見る、久しぶりで開いた水門から、新しい潮が道まであふれさうに入つて來る。はてしもなくつゞくさゞ波にふれて、どこまで吹いてゆくともわからない風が、やつぱり海の方から入つて來る。私の心にもこんなときがあればよいと思ひながら、四本の高い橋杭をさかさにうつす入江の水を眺めてうつとりした。

「どこに秋の淋しさが萠したらう、わが身を忘れるとかうつぶやきたいゆつたりした。夕ぐれである、かういふ、鳥が田から飛び立つ音さへ靜なと思つてゐるとさながら、紅と青との兩眼から火花を散らしながらボーと今表の川を通つたかと思ふ蒸汽は、もう海へ走り出したと見えて遠くの方で汽笛が聞えるのである。

むつと石炭嗅い煙を浴びてわれにかへつた時、私は無病であるとよろこぶとともに、新らしい淋しさが限なく湧いてきた。（八月二十一日）

人麿の戀

たらちねの母が手はなれかくばかりずべなきことは未だせなくに　いつはしも戀ひぬ時とはあらねども夕かたまけて戀ふはすべなし　はしきやし誰が障ふれかも玉鉾の道見忘れて君の來まさぬ　行けど／＼逢はぬ妹ゆゑ久方の天の露霜にぬれにけるかも　玉久世の淸き河原にみそぎして　いはふ命も妹がためこそ　思ひより見よりしものを何すとか一日隔つを忘るとおもはむ　戀ふること心やりかね出で行けば山も川をも知らず來にけり　山科の木幡の山を馬はあれどかちゆ吾が來し汝を思ひかね　春やなぎかつらき山に立つ雲の立ちても居ても妹をしぞ思ふ　久方の天てる月もかくろひぬ何になぞへて妹をしぬばむ　白玉の間あけつゝ貫ける緒もくゝりよすれば後逢ふものを　春日山雲居がくりて遠けども家は思はず君をしぞおもふ



晝に歌へる

☆

京都　要司村福子

しもたやの暗き庇に猫住まぬ家の如くも母と我いく

桐の葉は落ちぬ夕の風もなきに黄ばみて庭にひろごりてあり

我庭の落葉の上を小さなる名もなき蟲のはひてゆく哉

うるしの香まだ新らしき枕して若き我身のゆく末思ふ

上京やくづれ築地の土の上にまひる花咲くさるすべりかな

☆

江森美子

十萬の世界に渡る春風も我が肌よりうごきそめけん

さゆらげばこゝちなきかな若き身にもられし熱の亂れこぼるゝ

以下病床にて

緋ぼたんの花をし給へ熱に病む少女のへやを粧はんがため

熱燃ゆる身にけじめなし赤々と火の燃ゆる國にあそべるが如

☆

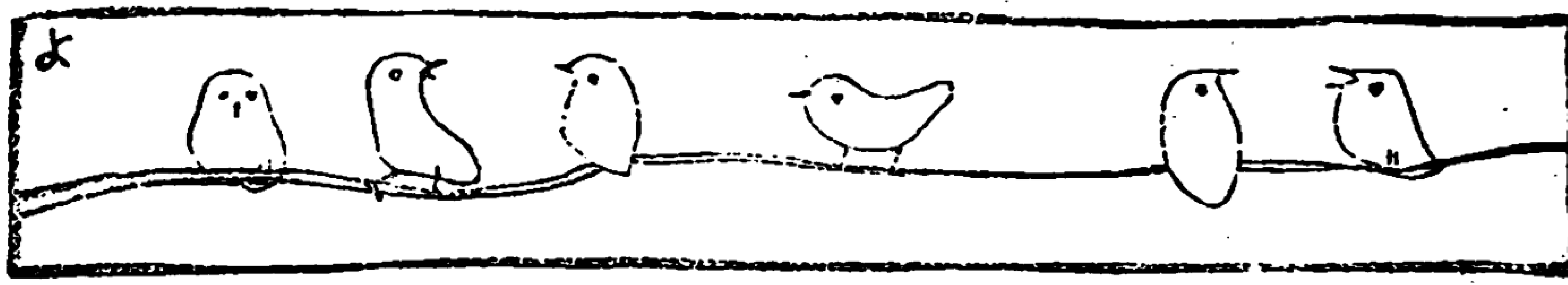
越後　齋川幸子

静やかにこゝろの上にあらはれて消えざりし秋とまたなれる哉

病みふせばとりとめもなき淺間しき悲しきことを思ひつゞくる

寢すごしゝ後の如くもこの日頃茫然としてあめつちに生く

洪水の夜の月のしづけさ天つちにわれたゞひとり生きて在かな



☆ 小萩

あやまちて母の言葉ぞさからひぬかつて一日はものうとましき
青山やあを葉をぐらきかけによりわが悲しさをしばし鎭むる
つく〴〵と思まとへばやみのうちにあるがやすけきこゝ地こそすれ
何やらむことのおこりのあるがごとするどくひゞく雨の音かな

☆ 豐後 散る花

秋となり思はれてある身はさみし山莊の夜をきり〴〵す鳴く
雜草の足にまつわるうつゝなき君に別れて二日をすぎぬ
君思ひ思ひつかれて何時の間か寢入りし夜のこほろぎの聲

☆ 豐後 佐藤花葉

哀樂の心と君を戀し行く心とあはれ九月となりぬ
車前草の花つゝましやかに炎天に汗ばみ咲きぬ泣かまほしけれ
秋の夜となりぬランプの石笠の石竹色のなつかしきかな
覺めたりと心强くも思ふ日の君が美き頰とさぼてんの花

☆ 大阪市 吉田春乃

海に似て霧の漂ふ夜の都會うるむ灯を見て愁ひて歩む
消えなんとするともし灯をかき立つるうしろ姿ぞなまめかしけれ
一人の君を競はん戀ひ心いつしか去りぬ廣き海見て



薄明

港の女

I

明るい空にみだれて、居た雨は、いつか梢に音をひそめて靜かな大空と、暗い我が心の濕地にほのかに微笑する薄暮の淡紅色よ……安息を銜ふ暮の色よ。

あゝこの光の永久に消えずあれよ。

疲れはてた瞳をてらして、大空を仰ぐとき、罪人の罪解れたやうに凡のとらはれから放たれたやう。鎖された裏門は我手によつてあけられた。そしてその光の中を、無言で行く我が姿をみとめるのであつた。

我が吐息に驚かされて我が存在を悟つたときは小高い丘の端に胸ふるはせて居た。

何故？如何して？こんな所へきたのかしら。

安らかな色——淡紅色——その光の奥に、何物か滿足を得やうと思つて、たゞわけもなくあるいたのが、この丘に登つたのだ。

光に計り奪はれて居た瞳は、いつか地に落ちてしまふ。

丘につゞく道は澤山ある白い乾き切つた細いのもある、柔かさうに見えるグリーンの小徑もある。

私はどの道からきたのか。

どこから來たのだかちつともわからない。

一つでも足跡が殘つて居ないのだもの。

どの道だらうか、と考へて見たが、分らなかつた。

苦しんで自分の辿つた道を、確めやうともしなかつた探求すべく自分が何事をも殘さなかつたのを、知つて居るから。

胸は沈ち着いて來た何か滿足を得たのだらう？

否決してそうでない。得る物はなかつた。

馬鹿らしい——ほんたうに馬鹿らしい。

くるしまず、努力せず、宙をあるく樣にこゝまで來た、それは我が十九年の生涯である。

群衆から逃れ、世のどよめきから逸し出て、通ふ人も極めて少い、人生の影道を辿つた自分が、今更馬鹿げて居る。そこに何を殘したであらう。あゝ何を？

静かに立ち止つてかへり見る今、何物か胸に得たであらうか、夢見た安息は、我前の灰色の野に、強い恐怖と現れた、何事も殘さず。何物も得ず、たゞ虚無である。

俄然自分はこゝに立つた。永久にと願つた淡紅色は、不安らしい灰色と化して居た。灰色の光の下に太い高い煙突や細い煙突は眞黒い重さうな煙を吐いて、活動をつゞけて居る猛烈に。

さうだ今にこの一大都會は動き出すに違ひない。凡ての物を乘せて……大きな大きな響を殘して……

そのとき私は取り殘されるだらうきつと……

私は丘の草の上を辷り下りた、夕闇の中を白い乾いた小徑に出來得るだけ、大きな足音を殘して走つた。



行かう——行かう物音の狂ひ亂れた市街に。青や赤の光が亂れ亂れ眩暈する様などよめきの中にやける様な息をつく群衆の中に……

そこでくつきりと我が足跡を、殘し、我息と我足音をきいてあるかう。

II

嚴かで悲しく、たとへば大聖壇かと思はるゝ夕の空、花は香爐の如く莖の上におのゝいて、周圍から物悲しい響が透明な空氣をふるはせて暗澹たる、私の心の奥に微かな波動をつたへる。

私はたへられなくなつて、大聲にないた、思ふまゝ泣いた。かつて、自分にこんな事はなかつたのに……しみ〴〵とこの夕自分といふの考へて、我と我にあ

はれを覺えて思はずも。あへば涙を胸の柔地に、注ぐのであつた、あゝこんなに強烈に自己のあはれむべきであるとは自分すら知らなかつた。

あはれむべき自己をこの上もなき賴みとして十九年の生活……思へば安らかであつた。

物知らざりし年月の、如何に幸福が多かつたかしれない、唯一のたのみとした自己の、かくもあはれむべきである事を知つた今、何に信賴すべきであらう。弱くとも、自己に最も忠實な自己をすてゝ、他に依るべきものがあらうか、決してない。

花に露は置いて居た。私の眼は乾ききつて居た。大きなトロロ葵の花をわざと、胸にかざした。ふるふ手をこらへて胸を抱いて、心の底から流れ出る熱い息に、やけはしないか、と花をきづかつた。

こんなにして居ても、我と我姿を見る事はかたくない、我魂はしづかに、我を離れて、今も、大きな花をかざして尊大らしく誇つた自分を、嘲る樣に見て居る。

そして心の底の底までみすかして居る。

圖畫の先生は、「自分で自分の肖像畫をかくんだ」と仰る。それがいかにも自慢らしくきこえる。クラスの友はうらやましさうに、偉い方だといふ。自分を見る事はこれ位精細でなければならぬ、ときく度毎に馬鹿らしいと思ふのは私許りらしい。

そんな、日はいつか過ぎ去つた。

「黒髮長く丈高く」などゝ自分の姿を歌つた心は若い者であつた。我と我にあこがれて、歌にも、詩にも、はた繪にも、自己の外貌を精しく現したとき淋しいなどゝ思ふ事はなかつた、凡てを捨てゝ自己を見るのに努力した。

自己を見る事精細を加へて、凡ての事に、自己に信賴する樣になつて、心の姿を認める樣になつてから、多く自己を解しただけそれだけ、自己のあはれむべきである事を悟つた。

自己といふものゝ、あはれむべきである事を知つてから私の言は強い者となつた。

私の行は實に不從順と化した。

あはれむべき自己よ……

人知れず熱い涙を内に流した。人が居ないとき充分に同情を寄せた、自己を慰藉する事忠實となつた。

人に對するとき、自己に冷淡を裝つたのだつた。

私は自己のため大聲をあげて、なく樣になつた。



スイッチヨ日記

田村紫色女

八月十二日、月夜、
一匹は探つた、また何處かでスイーチヨの聲がする行つて見る。居た。隣りの家に通ふ。芋畑の細道にさしかゝつた小さな桐の木に鳴いて居る、でもいくら見付やう、とあせつても見付からない。じれつたくなつて、一寸枝に觸れて見た。チヨンと鳴いたきり、鳴聲が斷えて了つた、もう駄目と言つて家に歸る。でも妹は家に這入らないで、庭に提灯さげて立つて居る。やがて姉さんまた彼方に居てよ、と提灯を胡瓜畑の方に向けて云ふ。出だして見ると、たしかに鳴いて居る胡瓜の葉に宿つてる、夜露は銀を細かくして、葉に撒き散らしたやうに、キラ〳〵輝いてる、花は青い葉の中に黄色く夜でも咲いて居た。スイーチヨ、スイーチヨと直ぐ目の前に鳴いて居る。物も言はずに、覗きこむやうにして見た、居た居た胡瓜の蔓を竹に結びつけた藁の縛り目の所に、青いやさしいスイーチヨが、鳴きながら居た、自分は手を伸ばしてあと二三寸で屆くと言ふ時、す早く指を動かして、蟲をつかんだ。二匹探る、妹も喜ぶ。家に歸つて兄様に軒に釘を打つて頂いて籠を絲でつるす、家内中今鳴くよ鳴くよと言つて居たが、其の夜は到頭鳴かないで了つた。

八月三十日、雨模様、
昨夜探つたスイーチヨを見ると、去年鈴蟲を入れた古びた籠の中に二匹して薄赤いひげを、動かして、優しい目をして居た、夕べ一晩何も食べずに、嘸お腹が空いたのだらうと、早速臺所に行つて、胡瓜を割つて其種子の所を持つ來て籠の中に入れてやつた、直ぐ二匹して種子の上にのつてチビ〳〵食べ始めた、雨は時時降る、夜になると風雨吹き荒れて、寸時も止まぬ。蟲の音は一つもきけない、妹と二人して日誌をつける。耳を澄せば、藁屋根からおちる雨垂れの音と、庭の柿の古木や樫に當る烈しい風のひゞきのみ……スイーチヨの籠を机の上に、床に入る。

八月十四日、晴天
兄様が朝餉の時、夕は、スイーチヨが大層鳴いたよ

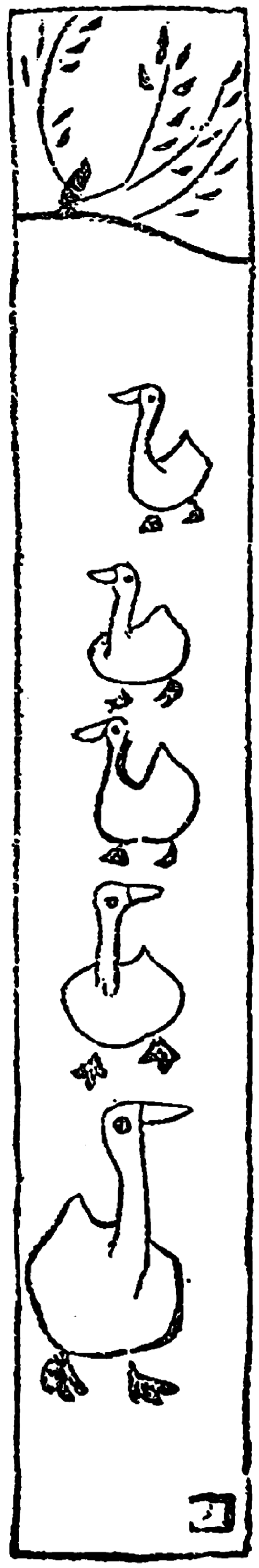
と言ふ、まあと思つて、再び軒に吊した籠を見る、今夜は、屹度鳴いてよと言つて餌を入れてやる、夜になるなか〳〵鳴かぬ、鳴かないのかしらと思つて寢やうとすると、俄かに軒で「チ」と凄い聲を出した。また「チ」と鳴いた、今度はチウと鳴いて、直ぐ切れずにチーと長く餘韻を引いて鳴いた、それつと思つて聞いて居るとスイーチヨ、スイーチヨと、凡三秒位の時間をおいて鳴き始めた。妹も起きる。ランプを持つて行つて、明くしたら鳴き止むかしらと、危ぶんだが、持つて行つて見ると、なき止まぬ、明く照らしても鳴いて居る一匹は下の方に、凝つとして居るが、一匹は、籠の上側に、鳴いて居る、青い草色の縁りの體よりも大きい羽根を力強く體に押しあて、摩つて居る。其度毎にスイーチヨ……スイーチヨ、と聲が出る、體も羽も燈りに透き通つて、綺麗に見える、夜目が醒めた時も鳴いて居た。

八月十五日、時々曇る。

スイーチヨが南瓜の花が好きだとお友達から、聞いたから、日暮方畑に取りに行く。夕風いと涼しく、青田には稻の花が咲いて、その匂がプン〳〵する。畑に着く。南瓜畑は青い大きな葉のついて、居る蔓がはびこつて、稍熟した南瓜が、麥藁の敷いてある上に、ゴロリゴロリ轉つて居る。花が黃色く咲いて居る。黃昏でも丸蜂が音を立て丶花を訪ふて居る。花を三つ摘んでかへつてきて、籠に入れてやる。今夜は、夜露にあて丶やらうと、草叢の中に籠を置いた。夜にぎやかに鳴く。

八月十六日、雲脚早し。

朝起きて見ると、雨が降つてる。驚いて草叢の中においたスイーチヨはどうしたらうと庭に下りて見た、す、ると一匹居ない。あら死んぢやつた!!! 籠の底に、脚羽根、頭、胸觸角皆チリ〳〵バラ〳〵になつて、肉は少しも付いて居ない。お丶可哀想に………籠の目からひげが外に突き出て、一本は中頃に折れて、短かくなつて居る。赤蟻が忙しさうに歩いて居る。尙妹とようく見て居ると、他の一匹は籠の片隅によつて、ひげをベコ〳〵動かして凝つとして物哀れに靜かに居る逃してやる事に決めた、朝顏の垣ににがした、朝顏の傍には、繁つた、つ丶じの古株がある、隣りに四五日前花は落ちたが白百合の群がある、他にまだ名も知れぬ草花がある、その緣の中に今宵から殘つた一匹はものあはれに鳴くのだらう、餌は何うするだらう。



白き手の謀叛者

望月野薔薇

アカシアの纖弱な枝が精巧な網をつくって、葉綠を分解したやうな午前の日光は少女達の白い足にゆらぐ噴水が懐しい情緒をつゞりながら池の面にゆるくそゝいで居る……汀のテンモンドウはてんもり薄青い夢を盛つて、淡い幻の樣なあるものが、空間から漲り溢る如き紫色の水煙に、ゆったり抱擁されつゝある。丈の低い濃紫のロベリヤや、白の松葉小櫻で被はれた洲のあたりに、白い水鳥のむれが眠った樣に靜かな狀態をしてゐる。淡青な半圓の天にはスーイ〳〵と、極細の毛糸をほぐらしたやうな白雲が浮いてゐた。今西洋婦人の一群が汀にそって徐かに歩みよってくる、若い少女らの心は如何に輝いたらう、一人はアカシアの木陰をたち離れて緋のパラソルをかざした、Kさんの憧憬の瞳は美しかつた、自分は默したまゝいつまで〳〵それらの婦人の群を見入て居た。……華奢な裝した他邦の少女達、リオン絹の輕やかな裾にも漂泊の悲は纏れども。歡樂げに談笑しつゝ行く心強き美なる旅人よ！ー。

汝等の行くべき世界は廣大いと何者にかさゝやかれつゝ、周圍を瞶れば、噴水の七彩の中にテンモンドウは生々とふるへて居た。その暫時の我心程輕い明るい物はなかた。——

☆

「先程も御訪ね下すつたんですつて？、一寸外出した暇でしたのよ、すみませんでしたわね。」――「エ！御留守て聞いた時なんだか無上に悲しくなつてしまつたの、でも客觀すればドラマチックね、御留守と聞いて紅い帶の女は……なんて、……ではいづれ再參上ますわ、今日少々急ぎますから之で失禮、御免遊ばせ。」ゴム輪がキラ〱と夕陽に輝いてきしり出す。

轟の遠く消え去る時、ポツネンとたゞずんで居る自分を意識した。華やかな表情、絢爛な美に殆ど眩惑されて居た心弱い自分は歡樂につゞく寂寥を感じた。やるせないうら淋しさの胸を抱いて迫りくる夕暗にいつまでか立ちつくした。――自分の手には友が手渡て去たスイートピーの白い花束が柔かい匂をたゞよはして居る。――

☆

何となく濕ひをもつた水晶店や、干柿干葡萄などを賣る奧深い店倉の家が、一樣に低く黝んだ影を連ねて、門店の旅館と劇場に蒼白い電燈が點されてあつた。冷たい風が峽谷の一つの市をすゝりないて行く。いつからかはかない生の經營をつゞけて居る山國の人の胸に泌々とした悲哀を與へる月光は今宵も蒼かつた。今ツト町はづれの馬肉屋を出た尺八吹と月琴を抱へた少女は暗い家の低い軒下に入つた、と黑い一團は一歩動搖して再其二人をとりまく、黑い群の中から絞られる樣な尺八の哀音と高調子な少女の肉聲はもつれ出る。停車場傍から續いて居る運送店の倉庫の白壁に、月光はまともに照して居た。悲しい唄聲はどこまで續くだらう、張上た聲の音波の消え去る時、門附の小女は狹い街の家並はてゝでつきてゐる事を今更らしく氣づくであらう。四圍に重疊した山脈は暗然として沈默を護り古城址の天主閣上に閃めく一つ星の光芒は鋭い。少女は木綿更紗の衣服を裾短かに着、色褪せた藤色の帶をだらりと下げて、上調子の肉聲を張上げて居た。（旅日記のうちより）

☆

白日に照された白木の橋の欄干に凭つて友と自分はたつた。橋の下のレールにそつて折々上り下りの列車が疾走して去た。果遠き南の天を異形な雲が通つて行くけれども、橋の上の蒼穹は底しれぬ碧海の様に澄み渡て居た。草の香がする、……櫻並木の青葉に生暖かい風がそよいで、堤の上のキンパウゲが金色の輝をみせて居る、輕い風がさゝやいて行く度後れ髪が微動した。二分――三分――四分――私らは唇に登せ



云ふ言語もなかつた。――灰白色に乾燥した凹凸の多い橋の上を、コツ〳〵靴音立てゝ行く男があつた、リンネルの夏服着てダリヤやスターフロックスを束ねて持て居た。

フト友をかへりみた、二人は同時に輕い微笑を浮べ

た、意味もないての二つの微笑、其時二人の心はそれで滿足し合つて居る。心は深い力を感えて冥默の底を翔つて行く、此の瞬間の心の輝をはなれまい！と二人は無形に手をかたく握り合つて居る。――列車が轟々と橋を震動して行く、沈默の二人を客車の窓から不思議そうな瞳をして見て行た人もあつた。草叢からおはぐろ蜻蛉が跳ね出でゝ視線を輕くさへぎつた。

☆

暗綠色の鬼蔦が纏はりついた灰色の壁の面は靜寂に充ちて、重い樣な輕い樣な大鐘の鳴り止だ刹那、聖院の周圍は白い輝いた樣な沈默に鎖されて居る、藤棚の下には濕た土の香が幽にたゞよひ、ドオムに黑い鳥がとまつて居る。あゝ、ローマの廢墟はこんなではないかしら……

崩れかゝつた蒼味がゝつた大理石や、古代の厚い硝子が冷たい薄暮の瞳を輝かして、遠きアルバニヤの山脈の頂に夕づゝが閃く、――白色の衣裝、白色のレースを被ふたロシア少女の憧憬の歩よ、「羅馬の美、ローマの墟址は余を醉はしむ、余はシーザルたらんと欲す惡魔たらんと欲す、法王たらんと欲す！」

……………。

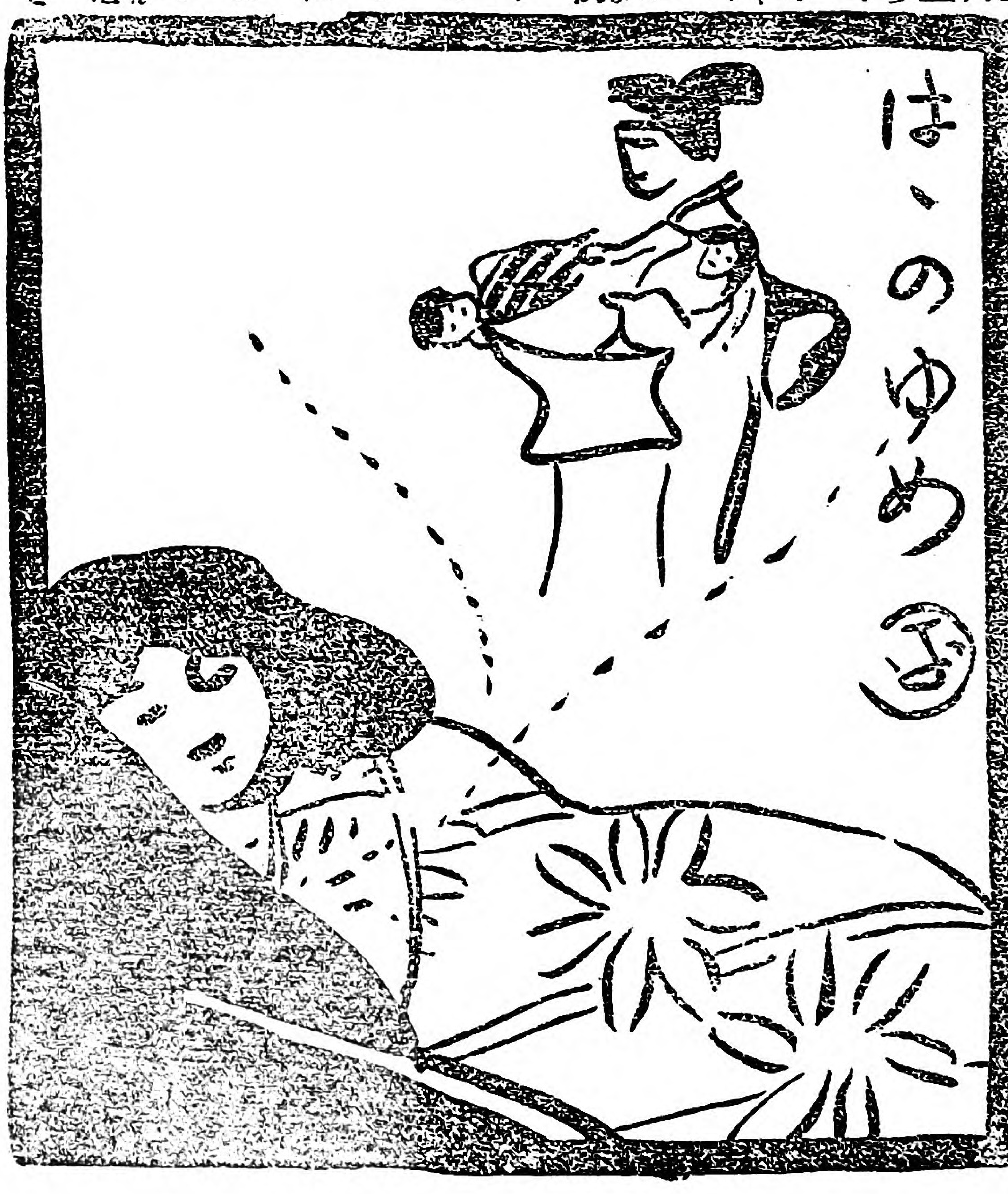
黑色の僧衣を着た牧師がサラ〳〵と砂礫を踏で行つた。ゆくりなくも浮び出でた物語の中の少女は幕にうつされた幻燈よりもはかなく消えさってしまつた。――幾多の幻影が一つ〳〵破壞された頃のやるせない悲しみがふとくり返されて又後方もない――。

☆

朽ちかゝつた線路にそふた木柵に凭て二人は平氣な顏して居た。青い細い花が穗をなしてクルミの枝から垂れて居る、――幾線もいくすぢも――。Hさんは默て私を見つめ出した、いつに似ぬ悲しい瞳をして。「母樣お迎へにいらつしやるの？、」

「エ、青森まで、……それから汽船でね」遠い―と直覺的に感じた。「Hさんもう御面會の期はないかもしれ

ないのね……一生涯!!、憎い程冷靜な人にかうさゝやいて、「私だつて泣くものかと強く心中に叫んだ。Hさんは何も云はなかつた。所在なさにクルミの青い花を凝と見つめて居ると、強く〳〵何物にか迫らるゝ樣な深刻な威壓を感えた。やがて空虛に充ちた如な驛鈴が冷たい朝の空氣の中に震へた。「御身體大切になすつてね、」Hさんの聲は微かに震を帶びて居る。――重々しい壓迫を感じて私は弱くも物を言へなかつた。サヨナラとかすれた聲を眩暈して倒るゝ時のやうに遠く幽かに而も、ハッキリと聞いた。疲勞した身を木柵に凭せかけてありし事實を遠い昔の夢の如に思ひたどつた、欺かれてゐたやうにも思へる。泣くにも泣けぬ北國の人の深刻な熱情を感じたのかしら?、自分はあれ程、今、靜にクルミの青い淋しい花を見まもつて居ると、疑念と反感がひしと湧き上てくる、――けれど



嬉かつた、自分で自分の憧憬の中に胸を跳らせる程、我精靈は若くあつたもの。

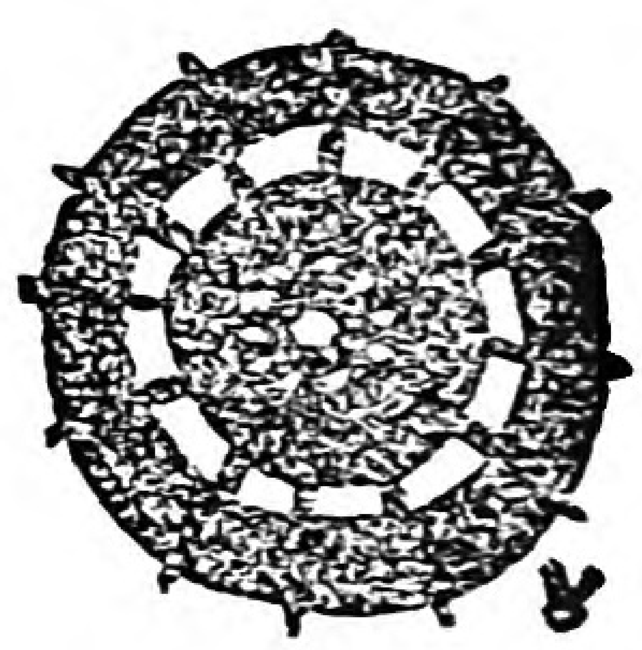
☆

K樣、——又貴女に筆とりました——。

コスモスの丈がいたく延びました——海は日毎に紺藍色が濃くなつて行きます、秋ですね。うすら冷い風が高い此家の窓掛に觸れて行きますよ、海村の靜寂な家からはよく二絃琴やヲロン琴の、落ついた哀ぽい音が聞えてきます。何事もないゆるんだ調子に充ちた此府下の家に居て私はマア何をしてると想像なさいます毎日々々。濕ぽい北窓の敷居に凭れて價値のない沈默をつゞけて居ります。朝暮根氣よく瞶て居た櫻の葉は知らぬ間に色づいて、やがてハラ〱散りますのに此私には何らの變轉もないのです。眠つた樣な生活ですね。

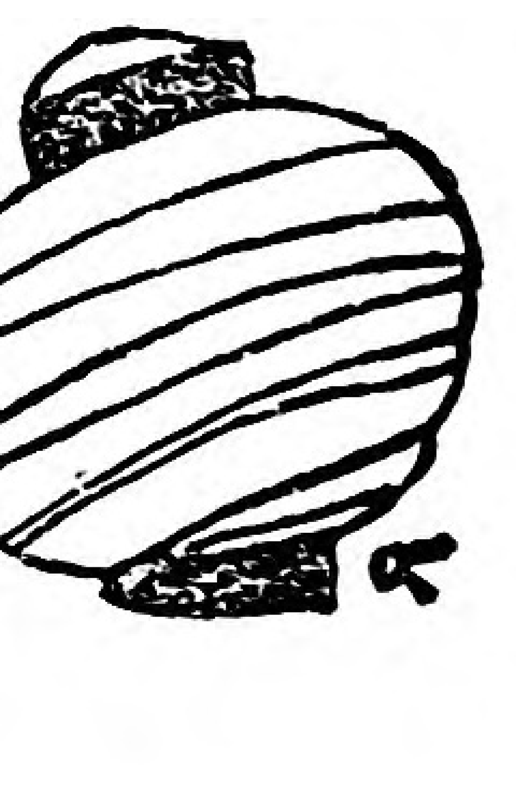
K樣朝戸を開ける時、夜又それを閉てる時、つく〴〵「どうする?!」と胸を震はします又自分には未だ期が來ないのだと思つてもみます、あゝ覺束ない朝夕で御座います。若い叔母はよく、私の机の傍に坐ていろ〳〵愉快そうに語ります。そして遠慮なく私の書いた物を見たりするんですよ、先日「貴女淋しい事ばかりお書きなさるね」から云つて心配げにして呉れました——快活な婦人ですからね。——ある日一寸外出して歸て來たらあの私の好きな、翡翠の置物の下に紙片がありました。何だと思召して?。「白き手の謀叛者」——かう書いてありましたの、笑てしまひましたよ獨りで、叔母樣の——なんです、K樣！かうしたたはむれ言に基いて何か云ふのを笑て下さいますな、私は本當に幾多の少女の中の謀叛者であるなら、もつと價値のある自己の力に賴る生活がしたう御座います。朝顏の露を絞て遊た昔早く成長したいと思ひましたっけが今再、自分に來るべき一轉機を早かれと祈て居ります。現在を歡ぶといふ事が人生の本義であるとやら、某人は云ひました。長い袂に、柔い手に、憧憬に、今こそ尤も少女にとつて幸福な、得難い時であると、祝福して下さいますか、K樣、只靜に期の至るを待てばいゝのですかしら、貴女は私の寂しい性質である事も、小やかな境遇にある事をも知て居て下さいますね、以上私のかうした言語は、何事もなく不甲斐ない身を安靜にして居る者の、自己を辯護する言葉のやうに響きはしないでせうか。

何にせよ東京の宅へもう歸ります。（南の郊外より）



あらしの夜

神近市子



Cさん。

あらしの夜は恐う厶いました。夜は二時を四十分も過ぎて居りましたでせう。イラ〱とする都會の暑さにいじけて、その上にその頃の雜然とした統一のない氣分によく有り勝の、蛇の脱殼のかゝつた木の蔭の薄暗に居る樣な、何か不安な不確な恐怖を持つた心地を夢みて居た樣です。ゴーッと地鳴する位の風が吹いてバリ〱とするかと思ふと、表の硝子戸がヅシンと倒れて、それにはねとばされた樣に、表の室と私の寢て居る部屋との間の障子が一枚倒れて、蚊帳は天井に捲き上げられまして、冷い雨が顏を撫でました。恐らくは此等の事がホンの一瞬の間に起つたんでせう。今考へて見ればかうした順序で順々に起つた樣です。

私は彈かれた樣に立ち上つて、蚊帳の一方をまくつて電氣を捩ぢました。幾度捩ぢても火はともれません、私はそれがどんな理由で、どんな動機でともれないかを考へるひまもなく、表の部屋に行つて又電氣をつけ樣としました。その絶望と當惑の後で私は漸う少しの餘裕を得ました。それで富士見町の電車通に僅に殘つた瓦斯燈の光にすかして見ますと、前の垣は倒されて、どす暗い空から魔物の暴れ狂ふ樣に嵐は私の二ツの部屋を吹き通ります。

私はもう自分が自然の暴戻に反抗する丈の力ある者か、又は反抗する事が流を綿で止め樣と試るより賢い事であるかを考へる暇なく、只無意識に不確實にさうした水に歌かく樣な事でも、その場合にはとるべき最も正しい、人たる生命ある者たる義務の樣に思はれて、風と雨に寢衣の裾をまかれながら、硝子戸を無理に立

て樣と致しましたね。勿論明はなし、嵐は强し、どうして若い女のか弱い手におへませう。五度六度試みては失敗し寢衣の袖もしつとりと濡らして、私は止めました。風は益々强く、到頭裏の障子の紙は全然で獸の皮をはいだ樣に、形なしに吹き取られ、家はいよ〳〵戶外と異ならなくなりました。

私は恐れました。思慮も熱心もない努力を盡した揚句、私は表の部屋に椅子に腰を下して、自然と自分とを沒交涉に仕樣と試みました。枝を折り葉を劈き、窓掛も電氣の球も天井迄吹き上け吹き下す嵐を、或る者の惡戲と見て、其間に若い女が詩を吟むと云つた樣な態度をとり度いと考へました。さうして私は息を凝しました。

暗い物恐しい暗の壁を見詰める事を止めて、一縷の望とも命ともかすかに光の殘る通の方を見ました。

其瞬間に前に數倍したひどい嵐が來まして、櫻の小枝が宙をとんでイヤッと云ふほど右の頰を打つと同時に、二階には恐しい物の亂入した樣な音がして、硝子の微塵に碎ける音がしました。その恐しい嵐の下に、二階に留守を守る人の恐怖にみちた、力ない聲で私を呼ぶのが聞えました。どうしたのか私にはその聲が如何にも卑劣な臆病な人格から出る樣に思はれて、押へきれない憤怒がムラ〳〵と起り、態と返事はしないで「うるさいつたら……いやな人ッ」と口の内に呟いて、云ふに云はれぬ快感を覺えたのです。私は確に其時强い大膽な笑聲が、ある嘲笑の聲が欲しかつたのです。「お前も私と同樣恐いだらう。どうだい一所に居樣」と云はれたのが堪へ難い程嫌だつたのです。そして自暴に漸う一枚立つて居る障子の影に行つて、頭を疊につけて、兩手で一生懸命に耳を塞ぎました。そしてさうした風迄もする卑劣な性根が恥かしく、暗故なればこそそんな事も敢てする自分を笑はねば居られぬ樣な氣がして、晝見たらば、狂氣とも云はれる樣な笑をしました。けれども嵐はます〳〵吹き募る許で、どこ迄吹いて止まるのか一寸想像はつきませんでした。殊に橫になつて居れば、地と家の震動が全身に傳はつて、

九段の高臺に立つた家が、大洋のたゞ中に漂ふ舟とも思へました。などい震動を感ずる度に、もうこれで止むか、もうこれが終かと考へてゝも、どうも止みません。終には夕暗に行く道くらく、蜘蛛の網にかゝつた蝶の、無言のうちに返付く終をヒタ〳〵と感ずる樣に、死の近きを思ひました。その日讀みかへしたリツトンに書かれたポンペイの滅亡する樣も現然と見えました

市民の不義の快樂の間に、天地濁り地は裂けて、音もなく下りて市民の命を吸ふ死灰は徐々と積る。死の黒い手に抱かれた、終の瞬間迄もその儘に想像も及ばぬ長い間、過去と現在の連接より放れて居らうとは思はなかつた心持が、今の自分の心と似てるのではないかと思ひました。すると自分が横はつて居る側の柱が次第々々に自分の上に倒れかゝる樣な氣持がして（お笑ひ下さるな）私は兩袖を顔にあてゝ、其上を兩手で蔽ひ、不揃に伸した足を、女性らしく形のいゝと思はれる格好に揃へました。

次の瞬間には、無殘に倒れた住居の下に、冷くなつて見出された自分の姿を見ました。長い髪の根元をゆるくしばつて、赤い下じめをすかす眞白の浴衣にうすい、とき色の細紐をしめて、長い眉は穏に閉ぢた眼をくまどり、胸元を少しはだけて豊かな乳付を見せ、永久に去つた女の亡骸をあまり強くない嵐のあとの太陽が照して、それを圍んでその女を憎んだ戀した、愛した嫌つた、うらやんだ卑しんだ、捨てられた捨てた凡の者が（可笑しいには皆息才で）云ふに云はれぬ悲哀の表情をして立つて居る。旅から大急で歸つたHは旅姿のまゝで全心をあげて愛した女の褪せた頬に亂れる後れ毛をかいて居る。その舞臺を判然と私は見たんですよ。

何處迄獨で行かねばならぬ私は女でせう。その頃Hが恰度船に乘る筈であつたことを私は思ひ出しもしませんでした。

大膽な覺悟を定めた（自分では）私さへも揃へた足を縮めて、頭をあげて戰慄く樣な嵐が又參りまして（大方此時に、南國の故郷に有つて萬里の海を驀地に南洋から來た嵐に逢はぬあなたが想像も及ばぬ――慘劇は大

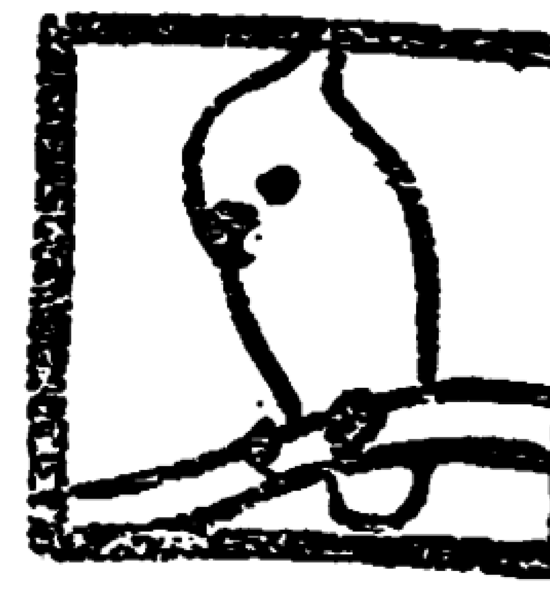
部分行はれたと思ひます）私は暗以外に自分より異なる者を認め度い切望を感じました。「神よ御心ならば今宵此靈をうけ入れ給へ」「凡の事を懺悔し奉る。願くば汚れし者を清め給へ」と云はうかとも考へましたけれ共、何だか自分で十字架に、石に、猛獸の牙に、血をぬつた聖殉教者の前に惡戯をしてる樣な氣がして、嫌になつて止めました。

至つて幼稚な盲目に近い無智の安心が呼び起されました。

暗い燈心の火がそよとも動かぬ奥まつた佛間に、鉛の樣に靜な眼の老母が皺の多い手を合せて、抑揚のない聲で「なんまみだーぶなんまみだぶなんまみだぶ」と唱へる側に、額白く眼の大きな女の子は、燈火に輝く金襴の打敷や、新らしい菓物や色美しい菓子の盛られたのに物恥もなく見惚れながら、甲走つた早口に「なんまみだぶつなんまみだなんまみだ」と和した夕暮に、夜更けた茶の間に時計の秒のみが判然とひゞき、うすら風がサラ〳〵と庭の木の葉を傳はり、騷がしき鼠の音に劫えた樣な犬の遠吠に幼い夢の恐しい頃、寢返りを打つ母の枕のきしりと共に、夢現となく「なーんまみだーぶなんまみだーぶ」と唱へる念佛を聞いた時のホッとした安心、それがヒヨッと思ひ出されて、「なんまみだぶつ〳〵」と云つて見ましたけれ共、私の弱い心は又或者を欺いた、ある物を瀆した樣なわびしさにかられて止めて終ひました。

その後で今迄自分の犯した罪を數へても見ました。





月の出るまで

かうほね



夕陽の光は野面を去つて仄かに比叡の嶺を染めた。觸つて見たいやうな、なつかしい紫の色に。夕映のほとぼりは我肩をすぎて露を帶びたクローバーをブランドの面紗でおほつた。

心ゆく夕よ。されどあまりに大いなる自然の美しさに、醉ひながらも我小さき魂はかすかにふるふ。

「どうなさいました。」はつとなる。聲は色の白い上野さんだつた。笑つては見せたが我笑はわれながら淋しかつた。

野に山に寮舍の壁に夕映は空しう消えて、色彩のいろ〳〵亂れて海をなした罌粟の園も、窮みなき大空も、唯黄昏の中に默し、梧桐のみひとり息づいて見えた。

優しき友はきつと、故郷を偲び病める親の上を思ふものとお察しなすつたのであらう。けれども、私はあれほどに懷しんだ故郷をも近頃は全然忘れて居りますもの。

かへると三輪さんが室の廊下に面つた障子に凭れながらにこやかに、わざと招く。その笑顔を見ると何物をも忘れて上草履を揃へて入る。ぱつと電燈がつく。私は靜かに机の前に坐つた。頭が痛み出す、走馬燈のやうに種々のことが思ひ出された。

あなたを憂鬱な人だと思つたら、さうでもないやうです。すぎし日の師のお聲、此間の同級會上、稀に開いた私の口から、迸り出たあの言葉、滑稽なる話の結びは、凡ての人を諷し世を諷し友を諷刺した積りでゐたのに、友だちは何と聞いたらう。あゝ先生、先生までそんなに取つて下さいましたか、あゝ、あゝ。

生れついた性質ですもの、どうして心から快活に、滑稽なんか口に出來ませう、胸の不平が迸つたのですのに。私は此憂鬱なのが好きなんです、苦勞性になつて居たいんです。愁の中の何とも知れぬ、スイートなとでも申しませうか、美しい夢の國、そこに憧がれ、

其處に大なる慰藉を求めつゝ私は生きて居るのです。陰氣なのは損ですよ、そんな言葉はいくら聞いたか知れませぬ、けども我此世界を捨てゝ何が面白からう。色は鮮かならねど、そこに花咲き溢れたる大野ありと、我胸は何となく、何となくさゝやきますものを。我空想の世界なる大理石の宮殿に長き絹の帷の陰より、白衣なるくはし少女は「共に歌はんに、友よ」と招きますものを。なつかしい夢の國。

夕餉果てゝ、片手に提灯、片手に祖母樣の御手引き參らせ、家の裏口から隱居所へ通ふ徑を辿つた故鄕の昔の夢は如何に樂しかつたでせう。灯は草に紅を印しつゝ過ぎました。五月雨の頃、私は先にたつて提灯持、母樣は傘持「お姑樣お足下が」とそろ／＼歩いていらつしやる間に、私は濡れながら驅け出して、軒から「早くよ」と招きました。「左樣な事なら提灯持は要らないよ」と二人は笑ひながら私のつき出す灯の淡く流れる所をいらつしやいました。檐近き櫻桃はルビーのやうな實を一ぱいつけて紅の露が灯に映えました。祖母は自然が好きでやさしい、すつきりした氣象の人であつた。夜うつゝに聞いて響に怖ぢた耳許へ「いゝものだよ、明朝はね。」と祖母樣に私語かれた翌朝、庭の叢に見出したのは琥珀色の美しい杏でした。其叢に秋は萩の花こぼれ、夏は眞紅なの、眞白いの、私の大好だつた薔薇の花がたわゝに咲きましたわ。祖母の死後、悲しい境遇を辿つた、折角うけた性質のうちで、すつきりしたといふ點は失せましたらうけれど、自然を懷しむ美しい情はなほこの冷たき胸にも燃えて、ともすれば夢のやうな心地になつて、美しき夕の空にみいり、消燈の後もなほ窓によつて眞闇な野面を眺め、或時は若葉をゆかしみあの淺緑の銀杏の梢に、あの葉の上に乘つて見たやと願ひ、また、一日默して野に麥藁燒く煙のゆくへを見送ることも屢々なので、友のたれかれ、賴りない夢みる樣な人だと評してゐるも知れませぬ。でも、私は室長、上級生、斯樣な名の下に縛られて固くなつてゐるのは、いやですもの。此間に、我文藝に對する憧憬はます／＼深くなり行き全く魅せられて了ひました。過ぎし昔、私の今の學校に入れられる前でした、父は呼んで目的があるなら云へと申しました。其頃の心弱き私は、迫られて漸う「お父樣私はお墓の外に行くべき道も御座いませぬ」やつとふるへ聲で申しました時、父の顏色は變りました、しかし、長き嘆息をついた外何もいひませんでした。あゝ、幼い少女

の云ふことでしたらうか。神は世の暗い方面ばかり餘りにまざ〳〵と幼き子に見せ給ひし故に私は學校へ入りました。せめてはと口には出さずして願つた一縷の望もこゝに斷たれて了ひました。勉强それはしましたが、常に好める方に傾いた。日は月となり年となり三年を過した今年の春、氣のついた時はもう遲かつた、親にすまぬ、少しでも……と思つたが蠟をかむやうなものを苦んで暗記することは、放縱だつた今までの習慣上とても出來ぬ、忘れやうと努めても離れるに忍びない、さめやうとあせるほど忘れがたい藝苑の夢、いつそ好める道にとも思ふけれどそれ程の力もない身の悲しさ、且は今更……來春は若い二十に足らぬ教師なのですもの。



卒業しても其末はと思へば不安、胸は塞がる。師から此上勉强する氣はないかと尋ねられた時、冷やかなる

胸にも波はうつた。しかしもう花やかな名譽、術學そんな色彩は胸の何處にもありませんでした。せめてと願つたのは遠き昔のことであつた。顧れば家は、家を賣つてでも勉强させてやらうと勵ました父の聲はまだ耳に殘つてゐるけれど、病の父や窶れた母、それに可愛い妹や弟を思ひ出すと其儘俯いて、「行きたいとも思ひませぬ」、きつぱり答へたが「お父樣はさぞあなたの卒業を待つておいでゞせうねえ」師の此一言に私の胸はにえかへるほど侮辱をおぼえた。

　月明き夜、眠られぬまゝに長い廊下傳ひ、電燈の光がぱつと床に映つて流れる二階を歩きました。低き病室の屋根の瓦がほんのりと明るく、唯青い野面をおぼろ〳〵と月光の照らすのを見た時、我が友を顧つて「三輪さん、逃げたくはなくつて」「エ、何處へ」。「何處だつていゝの、月光の下を走りたいわ、あの野を。」「濱田さん、世界の外へ！、私も行きたい。」はづんだ息をおし鎭めて「だけどねえ、此光の中を行つたつて行つたつて、遂に世界はのがれられないんだわ」怨じたやうな聲。「どうしませう」「あゝ逃れたい！」其儘廊下へ打伏して了ひました。長き沈默の後立ち上つた時には、月光は稍々青みを帶びて矢張天をも地をも同じ一色の下に包んで居りました。三輪さんは同室の友、私とは一級下のやゝ蒼白き面に黑く光れる眼と燃ゆる如き唇きはだちたる丈高き君であつた。餘裕あり、理性ある人。それに、今宵は！何とした怪しき夜ぞ。友も憧れ多き一少女であつたか。其夜は眠られなかつた、玻璃窓に白楊の影が折々動いた。

　家を捨て名をすて、凡ての係累を捨てゝ逃れたい。放浪、放浪したつていゝ。山、山の奥だつていゝ。支へんとする幾多の手をはらひのけて、ひとり、自由を叫びたい！。とさう思つて。しかし、友のねがへんを聞いた時は、純なるいとほしき友の胸を餘りに刺戟したのを悔みました。

　今日、作文を返して戴いた。過分な點を貰つたけれど嬉しくはない。あれは私の叫びなのですものを、先生は輕々に見過して、何だ生意氣な、位に思はれたかも知れない。我憧憬を認めて下さつたらうか、いゝえ、認めては下さるまいよ、きつと。堅さうな御胸に我叫びの響きさうもない。あゝ一人なりと、我此惱みに同情してほしい。

　人後に落ちて、草に埋れて、人知れず泣いて、かくて朽つる身か。あまりに惜しいこの胸、此思ひ。

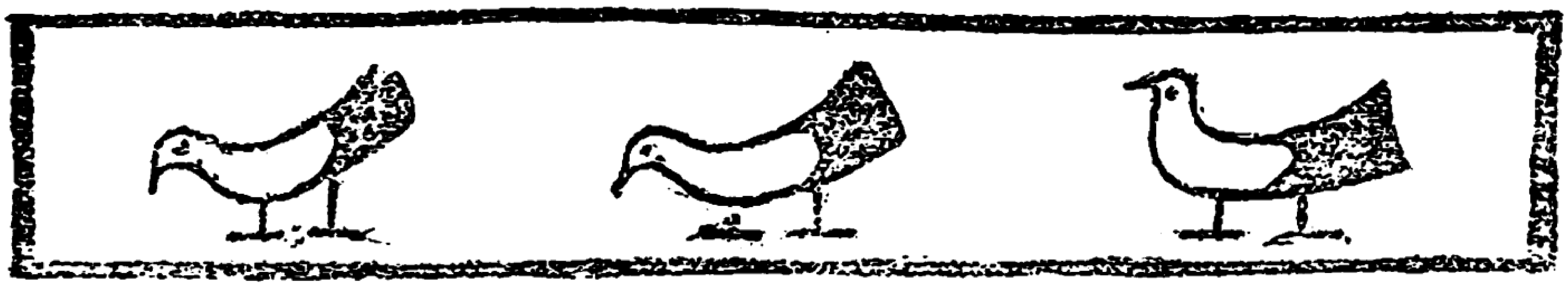
認めて貰つてどうする、共に泣いてほしい。それも果敢なき願ひよ。泣いてもらつたつて何にならう。ああ。ひとり。一人で生れて來たのだもの、もとの獨に歸るのに何の不思議があらう。世界に頼むべきはたゞ我身一つ。唯一つなる我心だに制し得ずたのむべき身體もやがては父様と同じ病の下に、仆れるのではあるまいか。惜しくもない命だけれど、我意にかなはぬ此身體なれど何とやら寂しい氣もする。

「共に語りませう」と夕暮の運動時間に涼しき合歡の樹蔭から友は呼んで下さるけれど、じつと默つて散る花の美しさに見入りながら、多くの友の笑ひ興ずるのを聞いてゐるだけ。何て臆病な子なんでせう。人の中を背を反らせて歩くこともなし得ない、友と話をしても後になつては、いふのではなかつたと直ぐ悔いてゐる。或友はいふ、貴孃は最も冷靜で最も熱情の高い人に違ひないと。此言葉をも嘲りの言葉かと聞く。

まことに我身は心の底から泣いたこともなく笑つたこともなかつた。泣かうにも涙は出ない、笑へば僞の笑、何といふ徹底しない心か。これで尊い教育の業に從つて行けやうか。わが生きんとする世界に生きられませうか。

友の群を離れて、ひとりで花壇の花を眺め、或時は我憧れの樂園を逍遙ふ様な感のある夕もございましたが、或時は草木の一本一本の前に立てられた白い札を遠くから眺めて、墓場をさまよふやうに感じました。

今夜は、最も樂しいといふ土曜日の晩。どの寮でも部屋部屋は燈明るく談笑溢るゝばかりです。三輪さんは窓によつて覺束なげな調子でハモニカを吹き出す。年少の中山さんは、明日は母様のお傍に歸れるといふ嬉しさに、袋を提げて見てにつこり。私は強ひて笑顔をつくつて立ち上つた。校庭の周圍にあやしげな輪廓がたちならんで、夕べの空に浮き出でゝゐる白楊の樹、今に月が上つたなら、根本から梢まで樺色に染つて、一葉一葉風にそよぐであらう、こんなことを思ひながら同じく窓による、手をのばして窓近く枝を張つた中庭の樹の枝から、丁度ふれた葉をむしり取つて、露ながらつき／＼した桃色の透いて見える友の頰にそつとふれてみた。友はうるみをもつた大きな眼になほ笑を漂はせながら、音を小さく小さく、まだ吹いてゐる。電燈の光にうつし出されて葉が、露が、美しく緑色に透つた。楓の葉であつた。東の空に月しろがさして、窓の磨硝子が次第に乳色を帯びて來た。



野に歌へる

○　磐城　鈴木豐子

わがこの身わがこの心青草にまかして靜にものおもはなむ

靜かなる灯にものがたる山峽の林を風が微かに流る

生くるため心いつはり三年經ぬこのはかなさやいつ終るらむ

○　宮城　長谷川紫葉

野の草や山の木の葉やしどろもどろ野分の風の吹き荒しけり

秋風やもろこし畑のがさこそと葉音鳴らして蟲の聲やむ

わが前に悲しき物の寄せて來る如くに散りぬ桐の一ひら

○　信濃　酒井治子

秋は來ぬわが朝々のくしけづるねみだれ髮に落毛あるかな

野分凪ぎし山の林に落枝を拾ふさびしき故郷の人

秋の朝小雨來りてやゝ濡れし街路の砂を心よくふむ

ま夜中をしのびしのびて迫りくるさびしさのあり遠きこほろぎ

○　丹波　森川孤蝶

いざさらば百千のしもと我うけむ若きつめ度きほゝゑみのうちに

よき衣をたゝみてあらば何となくをんななりしとほゝゑまれしか

○　林原やへ女

十月の草にいねけり野の中の踏切番の帶赤き娘は

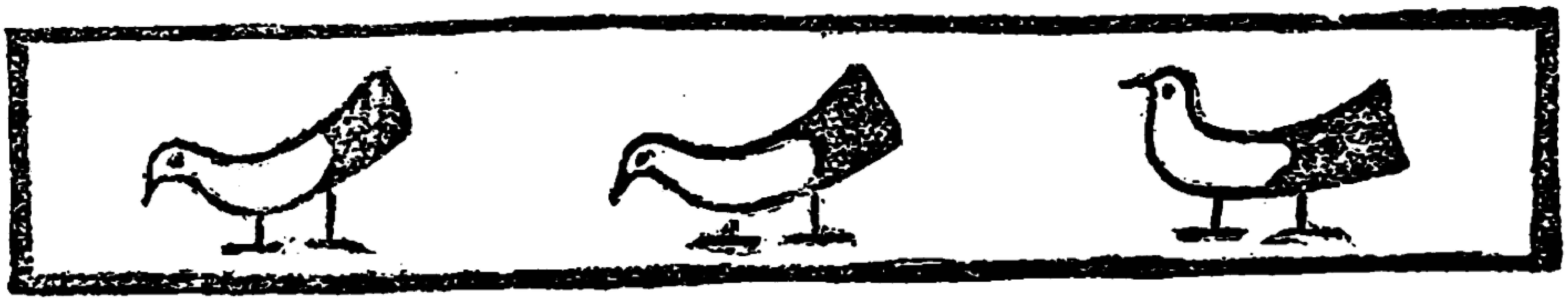
水藻うすらあかきを眺めつゝ金絲鳥なくをきゝてありけり

白銀の小さき環を投ぐること月白き夜をなくきりぎりす

夜の街の人ごみに居てふと君の白き額を思ひ出でけり

○　木下春子

美はしきあやまちとしものたまへなふりし戀など語ふ夕



日盛りにみちをあゆみぬつかれたる身を安ろふるかげもあらなく

戀はるゝは嬉しと思ひ幾人の男と知りて文まゐらする

雨の日は八ツ手の葉よりしたゝれる水などあつめ歌かきしかな

○　會津　せ　ん　子

あゝ若葉その靜けさにわれはゐて戀しき君の御名をうたはん

西の國琵琶湖をまへに控へたる庭よき家を故郷とせり

人を射るダイヤモンドは輝けり胸やむ君の指の細りよ

○　東京府　田中登久子

雁のくる九月の野べの月明にふえの音たかくきこえくるかな

はづかしき戀のはじめといたましき戀のをはりに老いはてにけれ

老いはてし立木と若き立木とのふれあふごとくかなしき戀よ

○　鶴岡　野口菊子

いとよわき翼ひろげて大空をかけりゆく身のあやふさ思ふ

心のみ都の空にあこがれて草深き野にくち果てんとす

○　赤坂　高力かざし

此の心見つめてあればほそぼそとかなしくなりぬ百舌の啼く頃

桔梗皆花壇に咲きぬ少女子の心少しく淋しさおぼゆ

○　東京　島　葉　子

紅牡丹くづれ咲く日を籠りゐる心躍りの遣瀬なさかな

戀を知る女の如き心もて夕べの星になつかしむかな

悲しみにひきいらるべき今宵なり只何となく風に吹かれむ

○　相模　中村貞子

初秋や柱によりてかもめ飛ぶ青き海原茫然と見る

共々に水底暗くしづむ如悲しきソロのきゝたくなりぬ



若きやすらひ

ひざくら

「奔放な熱に酔つて居らつしやるけれども」つて言葉を切つて。「やがて」つて後は微笑まれて終つたけれど。いつものやうに、お膝にまつはりたいやうな親みはうち消されて。「眞をうたぐるのは罪でせう」いはふとして上げた瞳の色をよまれまいと思つて、急いで眞赤に亂れて居る、鳳仙花にすべらして終つた。それは私の弱年を冷笑されたのでも、私を冷笑されたのでもなく。とつさに、そう思はれた事を、すぐに口外なすつたに、すぎなかつたのであると、氣がつきましたから。

　心を人の耳にさゝやいたとて何んにならう。

　瞳のうらを、やるせない涙が流れて居た。

　かつて、ある人が、美ちやん、何んでも、しようと決心した事は默してすればいゝのですよ。他人に同情してもらひたいと思つて口外するのは、いたづらにエネ……イを作るにすぎないのですから。同情する人は自分一人で澤山ではありませんか。自己が衷心の同情を其のことのみにあつめれば、百萬人の同情を補ひ得て猶あまりあるでせう。美ちやん、美ちやんの胸にある希望を空しく、しまいと思ふならば、何事も默して、滿身の熱血と精力とを其一事にそゝぎなさい。他人があなたに向つておこなはふとすることには凡て偶像で居ればよいでせう。これまで。仰しやつて、暫く私を見つめて居た後、又、力の滿たお聲で

　凡てをおこなはれた後にも猶偶像になり得るだけの努力があるならばあなたの未來に囑望すると仰しやつた。

　幻のやうにある意味のひそめてあるやうに思はれたその終の言葉は、此頃に理解する事が出來ました。不言實行。なぜ私にはそれが守れないのでせうか。このあやしく震へる心持を解してしつかりと、抱擁してくれるものはないのでせうか。

　美妙なる大自然の心に、淡くとも感應する刹那の心境には。唯ひれ伏して嬉涙をさゝぐるのみ。

　そして其の一瞬間の、過去の痛切なる悲哀は、自然

すべての人妻のうへに流れて、祝福すべき感謝すべき、奔放なる純潔なる我が處女の名は、寶冠のにへにさへ、なしがたきほどの強き誇りを覺ゆるものを。

唯何事も默して從順にして居たならば。移ろい行く何時の日にか。自分をとらへて。妻となさしめ母と呼しめるやうな、不思議な時が流れて來るのではあるまいか。

妻となり母と呼れて、猶、平然として、偶像のまゝで居られようとは、どうしても、思はれませぬから、私は其の時のめぐり來るを切に恐れ、其の時のめぐり來るをふせぎたきために。つとめていつはらざる眞情を親き人々に私語きつげる。さゝやいたとて眞情にたゞして深き同情をたれる人はないのだから。早く不言實行をさとした人は唯一人の知己なのでせうか。



虚榮のために歌をよみ、文を作るにすぎないならば、私は、妻と呼ばれて優しく人につかへますけれども。一人の生存を考へてさへ夢のやうに不思議な思ひが湧き起つて、しだいに曇り來る顏を強く兩手に覆ふたまゝ、とく由もなき憂悶に。知らずしらずすゝり泣く時の心持は。自分にも謎のやうなもので、ありますけれど、私は何時までもその心持を忘れたくない。

あゝ此暗き悶へるうちに何時までもいつまでも悶へさせたまへ。

淺きあかるさに遊ばんよりは深き暗さにたゞよはん。まひるの庭に、眞赤な着物を着て立つて居た子が、今は夜半の緣に白衣をまとふて、たゝづむやうになつたとでも言ひませうか。

心情の動搖は常に烈しくても、つとめて冷靜に冷靜にと我れ、われを守れり。

剎那せつなに閃く感情をたしなめる事の出來ないのは火玉をふところに入れてるよりも猶危いと思つてから、理は深きねむりより覺まされて、情と理との爭ひは開かれた。自分はよく情と理の爭ひに勞れては、ひぢ枕して兩眼をつむつて終うのが、常である。

重病にをかされて我がすべてを病に殺されてる場合のほか、日を一日安靜に送る事は困難であるけれども、小さき不安心な日をかさねつゝ、かさねつゝ何時か大きい安心を得る日の來る事を、自覺して居ます。

それは情と理との完全圓滿に融和する時、其の時ではありますまいか。

無明の慈愛は海の如く廣げ給ふとも、すでに浮く事をゆるされぬ我が子の重さをなせ理解して下さらぬのでせうか。

理解して下さるまでになせ、私は心を父母に語らないのであらうか。

父樣は、よくビールに醉ふと快活な調子で、やるさやるさやらうと思ふ事はやるさと仰しやるけれども、私には何んとなくそれが空言のやうに思はれて。

母樣は何はともあれ親なき後の我が子の守りを、たくすべき大木を移し植んのお望なる事は明かである。

うやむやのうちに、三人の者は一人の前途について別々の考へにふけつて迷つて居る。

惠を捨て愛を捨て我が子と思はぬ。赤裸々のお眼に私をつく〳〵と眺めて、眞の我が子を知つて下すつたらどんなに嬉いでせう。

無明な慈愛を深めれば深め給ふほど。前途のさだかならぬ旅路に、お心からゆるして、お放し下さる事は不可能でせうと思へば、悲しむよりほかはありませぬ。

それも我が行く先のよりもより、幸あれと祈るみ心よりと思へば。何んとなくいら〳〵して、めちやくちやに情緒の亂るゝを覺えます。

衾を一重へだてゝ友には語り得る意思も親には秘めたう思ふほど、遠き世界に呼吸して居るのかと思ふと淋しくなる。

やんごとなく沈默に沈默を重ねてしだに、我子のまはりに不明の垣のきづかれ行くを、父母は誰が罪であると思つて居らつしやるのであらうか。

父樣がある時、お前は何んだか夢を見て居る者のやうだと仰しやつた事がある。



繪に表はしたい心持

水仙子

お父様と末の弟と私の三人が上野へ散歩に出て歸り道、何時出來たとも知らなかつた細道へ這入つた、と草の中からする〳〵と、細いものが動いたと思ふと、蛇!!蛇!!!はつと思つて駈け出すと、方々に一かたまりになつた白い蛇が、逃げる事も出來ず足がすくんで、立止るとひやりとする一匹が足へからんだ、夢中になつて聲を上げるとふつと眼が開いた。夢、あら夢だつたのか、

時計を見ると四時三十五分、ちり〳〵と鳴りかけるめざましを止めて、ピンがぬけてくづれた束髪の髷を、まきながら起きた。

お天氣がいゝので又洗濯、兄様のと弟のと自分のと皆んなで四枚、たらひにつけた。毎日々々お天氣がよくさへあると洗濯ばかりで深い井戸から水を汲み上げるので掌にこんなにたこが出來た、指だつてこんなに太くなつてしまつたし、と思ふとなんだか眼の中がじつと熱くなる。下女をよしてから何から何まで自分がする、強情で生意氣な下女をいやな思ひをしながら、使ふより自分が手を下してする方がと考へる、けれど、母様があつてこんな家事の苦勞を知らない娘を見ると羨しく無い事は決してない、去年の夏までは私も其一人だつた、家政の苦しみは知らなかつた。

糊をつけて干しあげるとがつかりしてしまふ、新聞を一通りよんでから今朝咲いた朝顏の花を、三つ寫生する、かりばゝりへ張つてかわく間、弓張月を讀む、彩色をする、十分氣をつけて丁寧にしたのに、むらが出來て、なほせばなほす程きたなくなつてしまふ。

どうしてこうなんだらう、とても、とてもさきの望みなんか少しだつてありはしない、口惜しさが胸へこみ上げて來る。

毎日々々學校へ通つて、習つたのが何の爲だ、こんな寫生一つ出來ない様なら、いつそ繪筆を折つて、繪の具皿をたゝきこはして、そして私は一生筆をもつまい、繪も見まい、ピリッと紙をはがして、くしや〳〵にもんでしまつた。

「姉さんは氣ちがひの様だ、きつとヒステリーだよ」後に立つてゐた弟が笑つた。

突伏したまゝ、頭の中でそれからそれつと、つまらない事を思つた。

ヒステリー、けつこう、氣ちがひだつていゝ、何だつてかまはない。

家のすぐ前に私と同じ年頃の娘が居る。別に大して美くしい、と云ふ程でも無いが、でも年頃の女だから、どこか生々した血色をしてゐる。

私はその人を見るとなんだかいやになる、なんとなく。……おとなしい？あんな風なのがおとなしい女だつて云ふのかしら。だまあつて唄一つうたはず、隣の娘と一所の裁縫の師匠へかよつてゐる。たまにその女としてゐるはなしと云へば、白粉、きもの、芝居、きまつてる。

毎日同じ様な大きさのつゝみを持つて、つまらなさうな顔をして、はでなくどい模樣の浴衣をきて行く、かへつて來れば、何かしら臺所でごと〱働いてゐる。こんな生活を、何とも思はず、樂しいと云ふ事もなしに日を送つてしまふ、そして親の云ふなりに、年が來ればお嫁さんになるんだ。

幸福？そう幸福なのだ、つまらない事に氣がついて、もだへてゐるよりは幸福なのだらう。

是が非でも親の云ふ事には何一つさからはないで、たゞ人形の樣に、箱入娘！。

私だつていやでも何でも、學校を卒業からは、家の中で面白くもないしごとや、一家の主婦のする樣な事をしなければならないのだ。母さへ生きてゐて下すつたら、私は學校へ這入る時の考へに近づいていたらうに、繪も思ふまゝに書いてゐられ樣に、いもつ〱家の内でうろ〱してゐないでもすむだらう。

運命。それなんだ、何一つ自分の考へてた事が實現しなくても、それはもう私が此世に出てくる時に、持つて來た運命なのだから、どうしたつてこれにさからふ事は出來やしない、私に大ぜいの弟がなかつたら或はまんぞくするまでにはいかなくても、わんぱく盛りの四人の世話をする間に外の事が出來樣に、家が五六年前の樣だつたら、私一人で困ることはなからう。零落。あゝ、神樣は私共一家をすてゝしまつたのか、一つ惡い事があり出してからは、だん〱下へ〱と落してしまふ、いくら貧乏しても、たとへ乞食をしても兩親の元なら、たのしい事もある、これも私が前の世とかに惡い行ひをしたむくいなのかも知れない。

たゞ繪を書いてゐたい上手になりたい、……

何も世間の人にちやほやされたくはない、自分の思つてゐるものがそのまゝ繪になつてあらはれてくれゝばいゝ、それで私はまんぞくする。空想、空想なのか、永久に私の心からうれしいと思ふ時は來ないだらう。來るはずはないのだもの、はかない、あゝはかないのぞみ、かなへられない、とはあきらめるけれど、けれど娘時代、華かな娘時代、あゝなつかしい其名よ、したはしき日……よ、けれど私は……人生の春はふたゝびめぐつては來ない……。

私の心このかきむしられる樣な心、もだへた心をだれも知つちやあゐない、一人でもだへて一人でなぐさめてるのだもの、他人に同情なんかされたくない、してもらたつてしかたがない。

女、弱きものよ汝の名は……、だけど私は生れかへつたつて、男にもなりたくはない、強者、強い女になつて、そしてこのおとろへた家を昔の樣にして、きつと見せる。

私の伯母、昔者の伯母は、繪なんか習ふのを心得ちがひの樣に思つてゐる。

「女はみつしり縫物をしておけばもう、それでいゝんですよ、何もねえ、そんな……」一言目には自分で自分たちを卑下してゐる。

電燈をかやの近くにつるして、ページをおくつた、すつかり戸をしめきつたので、むしあつい事――息が出來ない樣だ、胸が苦しい、布をぎり〱と卷きつけて力一ぱいにしめ上げられてゐる樣に、……、本をなげ出して、まくらをした。

おろかな女、弱い女、耳の中でさゝやいてゐる。ふたをしたつて内でだもの、苦しい、ゴーッと夜汽車が、うめく樣に……去つてしまふ、冷たく光る、蛇の樣なレールをまつくろなものは、しつとりとしづんだ草や、ねむつた野の花を、たゝき起す樣にうめいて、走るのだ。

ねむらう、何も考へる事の出來ないねむりに、安らかな、夢を見ない眠に入りたい。

夕方お父樣と二人きりで本郷の姉をたづねた。涼しいでせうから、不忍池の方から歩いて參りませう、と納涼博覽會の前を通る、黒いピカ〱光る自動車の留つてるぐるりに、大せいの人が、てん〱にうれしそうな顔をして見てゐる。下らない、人の物等、それも珍らしさうに。

「自動車と、馬車には是非一度のつて見たい」とよ

く○子さんは云つた。平氣で、其度に、
「まあ、そう」と云つた私は、そんな事を望みにしてゐる外には、何にも思ふ事なしに、美しい着物をきたい、芝居を見たい、自動車にのつて走る時、人にかほを見られた時の心を思つて、胸ををどらす、若い女、そんなのぞみは、必ずかなへる事が出來ように、……。

姉は相變らず、若々しく、美くしかつた、生々した顏色をしてゐた。私は羨ましい樣な、うれしさを感じた。

「まあ琴ちやん、あなたは肉附がよくなつてねエ」と、自分の事の樣に、うれしさうに云つて來れた。

「雪子さんは御苦勞がないから、いつもお若い事ね」とよく姉が云つた、本當にそうだ。

人形を見せたり、繪紙を出して來たり、姪の薫は私を歡迎してくれた、この面白くも無い叔母をしたつてくれた。

「○○日の音樂會には、是非一所にね、きつと、」姉はうれしさうな表情を見せた。

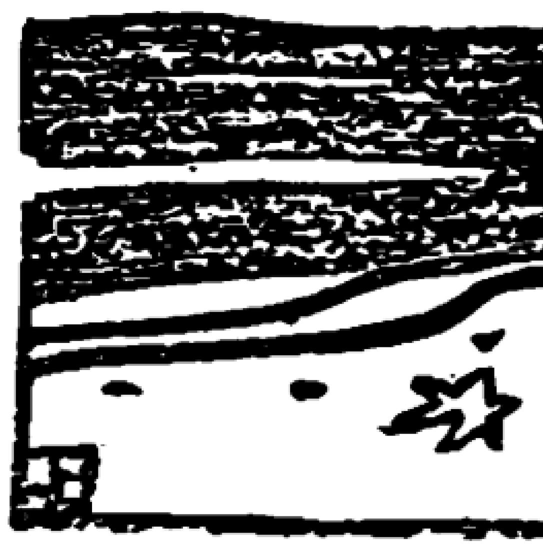
星がぎら〳〵とするどく、そして秋らしい光りをなげてゐた。もう秋だ。

ひなげし樣の、おうちへ上つて、小さな人形をいただいて來ました。花ちやん、千代ちやん、可愛い名をいくつも考へて見ました、やつぱり花ちやんて云ふのが、一番可愛らしい想だと思ひました、花子、花ちやん白いうれしさうな顏してゐるのが、眼の前へ浮びませう。紅い友禪の着物に、水色りんずの帶を緋ぢりめんの帶留で矢の字に結んでゐます。

「袷を着てゐますから、ひとへをこしらへて頂戴」つておつしやつた事を思ひ出して、私の單衣の荒い市松のきれが少し殘つてゐるので、こしらへて見ましたけれ共、やつぱり今までの方がよく似合ふので、そのままにして、帶だけひわのを結んでさげて、クリームの襟をかけました。今にふとんだの、かいまきだのをこしらへてやりませう。紅だのみどりだのゝ布が、窓からさす西日につよく光つてゐます、花ちやんが又ニッコリ笑つてゐます。



毒草の
美しき實を
むすびけり
子規



生きた人形

波の花

まあ、酷いッ、幾ら平凡な私だつて、これでも相當に理想も有れば希望も有るんですわ、だけど悲しい哉私の境遇は總ての自由を免しません、弱い私は希望を浴々と書き流す程の才筆も無ければ、理想の實現などと騷ぎ立てる勇氣は尙の事無いんですもの、苦しい、眞實に悲しくつてね。

覺めたの、やれ覺めるのは厭だのつて、騷いでる人達から見れば私のは淡い影の樣な生活は全くつまりませんわ、それあ私だつて女ですもの、ね、出來る事なら華やかな處女時代の春の命を一日でも長く有意味に過し度いのは言はずもですわ。明けても暮れても生眞面目なと云ふよりも、むしろ苦い顏とでも云ひませうか、滅多に笑つた事さへ無い父と母の他、三ッ指で、お孃樣、お孃樣、と小煩さく附き纏ふ小間使ひの千代やにお梅、私の周圍は這麼人々に圍まれて恰度人形の樣に無意味に明けては暮れるのを待つて居りますのよ同じ家に起き臥し爲てゝも下働きの女中なんか月の中に一度顏見る事が有るか無いかつて云ふ程ですからね女學校に通つてた頃は何んと云つても今よりは幾らか外の空氣にも觸れましたけれど此の頃の私は幽閉されてゞも居る樣ですわ、時たまお友達が來て下すつても例の三ッ指で隣室に千代やなんかゞ控へてるので、打ち解けてお話を爲て下さる方は有りませんもの、女中位に何にもそれ程御遠慮遊ばさ無くともよさゝうなものを、妙に堅く成つてお終ひなすつて、お暑いの、お寒いの、お天氣が何うとか、お靜かで宜いとかッて、まるで話らしい話も一つ爲ないでお歸りなさるんですもの。

女學校の裏庭の小山、彼の青い芝生の上で手を把り合つて、笑つたり泣いたり、お互に有頂天で、側から見てたら隨分氣狂ひとも思はれる迄熱し合ふた癖に、それが皆樣言ひ合したやうに宅へ被居ると那樣ですもの、私の宅には魔が潜んでるとでも見えるのでせうか、あゝ、彼の芝生が戀しい！

私は這麼家庭に囚はれて、新らしい時代に生れ乍ら、日に日に現代の若い人達と遠ざかつて行くのが情け無い。私は今、十八の春、人は誇多き千金の時と云ふけれ

ど、花咲く春を持たぬ無花果の樣な私は、あゝ、……でもこれで、少さい、ハートには赤い〳〵血潮がトウトウと響き立てゝ破れんばかしに燃え狂ふて居りますの、だから、それだけ又苦しさは一層です。灰色の重い空氣の漲つた家の中に、しわ枯れた頑固の兩親に育くまれながら、私ばつかし燃え狂ふにハートを抱いて自由に憧るゝ、あゝ、この少女の苦しさ。月も無い夕闇の窓によつて、月見草の微白く咲くのを見ては、理も無く泣き咳逆りついて、千代やに煩さく尋ねられ、其上母樣の下室へ呼び寄せられて、醫者よ藥よと騷ぎ立てられる辛らさ、悲しさ、もつたいないけれど腹も立つ、泣く事をさへ自由にゆるされぬ私は、何故生きて居なければなら無いのかしら。

いつその事一と思ひに……と思はぬとても無いけれど、弱い、あゝ、私は弱い、死と聞いて、微笑むのは刹那、直ぐ胴震ひして、矢つ張り、重い灰色の空氣のなかに生きて行かなければならない運命なのか!?女に生れなければよかつた、私はなぜ女に生れたのでせう、思へば口惜しい、泣いて苦しめとて此の世のなかへ出して下すつた神も、うらめしい。

去年、二十二の男のさかりもこれからと云ふ希望に滿ちた青春の時を捨てゝ、お逝きなすつた兄樣は、どんなにか死を恨んで、此の世をば戀しく思つて居らしつた事でせう。

私の自由を片ッ端から引ッたくつて、生きた人形に爲やうとばかし、たくんで被居る兩親も、彼の兄樣には、無限の自由を與へて、一と言もお小言を被仰らなかつたもの、彼は男だから……と口癖のやうに被仰つて。

何故私の兩親ばかしが、あゝも頑固なのでせう。男も女も同じ人間でお互に自由を失へば生きがひも無いと、悶えるのは、當り前の事、どうしてそれに心づいては下さらないんだらう。

いつそ、私を人形のやうな女にするつもりなら、初めから、形の中へ入れて一歩も外へは出さないで、ほんたうの人形にしてお終ひになすつたらよかつたものを、少しばつかしにしろ外の空氣に觸れて、自由に遊ぶ、若い人達の歡樂の聲をもきかした上で、それで、それで、今更私を、エヽッ、どうしてこの境遇に堪へられませう。

悶えて、悶えて、泣かずに居られませうか。苦しまずに居られませうか。

眞實に、死に度い、誰れでも宜い、私を殺してくれる人が有つて欲しい。弱い私は自分で、思ひ切つた事は、とても出來ないもの。

刹那の感がさめれば、矢つ張し、死と云ふ言葉が空恐ろしうきこえる、弱い女ですもの。

笑つて暮す花やかな時を、私は人にかくれて、泣いて、悶えて、そうして、人のみる目には、ぼんやりとして刻々に人形と化つて行くのです。

齒がゆい女だッて、思召すでせう、そんな煮え切らぬ女の癖に、悶えるの、苦しむの、と、人並みに言はぬが宜いと、おつしやつて下さいますな、眞實、私は弱い女なのです、も少し私が意氣地の有る女でしたら、此の一生に一度の娘時代を、何んで、烟のやうに、淡々と知らぬ間に過ごしませうぞ。

ばらの紅さに、ゆかしい薄紫のやうな涙をそへて、美しい思ひ出の一頁も殘したものを。

スヰートなラブストリーも無ければ、ドラヂカルな涙の跡も無い私の過去、平凡な生涯は何時終るのでせう、娘時代と云へば、殊更ならずとも華やかな時代、今、私はその時代に生きながら、色も香も無い。



誘惑に勝つ

しうん子

日頃、母が病氣の爲、遠方へ養生に行つて居ります所へ、父が始終出張勝だものですから、それをよい事にして、散らして書いたもの、横に書いたの、讀めもせぬ英文まじりの文、下手なの、上手なの、來る〳〵種々さま〴〵の魔の文、何れもお定りの文句を並べて、何所そこへ日曜に見物に行かぬかとか、寫眞をもらひ度いの、希望を聞かせろのと好きな事が書いてあります。保護者が側に居ない丈け、絶えず胸を痛めて居りました。返事等は、無論出した事はありません、先方は梨のつぶでもおかまいなし、七八通隨分しつこいのもありました。何れも弱き女てふ女の心を覗いてるかと思ふと、腹立しく、丸めてポーンと火中に投げるのですが、盛んに青紅い火の手をあげるのを見ては、ヅツと身震ひせずには居られませんでした。

▲恐ろしき男子の迫害

手紙で引き入れようとするのはまだ優しいのです、此麼事申しては失禮かも知れませんが、年若き皆様の御注意にもなるかと存じますから、顔を包んで申します。

丁度私が横濱に二週間計り遊んで居ります頃でした三四人の連れと公園の方へ散歩に出掛けました、すると歸途に芝居へ這入らぬかとすゝめられましたが、少し頭痛がしてましたので「一人で歸れます」と言ひ別れて、夜の九時頃、ブラ〳〵淋しい道を選み乍ら歩いて來ますと、いつの間にか川端の青く光る電柱も何となくもの淋しい交番所の裏へ出ました、此時までゝす、何も知らなかつたのは……

チラホラと、近く遠く行く人もあつたが、いつか影は消えて青い光りのみ自分や川面を輝して居た時、只一人の駒下駄の足音が、私の後を從いて來るのです、後に考へましたら其下駄の音はいつの程からかして居たのです、で自分は振り返りもせずに少し急ぎ足にしますと、突然私の左にピタリと接しました。「貴女」と低く呼ばれて打ち仰ぎますと、男です、「何といふお名前？」ア丶巡査なのかしら、何故調べるのか、何と答へようかと、思案してをりますと、「きかせて下さいね」つて肩に手を掛けまして顔をすかし見てるかの様です、「アッ」手足はわなゝかずには居られません、驚きと怖しさに胸を打たれて、「何も怪しい者ではないですよエお名前は」肩の手ははなしません、其氣味惡いぬくみ、振りはなしたら忽ち此川に投げられはすまいか、逃げ出したらすぐに追縋られてからき目に逢はされはしまいか、名を明したら後の災ひも恐しく、と言つて半丁計り後方の交番所に訴へて出ようか、吁其れも女と男、マザ〳〵させもすまい、男はしきりに「名を〳〵」と言ひます誰が本名なんかいふものですか、いゝ加減な名と姓をくつつけて、のがれようとしましたが、なかなかにしうねく、何やら一人で饒舌つては折々返事をうながす様です。私の耳へは何も這入りません、始めて逢ふた餘りの恐しさに心もたましいも出たり這入つたりするかと思ふ樣、識別が付く樣になるかと思ふと、ボーッと前後もわからぬ樣になつたり、ハッとして廻りを見廻した時は裏通りの細道をセッセと歩いて居りました。家々の雨戸は皆閉されて、戸の隙間から弱い燈の光が溝板に投げて居ります計り、内に談聲はきこえても、外には犬の影すら見えません、定かにわからぬ横濱道、俯いた儘ズン〳〵大股に歩きます、男は

私の脊に手をあてゝ一寸も隔れず従いて來ます、時々其聲は耳をかすめます、「まだ初心ですネ……今晩の約束」ア、嫌だ、堪らなくなり、耳をおほふ樣にして、夢中で逃げ出さうとしました、滿身の力を足にこめて、二歩三歩目、哀れ溝板につまづいて轉げて了ひました。

其時の私の心、起き上つた時の恐しさを思つて、此儘起きまいかとも思ひました、「何も僕はあやしい事はしやしないのです、宿は御宅の近所です送つて上げるつもりなのです」私は何うともなれと思ひ切つて「餘りです交番へ訴へて來ます」引き返そうとすると「何も僕はッ」四五歩進むと袖の先きをつかまれた樣です、吁もう自分の運命も之限りかと思ふと、張りつめた氣が一時にゆるんで、オロオロと涙が止め度なく出ます。此時側の家でガタ〳〵一枚雨戸が繰られました、やがて「何だ」と顔を出したのは一人の老爺、私は飛ん



で入りたかつたのでした。

しかし何となく恥しくためらつて居りますと、男は驚いて四五間急ぎ足に遠きました　私は此時、助けを求めるのは知つて居ましたが客の身だ、大業にもなるだらうと、押へて「お爺さんいつまでも」と祈つた甲斐もなく「何でもなかつたんか」と言ひながらピタリ閉めて了ひました。男は又此方を向きました、私は決心して一目散に今來た道を引き返しました、萬一の時は交番があると思つて、でも以前の電柱迄來た時は、いくら振り返つてもそれらしい影も見えませんでした、私はまだ不安の念は去りません、夢我夢中で凡そ一里も走つたでせう。家に着いた時は十二時近くだつたでせう、入口の雨戸開けもやらず内に倒れて了ひました。心付いた時は體中が痛んで溝板につまづいて打つた足の爪はとれて了ひました、斯うして私は一ヶ月計も寢て了ひました。十七の何も知らぬ田舍娘に始めて深くゐりつけられたにくしみ恐怖、もう〳〵都會等へ出るものかと、今に置き覺悟してをります。

▲同情すべき男子の失意

罪なき身にかゝる障害をとりのけ〳〵淸きを全うした十九、三四年前を省みて、始めて感謝せねばならぬ人のある事を、何故早く氣付かなんだらうと悔いました。之もわづか乍らも罪を滅ぼす爲、其人に謝罪する爲、告白してせめてもの心やりに致しませう。

父母てふ見張の垣の高からぬを幸ひに、誘惑文のうるさいなかに、只一つ肉をそぎ血を吐く様な痛切な文は一ヶ月置きぐらゐに、投げ込まれました。度毎に差し出しの名前を替へてあるので、心ならずもいつも開封して了ひます。讀む内には壯快な文章の中に、涙に筆しぶる跡あり〳〵と、吁誰が引き入れられずに居られませう、しかし「フ何かの雜誌から拔きとつて此麼文句並べたのだらう」ぐらゐで。でも餘りに文章の巧みよと、親しき友の前にもさらしたのです、文中にも「下級官吏、貧書生」と卑下してある通り、某役所の官吏です、度々用足しに行つて顔を合せますが、一度も其れらしい言葉を吐いた事もなし、素振りをした事もありませんでした。其れを却つて「意氣地なしね」邊りかまはず友と嘲つたのも思へば罪深う御座いました。

或春の夕べ、親しき〇子よりてふ、親展書を受け取りました、筆跡のやゝ違ふのに迷ひ乍らも開けました。例の快活な筆跡は彼の人です、讀み行く内いつもに

まさつた激烈な文章、今から三年も前の事でよく覺えて居ませんが、何でも「君よ我に一片の御返書たまはらば、死ぬとの御言にもそむくまじ」といふ樣な事や「此春季には休暇を得て、歸國せねばならぬ、其前に御返事下されて樂しく歸らして下さい、十日計りで貴女の爲に歸ります、あたら修業盛を田舍に埋れてもいとはぬ」といふ意味の長い手紙でした。私は青くなり乍ら讀み終りました、人を馬鹿にするもいゝ加減がいい、とにかく此ういふ事が實地に有つては大變だ。私はまるで彼の人の爲に、しばられてゐる樣なものだ、早く此まつはりをときたいとすぐ筆をとりました、此時、今の心が、今の涙が一滴なと有つたなら、彼麼慘酷な事計りは書きはしなかつたらうに、其後間もなく出發されまして十日計り過ぎて、國から一通きました、「此四月には○○校へ入學する、もうお顏を拜する事も無いだらうから、一片のお筆跡之を最後にたまはり度い」私は隔れた嬉しさと、氣の毒といふ心も少しは出たので、短い手紙を認めて出して置きました。

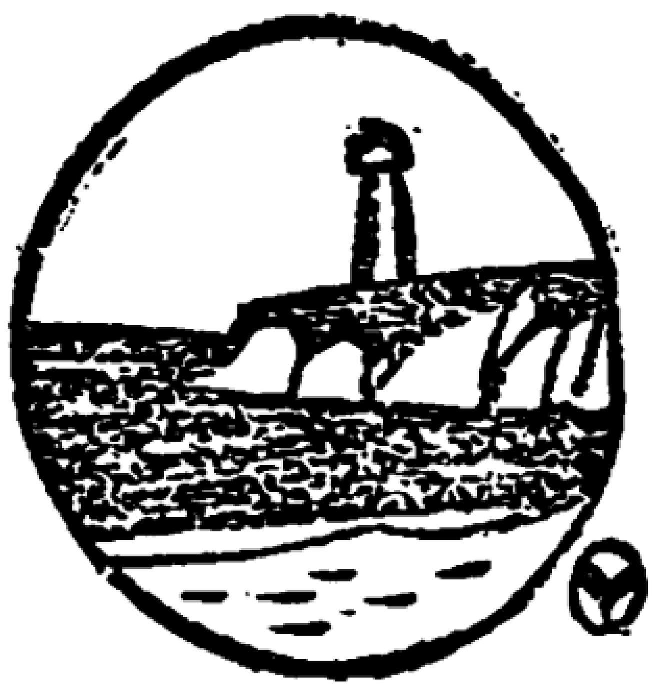
吁三年の星霜うつり變つた今、思ひ出す程、僞りの人とも思はれません。若き身の清きてふ唯一のブライド身にまとつて、樂しく月花に思ふ存分憧憬るゝ自分に引き替へ、哀れ失意に落ちた人の運命は如何なつてゐるでせう。許して下さい、強く胸を抱いて詫ぶる心の中も苦しう御座います。とは申せ、彼の時心のかたまらぬ少女に今の精神を宿して居たなら、必らず、墮落のふちにはまつて、今頃はもだへて居たでせう。吁何れを通るも、青春の道の危うさよ。

一茶の自然

草の花妹がさゝげは老にけり
名月やおれが八まん大菩薩
猫の飯うちくらひけりきり〴〵す
明がたにほんの名月となりにけり
親の日と思ふばかりぞ草のはな
盗人も身につまさるゝ夜露かな
秋の蝶案山子の袖にすがりけり
親ありや子ありや蟲も機を織る
戀人をかくした芒かれにけり
金の出た菊も同じく枯れにけり
猫の子がちよいとおさへる落葉哉
斯うしては居られぬ世なり雁が來た
次の間の灯で飯を喰ふ夜寒哉
きり〴〵すまんまと籠を出たりけり
秋風や皮を剝がれしかんばの木

裏門





破れたる友情

初鹿野道子



Near the lake, where droops the willow long time ago——

ゆつくりと、一針一針運んでゐた手がフッと膝におちると、いつか又あの歌をうたつて居た。柱に凭れたなり、自分の聲にひき入れられる樣に二節——三節と低い聲に歌ひ續ける。あゝ——

人が見てゐたら、聞いてゐたら、何と云つて笑うだらう。止度もなく、止度もなく涙がこぼれて。

辛らい事も悲しいこともないけれど、只、古い樂しかつたこと、嬉しかつたが一つに成つて、かうして凝として居り乍ら何にも譬へられない激しい感情に、ほろり、ほろり涙がおちる。

常盤木の繁つた丘はいつも映え〴〵しい綠色をして其の間に僅かに見える禮拜室の高い塔の頂きや、羽根布團の樣に柔かに芝生の若草や、泌々と思ひ浮べて、小羊の樣な懐しさに胸がふるへる。

秋ももう半の十月末であつたけれど、四月頃の樣に和やかな長閑な日であつた。夕の禮拜が濟んだ後で各々聖書や讃美歌をかゝへて、二人位しか並んで通れない小路を靜かに花壇に上つて行つた。私等の組は八人とも皆ゐた。ミスKを中に小さい乍ら暖い輪を作つて皆芝生に草履の儘ひつたりと座つた。ミスKは低い楓の幹に凭れて、膝の上に手を組み合して、替るがはる皆の顔をみて被居つた。私と翠さんと其右に坐つてゐた。翠さんはお下げの頭を私の肩にのせて海人を歌つてゐた。

「ミスK十年經つたら私等何してゐませう」不意に君さんがかう仰有つた。

「翠さんは聲樂家ねえ」私の詞に誰れも贊成したけれどミスKは驚いた樣に默つて被居つた。

うるみのある星の樣な瞳は美しかつた。時には今にも露が落ち相に思はれる悲しい色もみえたけれど、又急に晴れやかな明るい輝を持つて、一人の人がどうしてと思ふ程激しい表情の變化をみせてゐた。私は華やかなる可き翠さんの未來を思ひ續けて、ミスKのお心をよむ事が出來なかつた。暫らくと切れると翠さんは膝に重ねた紫矢飛白の袖の上に御自分の手と、私の手を合せて靜かに細い聲で Near the lake を唱ひ初めた。此れは私の組の大好きな歌だつた。私は二節の中頃でふと止めた、ミスKは默つて私をみていらつしやつた。噫あの時、あの時、私の心が盲ひて居らなかつたら。

大膽に云ふ、私は人に愛せられてゐた。先生からも凡ての生徒からも。私も其れを知つて居たけれど一度、「あなたは人に愛せらるゝ人の責任と云ふ事を知つてゐますか」とミスKが仰有つた。「いろ〳〵生徒間に起る出來事や、又生徒の間に持つ共通した不思議な感情の原因等、教頭は其麼事に對して全く無勢力ですよ。此校内の一種の大氣は貴方等が作るのですよ」とも仰有つた。私は幾度か繰り返して見た。私は人に愛せらるゝと云ふ事が責任を持つて來るとは思へなかつた。私には時に苦しみとさへ思はれてゐたけれど。「あなたはまだ〳〵する事が澤山ありませう」と云はれて只あつい苦しい息をしたのを覺えてゐる。

私はミスKが只管に懷しくて堪らなかつた。此の詞は私に妙に思はれる。もつと深い應しい詞はないでせうか。然し私は明らかに自分の心を知られるのが辛らかつた。怖しかつた。私は翠さんを好きだつた。翠さんは私と離れた事がなかつた。けれど是れは誰も知つて居た。學校中の人が知つてゐた。私は私がミスKに對して抱いてゐる思を知られ度くなかつた。ミスKが誰よりも深く私を愛して下さるのも知つてゐた。知つて居りながら優しいミスKが、私と氣の合はない谷村さんや水野さんに迄優しくなさるのが、堪へられない程悲しく遣瀨なかつた。（私はこれを書くのが恥づかしい、何と云ふみにくい心だらう）其れでゐて茫然考へてゐる後から肩に手などおかけなさると、水を浴びた樣にわな〳〵した。食事の時も、教室でゝも、全く反對を向いて居ながら、なさる事の一つ一つ知つてゐて不斗眼の合つた時等、よろめく樣に映ゆい感じがした。ミスKは私と君さんの友情を望んで被居つた。君さんは私と同室の、暖かい家庭に人と成つた優しい人、み

とりさんの次に好きですと答へた私の顔を、ミスKは淋し相にみつめて被居つた。

朝から冷たい風が吹いて、僅散り殘つた銀杏の枝をゆすぶり、グリーンハウスの扉も閉ぢたなり、淋しい日であつた。夕食後の自由時間を、皆ストーブのまはりに集つて、種々な事に笑ひ興じてゐた。ストーブは一杯に石炭を入れて、窓は只一つ上の方二寸許り開いてゐるきり厚いカーテンを引いて、汗ばむ様な暖かさ、皆の顔には幸福らしい輝が充ちてゐた。いつか冬休みの事に成つた。私には樂しい計畫があつた。學期初めから翠さんを冬休みに私の家につれてゆく約束だつた。烏川の邊の淋しい家は賑やかな美しい人を迎へて、父様も母様もどんなお喜びかと思ふと胸がをどつた。



私が此の事を云ひ出すと皆默つてしまつた。私は只不思議に思だ。

「○○さん翠さんが御一緒でなくちやお氣の毒ね」だしぬけに谷村さんがいつた。

翠さんは可愛いお下げを私の膝にもたせて、雪さんとにらめくらをしてゐた。

「えゝ、其れはね、翠さん」私は急に翠さんをかゝへ

る樣にして云つた。

「だつて、いくら一人できめてゐらしても、水野さんと一緒に橫濱の――」

君さんが急に立つと、谷村さんの椅子が倒れて三四人一緒に倒れた。混雜の中に自習のかねがなつた。君さん、感謝します、私は決して忘れません、何と云ふ美しい情けよ！

私は翠さんの肩に手をかけたまゝ、石の樣に默つてゐた。

皆、だん〳〵に自習室に出ていつた。君さんも私をみつめたなり默つて出ていつた。廣いシチングルームに只二人殘された。あか〳〵と輝いた電燈に、まあ何といふ廣い室よ！　けれど私の立つてゐたのはもつともつと廣い涯のない砂漠であつた。私は靜かに肩の手をはなして翠さんと向ひあつた。ま、蒼白な其の顏。

「みどりさん、どうしたのです、私に解る樣にはなして頂だい――」これだけ言ふに何度息をついたか。

「…………」

「言譯は仰有らないで、みどりさん、あなた眞實に水野さんと約束なさつたの、私等の約束はすてゝしまつて。私に一言も知らせて下さらないで……みどりさんどうして、貴方がどうして……。」

私は自分の聲がさゝやく樣に弱いのに氣づいた。恥づかしい程ふるへる足をふみしめて其儘自習室に入つていつた。

皆私が惡かつたのだ――一方から云へば、けれど若し私に倦きたのだつたら、なぜ私に知らして下さらなかつた……

渦の樣な思に何もまとめられない私は一人早く床についた。淋しい夜であつた。窓から一杯月がさして寢臺の上もひるの樣に明るかつた。怖ろしい風の收つた後は死んだ樣な靜けさ。君さんは後から靜かに入つていらして窓に向いた私の肩を一寸さはつて默つて隣のベッドに入りなさつた。

靜に橫に成つて居り乍ら、大人びた深い悲しみ、何にも例へる術のない激しい痛みに、私は一夜まんじりともしなかつた。誰れが、オヽ誰れが此の心を計つて呉れやう。私の胸は形もなく傷けられた。私はすてられた。すてられたのだ。欺かれたのだ。けれど是等はなほ忍ばう。私の心に深く〳〵根ざしたフレンドシップに對する思は根元から切りとられた。あゝ其れは私にとつて、どんな意味深い尊いものであつたらう。其

の爲めにはどんな困難も堪へねばならぬ。どんな尊いいけにへも捧げねばならぬと思つてゐた。美しい築き上げた友情の城に翠さんをすゑて——あゝ然し其の幼い人の只一つの指はこの城を、みんな、みんな地からくづして終つたではないか。私は今になつてもあの夜の事を顫へおのゝかずに思返へす事が出來ない。私は私は——かうして第一の戰をした。ミスK、默つてみ守つて被居たあなたは、私の男々しく戰つたのを知つてゐて下さいませう。

私は今明らかにみどりさんを見る事が出來た。けれどあゝけれど——其の痛みよ！

終業式の日が來た。私は手早やく荷物をまとめてミセスR(教頭)のお部屋にいつた。

「ミセスR、何卒お願ですから私を早くかへして下さい皆の夜室にゐる間に、私を早い汽車でかへして下さい、私は耐へられる迄耐へました。オヽミセスR、今くぢけては……」

ミセスRは默つて私の額にキスして下さつた。

私は私の組とミスKにだけさよならにいつた。

「今度かへる時、私はもつと強い子に成り度いと思ひます」私の息はつまるかと思はれた。ミスKはしつかり私の兩の手をおさへて腰かけて被居るお膝におのせなさつた。私はわな〳〵顫へる身體を安らかにまかせてじつと唇をかんでゐる。「貴方は男々しかつたぢやないの」ミスKのお聲も低かつた。

「一寸も強い事ありませんわ、誰だつて、誰だつて私の心にみどりさんの殘した深い穴を知らないでせう。私は臆病になつて人にかくれてゆくのですよ。けれど私がもしみどりさんを見たら、私の胸は屹度裂けるでせう、もうさよならと仰有つて下さい。私が歸へつて來る時、あなたが私を愛して下さるか、其れも解らないのですもの——私は聲をのんだ。堪へてゐた涙が初めて流れた。私は愧づかしい顏を兩手に覆ふて立ち上つた。よろ〳〵とよろめく身體は暖かい胸に抱きよせられて、指の間からほろり、ほろり涙がおちた。

Nou you are a Coward. go. May darling, just go—

私は顏を覆ふた儘に室を出た。

家にかへつてから三日、私は顫へる手に筆をとつた

「——此處に書く事の出來ない種々の事に私の心は破れて居ります。人が、自分の居るのも居ないのも誰の利にも不利にもならないと悟るとき、どんなに淋しいでせう。ミスK、私ほどに盲の人があつたでせうか、

私は何故翠さんを失ふ前、もつと深く、廣くものを見る事が出來なかつたでせう。若し翠さんが死んだのだつたら、私は其れが反つて優しからうと思ひ升。私が愛と云ふもの、フレンドシップと云ふものに對して持つて居た考は、アイデアルは全くちがつて居たのでせうか。何か一つの試が來るともう皆 untrue に成つてしまふのぢやないでせうか。私は、世の中に私のゝより外に不變とかコンスタンシーとか云ふものが無いと思はれます。どうして再び人の愛を信じる事が出來るでせう。私が愛してゐたのをあなたは知つて被居る。私が愛してゐた人が私の思つてゐた人でないと知るのは、私にとつて苦しい事でした。そして――そして、お免し下さい。私には書けませぬ。地は限りなく深い口を開いて、私をのむ樣な氣が致します――。」

越えて二日、私はミスKのお手紙を受とつた。只十一行の其お手紙は、やぶれて千切れて今も此處にある。全くの清い友情、アンセルフイシの愛を私の心に刻みつけたミスKは、今は遠い英國におかへりなさつた數多の尊い書物のためにLordの稱號をゆるされたお父樣を助けて、イーストグリムステッドの郊外に靜かな生活を送つて被居る。ミセスRも御歸國遊した。

組の八人は散り／＼に成つたけれど皆望にみちて、行くべき道を進んでいらつしやる。只文さんは一人短かい旅を畢つて、夢伏の墓地に眠つていらつしやる。みどりさんも、あゝ翠さんも幸福だときいた。

凡てはすぎ去りし古き日よ、かへりみすれば皆一つ悲しくも懷しきゆめではないか。

母の樣に敬ひ愛したミセスR、姉の樣に慕ひなづかしんだミスK、お二人乍ら遙かに隔てゝ在すけれど、私の側に私を守り給ふものは遠い彼の地のお二人をも守り給ふ。私の行手は遠いけれど、私をみ守つて下さるお二人を忘れませぬ。限りのないゆるやかな思にみたされて私は感謝をつゞけて居ります。

安しや、別れをるも、主の守りにてやすし。

しぐれの雨まなゝしふれば眞木の葉もあらそひかねて色づきにけり　よみ人しらず

都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關　源三位頼政

百舌鳥の啼く末の原野を見渡せば一むら林櫨紅葉せり　香川景樹

秋もやゝ深くなりゆく里林柚の實まじりに色づきにけり　井上文雄

大原や里の中道秋ゆけば青葉まじりに紅葉散りしく　上田秋成



夢二式の眼

初雁

娘時代の告白、なんて申しますとあんまり夫人ぶつてるやうな口ぶりですけれども、これでも夫人にはちがひないんですもの。あらお笑ひ遊ばしちやイヤ、伊藤の細君の大眼玉、と云へば主人のお友人中にも知れ渡つて居るので御座いますよ、こんなお轉さんでも赤ちやんでも出來たらば、少しはおとなしくなれるのでせうか。

それやア學校へ行つてました時分には……ホヽヽお話にならないんで御座いますよ、校中ハイカラの三幅對とか何とか云はれてまして、その頃流行たマガレツト、リボンはいつも眞紅ときまつて裾短な紫袴、あと高のあみ上げ靴に犬でも猫でも蹴飛ばしながら本鄉通りを濶歩して居たんですもの。學校がね、技藝の方でございましたから、他校ほど制裁がやかましくなかつたんで御座います。

その代りよくあの、お茶の水や府立の方なんかに遇ひますと、妙に肩身がせまくつてなりませんでしたのエ、電車へなんか乘合せますと、男學生女學生にかゝはらず、するどい批評眼を光らせましたわ。白二本筋が大もてゞ、わけもわからずその學校に知つてる方なんか一人もなくつても、もうみんな一緒になつて大さわぎ致しましたのですよ。中には明大だの高師だのつて物好きな方もありましたけれど、それは直接御自分に關係がある方達で、何誰でも海軍か向陵健兒に、憧れぬいて居りました、不思議と陸軍でおつしやる方は一人もございませんでしたよ、私早稻田は大嫌でしたし、慶應もあの紫紺の制服の色からして氣に入りません……

……ホヽヽ、柏葉宗の牛耳を執つてねえ、大さわぎして水泳部やボートのメタルを貰つて、かんざしにしたり帶どめにつけたり、狂熱のあるだけをつくしました

隨分運動會歩きもしましたが、どんな事があつたつて帝大はかゝした事はなかつたんで御座いますよ。三月一日一高の記念祭なんかには學校やすんで出かけまして、やかましく攻擊されたものですわ、翌年の分までくつてみて、あら來年もやつぱり日曜ぢやないのよ、つまらないわねえ、なんて悲觀したり……毎年の寮歌集が今年で八冊たまつて居りますのよ、このまた寮歌集とエハガキを買ふのがたのしみだつたので御座いましてねえ。

お友達との交際なんかは不得手の方でしたのに、皆様が百合子さん〳〵て仰有つて下さいました、けれど私は何誰とも學校での御交際ばかりでした、それも一つは叔母の家になど居りますため、折角お出下すつた方にも思ふやうなおもてなしも、出來なかつたからで只今ではもう伊藤のお來客が何よりうれしくたのしみで御座いますわ。

私がまだ三年ぐらゐの時でした、今から思へば無謀でした。同級のお友達に――その方はよほど年上でしたが、苦學みたいな境遇でね、ちひさい私にむかつて泣きつかれまして……それをまた私が自分のお小使金もまゝならぬくせに、そつと貯金を引出したり、叔母にたのんでしばらく一緒において上げたりしましてねそしたらその方のお國元からは餘計なお世話でもしたやうに云はれますし、その方もまた急に氣がつよくなつて、强迫がましい言葉さへもらされるのでした。自分の不明を恥づると共に、泣きたいほどに興覺めました、それからもう友達の世話なんか一切しないことにきめました。その方今はもう音信も絶て了つて、どうしてゐらつしやるかわかりません。文學の方でございますか、十六ぐらゐから投書家のお仲間入りをしましたが、賞められたりおだて上げられたりして夢中になつてよろこんでるのも、初めのうちで御座いますネ、十八、十九となりますと、もう淺薄な文學談などされるのが何よりイヤで御座います、それにその頃はもうその方を一かどの收入にあてゝ居りましたのですから何でもかでも書かなければならぬ、隨分苦しうございました。

誰から何と云はれても、私は沈默主義を守り通してましたが、そのまあ手紙をよこす人と云ふたらおびただしいものでした、おかげで手ふき紙に不自由いたしませんでした、男のくせにとの面下げて、ノメ〳〵と女に求交狀なんぞつけるんでせうね、そんな奴の横ぞ

つぼり張りとばしてやりたいと思ひました。一番癪に障るのは、いろくなことを書きつらねた末に、他見をはゞかる、御覧の上は御焼捨下さい、なんて返信の切手まで入れてあるんですよ。何も三錢が惜しくつて……あんまり馬鹿にしてるぢや御座いませんか、それもまだよ御座んすが、直接に濃厚くつきまとはれる人達にはなほさら困り切りました。通學の途中に朝な朝な行き合ふぐらゐでもう百年の知己の樣に吹聴されたり、同姪を利用していつか従兄や兄様が出來てゐたり——ですから私は多くの敵をもつてゐました、恨まれもし憎まれてもゐます、きくに堪へぬことを云ひふらされもしました、親の亡い身は嘲笑も迫害も思ふさま受けさせられました、よくあの中を切りぬけて來たものと存じます。



　かうして身にも心にも暇なく暮しました故、戀愛の甘酒に醉ふべき餘裕なんかは御座いませんでした、一面花やかな自由な放縦な私の生活はまた自分でパンの方の心配までしなければならなかつたのですもの、か

うなるとかへつて虚榮心も出てまゐりまして、ついあの可愛い時計が持つてみたかつたり、お立に結ぶ丸帯が欲しかつたり……地方において文筆に親しんでゐらつしやる方なんか思ひもおつきにならない……いゝえきつと冷笑遊ばすでせうが、まつたくさうなんで御座いますよ　都會に居ますと下駄のへることゝお小使ひの要ることとつて豫想外で御座いますよ。單衣が綿入れになつたり、帶が長襦袢に化けたり、そんなやりくりばかりして居りました、おくにから學費を送られて、熱心に勉強なすつてる方達が、羨ましくつてなりませんでした、私なんか親や故郷に對する責任と云ふものがないので、つまり放浪者だつたので御座いませうか

その後私は懷疑派に囚はれて了つて、性格も一變しました。晶子樣の一頰に寒き涙傳ふに言葉のみ、華やぐ人よと泣いてくれた可愛い友人もありました。

これは大いに女子文壇の感化でした、小川泉子樣だの、河野愼樣だの、みんな自分より年下の方達が深刻なさけびを發してゐらつしやるものを、私ばかりが我世は花よと浮かれてるわけにもゆきませんで……お眞似と云ふわけぢやないんで御座いますけれど。

御恥かしう存じます、うら若い少女の頭腦で解決の出來るやうな淺薄な人生ならば、生甲斐もないので御座いました、それを不可解だの無理想だの無光明だのとさけんで悶えました。すでに家庭を作つてる友や、前途の希望に若い瞳を輝かせてゐる大學生など見ましても、冷笑に堪へなかつたのでありました。

けれど女も二十と云ふ聲をきくと、こんなになつて了ふので御座いますよ、お笑ひ遊ばして下さいませ。私はまた花やかな希望も理想も多かつた昔にかへりました、必要にせまられて良人をもてば、やつぱり重い丸髷頂いて、甘つたれてうれしがつてるぢや御座いませんか、伊藤はね、丸髷に結はなければ何處へもつれて行かないぞ、なれ合ひ者みたいでみつともないつて申しますのですよ、ハア伊藤の頑固つたら御座いませんのですよ、でもお友人の方が、伊藤君は貴女が來てから大變陽氣になりましたつて、ホヽヽヽではあれでもさばけたのでせうかつて笑ひましたの。

ある人に、君もいゝかげんで本屋のひや食ひはやめて大學生でなくもたとへ漁夫でもいゝから婿でもとつてなんて罵倒された事など思ひますと、ほゝ笑まれるので御座います、ハア伊藤は今年工科を出ましたの、例の女學校時代には、どうしても一度は向陵生活を

して來た人でなければ、なんて氣焰萬丈で居りましたけれど、六高の出身で御座いますのよ、獨法〳〵つてさわいだものですが、やつぱり法科には縁が御座いませんでした。

愛の盃をのみほしてまた現實の世界にかへるのでせうが、無邪氣なものをよろこぶものに……私はもう柔順な妻として、一生を捧げつくして少しも悔はございません、私は幸福で御座います。

月に歌へる

○ 德島縣　蔦紅

いとけなき戀の心を七夕の七色紙にさゝらんとする

○ 大葉えみ子

栗の花うなだれしまゝに地に落ちぬ鐵工場の薄き日の色

○ 奈良縣　山田いそ子

カザリアの光うするゝ夏の朝街は靜かに尚眠りけり

○ 月山きよ香

西の京み堂吹く風ものさびて旅の女のくろ髮を吹く

○ 福井　明星

うちよする浪はかへれど舟はたゞ君をのせつゝはる〴〵進む

○ 大阪　田野しか子

戀すてゝ野に舞ふ蝶の白き羽に紅や染むらん姫百合の花

○ 岡山　桃のむら女

松透きて海見ゆる窓のまひる日に安らに眠る少女のすがた

○ 京都　名無し草

夢に似しうすむらさきの雲流る遠方にある君を思へば

○ 丹後　不審子

何事も運命なりと云ひたまふ御心おもふ薄暮はさびし

○ 植物春子

村百戸見下して澄む大空に鳶輪を描く秋日和かな

○ 福島縣　伊藤きみよ

たそがるゝ窓にもたれて若き日の戀を戀せしことなど思ふ

○ 岐阜縣　八千代子

楠の大樹の蔭に獨居て戀しき君の文を讀むかな

○ 神戸市　雪の女

常闇の國に住みゐる處女かも月さへ日さへ光さへなく

○ 宮城縣　長谷川紫葉

いく度かたふれんとせしわが命をさゝえて秋の風は吹くなり

○ 上毛　梨畑花城

夕立に押流されし畑道の土をふみつゝ茄子きりにゆく

○ 名古屋　渡邊萬喬子

沈丁花雨になやめる小徑あり君夜ごと來る我胸の家に

○ 福井市　山崎柏子

疲れたる吾魂は雨の音の甘きにとけて深くねむりぬ

○ 牛込　順子

鳳仙花一つ〳〵に散りゆきて秋の終の淋しさ見えぬ

○ 岡山市　洋月子

白萩の垣根に倚りて若人はくるしき胸をひたと抱きぬ

○ 名古屋　六つの花

ふはり〳〵空を飛びゆく白雲のちぎれにみゆる秋のさびしみ

○ 能登　埋れ草

草ふかき片山里に秋たちてはたをり蟲の月になくなり

詩

波よ

N女

降りそゝぐ夕暮の……
淡々しい薄明の漂ひ……
海のしづか
波は顫ひながら歌を唱ふてる。

波よ波よ
懐しい夕暮の白い波よ！
處女のやうに靜かに歌ひ。
ぴちやり〳〵と、浪を打つては
砂に戯れて又逃げて行く可笑しい波よ。

日は最う暮れて

夕暮の淡い哀愁がおまへの
よを纏れて行くのに、
お前は翅でも生いたやうに
海の面を甘へながら走り廻つてゐる
あゝ、その悔もない憶ひ出もない
心なげかはしい群よ。

見よ、瑠璃色の空に漂ふ白い
雲の碎片が、
しなやかな手を差し延べて
おまへとダンスをしやうとしてる
ぢやないか。ふつくらとした
愛らしい手で……白い雲が……ね！
それでもおまへは子供のやうに
ぐるりの柔い水を嚙んではは
からだをくづしては笑ひながら
歌つて居る。まあおどけた
その白い瞳つき!!

靜かなしづかな海の面を
一列の白い波が輕くみだれ……

みだれて……またその後から
白い泡を先立てゝ波の一列が……
その後を趁ふて……靜かに趁ふて…
波よ。——

いつまでも〳〵その優しい歌を
歌ふて呉れないか、
薄青い日光にたはむれて——
靜かな海の夢につれて——
おまへの懐しい歌の一節は、
うら悲しい、うるんだ想ひ出の
涙つぼい私の若い心を循つて
情緒をめぐつて……（入賞）

おそれ

菊子

をとめ子が、さゝげ持つ、愛の緋ばらの、
花のくづれて、散りかゝりし如く、
われの、今宵の、心のさびしさ。
澄み渡りたる大空に、

白くたゞれたる八日の月、
すでみおびたる青白き月光の流れは
蕭然と音もなき深林の杉の葉もれに
魂のまろび出し死人の面をかひな
づるが如く、音もなき風にさゆらぎ、
杉の葉の重たげにゆるゝかたち。
長く——ほそく大木にゐがゝれしを
とめの、
髪ほゝけたる、いたましきすがた。
すゝり泣く月光の許に、雨後の夜の
沈默を守るとき、
おそれ——不安に、
身内の肉はわなゝくとおびへふるひ
ぬ。
だく流のうづにとりまかれし身のは
かなさ、
ましろき手のいくすぢとなく、我が
袖に、からまる、月光のすでさ、
さびしい、おそろしい、
かなしい、
幽靈の世を思はせる。

夜明と蛙

夏野いろ子

夜明の蛙の嘘らしさ
瑠璃色の窓から
うるんだ瞳から
疲れた肉體のどてやらに
匂ふ夢から
窓によればスワンの頸の
白いさびしい思出から
鏡の樣な寝ざめのにはの泉水の
それに金魚が遊んでゐる
瑠璃色の空から
こゝろは恍惚と
あるかないかの小波から

秋のひかり

林原　やえ

光ゆらぎぬ
涙ぐめる白いコスモスに
貧しい我が秋の顔に照りたり。
ヒステリ性の疲れたる顔を仰向け
白くさける小窓の花よ
秋の日は黄燐の色にもえ
葉緑素のとぼしき莖にまつはる、
かなしみにうがふ淡い戰慄のうづ卷
きよ。
キリ　キリ　キ　キリ、
白銀の小さき環をなげて
小さき、きりぎりすは鳴く
薄く尖れる神經のいたみ
したしみに思ふもの
なべて思ふごとくなれ。
なつかしき秋なり、悲しき秋よ
秋のかゝやきの中なり。
光は弱く
地に敷ける淋しい心



葉月の末

里子

二十三日。

朝お葉さんがうつくしい林檎を澤山もつて來て下さつた、二階へ昇つて頂いて、サヤ豆のうでたのを出す。おはつものてんで、二人してさん〲たべた。けふ同窓會つてたけれども、表面ばかりかざる女の會合なんていやになつてくるで、二人とも缺席してしまつた。でも母校の圖書室ばかりの匂を忘れかねて、二人でねそべつて、古雜誌にかじりついた。

あついこと〱。まるで身體中に脂肪をしぼり出すやうな。あんまりふいて〱したので鼻の下がヒリ〱する。

けふは地藏盆で、夕方から、かねの音が方々からする。夜近所のはあさん、おのちやん、おことさんなぞと、鈴蟲とりに出かけた。

暗いこと〱、星のかげ一つない、わづかに時々出る懷中電氣の光をたよりに、近くののみちをたどつたボロ〱と雨はおちてくる。あたりはくらい、さみしいのね、少しも聞えないのね。とこればかしをくりかへし〱、でも二三町はいつた、けれども鈴蟲どころか、その音すら耳にひゞかぬ。雨は浴衣の背、袖とじつとりとする。おのちやんの手からパット出た電氣の光は、さみしい白い四つの人がけと青々と雨にぬれた草の中の、たゞ一枝の野菊のかげをうつした。せつなの光、でも〱、これがたよりだわ野ばらで、かきさいた足はヒリ〱する、鈴蟲に馬鹿にされたる夜なるかな。

二十四日。

むら〱とむらがつて居るうす白い東の方の雲間からにぶい〱太陽の光がさして、ぼんやりと朝だといふ感がする、昨夜の雨で木も草もしつとりと露にうるほふて、すが〱しい空氣が、みなぎつてゐる。

どうやらけふも雨らしい、でもその方がうれしい。朝飯後、小雨にけぶるうす藍の山々を二階のおばしまに立つてながめてたとき、ブーと汽船の汽笛を聞いた。

あらツ、あの船でお葉さんは東京へお歸りになるん

だわ、お送りすればよかつたにとは思つたけれども、一人波止場にとり殘されて旅にとゆく惡人をさみしい目で見送つてゐる、さみしい若い女のかげと思つてはやつぱり、かうして見えぬ船、見えぬ人をゑがいてゐる方が、少しは安全なやうな、氣持ちがするので——けふは二階で、おしごとしませうよ。

このむさ〳〵するのに綿入なんぞいやになつてくるけど、でも寒いこしらへでもしなくては、けどもけだるいこうヘラ臺にのべた秩父絣の綿入の身頃に、もたれてしまつて、袖付、八ッ口、身幅、身丈、衽下りとたつたこれしきのものを、半時間も使つてしまつた、表だけでも、今日中に縫上げなくてはならない——午後からは、雨は大分ときつくなつてきた、うす藍の山も、灰色の空も、一つの濃い灰色になつてしまつた。きのふから咲きかけた秋海棠が、かわゆく雨にふるうてゐる、桐の葉が大分かれて來た。

何かしらさみしい。きのふ出來た寫眞のうらへ、華、幸、たま、葉、里、槇、として葉月十七日と小さく書いたが、ふきこむ雨にところ〳〵にじむだ字になつた何かしらうれしい。

四時頃から雨は上つた、濃い〳〵雲の間からのぞいてゐる夕照が二階の軒にかけた蜘蛛の巣を、銀線のやうにその光をなげてゐる。あら〳〵ッとおもふまに大きい〳〵蝶が、あみにかゝつた。蝶はのがれやう〳〵と、あせつてゐるけれども、あせればあせるほどその足は、その線を破つて、一段〳〵と端の方に座つてゐる蜘蛛の方へ近づく。蜘蛛は悠然と見下してゐる。する〳〵するッと、その銀線はたぐられた蜘蛛はどこへやら、蝶はハラ〳〵、ハラ——とさもつかれたやうな翅を下にむけて飛石に一寸いこひ、亦はるか〳〵の空をめがけて海の方へ海の方へと去つた。

ものうげな太陽はわが横がほに直射する。

たそがれてから花畑に出た、桔梗も女郎花も、オランダショーブや、浦しま草も、みんな〳〵しなびてしまつて、かなしい〳〵むくろになつてしまつた。海の方から氣まぐれのやうな雷が、低音で、時々うなり出す。

宵闇の中をはげしい〳〵電が眼を射る。

ガチヤ〳〵蟲の音がかしましい。

二十五日。

彩雲斜にたなびきて、しづかに渡る明のいろ。

遠山が、まるで薄みどりでぼかしたやうにうつくし

い、芭蕉葉のゆらぎよ、波の音が低くきこえる。しづかなる朝よ。トンビの聲が空にひゞく。わたしはじつと、お隣の大庫を見つめた。所々にわづかの白い土をのこして、赤土のたゞれたのやわれたりしたのがまるで梅干婆さんの目と鼻を見て、むかしの俤を偲ぶといつたやうな、廢殘のむくろが老松や銀杏樹と一所になつて、いたづらにそびえてゐる。やつぱりとお前はむかしをくりかへしてゐるの？。馬鹿くしい執着じやないか。

續々と東都へ歸る友達は、一年の別をつげにくる。けふは政木さんがいらした。

私は別にそのかげはおはないけれども、何かしらとり殘されたといふやうな、淡いく悲哀てなものが顔を出す。

夕方京都驛から、きのふ歸つたお葉さんから葉書が來た。

今出ますよ、早くおのりなさい、と驛夫にせき立てられ、今一分といふ餘裕、人はみな車窓からのぞいてゐる工科大の生徒だと意張つてゐる兄様と、それに、女學生然と氣どつた私、それがエンヤラサッと三ッゞ〻の行李をもつたがい〻が、走つたために、タボ櫛はぬける、兄様の目鏡のガラスはとぶ、切符はおとす、國への土産のリボン、軍艦、お菓子の袋は、ひつくりかへる、惡人は笑ふ、わたしは熱くなるといつた頗ぶる間の惡るい、狂言をやつたといふこんな長つたらしい前置のつく驛にたゞ今つきました、お目にかかつたせつ、お話しやうと思つたけれども、おひやかしの恐ろしうて、たゞ今、御披露をといふ頗る振つたのだつた。

夜の幕のたれなんとする頃、無花果の木下に立つて裏の方からおこつてくる明笛の音波に耳かたむけた何といふ、デリケートな音だらう。

黑ずむだあたりの景にしつくりとあつてうれしい破れ庫を、おうふたつたのやうな葉の中から、白い綿のやうな花がういて見える。草の下から啼く名もしらぬ蟲の音が、まるでその笛の拍子をとつてゐるやうに、とだえては亦啼く。

山鳥の枝踏みかゆる夜長かな　蕪村
ながき夜や惡れば男ほしうなる　素丸
小娘の物縫いならう夜長かな　旨原
汽車過る跡を根岸の夜長かな　子規
傘に屈のつきし夜長かな　白雄
さて長い夜か長いぞよなむあみだ　一茶



巷の秋草

ひなげし

お湯の歸りに遇つた男は慥に本屋の旦那だつた、と思ふと、あゝ出たな、とすぐ思つた、今日はもう廿日である。

本屋へあんまり幾度も催促に行くので餘程手古摺つたと見えて、これからはお屆けするといふので、そんならと我慢して歸つてから二日になる。

一寸作つたしながら思はぬ雪駄の音と變つて我ながらハツとして玄關へ上ると、見なれぬ三つの毬栗頭、一齊に見かへる眼をさげて、カーテンすらりと引いて入に入る、此頃の書生達の友達の集まる事つたら、試驗前だといふのにみんなどうしてあゝ暢氣にしてゐられるのだらう。

思ひ出した樣に滲み出る汗を外の風で冷え切つた、かたばみ模樣の手拭で押へながら

「雜誌まゐりましたか」

といふと「あゝ」と仰しやりながら母さんは一寸御らんになつたまゝ、まだ本から目を離さうともなさらぬあれがさうなんだな、とすぐ思つたけれど實をいふと引つたくつて見る程待たれるものはないので。たしかこの號には投書しなかつた、

「母さん、おあきでしたら」

といふと、

「うるさいね。上げますよ、これには出てないのね」

と可哀想にといふ御樣子、えゝ私出しませんでしたわいゝえ出せなかつたんですよ、書く暇は有り餘る程ありますのにねえ、あたりがあんまりうるさいんでね。

かういひ棄てると、妙にむかくして來て、日頃の不平のすべてをさらけ出して仕舞ひたい樣な、變に昂奮した、むづ痒い心地になつて、つと立つ部屋に入るほんとに私は、わかつてる樣で割合に解らない私の周圍に不平のありつたけをいつて見たい。家中の惡感と冷笑の中心になつて、いはゞ迫害？されつゝある事を實に悲しく思ふ、人といふものは何も一つのものにばかり執着してなければならぬものではない、又してゐられるべきはずのものぢやない、私が本職の描く事をおこたつて、ともすればこちらへ向つて行く、その惡

い事は、いはれなくてもよく氣がついてゐる。

だけれども、もう此頃はそれすら出來やしないのだ、がたゞ一つの良心といふものが私の上に働く事をやめないかぎり私は横道へそれる事の善惡位は知つてゐる知りつゝ己れの自由になつてくれぬ自分を哀れみ、悲しんでもう持て餘し切つてるのに、その上端からやいやい云はれちやまつたくたまつたものぢやない。

私なればこそ堪られた、氣の小さい人なら今時分は神經衰弱でも起してるだらう、

この間新文章の表紙に當選した時もだ、

「こんな小さな事に一生懸命になつてないで、なぜ未來の成功をはかりませぬ」

と嚴しく叱られた、いや叱られたのならい〻、皮肉、否、たしなめられた、何といつてよいのかたまらない不愉快の念がむら〱湧いて、つい涙がこみ上げて來たのをそしらぬ顔に

「でもこんな事が成功の土臺になるかもしれませんね」

と平氣で穩やかに云つてのけたあの時の私——大出來だつた、と今でも思ふ。

私はさういつた。けれど一應は最もらしいがよく考へて見ると今の私として投書などに氣を散らしてゐられるはずのものか、云はれる通りなるほど間違つてるかも知れぬ、望みない方面にむしろ努力してるのは愚かな極であるかも知れぬ、私は本當をいふのだけれど文の筆で立つ考へはさら〱ない、そんな自信はゆめ持つてゐない。

頓挫といふ事が萬人の上に起るものならば私もその頓挫をして仕舞つたんぢやないかしら。我好む目的に向つて非常な勢で進んで來ながら何といふ意久地のない事だらう、かうして時々文の筆をもつ樣になつたのはほんの近頃の事なのだ、行き詰まつた苦しまぎれに見當違ひへ歩き出した、といふ迄の事なのだ、

あゝネルの着物が戀しい、折れ伏した秋草、その下になく蟲の消え入る樣なこゑ、冴え渡る月、秋——秋！

雄大な碧梧桐の夏は行く、大柄の浴衣を捨てゝ赤い鼻緒の雪駄を捨てゝ、薄紫色に代へる——うすい絹の袷と、處女の顔の幽かな憂ひ、胸をしめつけられるやうな人なつかしい想ひ——あゝ秋が近づく。

電氣がパッと消えて了つた、夜風が冷たい、われと我が襟をかき合せた。

沼津千本松原

番紅花

夜半から、くつがへす樣な雨の音に、いくたびか目がさめた故か、今朝はいつもより、ねむくつて仕方がない。

妹はと、ならんだ床を見ると、まだすや／＼と、いい心地らしくねむつてる。起さずに一人行かうかと、帶を結びながら考へて見たが、あとで『お姉さまてば隨分薄情ねえ』と、うらまれるに、きまつてるからと

『百合ちやん／＼／＼』

と、ゆすつてやると、パッチリ目をあいて、大急ぎでとび起きて了つた。

夜來の豪雨は、嘘の樣に晴れて、東のみ空から、金色の征矢が浪の上をうつくしく染めて居る。

コバルト色に、澄み切つた大空!!そんな色の、うす物に、紅に帶を胸高にしめて、そして濱に立つて居つたらと思ふ。

今日は浪も思つた程荒くない。洋々とした、この駿河灣の浪の囁が、なつかしい！

手早く、海水服に着かへてそして海中へ……潮風がそうと吹いて行く、可成沖まで泳ぎ出した浮袋もつけず板にも、頼らないで、この位泳げればたいていの場合には恐れぬつもりだ。

でも、敎はる時には隨分骨が折れて、泣きたくなる事もあつた。〇〇の水泳部で、鍊え上げて、「河童」と云ふニックネームのある位の剛の者ですもの。時々沖の方まで行つて、置いてきぼりをくつて、すんでにこの世へおいとまする樣な事にも逢ひました。

けれど、そのお蔭で、今では下手な男子なんぞには決して負けないつもりだ。

スッカリ疲れて了つて、砂の上へどつかりすわつたら、もう立てなくなつちやつた、妹はせつせと、小石を拾ひ集めて居る、これは東京へ歸つてからお庭へおきますのよ、なんて獨言しながら、

もう、太陽はやゝ高くのぼつて、四方は夢から醒めて活動に取りかゝつた。

松林の向ふから、兄樣が蠻聲はりあげて、

『オーイ五保ちやん、――百合ちやん、――御飯だよう早く、おかへり――』つてまるで誰かゞ氣絶した樣

だと可笑くなつて了つた。

『ハーイ、今行きますよう』と百合子が負けない樣な大きい聲で返事をする。大急ぎで二人は走つて行くザクザク〳〵砂路を踏んでく

明けはなした八疊の間に揃つてお箸をとる、新鮮い松魚のお刺身は、とても都では口にする事は出來ない兄さまは『僕は今朝はあんまりお腹が空かないよ』つて仰有るから『さう不思議ですね、え、一體いくつ召し上つて』と伺つたら大威張りで『たつた五つさ』ですつて──可笑しくつて、百合ちやんてばころげて笑つてる。兄さんケロリとして、

『オイ、朝つから何がそんなに可笑しいんだい？』

つて、これですもの。もう〳〵苦しくなつて了つた。

久振りで、鏡に向つたら、まあ驚いた、この黒くなり樣つてば、──新橋まで送つて下すつた姉さまが『九月に歸つてくるときには着物へ大きな札を下げていらつしやいよ、それでなければ、私迎へに行つても見つからないから』つて、笑ひながら仰有つたが全く『林五保子』とかいた紙でも下げて行かなければ納りはつかない。

でも避暑地では黒くなるのが一種の誇なんですもの學校の門を出て、園田さんと、おわかれする時、くろくなりつこの競爭しませうとお約束したのですもの、負けちや口惜しいから、もつと〳〵、獰猛な顔色にならう。

ルイザ髮に結び上げて、忘れな草を挿した合せ鏡して見る、氣まぐれに結んだのだがほんとにいゝ格好に出來たものだと、自分でほめてやる。

木の香のまだプンと鼻をつくお湯殿の白い湯氣につつまれてスッカリ洗ひ了つた。何だか、かううつとりとして夢でも見て居る樣な氣がする。

モスリンの着物にきかへて庭へ出て見る。萩がよく咲き揃つたこと！白芙蓉も靜かに默して咲いて居る、芙蓉は容色よきうら若い尼に似通つてるつて政惠さんがよく仰有るけど、ほんとに大好きな花だ。

妹がお部屋から大きな聲して呼んで居るので、折つた芙蓉を片手に持つて入つて行くと、まあお珍らしい靜浦へ避暑して被居るあや樣と香津子樣がお揃ひでお見えになつたのだつた。

『まあ!!!』と、三人顔見合せて笑つて了つた。

『黒くなつてねえ』とあや樣が仰有る。『アラ、貴女だつて』申上げると。

『でも、貴女ほど獰猛ぢやありませんよ屹度！』ねえ香津子さま？つて、加勢を求めて被居る。妹は立川さんの芳子さんが、お誘ひにならしつて遊びに去つて了つた。

三人は町へ行つて買物しませうと相談して家を出るあの淺間町の〇〇寫眞店の前へきたら、一緒に足が止つて了つた。『うつして行きませうよねえ記念になりますもの』つて、香津子さまが仰有る

パラソルたいへんで、三人は〇〇館へ入る。――。一時間も待たされてやつと番がきた。

私は中にお二人が兩側に、芙蓉の花を持つて――。

日盛のやきつく樣な中を家路に急ぐ。

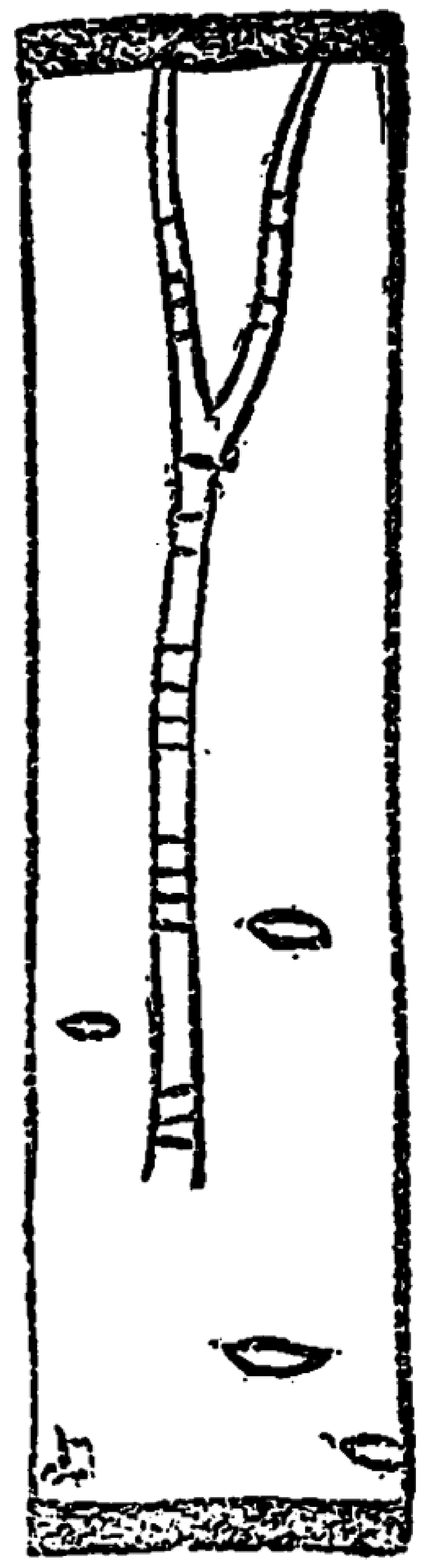


月の夕　東京　嶺田きよ

夕方無理にお止めしたけど、お二人は歸つてお了ひになつた、門まで妹とお送りする。お揃ひのお召に對のリボンさした美しい君達のおん姿は、西へと消えて了つた。

星がキラ〳〵と輝いて明日も晴天らしい。兄さまと若杉さんの御兄弟それに正木さんと四人は、明日は富士登山する筈になつてる。十日も前からワイ〳〵仕度して居つたが、今日も午後からまだ歸つてゐらつしやらない。

明日は一番で鈴川まで行つて、あそこから大宮へ行き大宮へ一泊してそれから登山するさうな。男なんて呑氣なもの强力も連れずに登るんだつて。



伊香保より

中村美登里

來る、來る雨にとぢこめられて、寂しく明け暮れした溫泉宿の三日は夢のやうに過ぎ去つた。雨戸ソト繰つてながく〱續く廊下の端に立つた。

湯瀧の音のみひとり高い宿のあかつき、深い濃い霧に覆はれて山の姿も見えぬ、また今日も雨なのかしらと思つてさびしくなる。

若い面だちのいゝ女が寢亂姿の襟かき合はせつゝ夢みるやうにたゞずむ欄干、さては白絹丈の細帯をクルクルと巻いて長く引いた派手な浴衣のタオル下げたあでやかな湯上りの姿。

かうした姿のふさはしいなつかしい湯の宿よ。

いつか消ゆるとしもなき山の姿をかゝせる白い霧はうすれゆいてあざやかにその輪廓を、白い空に染め出した。山の晴々したいゝ姿をみるのは、今日が來てからはじめてせめて山の影のみにてもとあつち此方とたづねたけれど、わが室の欄干からは、あまりに遠くつて、みることが出來なかつた。戀しい月波よ、師の住居やいづこ？、夜に入つてから母樣と二人して伊香保の町まで散歩にゆく、石の階段をいくつもいくつも下りてゆく、せまい道を明るくてらせる兩側の商家の灯其處を下りゆく人！昇りゆく人、ゆきかひしげき八月の伊香保の町は、みなはでやかな都人でうづまつてる

（八月十四日）

ゆかたのうへに帶しめて湯元までゆく。

山に沿ひ谷に連る小徑を、分けてゆくこと五丁餘、綠葉深き崖から滾々として湧きいづる溫泉の湧口に出た。深い木立の奥、其處にも冷めたい泉が湧いて居るアルミのコップで一杯すくつて飲んだ、おいしい水、上の小高い丘のベンチに腰かけて凝つと溪流に沿つて來る人を見つめて居た。

朝の散歩に多くあつまる湯元の道、

ローマウヰンナ、水仙卷、いきな銀杏、大きい丸髷それらのみな、瞳をうばふやうな美しいすがたが斜の徑にいりまじつてゆく。

あゝたゞ見惚る、田舍娘、われとわが姿をかへりみてはづかしくなつた。

歸路猿澤橋の下の石垣にあぢさゐに似た淡紫の美しい花の咲いてゐたのを一枝折つてかへる。

あゝ美しい夕方の雲、青い青い山に連る茜の空、

そのまゝの油畫にして、遠い遠い好む人の許に送りたいと切に思つたされどされど詩にも文にもなしえぬ



まつ身　東京　樋口愛

無能のわがいやしさ。

まちにまつた、家の方からの來信五通！

母樣に二通、自分のが三通、けれどそれはみな、附箋のついた家からの轉送文であつた

こゝに來るといふことは、みな前から知つてゐたけれどまだ此處に落ついてからは手紙を出さなかつたから。かうして家をはるかに來てゐると、何とはなしにたよりない何かしらもの欲しい思ひ

に身は悲しく寂びしく——誰でもいゝから、情を罩めたながい〳〵手紙でもよこして呉れゝばいゝと毎日毎日、自分の方からはところを明かしてやりもしないで勝手にあてどもない手紙を待ちこがれてゐたのだものたとひ轉送された短かいハガキ文でもどんなにうれしかつたらう——、

すぐに町までゑはがきを買ひに出て鉛筆ではしり書きして返事出した。

ポストまでは一丁ほどしかない、其處にハガキや封を握つてゆく時の心地は誰方も一つであらう——、戀しい人に出す時もなつかしい友の許に出す時も、家へ出す時も、うけとる人の心を思ひみつゝ投ずることだらう——と私はこんなこと思ながらいつもポストに向つた。(十六日)

淡暗いうちに起きる。

いきなり楊子くはへて、お湯に入つて來る。髪を結つて今朝は少し冷しいのでセルを着てゴム草履はいてさまよひ出た、うしろから母樣がゐらつしやるとも知らずに御用邸前のダラ〳〵坂を下りて物聞橋の上に立つた。これより物聞山へとしてある立札の小徑を指さして母樣に伺つてみたら、遠くに居ながらうなづき見せたので獨りで小徑を分けて入つた。

つまづきのはげしい石のゴロ〳〵した山路をあえぎあえぎのぼつてゆく。兩側より何處までもつきせず茂り合ふ深い木立のシットリとぬれた青葉の息吸ひつゝ物聞山の頂きに來た。

少さい祠が立つてゐて側によしずばりの掛茶屋がある、はてしもなく見ゆるときく物聞山の頂上に來て、胸をどらせつゝ茶屋の案内しつたる人に教へられたる東の方を、双眼鏡もちてあれかこれかとたづねたけれど、廣い廣い霧の海をのぞむばかり、遂に見ずにしまつた。あゝなつかしい月波の山よ、ゆかりなくてか、利根と吾妻の兩流がまばゆい朝日に映じてキラリ〳〵と美しかつた。

夢の朝、濃い下暗を思いだきつゝかへる。

道々、萩の白きがさかりに咲きみだれて居た。

かへつてから朝御飯、おいしく頂く。

それから七重の瀧へ遊びに行つた。

おては草の赤く雑草にまじつて咲く道を、ながい間通る。

瀧と云つても、ごく小さいのであつた。

たゞ金髪美しい洋人が華美なパラソルかざして急道

を、かるいつまさきに、のぼりゆくいゝ姿、此の日見たのが忘れられぬことの一つである。（十七日）

誘はれて榛名湖に行く。

梢をゆするかるい風に澄んだ青い青い湖水の波は小さくゆれて美しい色に光る。

あゝ、青嵐頂きをふいて雲の峰高い榛名湖畔の夏、忘られぬ湖畔のながめよ。

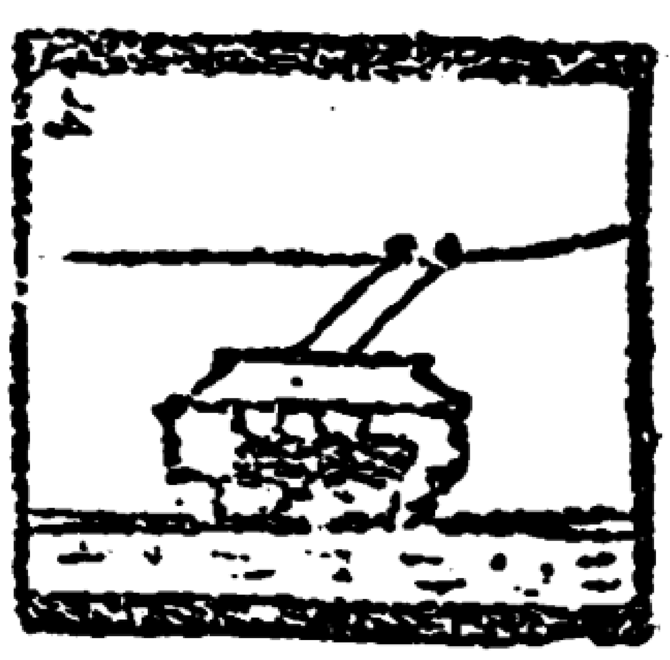
西の國人の白い肌を水につけて泳ぎまはつてゐたのが泣きたいほどよかつた。

二時すぎ惜しめどもつきぬ湖水に別れた。

伊香保平の美しい花、

蟲泣く叢らに分け入つて、もちきれないほど澤山折つた。あゝ、四季折々、たえせぬ情調のながれつきざるかうしたとこに、住家、一人の住家をつくつたらどんなにいゝだらう――――水引草の赤く咲いたくさむらよ。

山駕にのせられた身は、夢のやうに夢の湖畔や、花美しき伊首保平を戀ひみつゝ、宿の前によこづけされて、「お歸り遊せ……おつかれ樣」と女中や番頭にさけばれて下りなければならなかつた。夕五時。（十八日）



麹町行

美雪

今日は幸樣の處へ伺ひ度い一心で、五時前に起床。

朝日は次第に高くさし登り、日影が澄むだ空氣にキラ〳〵と漂ふ、青葉若葉はつやゝかに輝く。

井戸端の無果花の下へ、大盥持ち出して、浴衣一枚と肌襦袢を洗濯板へゴシ〳〵すりつけて洗つた。

お茄子のお汁に、玉子燒の朝餉のお膳につく。

「ねえ、母樣、今日元園町の菊池樣へ伺つても好いでせう？」「今日は少しお天氣が變りやしないかと思つたら、……道理で……」なんて、有仰たけど、心持好く許して下さつた。

嬉しくてすぐ仕度にとりかゝる。髪は思ひきり頭高のルイザに四时巾の薄水色のリボン、着物はお納戸地に白の大絣の壁透綾と決めた。自分ながらさうオシヤレとも思はないけど顔そつて頂いたりして、馬鹿に仕度に手間取れてしまつた、もう十時を餘程廻　てる。母樣が暑いのにお腹が減ると毒だからつて有仰るから、

落着かないけど有合せでお茶かけて、一椀かき込むだ。
あら、お南瓜のお菜だらうなんて、有仰るのは誰方？

クリームの洋傘パット開いて、空氣草履の音も輕く家を出る……時正に十一時？

電車を四丁目ですてた。眞晝の强烈な日光は、大空も張り裂けん許りに天地に白く滿々て、容赦もなくヂリ〳〵と照りつける。汗で大切のお化粧も、夕立にあつた冬瓜の樣になりやしないかと、心配し乍らセッセと、歩いていつの間にか、黒板塀圍らしたお家の前へ來た、お稽古では始終顏をあはせても、お宅へはこれで二度目。幸樣でもあるまいし、ご免遊ばせも一寸出ない躊躇てたら、噂に聞いた愛犬ポチ君が、ワン〳〵吠えたてる、それが私には幸でした。「コレポチ」、つて幸樣のお聲がして、横の窓から鳴海絞のお袖と、白いお顏が見えて、瞳と瞳がパッタリあつた……!!! あら、まあ、よく〳〵と連發して嫣然に迎へて下さる。通されたのは風通しの好い八疊のお座敷、お床には涼しげな山水の掛軸、隅にお琴が二面行儀よくたてかけられて、一輪挿の百合の花が淸い香を漂はしてる、左手に少佐の軍服召した亡き御父君の御肖像がかけてある、お緣近くの花壇には西洋花や、鳳仙花蝦夷菊百日草等咲き亂れて、蝶や蜂が花の香に群れ飛んでる。

「嬉しい！一年もお目に懸らないやうな氣がしてよ」

「本當に私も……」二人しつかり手を握りしめた。

「まあお暑かつたでせう、帶をお解き遊ばせな、汗が大變よ」

「エヽ有りがたう……」熱いお湯で絞つた手拭と、冷えた麥湯を進めて下さつた、其の嬉しかつた事、麥湯が甘しくて〳〵無遠慮にコップに二杯も頂いちまつた

「本當に好くいらして下さつたわね、何からお話して好いか分らないわ」、「斯して御目に懸るとお話が出なくなつて終ひますのね、ホヽヽ……あの乾一樣は葉山？」

「……乾一？エヽ伯父の別莊へ、だから尙淋しいのよ」

「貴女はおとなだから淋しいのよ、少と乾一樣のお代りにお騷ぎ遊ばせよホヽヽヽ」

「ホヽヽ……好い格好よ」、「アラ何が……？」

「お髮が……」私の髮を凝視てらつしやる、

まア嫌、幸樣こそ震ひつき度い程上品な、日本髮に結げてらつしやるのに。玉を延べた頂長く、刷毛で書いた樣な襟脚、紅を帶びた御頰、お肩の邊すらりとして、滑らしきまで艶なる御容姿——。

つひかけ違つて、お目に懸らなかつた、お母様がお鮨と水蜜桃を持つて出ていらした。艶やかな澤山なお髪を惜しげもなくぶつゝりと切り下げに遊ばしてる、凛々しいお顔に何處かなつかしみの有る方、飛白の召物に黒繻子の中帯を、キチンとしめて居らつしやる。「お初にお目にかゝります」と、御挨拶申上げる、

「御遠方をまあよく、でゆるりお遊び下さいませ、もう始終川島様くておうちはさ致して快活な好い方だつて申暮して居ります、……どうも幸は父がないせいでも御座いますか誠に氣がひきたちませんで……」つてつと御肖像の方へお目をお上げになつた時、お瞳が濕むだ様に見えました。幸様はたゞ淋しく微笑まれた、



月待　横須賀　上原茂子

私は何とお返事して好いのやら分らなくて、モヂ〳〵した……。

考へて見れば妙なもの、幸様は齒痒い程温順しい方私は此麼がら〳〵した御轉婆、恁して仲がよくなつたのか自分にも分らない……!?

「久しぶりて合奏して見ませうか?」「エヽ」

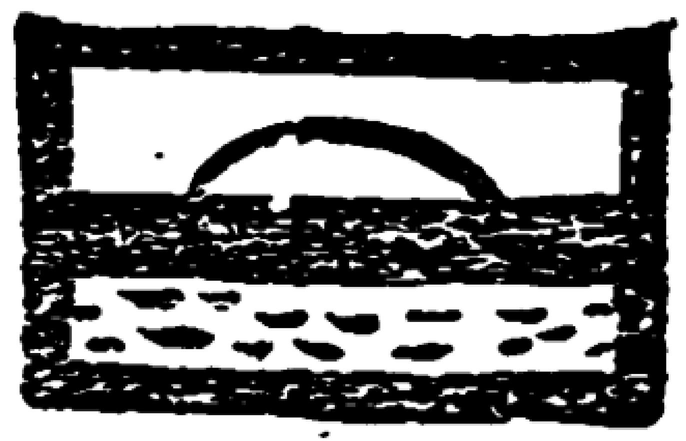
斯云ひ乍ら御馳走を戴いて、思つてた事の半分もお話しない中に、もう夕陽がお緣に斜に射込むで、忙しげな豆腐屋の喇叭の音が、聞えはじめたのに吃驚して「もうお暇しなけりやあ」つて云つたら、もう幸様のお瞳には露の玉が宿つて見えた、あまりに弱き君よ?お母様もお夕飯でも召し上がつてと、頻りにとめて下さつたけど、「今お暇しても先が暗くなる位ですから」とふり切つてお暇した。

ポチ君のお供で幸様停留場まで送つて下さる、出し遅れたお揃ひの菫色の半巾お渡しゝて、近い中屹度宅へもいらつして頂戴と、かたく御約束して惜しいお別れをした!!

電車が伊皿子邊へ來た頃から、雲行があやしくなつて、電光が間隙なしに閃めく、遠くの方でゴロ〳〵やつてる、氣が氣ぢやあない。京濱を降りた時にはもう雲が低うく垂れて、大粒の雨がバラ〳〵顔にあたる、もう姿も風もあつたもんぢやない、全速力でかけ出して家へ飛び込むだ……、あゝ息が切れる。母様に御挨拶する暇もなく、篠を突く大白雨、雷音耳を劈かん許りに、凄まじく天上に轟き渡る。これこそ何て間が好いんでせうだつて、皆の口から洩れて大笑ひ―。

本當に人驚かしの雨、暫くしたらヒッタリ歇むぢまつた、空はさりげなく澄み渡り、凉風葉末の露を落し來て、晝の暑さを忘る。妍麗なる月は梧桐の枝に高く至る處の雫に其の影を見る……。

夕飯後花を連れて私の好きな例の原へ、散歩乍ら凉みに出かける。此原は街より一段高い崖、青毛氈を敷いた樣に一面青草が密生して、得も云はれぬ好い香が鼻をうつ。一眸の裡に瞰下する、漫々たる東京灣は、水平線上から俄然として跳り出た月に、白銀を溶かせる如く白く湛へ、沖合遙かに白帆三ッ四ッ、點々たる灯影はゆらめいて、水に綾を織る。それを背景にした品川の街は、月の清光を浴びて浮き出た樣、直眼の下は京濱電車が、青い光を放つて走る。恰度油繪でも見る樣、――廻らぬ私の筆に書かれたんぢやメチャ〳〵だけれど、―。



親族の壓抑

河崎八重

人祖アダムが神樣より罰として與へられたる苦痛より他に一つます事になつた現代の若き婦人は、不完全なる婦人論に追ひまはされ、行くに道なく習ふに術なき過渡時代に、定めなき漂泊者のやうにさまよふて、其處に何者かを捕へやうと悶えて泣いて怖れて重き痛手をおひながら、疲れ切つた足を引摺り〳〵、性懲もなく迷ふてゐるけれど、虛僞と墮落のみなぎつた現代の世に何を得られませう？

「左樣なら永い間御苦勞だつた、お前には報酬として人妻を上げやう」噫やつぱり最後に嘲りと冷笑とを以つて投げ與へられた物は人妻てふ名。

鬼も十八番茶も出花、一生に一度しかない青春を、悶えて苦しんですねて憖じつか花の盛を灰色に過ごしてしまふより、思ひつ限り華やかに暢氣に若々しい血のほと走るにまかせ、歌ひもし叫びもしやうじやありませんか、そして何か强い〳〵印象として殘すべき深刻な文字を永久に消えない强烈な色彩、其せなに殘さうじやありませんか、青春が我等に背をむけました時「湯あみして泉を出でし我が肌にふるゝはつらき人の世のきぬ」ですわ、甘つたるい小說や、新婚當時の細やかな愛情に醉ふて、覺めるを知らない若き人妻の感想記等をみて、其んなはかないものに憧憬れて、バタバタと急いで安賣しちやいけませんよ。何の彼等の後には寂しい暗い浮幻物がふわ〳〵と今におそふてまゐりますよ、さあさうなると娘時代が戀しくなる、果ては人妻てふ名に若き時代をはうむられるのがあまりに早やかつたとか、一人の專有物だとかむづかしい言をつかつて、悔やんだつて泣いたつて百年目。私だつて舊弊な迷信本意の親類から早く〳〵と包圍攻擊をうけますけれど、人生重大なる問題を、義理や親族關係の犧牲になつて、せま苦しい穴にもぐりたかありません、赤い小切を集めて瓶細工の市松人形をいじつて居るやうな私が、嫁いだところで先方の御めいわく、だからなるべく世間の許す限り、年の許す限り此儘自由に氣儘に暮したうございます。じやと云ふてあんまん悠々と構へて、婚期が遲れたらもらひ人がなくなる、待てども待てど俊寛の二の幕。おかはりに頂戴するの

はオールドミスと云ふ定紋、どうしたつて女は最初から狹く弱く生れて來てゐるのですもの、今更嘆いたつて致方ありませんわ、まさかアダム君を攻めに行く理にもゆかないし、どうせ女のふむべき道を厭でも通らなくちやならないのですから、野暮な煩悶なんかする隙があれば、良妻賢母とやらの藥を煎じて飮むやうな本でも雜誌でも讀んでみませうよ、安心して新生涯にいられますやうに、けれど私には親族と云ふ强い繩が……

紀州と大和の境なる○○の豪家伯母が家！

つと門をはいれば紅白の芙蓉まだ淡緑なるはずの若い柔い葉の間に、萠ゆるやうな影を宿し、軒につるされた蘭の白き氣高き花、住む人にふさわしからぬ風情優しいSが東京から歸つてきて死んだ時、再びくゞるまいと誓つた三年ぶりの此門！「今日は」低い聲で云ふたつもりだのに自分ながら可笑しい程大きく廣い庭に響いたまもなく助さん家の娘、太つたお春が牛小屋かららしい刻んだ草を片手に出て來た「おや○○さんけ、お家はんがさつきから待つてますで離屋敷に居てます」導いて呉れるのでもなければニッコリともしない面憎さ、日常の不平と悔やしさが一時に込み上げてきて、迎ひに來るまで來なかつたら好かつたに今更口惜しい「花散り失せては薪木にきられ家貧しければ人に捨てらる」現在同じ血の巡つてゐる伯父や伯母でさへ、一日一日とはなれて行くのだもの、ましてお金しだいの下女においておやだ、塗骨腰高の涼しさうな障子越しに可愛らしい撫子の花を美しく生花られてある床の間の方へ頭をむけて、庭から吹いて來る遣り水の冷い風に樂さうに眠むつて居る透き通るやうな白い顏と、でつぷり太つた體とが無理に憎らしい、一寸ためらつたけれど何も當方から好んで來たのじやない、來いと云ふから來てやつたのだ務めて冷淡な態度で靜かに障子を明けて「伯母樣遲くなりましてすみませんでした宅が養蠶で忙がしいものですから、あのそして何か御用でも」つて初めて伯母の顏みたら常になく笑つてゐる、こんな時には必ずボックスが初まるに違ひない、内心冷や／＼してゐるとあんの如く初まつた「そやよつてな、貴女も妙齢にかたづかな世間が嫁く家ないんかつて笑はれますし、今云ふて來てはる家は、願ふてもおまへんせ、男振りは好えし兵隊さんで中尉やし、此んな緣談ゴテ／＼云ふたら出雲の神樣に罰あたるわ、」私がどんな事云ふだらうか口元をのぞき込むや

うにみてゐる、枕元に置かれてあつた夏蜜柑の一切を先程から小さい二疋の蟻が下りては上り、上つては下りて居る、私はだまつて餘念もなく之を眺めてゐた「若いつて貴女伯母さんなんど十八の時に二人も子がありましたぜ、親族が金持よつてこんな縁談がもち上るのや」ペッ終になつたら定まつて居る、親類がよけれやなにが好いんだ一朝金錢でも入ると起つたら、どこに風が吹いてると云ふやうな知らぬ顔の半平をきめこむ癖に去年だつて宅の相談きまつて、美術學校へ行く相談に行つたら、一も二もなくどなりたてゝ學費でも補助して呉れと云はれるかしらんと思つて失敬な。土に噛りついたつて頼むものかと思つたけれど、之もやつぱり砕かれて終つたのだもの、中尉がなんだゝと其日ぐらしでもかまはない親類のせわになりたかない



蟲の聲　仙臺　安井岸枝

結極再二人の中に一重のへだてがたてられました、噫此守錢奴の伯母と貧しいひねくれた姪とが終にどうなりませう？私はあくまで個人の思想を尊んで行くつもりです、「ほんまに同じ姉妹でも姉と妹とこない違ふもんかな、姉は柔順やけど此子はやんちやゝさかい何一物でも貰はれへんわ、男だつたら心配者だつて」お世話様だ、姉の様に親族からの云ひなりに云ひたい事も云ひ得ずにだまつて瞳をつぶつて嫁く私じやない。

「一寸お待ち、今下女が畑へ西瓜取に行たよつてお母さんに持つていんだげて」子供ぢやあるまいし、其んな重い大きな物を持つて歸れるものか、荒々しく玄關まで出てきたら、眞晝のきつい太陽が充血した眼には痛い程反射する、水色のパラソルも萌ゆるやうな赤い鼻緒の空氣草履も、さつき私が脱ぎ捨てた儘

ようしやなく日に照らされてゐるのが耐られなく悔やしかつた。「まあ華美やな」なんでも云ふが好いわ、走るやうに門を出た時、氣が清々した。常よりも云ひ込めてやつたのを嬉しかつたけれどなんだか心の奥に血と肉と別つた眞實身がうすれて、一人一人ゆく寂しい姿を眺めましたとき怖れと寂しさがひし〳〵と胸に迫つてきた。

親族束縛打破會と云ふやうな會が成立したら、私が卒先して運動いたしますよ、皆樣お知らせ下さいね、當地には同類が四五名あるんですからホヽヽ……。

『路上』より

多摩川のあさき流に石投げて遊べば濡るゝわが袂かな
ささむねの一合瓶のかはゆさは孫にかも似む飲までであるべし
父おはく家にあらざり夕されば早く戸を閉し母と寢にける
摘草のにほひ殘れる指さきをあらひて居れば野に月の出づ
辻々に山のせまりて甲斐の國甲府の町は寂し夏の日
めづらかに明るき心さし來りたまゆらにして消えゆきしかな
この鼻の低きが玉にきずぞかし肌の清さよよく寢る人かな
あはれまた眠りたまふかたま〳〵に逢ふ夜はわきて短きものを

若山牧水氏



湘南日記

古那夢

四時半に伊豆山に着いた、裏の小川で汗を拭いて居る處へ、兄さんの眞赤な顔が手拭をぶらりと下げて歸つて來た。まるで御閻魔樣の樣だとからかつたら、「なに涼しくなりさへすれば、黒くなる」と云つた。家へ入るとすぐに海へ連れて行つてやらう、といやおうなしに引ぱり出された。海までへは二丁ばかりでつま先を下に下げて、たゞ下りに下つて行く汚い細い道である。蛇が出やしないかと云つたら出るかも知れないさ、と云つて道端の草がかさついても、それ蛇だとかげが道を切つてもそれ蛇だと背をつゝく、だまされると覺悟はして居てもその度につひびつくりして、足をすくめて仕舞つては後で口惜しかつたと思ふ。

海の色がけふはいつもよりも一層コバルトなのださうだ、波は荒い、とうせ伊豆の海だもの、黒い背中の子供達が浪を破つて沖の方へ泳いだり、浪に追はれて

石原に押し上げられたりしてあそむで居る、漁師があみをかついで上つて來る、岸の石が一つ一つだん〲ぬれて來る。

私は石の上に腰かけて青い水の行衞や、白い泡の消えるのをぢつと見て居た。舟蟲が石の間を忙しさうにかけ廻つて居る、兄さんは背中の黒い子供をつかまへて何かしきりに話して居る。さうして海の上へキラ〱して居た夕陽が山にかくれた時また二丁の坂を登つて歸つて來た。夜は姉さんと二人ですぐそばの「あひぞめ橋」の上で十三夜の月をみて居た。輕鐵の終列車が通るまで。（八月六日）

お向ふのおかみさんの手引で、濱邊の千人風呂と云ふ大層蔽さうな名のついた温泉に入つてみた。



かなしき夜　東京　小林夏子

千人風呂たあ、大した名をつけたもんだと皆で笑つたけれど針を棒にする、世の中だと思へば腹もたゝない。

兄さんは海に入つたら温泉に入つたり瀧に打たれたりして居る。私と姉さんは着物の番を云ひつかッて、一日をこの千人風呂の中でくらした樣なものだ、さうして相模屋の客と、懇意になつて仕舞つた。御宅はと聞いたら「はいあの東京の深川ですのよ」と妙に品をつけて云つた。男の連が一人居るらしい。晩に御馳走をするからと云つたがむりに歸つて仕舞つた。

十五夜の月がいゝから權現樣へ登つてみないかと云ふ相談があつたけれど、姉さんがいやだと反對したので、それじやア坂の途中

まで行つてみやうと云ふことになつた。
月を背負て丁度半程まで登つた處で、くるりと逆もどりをした。(八日)
今日は田舍のお盆だと云ふので村の若いもの達は、揃ひのデンボー浴衣を着て朝からぶら〳〵遊んで居るお酒をかぶつて「何て間がいゝんでせう」と流行ぶくれの間がいゝ節を歌つて、さわいで居る家もある。お茶を入れたからお向ふのおかみさんを呼んで來いと梅に云ひつけた。梅がかへつて來て、おかみさんは娘をつれて湯が原へ行きなすつたと云つた。
兄さんは湯が原へ何しに行つたんだと云ふ、姉さんはきつとお祭でもあるんでせうと云ふ、梅はいゝえなに羽左衞門を見に參つたんでせう、と云つたので皆がさうだ〳〵と笑つてさうにして仕舞つた。お盆ってどんなことをするのかと思つて居たが別だん大した變つたこともない、たゞ飮むで食べて遊ぶ。少し若い元氣なものは荒い波を相手に泳ぐ、高くもない鼻を出來るだけのばしてぬき手とか、ぬき足とかの泳ぎ振りをこれ見よがしにふるまはして居る。果てしなき海原のかたすみに、天狗の群がうよ〳〵とうよついて居る。
おばあさん連は、御墓參りに餘念もなく、一日佛前に南無阿彌陀佛をくりかへして居る。
後の寺山には朝から晩まで、もや、かかすみの樣にぼんやりと白い煙がたなびいて居た。(十五日)
曇つて居て海へも入れないから、熱海の町へ行かうと云ふことに定めた。馬鹿に平たい道を半里程歩いて居る間に、たゞ一軒茶屋と陸軍の病院を見たゞけである。冬になると蜜柑が道の兩側を黃ろく色取るのださうだ。
篠原良平(寄生木の)が伊豆山で蜜柑の枝を折つたといふのもこの邊ではあるまいか。
橫磯から濱に下りて浪がくづれて、白い泡を押かへすきはの砂に草履の形をつけて三人は歩いた。
「オイ熱海の海岸だぜ」と妙に笑ひ乍ら、兄さんは私達二人をみた、姉さんはたゞ「エヽ」と云つて崩れかゝつて居る大きな浪をこわさうな目付でみて居る。
覺えて居る、熱海の海岸……寛一が忘れがたきお宮の後を追ふて、こゝまで來て「今月今夜の月を僕の涙で曇らしてみせる」ともだえ倒れた砂の上はどこだらう。
兄さんも姉さんもそんなことを考へて居るらしくだまつて砂をける音ばかりがスカ〳〵。

町へ上つてみると、あんまり綺麗な町風はない。熱海細工を求めてすぐに魚見洞へ行つてみる。魚見はいゝ處だ、切つたての岩の下に深い〳〵青い水が働きもせずに靜かにたまつて居る、靜かと云へばいかにも穏かな樣だけれど、たゞそう凄いと云ふより外云はれない凄さ、思はず一足引く程である。けしきはいゝ、私はつく〴〵我袖の記を讀むで來なかつたのが殘念でたまらなかつた。その絶景の描寫はよす。私が書くとあつたら、景色にしみが出來るから。

大島がだん〳〵薄くなつて、三原山の煙が全く消えた時分に私等三人は橋の袂の假家にもどつた。（十八日）

もう明日は歸京るんだから、日金山へ登りませうと姉さんの主張で、まだ暗い内に家を出た。頂までは一里も登るのださうだ。姉さんと私はとかくにおくれ勝に歩いた。爪先上りの道を、五丁程のぼつた頃ふりかへれば、紅の樣な朝日が眞鶴の鼻をはなれて、悠々と登つて行く岸邊を遠ざかりて行く舟の帆が、光に照りかへされてギラ〳〵きらついて居る。その光りが田に移り、森に走り向ふの山のはしをまはつて、私達の足元に及ぶ、小島にかゝつたもやがだん〳〵消えてボーと初島に浮き出て來る、トサワと云ふ處で綺麗な水を飲むだ。

谷の底に鳴いて居る鶯が山彦と節を合せて、妙な調子の歌をうたつて居る。道の兩側に桃色のひめなでしこの花とキセルのガンクビの樣な花が葉のない莖に無器用に咲いて居る。

兄さんの、ツンツルテンの飛白姿が、とう〳〵見えなくなつて羊腸の小徑は……とどなり、ドーマ聲許りが小だまをかへして、響く許りだ。

腰を叩き叩き呼吸をつき〳〵、それでもやうやく頂についた。頂と云つた處で、何のことはない、たゞ四五軒の茶屋が古堂を取りまいて居る許りだ。

まはりに大きな立木の並むで居るので景色もなにもない。白い雲を吸ひながら、これが日金山といふ山の頂だと思つて四顧するに過ぎない、ごく殺風景な場所だ。

後の十國峠へ行つて見樣と、云つたけれども、くたびれたからいやだと云ふ人があつたのでやめにした。「十國へ行くと田子の浦 のぞけるよ」と兄さんはよほど行き度やうだつたが、もう澤山と、とう〳〵下りることに定めた。

雲は足を拂つて後へ飛むで行く。

鳥の歌へる

信濃　世良田優子

○

秋なれば鳥も寂しく思ふやと餌などまきては呼びて見るかな

初秋や夏のかんざしぬきたるが鈍色なして草にころがる

○　　信濃　苔の花

絹針の尖りしさきの小さなる怖れにふるふ若き心よ

切られてもきられてもまためぐみくる桐のわか芽に似たる思出

人知れずなく身となりし夕より好みそめてき露草のはな

○　　菊子

あらひがみたばねし後のすゞしさに我れは林の木の下をゆく。

どくだみの白き花さく野路ゆきはた香にむせび君思ふかな。

○　　大阪市　小泉貞子

天王寺、五重の塔の欄に凭るましろき頬にあきかぜのふく

美くしと云ふを男はみな知れど我を迎ふに少したらざり

○　　若菜

春の野をあくがれいでし雙蝶のひとつになれるあはき寂しみ

妻といふいとしきものを得し兄の旅にいでける初夏のあさ

○　　波の花

いちゞくの青きなやみの重き頃夏やせ見ゆる白き面わよ

シウマンの畫像の前に夢みつゝキー打つ右手に紅き花ちる

○　　伊豆　土屋いそ子

街をゆく人の群より折々に我を見る子の美しきかな

想ふことならずと、けふの日も暮れぬ、心の惑ひとくすべもかな

○　　澁谷　田中春子

水草の花のなかより月のぼる野にわが垂れし丈のくろかみ

夜の野のはてより來る白馬のひかるゝ如きおもひ出なれや

○ 宮城縣 齋藤すみれ子

靜けさのあまりに秋の清ければ野を吹く風は白銀を吹く

わが庭の柳の枝の長ければ惜と思ふ迄切捨にけり

○ 京都市 中野絹子

百日に百の勇魚を突けるわれ罪とやあはれ山の清がし女

わたり鳥赤き實にきて鳴き交はす寂しき家に母と住みけり

何といふ名に咲く花に燒よ如き夏野には似ぬ淡き色かな

○ 神戸市 三木白菊

また思ふ大土燃えし前の世の火の海わたる舟もかくやと

大火山もゆるおもひのありたけをひとに送りてわが心冷ゆ

○ 京都市 松井綠

暮れて行く港の空のうすあかりくるべき人のこざる寂しさ

今日も亦思ひ疲れて泣きにゆく大川端の草の寂しさ

○ 長岡市 秋月すゞ子

妹の手に觸れてだにそゞろわが乳房をかくすはづかしさかな

太陽は面をあげぬかゞやかにあたら夜露の生を斷つべく

○ 淺草 佐藤艷子

つゝましく膝に手をおき淋しさを味ふごとし白ぎくの花

井のもとの白粉ばなの赤と白あさ風ふきぬ人にすゞしく

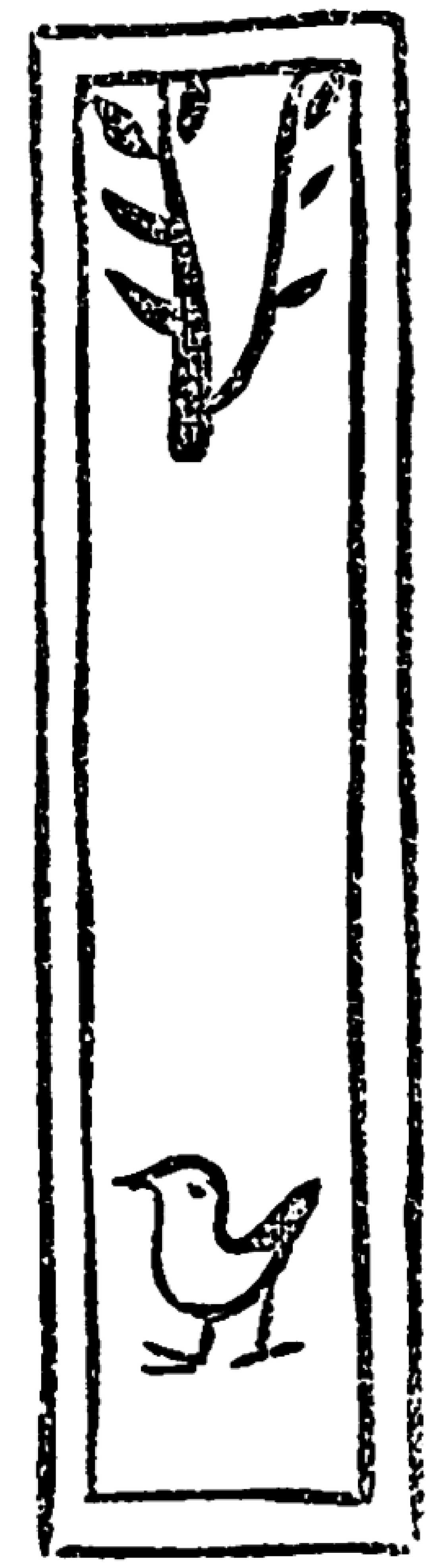
○ 淺草 夏野いろ子

帆ばしらのあひだを潜りつばめ飛ぶ大川口の初夏の雨

はなやぎて若き命を誇る日もすぎにけらしな今日のさびしさ

醉ひしれてある間ぞ安きならはしをつくりて一人盃をあぐ

* * *



義太夫を聽く夜

瑞野すゞ子

あゝ父樣、忘れませんとも、わすれない、わすれない、仰有つたお言葉は一生覺えてをります。またの世に人形のやうな容貌と、精神とに生れ代つて參りましたら可愛がつてやつて下さい、かういふ人間にもつて生れて育つた、すゞは食物をあてがはれて柵の中に飼はれますより、廣い野にひとりで青い草でも食べてをつた方が幸福でございます。

たとへ、餓ゑてもすゞは……すゞは口にする丈の體面は保ちます、あゝ……果敢ない悲憤の熱涙が、胸へ當てた袂に重く落ちた。

脛にからまる立枠の絞浴衣、闇に浮く素足のあとは危くヨロ〳〵と、姉さまの腕へ。

「どうしたのすゞさん、草疲れて？」

「イヽエ下駄を何かへ躓づきましたか、まだくたびれなぞするものですか」

什樣ことなしに足を擦りました。

思想も、事實も行き詰ってロクな事はございませんのね、淨瑠璃の連想が六疊の茶の間にうつって最後の或物に、散れば無になる反抗のしづく。馬鹿らしい小說が行き詰つて劇に推移して、劇のアットラストは……茶番の落しになるんぢやないか……とは冗談ですけれど、

「危ないからお氣をつけなさいませよ。」

まだ六月に足らぬ新マダムの姉さま、縞モスの浴衣をスッキリと身體そのまゝに、身體の搖ぎも見えるやうな。

義兄樣は美人の奧樣がお望みだつたのですつて！

「私のやうな、アンクレオパトラはお嫌やでせうのに。」

と姉さま皮肉つたら、

「君は風姿が善いからいゝ。」

と眞面目くさつたさうな。

「おすゞちやん、淨瑠璃がお好きなんですか。」

洋杖を後へ兩手で球杆のやうに持つた義兄樣が、突

然ふりかへつてから仰有る。サッポロ麥酒會社の明るいビヤホールがパッと眼を射た。

「エ、大好でございます出來ることなら一週に一度でも、毎晩でもようございますの。」

「お上品がつた長唄より卑しくとも情のせまつた淨瑠璃の方がすゞには嬉しい。

「でも×××に居ては滅多に外出が出來ないんですもの、智識の牢屋にゐ經木細工以上の辛い勤めがございます。」



思ひ出　京都竹村槙子

「聽きたくなつたら僕んところに泊りがてらゐらつしやい何時でもお供するから。」

「有りがたう。」

「しかし本所へ行きますつて云つて他所の家へなど泊つたら大變だハ……」

「一層義太夫語りになればよかつた。」と獨り言ちたのを耳聰い義兄さまきゝとがめて、

「エ？すゞちやん？」

「ホ、待合の女中になつて見たいつて申しましたの。」

「こりや　奇抜だ。」

と、義兄さまは白絣の肩をゆすられる。

「すゞさんは時々破天荒な珍事を云ひ出すんでございますよ。」

毎日、忙しくつてお嫁になぞ行つてる暇がございませんと、母さまの居られる前で、下らない事を仰有る叔母様に申したら、叔母様は呆氣にとられて、まあどうでせう、と云つた限り、毛蟲のやうなすゞの眉毛が恐しいと云つたやうな顔をなすつてらしつた。

「ねえ、姉さま、待合の女中になつて、バタバタして暮して脳溢血でゞも倒れてそのまゝ逝つてしまひましたらどんなに煩ひがなくつてようでございませう、如何かしなくつちやあ如何かしなくつては、なんていふ青息も吐かないですむし。」

「すゞさんは逆上せてるのね、もう東橋亭はぢきですのよ、その橋が吾妻橋。」

「あつ仁丹の廣告ね、赤くなつたり青くなつたり、おもしろい、面白い、あらまた赤くなつた、義兄さま姉さま。」

何物かゞ自分を操縦して他愛なく騒がせます、騒がせるまゝに物も云ひました、振舞もいたしました。

義兄さまも姉さまも、何もかも御存じなのでございます。

ハッと思ふ躊躇の胸が徒勞の悔でした。

滿潮時の大川端は宛然の湖、ヒタ／＼とさゞ波よする石崖の岸に一隻の傳馬船が繋がれてありました。橋上の若者と船中の若者が云ひ爭ひをしてゐる。

「覺えて居ろ！」

と兵子帶の間へ兩手先を挾んだ橋上の若者、

「なあんだ、賣る喧嘩なら買つてやる。」

事のいきさつは知らないけれど。

焚く篝火に櫂をとつた船中の若者の腕は、名畫伯の筆に成りし油繪のやう……。

やがて船はとかれて水のまゝに滑つてゆく。卜傳を氣取つた船中の若者は靜かに櫂貝を動かす。

「覺えて居ろ！」

ふたゝび怒氣を含んだ低聲に強い一言を送つて、橋上の若者はさりげなく、とゞ一を口吟みながら人込みの間へ隠れて了ひました。

水に碎くるオールの音、倉庫の白壁も薄つすりと、如法暗夜の遠くより筏のキシリも流れて來ます。

ローン河のほとり、異國の空にきのふ別れしこひ人

を思ひ、何をたより此おもひを留め置かうと、冷たき石に額をあてゝ泣いた詩人、泣き止んでうるんだ瞳を上げた時、あたりは早や夜であつた……ローン河。すみだ川。電柱の大森林と忿嘆遊ばすな。

戦く眼は見れどもみえず、震ふ手足、欄外一歩も厭はじと憧憬はむねをそゝる、危ない！

「發作的の自殺ってたしかにある。」

と、我知らず口をついて出るのに、姉さまは驚いてすずの手を握つた。

「行きませう、すゞさん疲れたでせうけれども、一足なのよ。」

兄様は橋の袂で待つてらしつた。

「すみませぬ義兄さま、足がふるへて歩けなかつたんですの。」

「何あに川風は涼しくつていゝ。」

二階へ上つた。

都太夫の、小紫權八でした。

白井權八？浮世繪の夢の……人幾度か殺した彼の手は、いつも白く柔かであつた。彼の誘ふ口笛にすべての女は吸はれてしまふ……、干からびた老人の忠孝な物語りより、あゝ惡魔の美の力よ……。

義兄さまは右に、姉さまは眞中、すゞは左に團扇を膝に投げたまゝ俯いてきいてゐました。隣りの人の敷島のけむりが、窓から入る風に煽られて、生あたゝかく髪から肩にかゝる、ビラがハタ〳〵と鳴る。

高座はかつてみた明治座の舞臺のやうに一廻して、いよ〳〵眞打の語り物、朝太夫の太閤記十段目。

聽衆は、待つてましたと拍手します、扇の閃めきも止みました。

ハッシと當つる象牙の撥に、特有の奔放な三弦の響は、渾身の血潮をわきたゝせます。あこがれに囚はれた少女の瞳は燃えて、彈かれるやうに、ふくよかな舞臺のひとをみ上げました。

本號の批評を求む

▲例により『娘時代』の批評を諸嬢にお願ひいたします▲全體に就いて、或は一部分に就いて、一讀の際感じたところを書いて下さい▲批評の文章は▲二十四字詰五十行乃至百行まで▲原稿締切は十月三十一日限り▲十二月號に發表す▲賞は一等價格金二圓、二等金一圓、三等金五十錢とす。

田舍の町

はる子



妹、弟との手を引いて夜町中をあるいた、あかるい瓦斯の火が靜かにゆれて、林檎や、水蜜桃や、あかく熟した果物が、美はしく彩どられて居る。夏草に水をそゝいで居る花賣りの、池の坊×××と襟元にあざやかにぬいた、かんばんが眼立つて見える。

早咲きの桔梗、山百合などの中に、ひあふぎの脊高いのが、割合に人目につくのか、幾本となく賣れる。顏も着物も、只白い多くの人達は、誰れも一樣に視線を夜店の花になげながら、ぞろ〳〵と、南へ北へあるいて居る。下駄の音、雪駄の音、其騷々しい中を商業館の四つ角を、東に折れてあるいた。

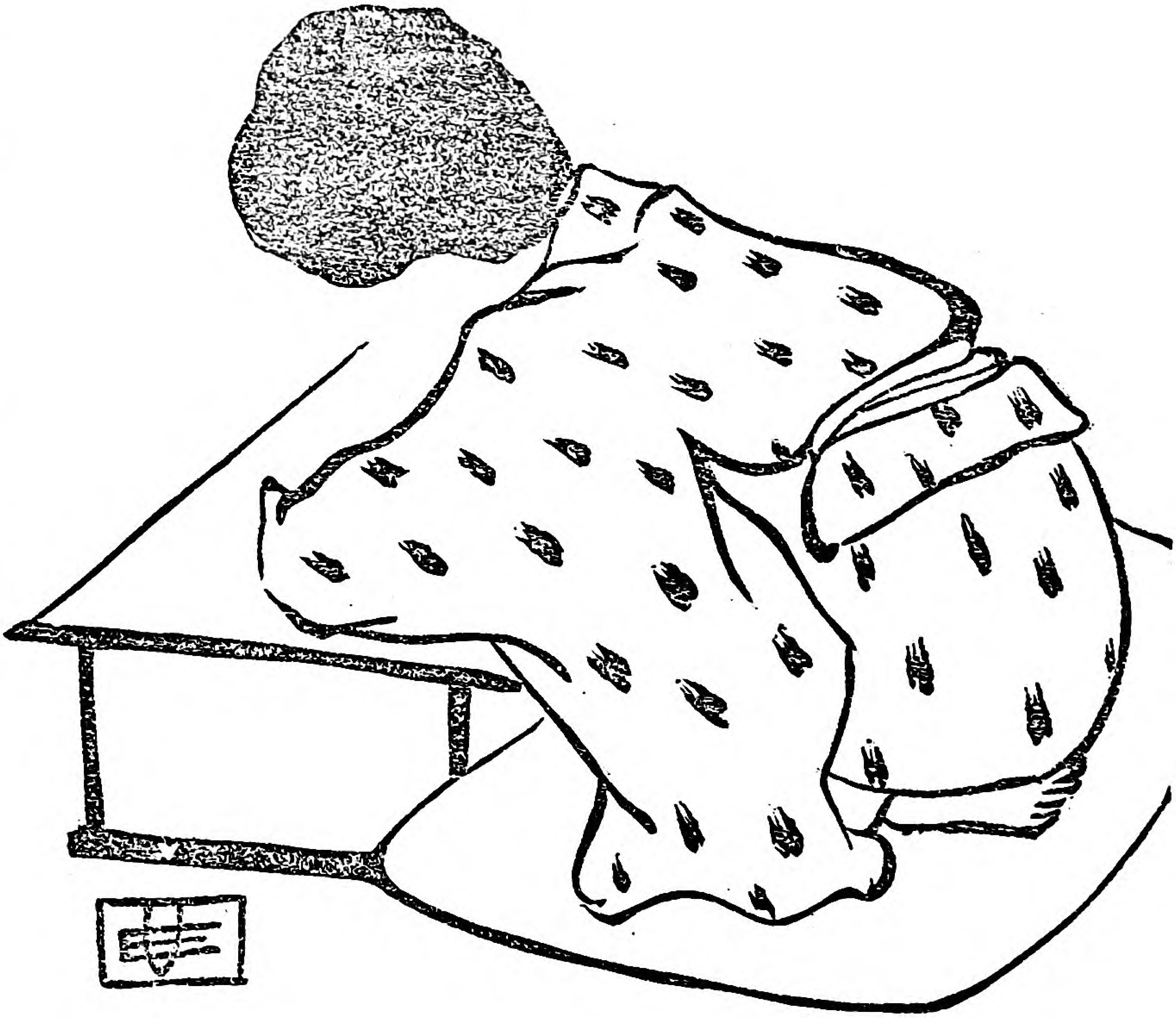
××屋といふ本屋の店に入ると、すゞちがひに、白がすりの書生が外に出ていつた。若い美くしい妻君を相手に話して居ると、主人もうちわをつかひながら出てきた。「私も本屋になりたいなあ、」といふと主人は、「なぜ」といふ、「いつだつて本をよめるからいゝぢやありませんか―」あまりかんたんな答だと思つたが。今の自分の心には、それより他に考へては居なかつた、「いくら本があつても、あればある程讀めませんわ、二三枚かせい〳〵……わかりませんよ、」と主人は笑つて居る。稻荷の夏市に行かうかと思つたがよしてかへつた。蓄音機屋の前に多くの人が立つて聞いて居る。わづかに足のつかれを覺えた許り、別段に強い印象も殘らない。「えゝあめよ、朝鮮あめよ―」にごつた太い聲が遠くから聞えてくる、あかい上着、黒いズボン……毒々しい配台のあめやが眼にうかぶ、いやな聲がとつく〳〵思つた。（一日の夜）

ねむつてるやうな庭の緑葉、風のない、むしあつい日だ。一昨日から、井戸をほりおこして、土管のに取りかへる爲に、人夫が二人來て働いて居る。脊の高い方をながさん―と呼び、ひくい脊の人をちやでさんと呼んで居る。これは二人が間に呼ばれて居る仇名である。カチン〳〵と鶴ばしの先で、ほりおこされた土は上に運ばれる。晝頃になつて、一丈程ほれた、

「オイ、ながさん、もうよからう―」

「そんならをれはでかろうか、御家老の方がいらいぞ、」たわいのないてとをいひながら、時折おくればせの流行語なんて間がわるいんでせうを連發する。

日光にさらされて銅色にやけた體の筋肉が、小氣味のいゝ程よく發達して居る黒い髪の毛を、丁寧にわけて油でかためたのに、ボデヤリと土がはねる、それが苦しいのか、ながさんなる人は、終日、麥藁帽をぬがない、「私はね、頭がはげて居るから、髪をあんなにながくわけて帽子をぬがないのだと思つてよ」と奇ばつなはん斷を下した妹もある。



うしろ姿　京都　うめ子

角がりのいなせな姿、兩の二の腕に、なにやらのほりものをした、ぢやでさんは、梅が谷を以て自ら任じて居るだけ力もつよい、でしく土をいぢつて居て、ぷつりと手に針をさした、それが途中で折れて、指の中に殘つて居るといふ。血を見るになれた眼には、然程の苦痛も感せないのか、けろりとした顔で、手をし

ばつてもらつて居る。

「どうせ、やぶいしやだ、間に合せろう〳〵」ながさんは高聲にいひながら、きれをぐる〳〵指にまひた。「てんちく生、なんぼたけのこだつて、こんなでこぼこしたまき方かあるかい……やあ、いゝよ、なにせこれから一仕事—だ」二人は又働き出した。

「あゝあつい、たまらねいや、暖かい風が吹きやがる夜にや氷水の十杯ものんで、うんとうめいものでも食はなきや清々しねいあ」

「全くだよ、十錢かせぎあ、一圓もつかふてな、でなけりや生きて居られやしねい、なあ、ながさん—」

「あいよ、おやでさん—」二人の對話がきれると、上に見て居る連中、妹らが口をそろへて、「恐ろしいなあおつこちたら如何しよう—」とやさしい眉をひそめる夜、電光が、西北のすみから大きく光つて、半天を、わづかにしゆんかん、あかるくする、黒い、雲と雲との間から、それが、なんともいへぬ程に美くしい。

（二日）

家といふものを外に、生活をして見たいと思ふ、舊盆が過ぎたら、山の溫泉にでも遊ばうと思ふけれども遊ぶつもりでいつては、まちがひだ、七人の弟妹らの世話は容易なものではない。

鯉を三尾もらつた、殺して食ふのが可愛さうでならない、小さな弟などは、昨年あたり迄は魚を料る度毎に、泣き出して困つたことがあつた。「なむあみだ佛」と口にねん佛をとなへて居る祖母君。

動くのを無理におさへて、つと、はうちやうをさすと腹から、あか黒い血が出る、腹をぬきとられて水にはなされてもなほ、およぎまはつて居る。恐ろしい勢力だ、人にも此樣な勢力があるなら、など思つた。

夜、知らぬ人に挨拶された。私の側には背の高い白地の人が後をむいて居たが、その人にか私にか……

低い背の、縞の着物に、白い兵子帶が、如何にも田舍者らしく思はれる男が、女の手をひいてあるいて居る、毛のちゞれた、みにくい女だ、色のあせたメリンスの帶、私は後から、行くともなしについていつた、二人は無言であるつて居る。半輪の月が半天にかゝつた、割合に涼しい夜だ、小間物屋の店には、盆提燈が美しくかざられてある。（四日）

夜目には美しい、稲荷の夏市も、晝に見れば、いづれもがたく〳〵した家許りだ、風が強く吹いたら飛ばされやう大雨が降つたら流されやう、裏の輕業小屋には

一人の人も見えぬ、淋しい……妹をつれて病院にゆく
なるべく人に接して、人を見たいと願つてるのが私の心だ。根の低い、島田のたぼが、襟につかへる。三四年前の自分といふものを知つてる人は、或は驚きの眼をはるかもしれない、束髪もいやだ、つめゐりもいやだ、下町風の意氣な姿が、如何いゝか知れない。

「おや、おめづらしい、始めてだね」「いゝえ家ぢやいふてますけれども、病院にくる時は、こわして來るの―」

「病院にくるからつて丁度よく、こわす人もないものだ」

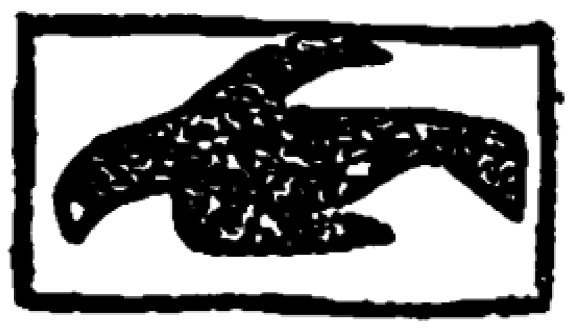
「まちがつたわ、こわれるのよ―」

「いゝね島田は、私はほんとに好きだよ、意氣にも見えるし、高尚にも見えるし、」

「今日はね、低いのだけれども、しろうと風にいふてもらつたのよ」「米屋の娘が、藝者風にゆふたつて、あつてない話しぢやないか……」

つまらないと思ひながらもこんなことを話した、意味もない、なにもない。

すり硝子の戸を越して芭蕉の葉が、ざはくと、夢の様にゆれる。（五日）



山裾の家

薄紅



戀ひ渡りつゝ、まれの逢瀬を、はかなむてふ、一つの星を、なつかしんで、陰暦七月七日の曉早く稻の露を取るべく野に立つた。

振りさけ見れど雲多き雨もよひの、逢はぬ心、ためしに、今年ももれぬ事で有らう。

竹竿頭上露に墨して、吾願ひの歌を書いたものを空は晴れずに夜は、全く明けた。

日の光りは、さゝぬけれどいやに、むしあつい、手にしたばかりの針を置いて窓のすだれを捲き上る。心持よい風と同時に深緑の木の間を通して山百合の花が眼にしみる樣にうつる。

葉と同じ色のつぼみを持てゐる、長い事待たされたのが一昨日の夕から目さめた樣に――一ッ一ッ開きはじめた。まだ露を、帶びてゐるらしい、ぐつとうなだれてゐる、丁度築山の樣に、迫た山の裾の、雜草の、あはひに遠く、近く、見えるのは、たとへやうなく美

しい。氣まぐれに移し植ゑたのが表庭にも咲いてゐるけれども何だか痛ましい！

　不安でならぬ！

　あの花の大きいのに比して葉と莖の小さく細い所以であらう！

　いはゞ顔のとゝのた女の手足の丸みの乏しいのを、思ひ出させる。やつぱり持前のひろでりをほしいまゝにしてゐる葛の葉や、丈を沒する尾花や、そんな繁みの中に、見出す方がいゝと、時折強い香のたゞよふうちで考へてみた。（一日）

　もう、歸らなければと、から、思ひ乍ら、私は繪うちはを、下へおいて、長い髪にさはつた右手を前に廻す。少し開いてた衿をきつとしめた。があの、熱砂をけたてゝはしる車の上を思うてまた躊躇する。

　落ちついた働作と、柔い胸と、叔母さんは氣持よく話しつゞけてくれたが、東北風のよく、入る窓際に立つて、どこか外を見て入らした。

　名のある此家の老松は、眞夏の強熱な日光をさへぎつて濃い影を庭の一部に印してゐる、そこに息づく樣な夏花が咲いてゆらいでた

　ふつと、叔母さんは「やつぱり貞だつた」とさう、仰しやる。

「さう、貞ちやん歸てらしつて？」

　私は立つて叔母さんによりかゝる樣にしてみた。

　木立、蓮池――面積の廣い裏庭の塀も、垣根も、無いのに、ずつーと青田が開けてつゞく。

　並木のある縣道をそれて、畔づたひに赤いパラソルはつひ一田闘向ふをかけてくる――

　貞ちやん……貞ちやんは叔母さんの幼時をそのまゝの美しい子とよく母はいふ。

「松が岡の御新造樣のちひさい時は、ほんとうに可愛らしゆう御座んした」と叔母さんの三ッ年上の仲のよかつたお琴はいひ〱する。

　お琴は爺やの娘、昔爺やにつれられて毎朝田圃の中の細い道を通つて私のうちの門の見える椿の木の處迄くると、きつと！

　叔母さんが門のうちからはしりいでゝ「琴ちやんが來た。琴ちやんが來た。」と大きな聲してよけてくる――

　眞白なふつくりしたほゝに、房々と髪をたらして、――もう、目に見えたやうだと、お琴は今も忘られな

いとみえる。
其叔母さんの愛兒として貞ちやんは、なほ此家のお祖父樣！後半生を草にかくれながら儒者として、詩人として、多くの記憶をのこして物故したお祖父樣の血を引いて、もう非凡の才をみとめられてゐると聞く。
お祖父樣に、更に、新らしい思想を含む。
父樣は貞ちやんの未來に多くを望んでゐる、祝福すべき運命の子と！私が思つた時、池のそばの柳の下にパラソルたゝんで貞ちやんは笑つてゐる、嬉しさうに……（五日）
夜來の雨は、一層強く降つてきた。
復工の終へぬ道路や、堤や、また破れて濁流に、青田が浸される事であらう。とじめ〳〵し



卓前　廣島　三戸みゆき

た部室の內に座つてゐる。
尙暗く〱しめつた佛間から、御燈しをかきたておいて、母が出で來た。沈んだ顏色をしてだまつて、側におすわりになる。
盂蘭盆と云ふに、父と兄との、精靈をまつらなければならぬ、母を思ふと、外障子がしぶきに、ぬれたのを、氣にしながらも、只、もう、母にはなれずにすわつてゐたい……
「お母樣かわいさうね、此間山崩れで死んだといふ十九の娘さん」
「あ、あの、隣り村のネ、人事とは思はれません」母の聲が重い。
「みんなが昨日、話してましたつけ。あの時娘が、もう、三尺後に、仕事して、ゐれば、きつと、助かつたでせうつて。で、九死に一生を得た母親がもう、一尺前にゐれば、やつぱり絕命したんだらうで、——よく〱の運命なんで御座いますわネ」
母はじつと、うなづいたまゝ重さうなまぶたを、とぢて考へてしまふ。
ほんとにわづか、三尺と一尺と、そこに、親と、子の、生死がなかなか、區別されだんと私もたよりない胸を抱へて沈む。
雨はようしやなく、その威力を示して、伴ふ風と、呪の叫びのごとく荒れ狂ふ。身も、心も、暗く、母と娘は無窮の沈默に、長い、對座をつゞける。
夜になつて、天候は一變した。
かつきり晴れた、空には丸るい月が光つてゐる、無難に、終つた山も、田も、けろりつと月に照されてゐた。私は——やつぱり淋しい胸を、包んだ淋しい影を庭の片隅に落してゐる。
早くより、世をつれなしとのみ思ひなして處女に、ふさはぬ、偏狹な、思想をたどつて獨り山にかくれし過古、同じ現在、嗚呼、たのもしからぬ我若き命よ。
瞬時も新らしいものに同化され新らしいものと理解し得る賢人を思ひ來て、私は自らをさげすむ矛盾した恨みにしらず〱涙がさしぐましゆうなつた。人目のないのに浴衣の袖で顏を掩ふた。（九日）

尾花さへ更けた顏なり十三夜　花讃女
朝寒や窓の下のつゝれさせ　多代女
朝露や草に並べば夜の明る　松葉女
はた織も昔になりぬきり〲す　星布女
年よれば聲は枯るゝぞきり〲す　智月女
秋風の云ふまゝになる尾花かな　千代女



人並の女

糸柳

窓によつて片割月を見てると、去年丁度登志子さんとこんな月光をあびて、理想の希望のと語りあつた身が、友は立派に教育事業にたづさはつてゐるのに、私はこの儘平凡に一生を過して仕舞のかしら、それにしても義兄さんはどうして被在るでせう、一番上の兄上が十一月卒業して御出になれば、すぐ御嫁さんを貰はなければならない、そして私の兄樣が來年檢査に合格したら、せめて御茶でもすませておきたいわ。小さい時から養女になつて氣兼をしてるんだもの、早く自分に慰安をあたへてくれる人が欲しいわ、そりや母樣は隨分可愛がつて下さるけれど、別に兄弟もない身は、誰に慰めてもらう事もないから、早く兄さんが家へ來てほしいわ、私つく〴〵さう思ふわ、女なんて決して一人で居るものでないわ、自分でいくら潔白でも人はいろんな事を云ふもの、女はやつぱし家庭の女主人としての方が幸福だと思ふわ、人は、否娘時代の人は、いつ迄も若く生きたいと云ふけれど、私は前のやうな事を思つてるから、月日の經つのが待遠しいわ。嗚呼この得がたき人生の花に逢ふて、衷心の歡喜禁ずる能はず、自から我世の春を語らんとする花の少女でありながら私は若々しいハートに宿るすべての希望や、理想や、戀や、などに悶へる事は出來ないのですもの。血の踊るやうな懷しい響き、青春の血汐の燃ゆべき年ですけれ共、私にはこれと云つて深い〳〵涙をしぼるやうな印象も殘されない。あゝ花やかなこの娘時代を、けれど戀に悶へる事は出來ないとは云へ、誰も知らぬ心の中では、夢の中では人知れず思つた事もあつた。兄樣が嫌ひと云ふのぢやなけれど、より以上の人は外にもあつた、只母上を泣せても世間を棄てもと云ふ樣な熱病に罹る機會がなかつた許りだわ。兄さんと云へばあの本當の兄上のやうにして懷しがつて、甘えて居つた康樣も、とつくに結婚して仕舞つた、そりや互に自分の境遇を話して、空蟬の雪子のやうに義兄のある事をかくして居つて、植村を泣かしたやうのでもないし、戀のなんのつてのぢやなけれど、今迄妹のやうにして、よそへ出張なされば、いつも美しい繪葉書で安否を

訪ねて下すつたのが、マダムが御出になつてから、少もそんなないものなんのかんのと云ふた所で、男でも女でも、家庭の人になるとだめだわ。だから私丈は一生誰にでも親しくつきあひませう。百合子さんはいつ迄たつても心變りしない人だわ、ていつも云はれてるのに、結婚してからちがつたなんて云はれてはならないわ、氣をつけませう。

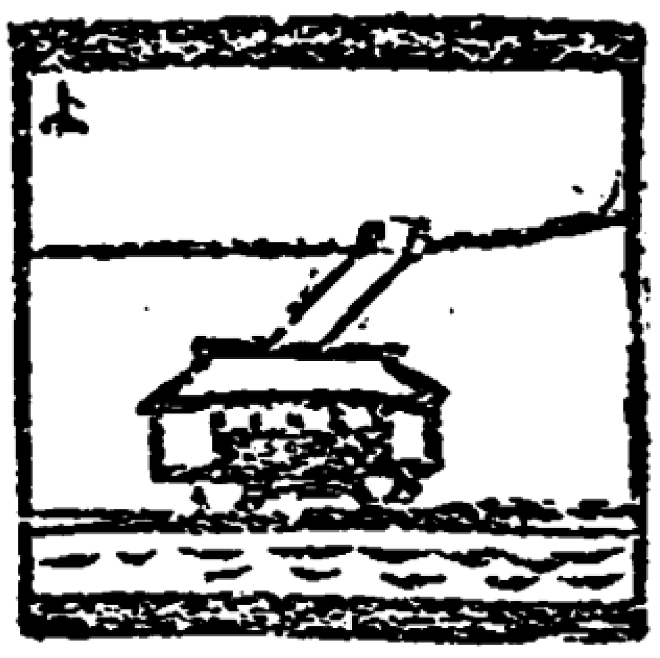
又十一月になれば、柳川さんが入營なさるので別れなければならない、而し私は柳川さん眞實感心して仕舞たわ、この方から私どれ程、子としての務を教へられたか知れぬわ、私義兄さんがきまつてなかつたら、未來は此方をと思つたものを、そりや本當に親切な方だつたわ、別離によつて起る悲しみ、悲しみによつて出る涙、いくら意志が強固だと自信して居つても、私は脆弱よ、汝の名は女なりだわ、私だとても若い娘ですもの、リングや時計も欲しい、美しい着物も欲しい着物の事を云へば結婚式の時には高髷にお振袖が着たいわ、田舍だから丸髷に江戸褄がいゝつて被在るけれど、一生に一度だもの、熱海か江ノ島のあたりへもホネムーンがしたいわ、母樣なんか十九世紀もんだからそんな事を云ふと叱られるから、それだけ餘計働いて是非望み通にしやう、ホネムーンでもして來ると御互の心が判つていゝつて、久さんも被言たわホヽヽ、こんな事考へて誰も居ないのに赤くなつたわ。五月始めて桃割れに結んだとき、好く似合つてよ、て皆樣が被言たから、私束髪が好きだけれど、ほんとかしら、お世辭とは思ふけれど、逢ふ人毎に褒められて見ると滿更厭やな心持もしないから、涼しくなつたら又結はふやつぱり自惚となんとやらない人はないつて昔の人の言事はよく當るわ、こんな事云つて私いつのまに虚榮の塊になつたのでせう、親友の桂子さん、ヴアニチが強い許りに三月式を上る筈になつて居つた相思の許婚者の兄樣とはあんなになつて、今では人の家に召使して居なさるもの、人事ぢやない、私もよく氣をつけませう。

翼をひろげて自由の空氣をすつて詩や歌に憧れたいわ、でも考へてみりやあんまり自由が過ると又人に後指をさゝれる樣になる桂子さんなんて親兄弟がなくてあんまり放任されすぎてから一生取り返しのつかぬ事になつたんだわそれから見れば私なんか喜ばなけりや

私子供は男二人に女二人欲しいわ、男の子は實業家と外交官に育てゝ、女の子は田舍の素封家の奧樣。



わが故郷



醉茗選

日本海の岸

はる子

避暑に行つて、海岸を歩つてゐると、砂と同じやうな色をした漁夫の子や、土地にはふさはぬ幅廣のうすいリボンを襟に結んだ避暑客の幼いのが一緒になつて砂の上に、丸く土手を築いて、その一方をあけて水の入るやうにして遊んでゐるのをよくみる。私の故郷は丁度、そのやうだ、紫色の國境の山々は、只みれば美くしいけれど、どれほど、この小さな山國を、世の文明の光りにあてまいとしたことか、北西の一方だけ波のあらい日本海に面して、冬の寒さは話にならぬ。

私なども高等小學にゐた四年間は、小さい足を草鞋、脚絆にかためて、尺餘の白雪をふみしだいて通つた、眺のいゝのは凍つた朝、大理石の床ともみえる凍つた雪の上を、サッサッ〳〵音をたてながら、身輕く走つて行く愉快さ。そんな日に限つて、よく晴れて、風は頬を殺いで行くほどなのだが、久し振りに赤々と輝く太陽に、片面をてらされて、柳の枝ながら凍つた雪を口にくゝみながら、スケートのまねをして雪をふみやぶり、痛さと可笑しさに泣き笑ひすると、氣の毒さに笑はれもせず、顔をしかめる我、足袋二つ重ねて、唐辛を間に入れてはをるのだけど、指の先はしびれて、何事も覺えない位だが、その辛さも忘れて、三十町の道を只愉快に通つた。それかと言つて處もまたいゝ、千代の流れに舟を浮かべて、柳のかげを靜に棹さす時、友あればよし、なければなほよし、三日月のやゝ輝き初めて、月見草のほのかに匂ふ岸のあたり、夜釣する人の影もみえて、夕日のおちた川面に灰色の腹をした千鳥がさえた聲でないて行く。私はよく父につれられて、魚とりに出た、月のない眞暗な夜、舟に一人殘されて、次第に遠ざかり行く父のかげを幻をとらまへるやうな氣もちでみてゐるとつひ涙がおちるかすむ目を見張つて、鮎つる人の篝火に、高くとび上る鮎の銀色に輝く樣をみてゐると、何時のまにか、美しい詩のやうな空想にとらはれてしまふのであつた。

城山の茸狩り、椎拾ひ、袷になほ汗をおぼえながら、稻葉の山の頂上の池に花菖蒲をみに行く人の多い頃は、學校の郊外運動でよく濱阪の砂山に上つた。多稔ヶ池の深淵、その水の底から、今にも、池の主になつたといふ、おたねが出て來るかと思はれてもの凄い、松露がたくさんあるのだけれど、私の拾つたの

は、半ば以上兎の糞であつた。名物で甘いものを言へば、城山の松茸、松葉がに、千代川の鮎など、他國で喰べやうとて、たべられぬのは、新兵柿のあはした（湯の中に入れて、上から藁やら、むしろやらかけてむしておく）の、御所柿も他に類がなく、美味しいといふ。故郷、思ひ出づるだになつかしい感想のわくものを、五十里の遠くにはなれて、夜な〳〵の夢は城山の下、扇の仙を眞向ひにみる、故郷の家にのみ通ふ。（入賞）

蜜柑のない國

平塚白百合

W子が病んだ時、みかんが吸ひたいと熱病に倒れた。此度生れる時はなーみかんの澤山なる國にお生れよ、と母親は入棺する娘の髪をなでながら泣いたときいたはもう十年にもならう、我故郷には蜜柑の木が一本もない。

オレンヂの花くゆる、なんて云はれると、私は口惜しい。柑子をうゑても三年の後には茨になるのだもの、そうして實は決して結ばない。

しかしあのピュアーな小兒の頰の色を想ふリンゴは我北の國の誇であらう。

イブやアダムが口づけたのもこの木の實ではあるまいかと思ふ。色や匂ひやスヰートな夢をさそひさうな其の實は累々と青い葉の中につゞられて、空の色も柔かい高さをもつてくると、我は林檎林の直ぐ先きの牧場の少女から、ふちの厚いコップに濃い〳〵そうして甘い牛乳をきつと持つて來てもろう、そうしてうつとり青草の匂ひの中に包まれて牛乳をのんだ、それは我故鄕に於けるわたしの日課だ。

私はリンゴの美しい誇ともう一つ馬をほこりたい。

夕ばえのサブライムな夕、山の間から浮く霧がボーッとうるほひのある紫に、山に浮き上ると、小さい牧童につれられて、平原から山間の谷村には入つてゆく其の長い〳〵ラインは、幾町にもつゞいて、山狹に入り切つたしろ、霧はとけて此の山や平原はボーッとけぶつて、平和な星がチンクル〳〵ときらめき出します。

一度汽車にしてこの平原を通つてごらんなさい。

線路に近くも澤山あそんでゐます、その一つ〳〵がよく肥えたたくましい光澤のいゝ毛を、日に輝やかして放逸に草をけつたり、何といふ心よい事でせう。

山は遠く我の街をかこんでゐます。岩手富士や津輕富士は、カッキリと東北山脈の上にセピア色にゑがゝれてゐる。

山の青いのは時期がごく僅かで、渡鳥が群れをなして夕雲をわたるやうになると、もう雪がふり出します。水氣の殆どない、粉のやうな雪は僅かなすき間にもふり込みます。そうしていく日もとける事がない。日があたつてもとけるけぶりも見せずにその上に〳〵とつもるのだ。

こんな時この街の家々の納屋の影や底の下にきつと氷

豆腐が藁でつかねてつるされてる。ニガリの多い豆腐は黃色くからびて二寸位の少し長めな物にほしかたまつてゐる。風がふくとカラ〱と家をめぐつて鳴る。農家や魚にうとい此の邊の家は一年中の菜に用ゐられるのだ。

勝手には大きな爐が切つてある。中には草鞋でふみ込む者もある。その上に天井から川魚のくしざしが藁のつとにさゝつて煤にまみれてゐる。

寒い國の習慣で大ぴに酒をのむ。女も隨分大酒なものがあつて、熟柿くさい息を平氣で吐いてる。私はわが故鄕ながらいとはしいものであると思ふ。のめば必ずうたふ。どんな時でもかゝされないのは、「さんさ時雨」だ。淡いローカルカラーな音は文明の至る事遲い奧のくにゝふさはしいものである。

北國の天地と云へば人は皆メランコリーの天地を思ふであらう。灰色の露國のやうな冬を思ふであらう。けれどわが故鄕はも少しやはらかいあたゝか味をもつてゐる。そうして早く露西亞敎のは入つたくにである。それ故か盃をどりなどゝいふ遺物は私の父すら覺えぬといふ。太平洋を十里以上はなれた山中の小さき街は、今ペンキ塗りの商店も二三立つた。我幼ないメモリーを育てた乳母の家は中學校のしき地の中には入つてしまつた。

折々夏はおとづれるけれど六つの時、既に〱都の人となつた私は、ズー〱の鼻でゑすら知らないのである。（入賞）

賤機山の麓

野の花

小川の板橋を渡つて、要の生垣が廻はされてあつた。そして大きな杏の樹が、垣に沿ふてあつたので、實のなる頃は子供がよく石を投げる。たまには障子を破つて窓から中に飛び込む事さへあつた。家の裏は、廣い廣い畑の柿の樹が五六本。皆澁柿だつたので、葉が落ちてしまつても赤い實は、何時までも霜が眞白に降る頃迄殘されてあつた。一漏町の若い衆がいかにも甘さうなので夜盜みに入つたが翌日見たら、皆木の下にたたきつけてあつた。中庭に行く方の境は古い椿の植込になつて居た。遲咲の花の落ちるのを拾つて、私は物おきの戸にもたれて一つ〱白絲を通して行く、眞白な絲は、花粉で黃色くなつて、汚れた金絲の樣になつた。手の下から裾に迄赤い花がつながつて、下の方はうつむけになつたまゝ地びたについてゐる。暗い綠色の葉がうんだ根元に散つた花片の綺麗なのをえつて通してゆく。慥かそれは六つ位の春だつたらう。切りかぶろの私はいくつも〱通した花を首にかけては喜んで居た。富士山の雪はあつくても、梅の花はもう咲いて下萠の草が美しい。茶の木の根や、生ぐねの間々を、よく蕗の薹をさがしたものだ。淡い綠のまるい芽が、嫁菜やはこべの中から頭を出して居る、それがほんた

うに嬉しくて白い花の咲いたのなどなつかしいものであつた。賤機山の麓の町。撫子のたよ〳〵と咲く、白い、河原の間を縫つて、水がゆく安部川も流れて居た。堤の上に、仄かに月見草が咲く頃には、家の前の小川には螢がとんだ。そうして此地しか居ないといふ古い傳説由井正雪の亡魂とかいふ蚊とんぼが澤山とび出した。山梔の白い花を取つて、竹を通して流れにかけると、くる〳〵と美しくまはる。其頃になると、淺間樣のお宮移しがあつたと思ふ。それはさくや姫の母宮は、大變子孝行な方で、暑くなると姫宮を山の頂の、涼しい宮に移して、自分は山麓の宮に移られる、何時からのならはしか、毎年〳〵冬と夏との初めには、此宮移しがあるのだつた。町から二里、田をぬけ、村をよぎつて、私はよく母につれられて久能のお山にいつたものだつた。麓の濱邊は、砂糖黍の村だつた。

白帆を通り松を渡り、磯の苫屋を拔けて來た汐風を浴びて、眞黒になつた漁師の子等と、砂糖黍を一所に、嚙みながら遊んだ。南の國のしのばれる日の光、半裸體の彼等、甘い黍の香、今更其頃がなつかしい。

あんまり黍をかぢるとてこらの子の樣に、齒が惡くなるよとお山の家の小母さんはよく言つた。

久能山は美しい。いくつもに曲つた石段をのぼる。一くぎり登ると休み場がある。叉二三十段のぼると、切株があつたと思ふ。休む度にあたりの景色が變つて行く。木の間から駿河灣を廣々と見渡した時の心よさは、今もまだ忘れられない。三保の松原の羽衣の話など小母さんは指さしながら話してくれた。椎の實の落ちる頃はお山で澤山ひろつて來た大きなのを、爐にくべてはやきながらいろんな、おもしろい話をしてくれた。其の小母さんは今は居ない。

八月。私は伊勢路にいつた。十年ぶりに見た故郷、山の姿も美しかつた。川の流れも靜かであつた。ひよろひよろとならんだ松の木も昔のまゝなのが何より嬉しいと思つた。しかし我が家には見知らぬ人が住んで幼なじみの友達の影も見えなかつた。（入賞）

那珂河の水源

柴藤くに

『お前は何處へ行きよんなるとけ？』

『俺な？俺は一寸そこまで……』

私の故郷と言ふのは。女同士でも、こんなぞんざいな、口の利き方をする處である。優しく、美しい言葉使ひに慣れた都の人が聞いたら、親子同士の對話でも、まるで喧嘩でもしてゐるやうに思はれるに相違ない。

那珂河七里の水流を溯れば、筑紫平野はだん〳〵狹くなつて兩岸に山と山とが相逼つて來る。釣垂の絶景より更に溯る事一里。山は漸く逼つて、那珂の流れは愈愈急に、岩と岩との間を奔湍が、白く激して居る。其の流れに沿うて草家が、三々五々、二里が間に連つてゐる。是れが私の故郷——五ヶ山である。

背振、西宮嶽。石谷、九千部などの連山が、此の寒村を威壓するやうに、四周に聳えてゐる。見晴らしとては更になく、摺鉢の底のやうな處である。

然うした私の村は明けるに遲く、暮るゝに早い。冬の頃には日が西の山に隱れて、谷の村々には、最う夜の氣が、もつそり襲つて居る頃、東の山では力弱き落日の光線を浴びて、其の頂がはつきり色彩られてゐるのを見受くるのが常である。旅人が日暮れに近い頃、此の谷に入つて、急に暮れたのに驚く事があると言ふ。時として秋の頃には、谷の村々では最う燈火がついてる頃、西の山の向ふでは、あか〳〵と夕榮えがしてゐるのを見る事すらある。

摺鉢の底に住んだ村の人々は、流行も追はず、榮耀も求めず、富貴を貪らず、文明とさへ懸け離れて、極めて平和なライフを送つてゐる。

一月二月の頃、鶯が梅が枝に來て啼く頃は、此の山里は春と言ふには、まだあまりに早い。

燃え立つやうな赤い山つゝぢが、岩根や、柴草の間から、ちら〳〵と見え出した頃、山里の春は舞踏の女が、ゴム靴でフローアの上をすべるやうに、しのびやかに、音もなく、やつて來る。春の氣はひが立てば、流石に山里も、長い冬の眠から覺めて、嬉々の聲が村々に漂ふて來る。赤葉交りの山櫻にも、趣は深い。新緑の頃は更に氣持が好い。

家々に投網の用意せられる頃は、最う夏である。

『今日はいくら獲つた？』

『今日は水が深くていくらも獲れなかつた。』

こんな會話が村の到る處で取り交はされる——鮎獵の話である。那珂河の鮎獵は、此の山里の夏季の唯一の仕事となつてゐる。夏の夜、那珂河を沿うて下れば點點として、火把の火の連るに驚くであらう。總て鮎を捕へるのである。

夏の時季は正に水の時季である。高い崖から落ちる水聲、田から田へ落ちる水音、岩に激する水聲、半夜目覺むれば雨かと疑ふばかりである。

夏季に於ける天與の仕事に米搗きがある。「得三の米搗き」と言ふ。こんな山里でなければ、容易に見ることを得ぬ。踏み臼の、人が足で踏む部分に箱を作つて、崖より落ち廢る水を注ぎ入れる。箱に水が滿つれば重みに依つて、ギーッと上にあがる。水が落ちれば又元の位置に復へる。ギーッ……ドドッ……トーン。と極めて悠暢な音を立てゝ、幾十回を繰り返へせば、幾ばくかの米が白くなされるのである。眠り就かれぬ夜半など、此の悠暢な音を聞けば寂しい思ひを增さしむる。

秋は山より谷へ、谷より村へと襲つて來る。山々が黃ばんだ時には、此の山里は却つて明るくなつたやうな氣持ちがする。『栗が笑ひ始めた』と言つて、村の子供が籠を下げて、栗拾ひに山へ行く。村の若い娘達は、大勢連れ立ちて毎日蕨狩りに出掛ける。村の男達は、皆山に入つて束木を作るに忙しい。

かうして村の人々は、秋は殆んど山の中で暮らす。夜具一枚に寒さを喞つ一夜、明けて見れば、寂びれ果てゐた山々が、美しく白い装ひをなしてゐる。『冬だ』と言ふ叫びは、此の山里の人をして戦慄せしむる。遠く離れた小學校に通ふ子供が、赤い毛布に包まれて刻み足に行く後姿が、何んとなく寂しい感じを起させる。恁うして此の山里の四季は、限りなく循環して止まぬ。村の人々は此の谷に生れて、此の谷の土となる。彼等は更に、便利の地に遁れようとは決して企てないのである。

未だ見ぬ故郷

鈴蘭

故郷――とかう靜かに、呼んで見るだけでも、懐かしい心行く思ひがします。それほどですから若し、私が私の故郷を訪ふことが出來たなら、どんなに嬉しいことでございませう?。不幸にも私は自分を生んでくれた懐かしい故郷を訪はぬ計か、全然故郷を知らないんです。生れて一年目、私をこの家族は皆、今住んでゐる此處へ來たのです、併し父母は來たのでなくて、歸つたことになるのでしたが……。始祖よりの墳墓の地、といふ傳統的な感を二十年來住み慣れたといふのとで今の住所が、眞の故郷――生れた所――かのやうに思はれますが、考へてみればまだその先きの故郷が私には有るのです。

同じ縣内の湖畔の地、海拔四千餘尺の伊吹高峰に近き所……それが私の故郷なのです。今頃は屹度湖邊の葭原あたりに行々子が鳴いゐるでせう、伊吹山には毒草の花が咲きほこつて居るでせう。生れた家は……什麼に―、村は……人は……といつも〱北へゆく雲や鳥を見ては種々と想像してゐます、國内の事ですから、さのみ遠いのでは有りませんが、どうも行く機會がなくて眞實に殘念です、まだ見ぬ故郷に憧憬れ〱て、終に逢ひ得ずに、私は此の國を後に見たこともない遠い所へ行くやうな事はありますまいか?、噫々――未だ見ぬ懐かしきわが故郷よ――。

大和路

貞子

彼岸花の毒々しい赤や、野菊のしほらしいむらさき、ところ〴〵に小さいま白い花の、みだれさく草の野を分けて、汽車は今し河内野をすぎ、大和路に入らんとて、東へ南へとひた走る。あの龜の瀬のトンネルの長きが一ッ、短かきを二ッこして、大和へ入れば、二子山のかなた、櫻井の里に、なつかしきわが從兄妹は居る、山にかこまれし村よ、岳の家よ。五畿内は、山みなまろく小さきと、人は歌つたけれど、山なき土地に育つた私には又なくなつかしい。母が生家は今もなほこの地に在つて榮えて居る。私はこの地に生れて、この家に育つた。

幾春は逝き、いく秋はすぎて、月や其夜の月ならねと、まだうら若い十八、母のふところに、いだかれて、私は幾度、この途をゆきゝしたであらう。

おゝ、もう九年ぶり。早、一むかしも遠き過去となつて了つた、今、長きわが髪も、其ころはまだ引きつめたお下げにして居た、八ッか九ッ位であつた。

其ころ、毎朝、かゝさず宮詣でする、曾祖母の袂につかまつて、漸やく覺え初めた、琴唄の萬歳を、聲そろへて歌ひ乍ら、初夏の涼しい朝の畷徑を、露ふみしだいてたどつた、果は大きな聲で、從兄に敎はつた軍歌などを歌つたりして、曾祖母の嬉しげな、笑顔を見るのが、小供心にも、ほんたうにうれしかつた。

それも、早遠き昔となつて、縋つた曾祖母は冷たき土の下に永き、ながき覺めざる眠りについて居る。

曾祖母は又、遠きとほき、むかし、大庄屋の家の愛娘として、生ひ立つた自分の若き頃の、華やかなる夢を、長夜の寢物語りに、美くしい彩をかざつて、きかせてくれた、また、私はそれをどんなに、樂しくうれしく、聞いたであらう、それに依つて、私はいつも封建時代の美くしい繪卷物を小さい胸に、つゞッて見た。美くしい過古をぞてる曾祖母よ、美くしい夢よ。

寒い冬の朝、雪の山に、共に兎を追ふた事もある、從兄は驚ろくばかり、丈のびたと聞いて居る、百姓の子なるが故に、髮梳づる術もしらず、といつやら手紙の端に記してあつたのを見て、私はその人のために涙がこぼれた、よく爭つては、白眼まれて、恐かつた人の大きな眼などを、ふとおもふ。

七人の我いとこは、今日の久方ぶりの、おとづれをどんなに待つて居られるだらう。

おゝ、なつかしい村よ、家よ、草の香よ、

汽車は今、トンネルに入らんとて、悲しい笛の音をたてゝ走つて居る。

本號 執筆諸嬢の住所別

▲東京。小宅てふ子。ふさ子。藤田幾久子。草の門。さかえ。筆子。望月野薔薇。ひざくら。水仙子。初鹿野道子。ひなげし。香孔花。美雪。古那夢。平塚白百合。田澤野の花。青柳▲武藏。大鄕米子。きりぐす。中村みどり▲橫濱。千鶴子。月草▲常陸。田村紫色女▲越後。阿部胡蝶。糸柳。齋川翡翠▲信濃。前島優梨子▲岩代。はる子▲相模。しうん子▲伊豆。加藤爲子▲駿河。薄紅▲名古屋。舞姫。波の花▲若狹。杉若里子▲近江。若葉▲京都。要司村福子。かほらね▲大和。河崎八重▲大阪。梨花。やゑ子。はる子▲神戶。港の女▲土佐。譽田順子▲備中。春子▲福岡。筑紫饒子▲不明。N女。草苺の花。以上。

俳句



○（天）　　備中　春子

蛇穴を出でて野の道照る日哉
乙鳥や座敷普請の泥仕事
穴を出る蛇に恐れし女哉
蛇穴を出づる氣配や草動く
秋晴れや落穗を拾ふ雞肥えて
時雨る日を捨てたる猫の戻りけり
朝寒や焚火に集ふ普請小屋

○（地）　　越後　翡翠

交番の前に巡査の月見かな
秋晴れて白壁白き在所かな
善鬼眼を洗ふ洞の水も秋
博勞の手拭金や渡り鳥
長安に古書を探れば紅葉散る
秋雨の一日を障子張りにけり

○（人）　　茨城　紫色女

夏の月伽藍のかげに隱れけり
水の香や湖畔の宿の明けやすき
藻の色を分けてあみ打つ月夜哉
蒲の穗に赤き蜻蛉のとまりけり
合歡の花水に漂ふかほり哉

○　　京都府　竹村まゝ

專念に石切る人や秋の風
秋風や甲斐ケ根かけて雲の飛ぶ
朝顔の百日咲いてしまひけり
草の花石の凹みにこぼれけり
栗の實や珊瑚戻りの女づれ

○　　京都　名無し草

時鳥なくや据風呂落す頃
竹の宿ほそぼそとたく蚊遣哉
京へ行く飛脚にたのむ團扇哉
蚊柱や俳書の軸の煤けたる
萬水の塵撰る儒者の爪長し

○　　岡山市　桃のむら女

神殿の普請久しき青葉哉
青桐や僧居眠す羅漢堂
雷止んで學の音遠く聞えけり
戻り來て燈の黒き晉さ哉

○　　肥前　吉村峰子

名月や土新しき芋畑
嫁入の荷にすがり行く蝗かな
秋風や旅が裂きたる文を吹く
夕顔や宿直の人の五歩の庭

○　　廣島縣　中村靜子

蟲きゝに旅つれてゆきにけり
そのまゝに手折らでおきぬ萩の花
山深き奥津城に咲く桔梗かな

帶しめて一人はゝえむ鏡かな
緋のおびをしめて白地のうつり合ふ

○　東京　夕かげ子

墓場過り町へ急ぐや秋のくれ
髮飾のぬけて落ちけり秋の水
涙多き女となりて秋ふかし
秋風に肥馬の嘶く北野原
石見えて鮎の落ちゆく川瀬かな

○　安井岸枝

初秋やゆびわゆるみぬ君去りぬ
七夕の歌書く女戀あらん
初秋や戀人あらばと思ひけり
初袷肩細りたる女かな

○　府下　高木多香子

白百合や雨ほど落る朝の露
秋晴れて朝栗す菊の花
兩岸の小川の荻や咲き埋む
コスモスや露重くして傾むけり

○　大阪　絹川まつよ

送らるゝ柿や故郷思ふ夕
行夏も〱同じ簾哉
せんぐりに百八燈のかすみけり

○　伊豆　土屋いそ子

糸荻の露こぼれけり袖の上
紅さした女わたりぬあきの水
菊活けて淋しき雨をきゝにけり
樽さげて李白のもどる花野哉
曉の燈籠くらし蟲のこゑ

○　岡山縣　野崎よしの

お祭りの躍りを見るや宵のうち
嫁にくる家とは知らず手鞠突く
七夕に戀知らぬ子も歌書きぬ

○　神戸　雪の女

秋の雲重り合ふて日暮れけり
風凪ぎて鰐射る弓のうなり哉
煙にする文殻多し秋の朝
そへ乳や萌黄の蚊帳の新しき

○　宇都宮　井清子

如意の影拂子の影や朝寒き
時鳥錢に代たる俳書かな
水音の力もぬけて時鳥
目のさめて物食ふ夜半や時鳥
芋汁に時鳥きく山家哉

○　浮舟

白芙蓉一片ちりぬけさの秋
ならぬ戀星合の夜にわかれけり
秋海棠の花いたましき野分かな
コスモスの花のさかりや去にし君
夜業する窓に淋しき蟲のこゑ

○　大和　西田豐

今朝の秋動かぬ水をながめけり
老刀自や障子切張る朝寒み
蟷螂の斧振る怒り秋の風
荻の宿の戸ぼそに忍び車かな
蟲賣の踏み來ぬ淀の橋の露

○　信濃　酒井治子

行く秋を落毛まろめてさびしかり
砂に歌書く明月の河原かな
百舌鳥なくや牧出す馬の肥えまさる
すりへりてくぼむ硯や暮の秋

わが親友

白羊選

濱町海岸

青柳

船料理の紅い電燈が輝き初めた、今迄華やかな夕雲に色どられてゐた對岸の白色の倉も淡く夢の樣に、茫として見える。薄黑い藍色の中に思ひきり延び上つた樣なカブトビールの廣告や、をり〳〵ザワ〳〵と私語あふそこらの立木はそれでも夢の中の繪を見る樣に、おぼろげながらに目にはひる。私はいつもこんな宵には、きつと、胸を抱いて、ソツト裏木戸から、さまよひ出るのが癖であつた。清い月の光を浴びながら涯しもない追想の糸を、たぐつてさまよふ時いつも思ひ出されるのは、若くして逝きませし美くしい友の面影であつた、振の長い米琉の袂に、おもひきり堅く合した細やかな胸、ルビーのきらめく美しい手を胸に置いて、ヒタとばかり、よりそひ乍ら美くしいあの口にするのは、いつも雲井の曲だつた「人目忍ぶの中なれば」、と細いうるほひの有る聲で歌つちや、「姉樣これ好きでせう」と輕く肩に手をかけて、のぞきこむ樣にした。細面なパッチリとした黑目勝な、其の優しい瞳の中に常に不安の色の漂よふてゐるのは、人知れぬ想ひに青春の血汐を渦と狂はしてゐるのぢやないかと始終さう私は思つた、けれど幼い時から姉妹の樣に睦み合つた親しい友は其の儚ない生の終りの夜迄、何事も語らなかつた。あはれ純なる少女の胸に燃ゆる火は、遂に身も心も燒きつくしたのだらう。庭の白萩が露重りにホロ〳〵と眞珠の玉をまろばす美くしい夜、靜でよいと言つた濱町河岸も、好んで口ずさんだ雲井の曲も、遂に……永刧……歌はれぬ身となつた。花はづかしき少女はつひに……あゝ又も思ひ出に泣く秋はきた、ありし世の面影を戀ひて、私は、私は、幾夜恨んで慕うて泣いたらう、哀れ美くしい友は昨日も、前の夜も其の前の夜も、妙樣逢ひたくつてと、枕元で潸然と泣いて、しほしほと歸つていつた、餘程逢ひたいんですね、思ひ斷れないんでせう、御無理も有りません、お可愛さうにと、乳母はしみ〴〵と美くしい友に同情して言つた、私はいつもあの西鶴物の、ヒロインの樣な友の上を、どこ迄も美くしく詩の樣に思ひたかつた、あの短かい生涯も……私はいつも美くしい友を思ふ度に、あの口繪の樣なハイカツタスタイルは、さして置きたくなかつた、人目忍ぶの中なれば……と歌つてゐる時私は其橫顏を見詰ちや、いろ〳〵の想ひに耽つてゐた、思ひきりぬいた白いうな

じに緋がの子襟、赤い鼻緒、紫の繪日傘と、芝屋で見るお染の様な姿を聯想して見た、それがよくにあふ様に思はれてならなかつた、名も知らぬフト相見し其の人の面影を戀ひて、妙さん濱町岸の……せめてせめてヱもう一度そつと夜着の襟で泪をふいた美くしい友はつひに其夜……妙さん不意にのぞきこまれて、ハット我に歸ると、シガーの烟を輪にふきながら兄様が立つてゐた、大橋通りの蒸汽船がけだるさうな、音をたてつつ鏡の様な川面をすべつていつた。と水にうつッた、月が淋しさうにブル／＼と身震ひした、こんな晩白い桔梗を胸に抱いて美くしい友は、フラ／＼と迷よい出やしないかと思つた!!!（入賞）

冬空

草苺の花

物心を覺えたのが五つ位だらう、若い叔父様の手を引張り合つて寫眞を撮つた、其一人は糸さんだ、私より一つの年嵩、日當りのよい庫の前にむしろを敷いてお飯事の道具が列んで居る、小さい江戸輪の頭を突合して草をきざんだり砂糖をこしらへてゐる、吹き來る歎風に甘い桐の香がただよふ、何處に行く時にも對の着物、背も同じ、装もおなじにして、如何なる場所にも二人離れて居るのを見たものがない。「双子でせう、」此度知らぬ人は言つた。學校の三四年頃から澤江さん翠さん松子さんといふ仲好が出來た、人の惡口を受けたが、一切頓着なしに、舊制高等三年迄心隔てぬ親友だつた、私が女學校へ這入つた時には、四人手を取つて泣いた、けれど永久に忘れまい、離れまいと固く握つた心のハンドルも二年三年經るまゝにひがみが出たが漸く緩みかけた、三度の音信が二度になり、二度が一度になり、その一度も絶え／＼に命があるかなしか晩秋の蟲のやうに、多血質の澤江さんは家は貧しいが自ら努めて勉強したので知事よりも賞められた、それ程までの人が私と別れた年學校を止して田舍廻りの俳優の仲間入りしたと聞いた、確一昨年の十月鎭守祭の日、配合のはつきりした装ひ、赤ちやけた髪に細長いベラベラのリボンを飜させて田舍少女が喜んで居る、御輿家の脇手から急足に出た一人の女、見るともなしに振り向けばあら澤江さん、その人だつた、肩上げのない着物、衿に白粉の附いた、一寸粹なつくりだつた、村の若者の吹き懸ける熟柿臭い息をあびて、私の前を知らぬ顔して過ぎた、私は言葉をかけ様といふ勇氣も出なかつた。

あゝ、あれが私の親友か。後姿を見送つて涙がじつと涌いた、或る夕方早く湯を浴びて、散歩に出たら、田草取から上られた松子さんに會つた、如何に變つても懐しい人はやはり懐かしい、あつ松さん！と突然發した言にはなつかしさが籠つて居る。飛びつき度いと思つた、が徐ろに顔を上げて會釋された冷やかな態度を見ては思はず萎れて仕舞つた。

女學校でシスターと契つた人は神經の鋭敏な方であつた。夫れ丈又愛の深い同情の厚い方であつた。然し花に嵐、今年泣いて別を告げて歸られてからは不幸續き今は愛する人に捨てられて、病床に臥してゐる百合さんがそれです。生みの親御を舅姑と思つて仕へる――何といふ情ない言葉だらう、家のため、亡い兄弟の爲め犠牲となつた、嗚呼私のためには復活させられた再世の恩人「儚ない浮世に空しいこの形骸、早う神にすがりたい、が後で可愛いゝあなたは誰に賴つて慰めて貰へる、思へばあなた一人を措いて逝き度くもない」とあつた百合さんの手紙はたしかに熱い血涙がこもつて居た。

可愛想に廣い天地に容るべき處がないと歎く、友と私との間には、十里の距りがある。籠の小鳥、如何とも仕方がない、只折々のたよりだけがせめてもの心遣り。

糸さんは遊び友だち、今でも變りはない。年と共に親友がかはつては仕樣がない。女はかうも氣が變るものだらうか。(入賞)

唯一人の友

失名

三日の旅行を許されて、美代さんと二人、數十里の道を汽車にゆられて、ステーションに着いたのは四時少し過ぎだつた。プラットホームを出ると、向ふから薄色の新お召に大がらな遊蝶花を水彩畫式にあらはした帶を胸高に。愛らしい下女をつれた血色の好い友が、ゆるやかに歩んで來た。あれがあなたの友、と美代さんは先づおどろいた。それも其のはず、なりにもふりにもかまはぬ自分の友、然かも三つも年上と語つてあるのに、意外にも意外だつたらう、着物から帶、指輪、時計、皆お金の掛つたもの、田舍の私などとても傍へも寄り付けぬ。此處ととり立てゝ云ふ所もないが、どこか都會式ではでやかな若々しい友は、私より二つ位はたしかに若く見えるのだもの。

友の日頃を知つて居る私は、さまでおどろきもしなかつたが、一夜二夜と立つ中、私にも不思議と思はれぬ事もないではなかつた、常から美しかつた友は、都に出て三月、いつか都の人となつて、都の中にもまれに見る美しい人だつた。そして誰れとも元氣よく浮々と話して居た。

父とは見知らぬ中に別れ、兄とも故あつて別れて住んで居た。友を守つたのは只だ一人の氣強い母樣だつた乳房にすがつて居る頃から、友は母樣と二人きりだつたと聞いてゐる。其母を一月以前に失つた友、上べは氣強くよそほつては居ても、胸の奧にはいつも涙の泉をつゝんで居る友、どんなに憂に沈んで居るだらうと思つて來たのに、あまりに友の元氣なのに其の心をはんじ兼ねて、私は何も云はずに快よく語つて歸つた。

家に歸つても、絕えず胸にくりかへさるゝは友の姿

であつた。あのにこやかな胸の奥に、……何しないといふことはない。だのになぜ私は聞かなかつたらう、母樣とわびしく過でして來た幾年月の友の越し方と、きらびやかな兄の別莊に、兄の守りで心安く暮らす今の身の上とを思ひ比らべて、人は幸福だといふだらうされど心の奥はどんなだらう、友といつて他に語る人はないのに……年下の自分から何も云ひにくゝて只だかりそめの安着を知らせると、折り返して長い〳〵返事が來た。

「……笑ひにかざる胸には、泣くよりつらい苦痛を忍んで居るので、思ふにまかせず、さぞかし御不足でしたでせうが、御ゆるし下さい……御話致したとて御心痛をまさせるばかりと、こらへて居りましたが、日記を燒いてしまつたほどですもの、泣かぬほど胸はさかれるより…………」

といふ樣な事が書いてあつた。やつぱり……と語らぬ友の胸を思ひやつてそゞろ涙ぐまれた。

私が此の友を知つたのは、六年前の四月だつた。其の頃友は友達の多くに知られて居た、親しい友といふ程の人もなく、言葉すくなの自分は、人に知られなかつた。友は美文家だつたので、作文の先生……獨身の年若い人だつた、がいつも讀み讀みして皆に聞かせた。學校の歸りなどにも、人をおそれぬ友はよく師を訪ふては、元氣よく語つた。國語なども敎へられて居た。そんな事から同じ樣に勢力のあつた二三人が恨んで、あらぬ噂を立てる樣になつた。神經過敏な師に其の事が知れると、習字にも作文にも來なくなつて、知らぬ人まで知る樣になつた。そして噂はいよ〳〵高くなつた。其の中に受持の先生から、女の口輕を深くいましめられた。其の時多くの友はうつむいて目には涙をためて居た。人の言ふ事を只だ聞いて居た私は、何の感じもなかつた、が一番後にじつと唇をかんで居る友を見た時、胸が一ぱいになつた。

そんな事で其の年も暮れ、修業式がすんで間もなく、先生は目出度結婚せられた。一度は目茶〳〵になつた緣談も、再び熱心な我が友の力によつて、其の頃の友の親友であつた花代さんと……うたがひは盡く解けた。修業式頃から私は親しくなつた。花代さんの結婚については一言も言はなかつたが、いつともなしに友の強い心、清い心が胸にしみて、忘られぬ友となつた。清い心をあれまでに言はれて、師の爲め友の爲めに一言の言ひわけもしなかつた、友の廣い胸を、しかも年若い身で、……私はいよ〳〵親しんだ。師の家庭の平和は表にあらはれぬ此の友の賜ものだ、といつても過言ではないと思ふ。

今は師も都に出て、友の近くに住んで居る。春代さん明子さんといふ愛らしい兒の父樣母樣となつて。

心強い人、清い人、美しい人、やさしい人、友は其のすべてを合せ有して居るのに、人の多くは清い心とやさしい涙多い性とを解して居ない。天下の英雄吾一人

と云ふ顔をしてると或人は友を許したといふ。

友の心の、日に日に荒み行くのを私は悲しむ。青春の思ひあせんとするまで、破れた想ひを抱いて尚獨りを守る身だもの、荒むも夢むりとは思はぬけれど……忘られぬ思ひも語らで、ひとり胸にひめ、淸い思ひ出に私は獨り泣きますといつた頃の涙多い友がなつかしい。

雪の日

翠

昨年の三學期の初めつ方珍しく朝から間斷なしに雪の降る日である、生憎次の人が缺席で、Ａ組の高科さんと圖書室の當番になつた。入學して大方三年になるが組が異ふのと、一つは向ふが非常な寡言家なので、他組の人などには、紹介されて居なかつたゝめ、未だ一度も言葉を交した事がない。

天氣が天氣なので讀書する人も少なく、先刻まで二年の中里さんが居たがそれも歸つて、校務室をはなれた四坪餘りの室に、唯二人テーブルを挾んで、些の搖ぎもなく時間繰る頁が、寒い音を立てゝ此靜止を破る計りである。

「今度發行の校友會雜誌に何かお出しなすつて？」と高科さんは徒然草文段抄（多分さうだつたと思ふ）からかなり疲れた目を離して始めて口を開いた。

「いえ、何も出しませんでした、貴女？」

「私？私にかけるものですか、もし又禿筆をなめて書いた所でゝ次の日は譴責を受けて沒書ですから」

「まさかそんな事は………」

「いや私は虛飾する事は出來ません、詐るのは嫌ですから、此頑な性が人に容れられない所以でせう、翠さん、けれども私はね！それを直さうとは思ひません悲しんでも居ません、人は周圍に順應するものですから此心も、五六年の內社會に立つ樣になつたら亡ぼされる事と思ひますが、自然に反抗するのは絕對に不可能ですから、唯々偉大なる自然に委せます、オホ……話がとんだ脇道に寄りまして」

「實際校友會雜誌なんてものは、思想に制限がありますから、唯當り觸りのない月並文句を美しゆう飾りたてればそれで好いのです、こんな種類の雜誌には充實した新しい作は到底見られません」　高科さんは同感といつた樣に大きく首肯いて暫らく考へて、前より一層沈痛な語氣で。

「雜誌ばかりではありません、此麼田舍では新しい女の道は閉ぢられて、舊線外に一歩も脫する事は出來ない、私休暇などに親しく家庭に接すると周圍の自覺のない女の聲が、自烈たくつて總べてを擲つて泣きたくなります、けれどもそれ等は却つて私より幸福かも知れない滿足してるから……から考へると基礎なく立脚地なく盲動して居る自己が、悲しくなるのです、徹底した人格！幾年かとれ程此名に憧れたでせう、けども苦惱して未だ眞の自己の定着さへ出來ません、多分捨

てながらも猶過去に對する執着と、確乎な自信がないからでございませう、もゆる樣な向上の底に在る此二ツの暗流のため、泣きながら悶へながら遂に沈默に終るのです、弱いでせう笑つて下さい。

先日石井先生をお訪ねした時でした、一寸した機會から平常の沈默が破れて話し出しましたら、私を誤解してゐらしつた先生は大變お驚きなすつてそれから一時間餘り諄々と女大學や鳩翁道話を引張り出されて、御教訓に會つたのでございます、歸りながら、私の前途に杞憂を抱いて下さる其篤いお心で、なぜ教育家といふ形式を脱して、對象を失つてる教へ子に新しい行くべき道を説いて、下さらないのだらうか、と泌々思ひました、女が此麼に變つたのも自然の趨勢だから防せがうとしてもそれは總べて徒勞だわね！、私共の今の懊惱が、やがて來る次時代の女性の社會的地位婦人標準の基となるのだと思ふと、悲しい寂しい慰安を得るのです、今の私は只寂しく迷ふてるのです。

「吁高科さん！總べての苦しみ寂しさが同じでございます、私も決斷のにぶい意志の弱いに泣いてる女です」覺えず手を握り合つた。涙は二人の頬を流れた。是が私の親友を得た初めての日の事です（備忘錄より）

美しき人

秋の花

瀧の樣に長くたれたリボン、襟止（ブローチ）や指輪（リング）の光、むせる樣な白粉の香、華かな電燈のもとに立つて、鏡に映る自分の姿を見て綾さんはほゝゑんだ、美しき眉や白玉の如き頬や、若き血しほの漲つた美しいその俤、綾さんは美しかつた。

紅友染の振りの袂を胸に、母樣にせがんで買つて頂いた花のかんざし、それ等の多くはまだ手函の底深くあるけれど、その花のかんざしをかざる綾さんが、あんなに變らうとは、神ならぬ身の知る由もなかつた。

（秋ちやんを見る度に私は綾を想つて）と伯母さんのお顔のくもるのも無理はない。

ゆく水の流れと、人の行末は、はかないものは多いけれど、綾さんのおん身を想ふと私は泪がこぼれる。

そんなに思ひつめる程の祕め事があるならば、私にだけ秋にだけでも何故語つて下さらないのと、一時はすゐ分恨んだけれど、うす暗い病院の一室に、淋しく自分の身をはかなむ綾さんを見ては、どうして恨めよう共になげけとてどうして恨む事が出來よう。

綾さんは美しかつた。本當に美しかつた。紫矢絣のお召にマガレット結ふて、學校に通つてゐる頃から美しいといふ評はいたるところに高かつた、デヤレストにとせがむ人も幾人か、双手の指を屈してもなほたりない程であつた。共に道を歩めば多くの人が、きつと振り返つて、あゝ美しいとは云はずともその眼によまれる。私は綾さんを羨ましくも思つた。

＊ ＊ ＊ ＊

去年の春、綾さんが卒業なさつた送別會のある朝だつた、夜が明けるか明けないに、綾さんが昨夜から急にわるいと聞いて、私はびつくりした、家のものにせきたてられて學校へは出たけれど、皆様のなさる餘興も何も夢中（綾さんはどうなさつたの）と聞かれて、（それどころぢやないのよ）とけんつくをくわして後で笑はれたが、其時はもう夢中だつた、歸りにおうちに向ふと大學へといはれたので早速大學病院に行けば面會謝絶、この時の口惜しさ今でも忘られない。

伯母様に伺ふと。何しろ眠つてばかりゐるのでとまゆをおひそめあそばす、親一人子一人伯母様の御心を想ふて私は泣いた。

早くよくおなり遊ばす様にと、祈つた者は私ばかりじやない。けれども綾さんの病は日に〳〵快よくなくつて美しかつた花の顔はあともなく、見違へるばかりになられた。秋、蟲の音も哀れにさらぬだに物想はるゝ秋のなかば、綾さんは病院からなつかしいお母様のみ膝の許に歸つた。

私はそれからいく度も伺つた。さうして、綾さんをしてか程まで物想はしめたその人のうつしゑも手紙もみんな見せて頂いた。

綾さんは悲しい想出よと仰有るけれど、云ふにいはれぬその苦しさは、どれ程でせう。

許嫁でありながら、いくら親の命令だとて互に許した戀人を捨て他家へ養子にはひる人がとNさまは自分の事の様に憤慨なさつた。

いくら當人の意志じやないつたつて上官の命令も時によるわ令嬢をおしつけられて只ハイ〳〵といつてゐるなんて、本當に私ならどんなにしてやるかしれないわ、といつておとなしいM様さへ仰有つた。

綾さんは（みんな運命なのよ。私がはかない運命に生れたのですもの、何も人を恨む事なんぞないわ）と淋しう〳〵ほゝゑんでをられるけれど、私はそのあきらめた淋しい姿を見るとかへつて泪がこぼれて――神様も佛様も、この美しい人になぜ幸を與へないのか？美人薄命とはいふけれど、綾さんにいふにはあまりにざんこくすぎます。

この幸うすき美しき人、今は湖南の片ほとりに淋しくこの世を厭ふて、病める身をはかなう暮してゐます、綾さんは、（どうせもう不治の病ですもの）と仰有るけれど、私は此の美しい綾さんに幸あることを祈つてやみませぬ。

波荒きさがしの海よ永久に守れや美しき人を。

缺損

はつゆき

「今日はお寂しいでしやうおみきすゞがかけて」といはれるまで、知らず〳〵H様と私とは仲よしになつてしまひました。どんな方？つて、さう一寸云はれませんわね、むきになつて問はれちや。

そりやいゝ方、ほゝゝおかしいわね、さうよお色が白くつてお背がすらりとして、いゝえそんなに美人でもないわ、そりや矢張類を以て集るですもの、だつてあなたにしてからがさうじやありませんか、よりく美しい方と並びたくはないでしやう、まあいゝわそんなに茶化さんでも、かしこくて敏捷でいつも優等ばかり人を見る眼なんかそりやすぐれてゐらつしやるわ。いゝえおきやんじやないこと、ほんたうにお優しい、おや酷いわね、醜婦にだつて、醜婦にだつて相當のやさしみはあるわ、ねえHさん、未來ある女をさして醜婦とは何事でしやう、憎らしい！そりや怒りますともあたり前だわ、たつた一人の親友に難癖つけられて默つてゐるたわけがあるでしやうか、誰だつて誰だつて……ハアおかしいでしやう、たんとお笑ひ遊ばせ、私はかうした偏屈な女です、お寫眞？みせたあげますともずんといゝのがあるから、だけどちよつと困るわねいいつてよかないわ、私は、なんだつて……ほゝ弱いのね伉うつたりうたれたりつて。

いゝでしやうこの眼！インノーセンスな、あゝすき！そして締つた脣とが全部を引き立てゝるんだわ、いつもかうした油つ氣なしの、一寸だんのついた髪を無造作に捲いてらつしやるの、リボン一つさゝずにね、かと思や時には手製の造花なんかさしてらつしやるわそして何でもよく出來て、え全くよ、私なんかほんとうに戀しくて……あゝなつかしい！全く秘密になされてる成績簿だつて、二人でみせて戴く程、先生にも友達にもゆるされてゐたんですもの、それがどうでしやう卒業といふ美しい名と共に梢はなれた花のやう、わかれくになつて了つたんだわ、淋しかつてよ、其の當時！其後偶の集りやおぼつかない雁のつかひにも、つひぞ一ぺんいやなこと仰有らず、いつも輕い笑ひに人を引きいれるつて風なの、いゝえずるずるじやないわちやんときまりがあつてそしてかうなんでしやう、全く感心。なんぼ親しいからつて心やすいからつて、腸の底まで吐き出すやうなのは、あんまり好かないわ、それも時と場合と程度によるけれど……遠ざけられたやうなのもまたいやだけれど。

「……ほんとに失禮ばかり」してゐました、どうぞかんにんして頂戴よ、私はやつぱり神經過敏ですね、すぐわけもなく悲しくなるんですもの、こんな調子では到底人の慰藉者となる資格はありませんわね。よつぽどどうかしてゐるとお思ひでしたでしやう。

お心づくしの御おくりものは、長くく紀念にいたします、遠い所、むさくるしい所をもかまはず、わざわざいらしつて弱い女の首途を祝つて下すつた一人の同情者のあることを永久に忘れないために。

千葉の兄からも、昨日紀念品を贈つてくれました。父や母も非常に心配してくれます、私はこし方やゆく先を考へると悲しいことばかりですが、このまゝではすまないですから、勇氣を出して活動してみます。

女の歌へる

○　東京　島　良子

猿辷り紅に咲く夏の末我は一人の君を戀しぬ
朝霧は白くまよひぬわが前の芝生堤に人あらはれぬ

○　姫路　磯　菜

うとましとわざとそしりて君がこと絶えず語りつ我胸やすむ
空寢して夢見るさまを裝ひぬきみが歸りてさゝやきし時

○　近江　植村ひろ子

片栗や白粉よりもなほしろき少女のはだの美しきかな
美しく草まじりなる白百合を摘まんとすれば露深きかな

○　深川　花野芳香

海ばたにまるべる青き石がそゝはぐれて歸る此の戀ひ心
汝差す香漂ふ頃を接吻を思ひて歩み戀しうなりぬ
海に行く空しき心海に行く戀ざめ際の花の吐息よ

○　仙臺市　安井岸枝

黑かみのひとすじをだに惜しと云ふ若き心のなほつゝけかし
長き袖むねにたゝみて岡の上に君まつ夕べ月見草咲く

○　陸前　浮草子

去にし日の足はぬ事に涙する天地小暗く雨けぶる日よ
野の草は薄紫に花開く秋なればこそ蟲繁く啼け

○　靜岡　西島しをり

八月の末ともなれば高原にしのびしのびに秋風は立つ
伊豆の國空晴れゆけばたゞなはる山のかひより秋雲の立つ

○　大阪市　吉田秋代

我が行く道君が行く道いつしかに別れてありぬせんすべもなし
君による心君をば忌む心たゝかはせつゝ君と相行く
手伸ぶれば壁冷たく海の如し佗しく死をば思ひつゞくる

○　近江　鈴園

此の一夜誰と語らん願ひにて咲き出でにしや夕がほの花
人去りし後に漂よふ洋服の香の故知らなくに懷かしき哉
流れ星北へ走れば海思ひ南へ行けば君懷ふかな

○　筑紫　饒子

左月少しあげつゝ小石などけりつゝ歩く人なりしかな
人形のひとみにも似て嬉しかりまんまるき花あまごけの花

○　岡山縣　大熊文子

秋の日のよわき光は葉がくれの黄なる柑子にあたゝかく照る
沖のしま今暮れはてゝ夕闇の中に小さく神の灯の見ゆ
山見れば山なつかしみ河見れば河をしおもふ若き女は

○　群馬縣　高橋夕星

我胸の琴に觸れたるときのごとこの月の出を高潮のする
白鳥の翼と己が若さとは共に悲しく憧憬るゝかな

○　熊本市　長野白哀子

晴れしかと見れば又しも雨のふる秋はあだかも我が性に似て
君なくて秋は來たりぬ淋くも桐の落葉を雨白く打つ

○　尾張　森々江子

彼の人の彼の夜着させし浴衣地の模樣に似たり夕顔の花
何者か深夜の窓にさゝやきて過ぐるが如き秋の雨かな

○　城南　詩森香

七人の男等は皆わが前に立ちふさがりて大手ひろげぬ
七人の男の子はいつもわが前に伏せどさびしき君いまさねば

○　伯耆　積山正子

かばかりのことばとむねをしづむれどなほもれいづるわがなみだかな
やれはてし屋根にまとへるつたもみぢ宿をかりてもみまほしきかな

○　府下　浪野

放浪の旅かや女たゞ獨り切れんとまでに疲れし絲よ

○　美濃　夢の人

廢き室ものみな青し夕暮の瓦斯の光りをさびしと思ふ

○　丹波　吉莨のぶ子

するものゝ戀はくだけぬかくまでも弱きこゝろをわれはもてるや

○　　　　　　大　阪　雑　賀　し　づ　子

たわむれに男ぞたゝくしろがねの愛の扉は開かぬものを

○　　　　　　京　都　芳　　子

やるせなき胸を抱きてほゝ笑みぬ我れはをみなとさとりし日より

○　　　　　　靜岡縣　壽　　賀

幾千の歌よみしかど其の奥に君てふ影のこもらぬはなし

○　　　　　　宮城縣　馥　　子

夕ぐれや山は紫雲ははなだよき香たゞよふ心地こそすれ

○　　　　　　北海道　海　　姫

秋こんと人の言ふより思はずも白きうすぎぬすてじといだく

○　　　　　　白　き　花

わが胸はなどてかかくは亂れけん野分の朝のコスモスのごと

○　　　　　　岡山市　立　岡　藤　花　子

美くしき眸に我を見給ひし君の夢見て悲しうなりぬ

○　　　　　　長　野　わ　か　ば

何事か心に欲りするもの得んと古きほごどもほぐしては見つ

○　　　　　　三　河　不　三　子

金星は今かしづみぬ山の端に萩のしら露あはれなるとき

○　　　　　　山　城　木　の　花

大瀧を見しおどろきに眼をとづるわれはかよわき女の身なり

○　　　　　　深川區　春　川　花　舟

秋の日や松葉の下の枯れ草の黃ばむを見てもそゞろかなしき

○　　　　　　大　阪　田　野　靜　子

酒藏のいらかの上に明けのこる玉とも見ゆる月の影哉

○　　　　　　花　陽　女

われはたゞ君を戀すとえ思はずいつの世かくぞ二人は誓ひし

○　　　　　　廣島縣　中　村　靜　子

十六の胸はみだれぬ一しきり秋風立てばすゝきの如く

○　　　　　　京　橋　二　葉　癸

音たてゝ電車は去りぬキラ〳〵とレールの上に夏の日輝りぬ

○　　　　　　芝　　萩　原　晄　子

秋草のみだれて咲ける野のはてにきろびて海の人戀ひてゐぬ

○　　　　　　土　佐　は　る　み

君が妻美し女と聞き何となう女心の安からぬかな

○　　　　　　本郷區　中　村　え　い　子

人妻と呼ばれて泣きぬ若き姉萩咲く庭に月白き夕

○　　　　　　東　京　ゆ　ふ　か　げ

この世終に闇となるべき運命ぞと星の流るゝ空占ひぬ

○　　　　　　長岡在　山　　栗　　子

十六の羅漢すゝけし山寺に君と憩ひぬ白萩の花

○　　　　　　神　田　石　田　美　子

はかり得ぬ歡喜に咲ける赤き花手折らんとする恐しきかな

○　　　　　　横濱市　金　井　清　子

何事も君いふまゝに打默し吾れてふものゝ空しくなりぬ

○　　　　　　信　濃　下　枝　よ　し　子

十五夜の月の光に桑園の夏蠶桑つむ歌の聲かな

○　　　　　　常　陸　田　村　り　き

引しめてゆるめまじきは紫の心の駒の手づなりける

○　　　　　　大阪市　三　大　寺　久　子

別れきてしほ〳〵かへる夕暮の素走にふるゝ夏草のつゆ

○　　　　　　周　防　初　　枝

沈鬱にとりこにされし少女子はたゞ露を愛づ白萩を愛づ

○　　　　　　茨城縣　浮　　舟

わかき君每夜の如く來給ふをいと危うがる人もありけり

○　　　　　　信　濃　べ　に　百　合

月さやにゆらめき登るまろ山の一本松のよき形かな

○　　　　　　本　郷　ば　ら　香

我むねにひめたる事のかなしさを皆あかしけり白萩の花

わが手文庫

夜雨選

文庫の思ひ出

優梨子

明治二十一年三月五日新調。前島茂夫所有。もう好い加減古くなつたけんどんの裏へ、お祖父さんの筆で大きく斯う書いてあるのが私の文庫である。君ちやん、お前此中へ千代紙や人形さんなんか入れるんじやないよ、可いかえ？學校の本許りちやんと奇麗に入れて置くんだぜ」と念をつく樣に云はれて、

「ハイ入れやしないから眞實に」と欲しい一杯にわけもなく頷いて叔父さんから貰つたのは、皆勤賞と一等賞を一緒にとつた尋常二年の時であつた、けんど貰ふ約束はずつと前からしてあつた。

「叔父さん、早くお呉んなネ、和繪草紙や人形さんの着物を入れるんだから」と始めに斯う云つて幾度かせがんだ。

「馬鹿云つて居るよ人形の道具なんか入れるんだら遣れない、まア學校へ行く樣になつて優等になつたら」と其度に同じ事を云はれて居た。

いきしや貝を入れるに好い樣な抽斗もあるし、一杯何か入れても横から見える好い箱だと思つて、もう欲しくつて堪らなかつた。

鼠色や淺黄や茶色の表紙が着いた日本綴りの本や、たまには何か仇討らしい恐しい樣な繪の描いてある本などを、皆引き摺り出して「さア大事に使ふんだよ、とんだ事だお前にや好すぎる」と云ひながら、蜜柑箱の新聞紙を張つた樣な箱へ這入つて居た私の道具を其中へ入れて呉れた時は、もう嬉しくて獨でそは〳〵して居た。

「母さん、めいぢ二十一ねん三月五日？？つて書いてありますよ」とさも珍らしさうにけんどんの裏を引つくり返して見て云ふと

「さうかえ、二十一年と云へば母さんがお嫁に來た年だよ」と母さんは云つた。

始めは何も入れるものが無くて困つた。お道具包む紫メリンスの風呂敷まで、學校から歸るとチヤンと疊んで入れたけれど、それでも上の段も下の段も隙々して居た。少し工合の惡い抽匣には蠟石筆の缺けたのが二三本ごろごろして居る許りだつた。

叔父さんに叱られるのが、怖くて千代紙は入れなかつた。だん〳〵本の數が增へる樣になると、繪本やお伽噺の本なども幾冊か入つて居る樣になつた。

幾年か〳〵立つて、法制や幾何や神田リーダーなどが、下から引き出す事も出來ない程ぎ

つしり詰め込んであつた頃は、もう本箱の中はでつちや〳〵になつて居た。抽匣の間には試驗の答案などが挾まつてどうしても明かなかつたりした。

千代紙を入れると叱る叔父さんはとつくに北海道廳へ行つて居なかつた。今はもう何處にも居ない。

去年の春、袴の布を座蒲團にする時、其でちや〳〵した本箱はどさりと引つくり返されて、感心にベリグード許り貰つた英習字も、それこそ一つもろくな評の附いて居ない作文帳も、「信濃の春秋」の遊戯に使ふ十本骨の赤い扇も、皆一抱にされてとこしへに袋戸の奥へ葬られた。其時殘された教科書は、明治文範と日曜講談許りであつた。

今の私の文庫の中はあまりに入れてあるものが、放縦である。よく讀めもしない長唄の稽古本も入つて居れば、常磐津のお俊傳兵衛や二十四孝の狐火なんかも這入つて居る。そして其間に色々な人の色々なものが不揃ひに這入つて居る。ツルゲネーフと獨歩の短篇ものが割合に多い。

琴の歌本が見えなくても、讃美歌が見附からなくとも其中を探すのである。其かはり、緣を削つて工合の好くなつた抽匣へは、日附けの新らしい手紙と葉書とが奇麗に上へ〳〵と重ねられて行く。(入賞)

白紙のノート

筑紫饒子

用途はわからないが模樣が氣に入つたから買つて來たと云ふ伯父樣の博覽會土産、もうずつと昔あの京都の、朱の地に一面金でお多福れんを書き散らした只それだけの小筥じやない重箱大の筥、そしてお念入りに角切りのかぶせぶた實に何に使ふのかわからない。

昔は玩具箱だつたらうが今は文筥とでも云ふておかう、紙で坊主雛を作つてやつとくとそりやおとなしかつたよ、容れたり出したり、たまには背負ふ樣な長太郎が容らないつて疳癪を起してたが、とても覺えまいね、と伯母樣は逢ふ度に仰有る。飯事に持つて出て砂や水を容れて叱られたのは微に覺えてる、モッサンやメニコ貝から、それから花だのカード、ビイドロ、ツナギ珠、朱玉などゴッチヤ交ぜに入れたり出したりしてたのはよく覺えてる、實家へかへつてから、母に眞似て覺束ない針先で、桃の實お猿、胡椒など縫ふていれた事もある。あゝ一度さう大喧嘩をした弟が、粘土細工のいれ物にするから貸せ、いや汚れるから貸さないつて、到々私がまけてかしたが、ほんの暫くだつた、女の持つ物だつて友達に笑れたとか、御禮に粘土を添へてくれた、それで弟に習つて作つた茄子と狐の面とが、未だ妹の玩具箱にごろ〳〵して居る、もうすつかり石になつてる。

夫れから小切箱、お清書箱、編物箱かんざし入れなど考へて見ると隨分變つて來た、學校を終つてからは造花用具を入れて一年餘も棚上にはふつておいたが此春

おいに、お前の机を室へ持つて御いで、そうすりやちよいちよい手習も出來るし、何彼につけて便利がいゝ、と母様の命令、引出しのも其まゝでいゝじやないかと仰有るけれど、否中々大切なものがある、人に見せては都合が惡い、其大切なもの丈けを箱にうつしたのである、先づ狀挾に無雜作に挾れた半紙や、罫紙の反古樣の物、これ私の日誌、書きたい時につけたもの、それからふしぎな程生立ちの似て居る武子樣のお玉章、皆卒業當時のもの、まゝならぬ浮世の常を泣いた涙の文字、眞もあらう、僞もあらう、今は銀杏城下に幸多く在すとか。

それと一冊のノート、これは以前の先生、日曜學校の先生にいたゞいたもので、大學形のHの二帖とぢ、表紙は裏共白地に茜とあけぼの色とで積亂雲浮し墨色鮮に「野の花」と行の御筆、裏の隅には私の好きな甘酒花が三ツ程散らしてある、これも御先生の御手らしい、そして紙の五枚目毎には、五線紙とケントとをとぢてんである。書き度いもの書きなさい、ともう二年前東京から送つて下さつたのであるが、未だ何も書かれずにある、あれも書かうこれも書き度いと思ふた時は字がまづくて厭だつた、字も文章もまづくていゝから、ほんとに何か書き度いと思ふた時は、何故かけなかつた、書き度いと思ふ事は山々だつたけれど、今は立派に斷念めて居る、何もかゝずに此のまゝ眺むるのが、眞實かもしれない、これは紀念だもの、話されない昔の夢。其の白いページの一枚毎には、清く美しい先生の御情と、清く美しい私の心とが清く美しい夢となつてこもつて居るのである。書き度くない、話し度くない、一生このまゝ眺めるのである——（入賞）

玉石混淆

春川花身

女子文壇の投書に何か材料を得たいと思つて手文庫をもち出した。バタンとふせて空箱のせると目茶苦茶な物が山と積れた。文がらも有し、寫眞もある、おゝなつかしい操樣の御寫眞、あゝ思出る去年の九月新橋で御別れした、あゝ彼の時は夢の樣でございます。——花香樣もう御別よ左樣なら。あゝ操樣御きげんよう一日も早く御全快遊して歸つて頂戴な御まち申して居りますよ。さらば。さらば。見合す目と目結べる手と手とあゝこれが最後の御別れでした。操樣は十月の卅日に無情に吹く秋風ににほひこぼるゝ菊の花あはれほろりと幽明境を異にして死出の旅路に逝かれてしまひましたあゝ彼の君の容姿何處の空に逢見ん事のあるべきや、花咲くも蟲鳴くも、永劫に歸り來ぬ操樣、秋來る毎に思出る、來る年も來る年も誠をこめてうそほへる君が御好の草花を捧まつる。十九歳を一期として逝かれた操樣の面影、マガレットに白リボン淋しい風情が今も目のあたり浮ぶ樣でございますわ、焦るゝ蝶より花香の君へ、あゝ此年の春琴平神社の緣日で袂へ入れられ

たラブレターだ、返事も出さずにおいたら五日ばかり過ぎて土曜日だつた。校門の所でまつてゐて「僕と一所に來てくれ給へ」と言つた好男子があつたが、すつぱりとことわつてやつたが、其の後も二三度レター〳〵れて最後に「僕がこれ程焦れてゐるになんの御返事もなくて僕大いに失望して居るのです、花香さん可愛そうと思ひ、たゞ一通の御たより給りたく」なんて言つてきたが、かまわずにおいたら又「君僕があれ程たのんでも返事一つ下されないのですね、そんなら僕も男子だ、思ふ事がある、花香樣よくおぼえてゐたまへ」と凄く書いて來たので、これはどんな事件が出來しないともわからないと思ひすぐ返事を出して。そして其の後學校の歸りに彼の男がいつもまつてゐて同道してくれなんて言はれた事があつたが實際困つた、――あゝおや〳〵三友館案内が七つ出た、八重さまと二人で土曜日の午後から淺草へ行くので此れには大いに「いはく」有よシイクレット〳〵思出るオペラの窓よ。T樣……T樣なつかしい彼の窓、見下すT樣見上る二人眼と眼とにつこり笑つたあの窓。空色のパラソルぱつとかざしてばた〳〵とかけ出すあの窓下よ……KSTの三人は相かはらずあの美しい瞳で窓下通る若人の青春の血汐ををどらせてゐる事か?あゝ夢の如く過ぎた去年がなつかしい――小さいブック何んだらうおや寮歌集だパラ〳〵と頁ひるがへして私の大好な――あゝ玉杯に花うけて、綠酒に月の影宿し、治安の夢に耽りたる、榮華の巷低く見て、向ヶ岡に聳え立つ、五寮の健兒意氣高し。ふようの雪の精をとりて、芳野の山の香を奪ひ、淸き心の武士や……又二三頁くると「おのれの好なは世界で二人新渡戸校長に釜山さん……デカンショ〳〵赤門前で、おでんかん酒稻荷ずし………。おや夢二樣の花の卷が入つてゐる、私蕉園樣のも崇拜致しますけど夢二樣の方がハイカヲがつて居るわね私の足と手は誰に見せても夢二式だつて慶應の澤樣の影口ですつてホ……淡紅色のハンカチーフ誰樣に戴いたのだらう。YKあゝ柳樣の若樣だ。私が二八の春淺き頃日光中禪寺湖畔に遊ぶ時、私が鬼ごつこして鬼になつてよき敵御參なれと彼方此方を眺むる折に、彼方の大木の下にかゞんで居る人影締たと飛んで行つたら柳樣の御次男樣だ「若樣如何遊しましてやあ鬼は誰です?ホ……私よ。えつ君ですか僕岩角で足を少し傷めたのです」「おや大さうに出血遊しますね、まつてゐらつしやい」とハンカチ取出して四つにさいてぐる〳〵と足にまく「さあ若樣私につかまつて御いで遊せ」いや大丈夫ですよ!!!と立ち上る二人の襟に肩に袖にハラ〳〵と散る木の葉の雨――若樣あの頃はツーライン姿今は角帽姿で赤門通ひ、あゝ日光から歸る時別れのしるしに下された十八金のブローチと、此のハンカチーフああ若樣都の片ほとりに君を思ひ出でなつかしむ、乙女の有るを忘れ給ふな――赤い紙入何が入つて居るか知ら、あらつ有がたい三圓入つてゐる、いつ入れたの

だらう、なんて間がいゝ事でせうホ……當分小使に困らない。

人には見せぬ

をだまき

間がいゝんだか惡いんだか、母樣も姉樣も出掛けてしまつた。私の側にばかりかぢり付いて、一葉の端書さへ見逃すまいと見守つて居る妹も、どうした風の吹き廻しか、珍らしくも久しく逢はないクラスメートを訪れるといつて、先刻出て行つた。鬼の留守に洗濯？といふのも人聞きがわるいけれど、こんな好機でも利用しなくちや、私は實際何も出來やしないんだもの。

まづ第一に、原稿紙ひろげて見たがさつぱり意味がない。こんな事。いつでも出來るんぢやないか、それよりももつと〳〵重大な事を、と思つた刹那、ふと暫らく披かなかつた手文庫の整理に氣がついた。放浪の旅から歸つて半歳あまり、四疊半の片隅に幽閉された手文庫は、堆きまで塵埃がつもつて居た。妹の机の鍵と合つて居るので。やう〳〵だまして机を交換してしまつたから安心の樣なものゝ、でも鍵だけは紙入にかたくかたく秘めておいた。

バチン――忽ち秘密は破れた!!!

若き人々の叫び、肉體の欲求、涙の文字、幼なき日記などが不規則に入つて居る。思へば昔戀しき追懐の數歟。

あまりに拙なき我が半生、幼なき日記は再び讀むは悲しかつた。けれども、幼なき悶えは癒やす術もあらうが戀に破れた痛ましき胸は、再び春のめぐみに逢ふ事は出來ないのです。

「×さん僕は僕は獨身です、表面は妻があつても……×さん早く良人を持て下さい、さうすれば僕は……」フツ人を馬鹿にしてる。私が眞實彼の人を戀してゞも居るかと思つたのだらうか、當時十六の少女の理想はもつと〳〵高うでございましたよ。

「――花あり折るに忍びなば直ちに折るべし、花なき枝を折るなかれ。――　つら〳〵思ひ起す四年のむかしいとしき君と相見しは…………」四とせの昔、私はまだ小學生、引つめた束髮に海老茶袴の裾を靴で蹴飛ばして歩いた時代。似通つた名前すら覺えて居ないものを異性の誘惑を恐れて居た弱い私は、人にも秘めて語らなかつたが、其後度々の脅迫狀に山吹そへてお返しゝたが何と解したらう、それからふつゝり文通はたえた。

「いかなる故と知らなくに涙あふれてとゞまらず、何故ありと覺えぬに心悶えて堪えがたし、とは此頃の心にて候」哀れつぽくいふのが彼の人のくせ。悲観――煩悶――華嚴へいかないのがまだしもだけれど。お許し下さいませ、私は矢張り弱い女でございました。

「――顧みれば青春徒らにくれ易く、殘花色あせて斷

腸禁ずべからざるものあり、あゝ青春の血なかば戀にそゝぎなかば詩にそゝぎ殘るものは何ぞ」これも同じ人の手、あゝあなたも矢張り弱い人でいらつしやいましたわ。

私の眼はもう疲れた。

數ある封筒の裏かへしては、悲しかりし、樂しかりし、思ひ出の糸を繰るばかり。

あゝ、えにし拙なき若き人は……。

と、玄關に足音、ハッと思つて取かたづける暇もなく……でも父樣でよかつた。ホッと息整理もせずに、再び閉す秘密の鍵!。

幼なき追懷、あゝいつまで秘めらるべき。私もやがては嫁ぐべき身の、いつかは捨つべき此の文殼!!!

あゝ女の罪なのでせうか。

友の新展書

百合香

黒塗の手文庫の蓋を外せば心地よい樟腦の匂ひのして、白地に紅疋田ちらしの、綸子帛紗に掩はれて、淡紅絹の服着た、尺餘の人形は、靴ばきのまゝ眠つてゐる。

手紙の多くを蒲團にして。必親展の文の多くそれは人の心を語つた秘書である。我より他の目にふれさせまいと思ふ信書のみ。

二年前の香高い病院の白い床に臥す身となつた時堪へ難き肉の苦痛にやつれた身に、神經が多く走せたのはこの文章の內であつた。

もし此儘で再び立たれぬではなからうか、若くして逝くは喜しいけれど、亡き後に、文庫內の物の總てを人に見られるのが不安だつた。

病院を出て後、青白い細い手に、ふるへながら胸の波動きつゝ、蓋をとつて見て、雲はれしやうに胸も靜まつた。

永久に消えぬ筆で書いた手紙の數々は、我が生を捧げても悔いぬ、人のではあるけれど、――惜しさ苦しさの情を堪へ、人なき室に閉ぢこもり、二度三度くりかへし朱點ある箇所の總てをよみ盡して、高鳴る胸を押へて、其總てを袂に忍ばせて、霜どけの庭の飛石を傳へた。

紅梅は香ひ高くゑみ交せし、軟かい春の日光はそゞろ心に喜しかつた。病ひ長き臥床に力失せた足の、漸く十歩二十歩歩むに馴れた、如月半ばのひるさがり。片隅の桃の根本に板を敷いて、其上に披いて强くひねつた手紙をのせ、そつとマッチをすつて火をつける。

メラ〳〵と黒片を漂はせる上に〳〵と皆燒きつくし、跡に水をそゝいで、髮にのつた片を落して心安らかに部屋にもどつた。

其後暫くは來る毎に、細斷したり火にして、文庫の內は少許の半紙に當用日記の金文字が、我物顏に光つてゐた。

かくして年移り日記は追ひやられいつとはなしに又手紙がひそんだ。

水色桃色或は灰色竹の模樣の封筒、白の横なのも交つて、或ものは大方は厚く、力ある文字や、花片のせて流れる春の水のやうに、美しい水茎のあと秀でし墨色のにインクのもまじる。

小説を書いた桑港の繪葉書、畫を入れて英詩をさしはさんだのや何とも云へぬ快い匂ひのかみもされども——。

先に燒きすてた人のは一通もない。

信書の多くなる每に、人の命の儚なさを感ずる度に、火に入れやうとは思ふけれど、心の奥で「今暫くとゞめよ」といふてゐのするやうでまだそのまゝである。

然し。あゝ、もし我が新たな生涯に入らうとする時に殘らず燒かねばならぬ、とゞめあへぬ哀想のわく。おお此底にひめたいく通かのふし

我心の秘はよし知る人は知るとも、人のものゝ表はれるは罪である。　×先生、從姉、不幸な此の人、のは此後も得られやうが、逝つたのではなくして、再び新らしい筆蹟を、みられない人の美しいもじも交る。あゝ遠く去りし人のかたみ、わが永久のおもひ出の種となるだらう。

自分に關係はないけれど、人のなみだのかずく、「火中」と記したものを、燒きすてゝなほのこる、文庫のふみは、淋しい時悲しい折とり出して慰めとし、又華やかな色彩を想像して、今は人をいたましとも思ふ。

女學校に入學の砌、父上から戴いた、その當時は、可愛い日本人形の部屋として、其頃大切にしてゐた美しい錦繪や、華麗なハコセコやリボンなどで、賑やかに飾つてあつたが年うつり月ゆき今は親展書のみひそむ。

あゝ、我手文庫の境遇の變遷しかしなほその主人公の心こそ、より多く移變したのである。物に相應せぬもの納めた……人には見せずもらさじ我が手文庫のうち。

兄上に伴はれて、倫敦から來た、我がビールのみは、星の瞳をとぢて、人の秘をまもつてゐる。

美しい姿をよこたへて。

形見の文字

止水

流れて早き空の海原、淀むは私の心許りか？緣の半ばに白いカーテンを引いたそれは、戶張の羅衣を月に染さしたと云ふ昔が眞似たいからではなく、彼大きい春日燈籠に折々さす電に我鋭心の怯ゆるを恐れて。例の手箱を持出した、誰も同じ美しい寫眞の數々には只御機嫌ようと云つた「相變らず御勉學の程」とある尋常三年からの敎受けた師の君の御文。御恥かしながら二人の母と相成候。とある樣の文其一つ一つに輕い敬意を拂つて丁寧に傍へ置いた、斯かる夜、私の取出すのは、奧に秘めた僅經四寸幅二寸の紙きれ、金〇〇圓病氣見

舞肩に小枝子乳母へとあるいはゞ紙屑である。人に見せたら笑はれやうけれども、私の唯一の憶出、否戀草はこれサッ〳〵と吹雪する冬の夜であつた、氣樂に女中等が嚇々たる炭火にあたりながら、面白相にこしらへる拂塵の裁ち屑から、戀ひわぶる心はふと其遺筆を見出した。明治二十何年か新帳面のくづしである、見詰むる紙面に雲の樣に湧く情緒。豪快な御氣象がよく見えると母の言ふ位、ぎす〳〵した筆つき、二年後に世を去るとは、此時露思召されなかつたのであらう。

マラリヤにかゝつた幼子の日に日に瘦せる姿にエヽマテッ遮二無二飛ばした慈悲の姿、彼の潔癖の旦那樣がまあ熱の中へ入らしつて、早くよくなつて呉な賴む、と仰しやつた御言葉一つで生かへつて御粥になるとすぐ飛んで歸りました、と話されてからは、此處に深く秘めて人には見せぬ御泣せすると甚い御叱りで御夜泣の時は、御母樣と二人で夜通し玩具を以て明かした事も御座いました、御歸にならやい行て入らつしやいと仰しやつた時の御笑顔覺えてゐらつしやいますかと云はれても、影も殘らぬ何故もつと深く刻りつけて置いて呉れなかつたと、雲の樣な物をぼんやり恨んだ事もあつた御父樣奇績が濟度の方便で釋迦の言行を讃美するが宗敎の神隨なら私にも遺筆に籠る三靈の哀慕を御許し下さいまし杜に凭掛かゝつた淸爽な夜氣に浸りながらかき抱く永遠不變の慈愛私の烈しい情緒と抱擁する瞬間目も耳もなくてほしいと思ふ。嘗て父の早死は心に二個の寶樹を植ゑたらうと人は云つた、私はさう自覺した時は、最淋しい頂上だと思ふ。悲しきを嬉ぶ心、愚痴の執着、何でもいゝ身內の痲痺しない限りは此影を薄めたくない、晶子樣なら青春の血迸ばしる時、此悲しみを知る我幸と御叫びになるかも知れぬ、只一度でいゝから、さう云ふ氣分になつて世を人を冷然と見てやりたい、弱い、不甲斐ない心よ、サッと冷い夜風に岐阜提灯の緋房がゆれる、此法燈も殘十日此火と二人今宵は御留守を守らう。

注意

來る明治四十五年度よりは、增刊の代りに年四回の特別定期號を發行し、紙數を倍加して特種の投稿をも募集する筈なれば、今回は次の增刊原稿募集を豫定せず、なほ詳細は次號の誌上に發表すべし。

編者

燈臺の下から

竹久夢路

――應募畫選評――雜誌の繪は他の創作と違つて、日本では、作者の手から藝術に緣の遠い職工の手に渡されて、雜誌に彩られて作者の眼に返るまではカナリ心もとない不安を持つて待つてゐなければならぬ。殊に、表紙畫や口繪は發行者の心も汲まなけりやならぬし、不貞操な讀者を店頭に於て引付けるだけの、チャームをも加算しなくてはならぬ。そこへゆくと比較的草畫の方は、それ等の條件から自由である。またそれだけに草畫には放たれた一の創作としての愉快がある。私は畫集「春の巻」を出す時。私のこの小さな繪も、早晩、一の創作として世に容れられる時が來なくてはならぬと豐いた。今や、この小さき繪が古いコマ繪や漫畫や俳畫やスケッチと獨立して新しい創作として認められるに至つた。自分の手許へ送られた應募畫を見るのに、やはり口繪や表紙よりも草畫の方が作者の感傷を最も自由に、最も愉快に再現してあるのをうれしく思つた。元來、藝術の作品に對して苦心の跡見るべしだとか、いかに努力せしやなどといふ讃辭を贈る世の批評家もおかしいが、それをまた得々として、成功譚更中の人の如く自分を心得てゐる作者も―おかしいではないか。私は思ふ。繪はいかに苦心して製作したるかを見せるためではなく、いかに樂しく自然を見、いかに幸福に生きしや、いかに世の哀音を聞きしやを見せるものではあるまいかと。そりや。人の一生には暗い泣くべき半面もあるであらうが、涙の中に輝く若き心の光を我等は認めたいではないか。醒めた醒めた。と言つて、何もお會式ではあるまいし、太皷をたゝいて廻るにもあたるまいとおもふ。昔、ある男の兒が水の中で戲談に、おれは溺死する人の眞似をして見せると言つて波の上に仰向けになつた。まつたくの所、泳ぎを知らぬ悲しさに、波にさらはれて、だん〱沖へ流された、苦しさに助けを呼んで、もがけども〱、陸の見物は、うまい〱と手を拍つてその眞に迫れるを喝采した。子供はとう〱死んでしまつた。

眞を描かねばならぬと言ひ、眞を描くには實驗しなくてはならぬとなると、もうこりや命がけの仕事だ。

『死を思ひけり』と歌にはよくあるが、私はまた死にたくない。また『死を思ひけり』の眞似もしたくない。しつかりと自分の足もとを見つめて、力強く歩いてゆきたい。で、それなら眞を描かないなら、僞をかくのか。そうではない、人は生れ落ちるとその國のランゲーヂを敎へられる。敵伐ちの物語をきかされる。堪忍、忠義、貞操、勤儉、貯蓄、などゝいふ道德を敎へられる、さ、そうなつて來ると、もうある事相にぶつかつてもこれが、ほんとに人間の情なのか、習はされた道念なのか、わからなくなる。情操と習慣との烈しい矛盾を感じて來る。眞がわからなくなる、それで溺死の眞似もして見なくてはならなくなる。けれど、そこに溺死からのがれる唯一の道がある。それは人の心に奧深く秘められた素純(ナイーヴテー)な心である、このナイーヴテーこそ眞にものを正しく見、情操を正しく感ずることが出來る唯一の道だと私はおもふ。そして正しく觀照され再現したところにフレッシュがあり、新がある。新しいといふのは必ずしも題材ではない、その取扱ひ方だ。

私が撰をする標準といふやうなものは、それで大方言つてしまつた。

表紙

まづ表紙から見てゆく。表紙には畫題がないから一枚一枚に就いて云ふことが出來ない。

△名倉ちづる（一等）旅人がはじめて異國の地を踏んでその國のムスメを見たフレッシュさと、それとはなしになつかしがるナイーヴテーが。あなたの繪にはみなぎつてゐる。このやうな好い繪を得たことを私は心から嬉しくおもふ。

△田邊むや子（二等）これはまたデコラテーヴな約束から出立して成功してゐる。けれど乾いてゐる、もつと水々しくあつてほしかつた。

△神原サキ。これもみんな圖案風に出來てゐるが、オリヂナルな所がないやうにおもへる。一眼見れば作者の氣分がぴつたりと胸へ來るほどの個性がなくては、藝術はいけまいとおもふ。あなたは線が好いんだから勉強なさることを祈つておきます。

△山田てる。思ひつきの好い繪です。けれど色彩がすこし混雜してゐますね。それは、あなたの氣分がよくコンデニスされてゐないからです。

△中本フデノ。これも色彩が明快でない。繪の具の惡いこともその原因の一でせうと。「あこがれ」と言つたやうな心持は出てゐます

△細目久。可憐な少女が花を見てゐる、日本風な好い繪。

△ひなげし。直言を許したまへ。主觀を避けない「筆勢」は徒勞であらねばならぬことを考へて下さい。

△紅。我等は何事にまれ、何時にあれ、自己の藝術的の情緒をなるべく多く滿足させることを幸福とおもひたいものだ。私は、イヤなことを仕なきあならぬなら食はずに痩てゐた方が好い。

△竹村槇子。表紙としては、あまりに日本畫の筆勢に囚はれすぎて。けれど非常に好い繪だ。

△ともえ。この人も色彩の統一に無頓着なので印象を粗雜にしてしまつた。

口繪

口繪は圖案風といふ約束から放たれてゐるだけに好い繪が多い。

△宵の月（一等）名倉ちづる。この頃の雜誌に出る、水彩畫の大家とやらいふ人達の繪のすつかりマンネリズムに墮ちた中に、我女子文壇にこの繪を得たことは實に喜ばれねばならぬ。氣分といひ構圖といひ、間然するところはない。「たそがるゝ」の勞れを色彩にも私の心は躍つた

△お縫裁のひまに（二等）鈴木清子。おどおどした線條、おちつかぬ色彩。くづれた形。科學の標本にあらぬかぎりそのやうなことは言はずもがな。たゞそのナイーヴな氣分に酔ひ得れば好いのだ。

△暮るゝ時。ひなげし。矢張り線條の何ともいへぬ甘味がある。臆け出しのエカキにこの位の筆は見られないまたそれだけに私はその線が語つてゐる多くの因襲を感ぜずにはゐられない。あなたが美術學校の教室で習つた事と、藝術的滿足とが相拒み。自己内心の御心傷と、教へられた發想の方法とがしつくりと合はないといふ煩えがありありと線のうちに表はれてゐる。これは強ちあなたばかりではない、學校生活をした畫工の等しく感ずる所であらう。あなたはすべてに別れねばならぬ、そして、新しく自分の路を歩まねばならぬ。あなたの筆を惜むがゆゑに、私はこの苦言を呈する。

△爐開き　小林夏子。あなたも丹彩の道にはかなり苦勞した人と思へる。構圖といひ色彩といひ、けばけばししくなくキモノのヒダ一つにもおろそかならぬ用意がしてある、ほんとによく出來た線だと思ひましたけれど一の苦言を許しか下さるならば、缺點も其所にあると思ふどうて若々しい、囚はれない、習はせられない自由な、水々しい純なはじめてアンノンの世界を知りそめたアダムとイヴの心持で畫いてほしいと思ふ

（記者曰）なほ此續きあれど紙面餘白なきため割愛す、讀者の諒察を乞ふ。

本號諸作入選の等級

一　等（正金）

▲白き手の謀叛者　望月野薔薇

二　等（正金）

▲たゝかひの跡　小宅てふ子

三　等（以下物品）

▲破れたる友情　初鹿野道子

▲月の出るまで　かうほね

四　等

▲現實から離れたい　ふさ子

▲薄　明　港の女

▲若きやすらい　ひざくら

▲火事と地震と男の手紙　梨花

▲面白い月日　胡蝶

五　等

▲生きた人形　波の花

▲繪に表はしたい心持　水仙子

▲十六になつた娘心　藤田幾久子

▲見合の前　錦姫

▲誘惑に勝つ　しうん子

▲親族の厭抑　河崎八重

▲人並の女　糸柳

日　記

一　等

▲大阪より　やゑ子

二　等

▲健康診斷　きりぐす

▲雑草の花　譽田順子

三　等

▲田舍の町　はる子

▲巷の秋草　ひなげし

▲スイツチヨ日記　田村紫色

▲出　水　草の門

▲葉月の末　里子

▲沼津千本松　香紅花

▲伊香保より　中村みどり

▲麴町行　美那雪

▲湘南日記　古夢

▲山裾の家　蓀紅

小　說

▲本郷の兄（一等）　前島僾梨子

▲お奈津（二等）　新免榮子

▲伯　母（三等）　加藤筆子

課　題

▲文庫の思ひ出（二等）　前島僾梨子

▲日本海の海岸（二等）　小畑はる子

▲蜜柑のない冬（三等）　平塚白百合

▲濱町海岸（三等）　青柳

▲賤機山の麓（三等）　野の花

▲冬　空（三等）　草苺の花

▲白紙のノート（三等）　筑紫饒子

詩

▲波よ（三等）　N　女

和　歌

▲一　等　大郷米子

▲二　等　加藤爲子

▲三　等　要司村福子

俳　句

▲一　等　春　子

▲二　等　碧　翠

▲三　等　紫　色

繪　畫

▲表　紙　田邊むや子

▲口　繪　名倉ちづ子

附言。若杉凉子、神近市子、初雁、珠野すゞ子四君の作物は懸賞以外の特種寄稿なり

本號の賞品は凡て本年內に發送す

表紙の一等は口繪と同人なりし故、わざと二等の方を採用することゝせり。

批評を求むること（一五三頁）投稿家の住所別（一六九頁）來年度よりの注意（一八九）等はそれぐ餘白にあり、御覧を乞ふ。

雜報

△コスモスの咲く氣候となつた、晩秋の空は美しく晴れて、都會の人は都會に、田園の人は田園に、外に出て遊ぶべき時だ、諸嬢も亦娘時代の健かなる日を感謝すべく、外に出でゝ遊樂の時を費したまへ。

△各學校の運動會や、遠足會がある、運動も、遠足も只健康の爲にするのだ、外に意味はない否、外に意味をつけてはいけない。

△月の十五日から上野に公設展覽會が開かれる女は美術の智識がなければならぬなどゝむづかしい理窟は言はないでも美しい繪や、新しい繪から感受する心持を味ふのは誠に快いことだ、早く一覽するのが宜い。

△一時、新聞の社會だねになつた小林孝子は田中伯から離縁された、これある哉。

△雜誌『創作』は再び東雲堂の經營となり、北原白秋氏編輯するとの評判がある。

△『秀才文壇』の十月號は發賣禁止された、十五日に出る增刊『高潮號』は紙數を倍加して內容の充實した大冊を發行するさうだ。

△伊太利と土耳其が戰爭を開始した、未だ平和の世界でない。

△帝國劇場は新女優十數名の卒業者を出した、合せて二十三名の帝劇女優は、新代の女優の卒先者として今後の活動を要す。

○女子文壇定期號投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること▲小説と、詩は振假名をつけること▲小説は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類每に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る、長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◉投稿は每月十五日到着を以て厳に締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲小説と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し二頁以內の短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す。

▽女子文壇定價早見表

每月一日發刊、年四回增刊

冊數	定價前金	郵税	合計
一冊（一月分）	拾五錢	壹錢五厘	拾六錢五厘
三冊（三月分）	四十三錢五厘	四錢五厘	四拾八錢
六冊（半年分）	八拾四錢	九錢	九拾參錢
十二冊（壹年分）	一圓五十六錢	拾八錢	壹圓七十四錢

定期及增刊號とも	定價前金	郵税	合計
增刊一冊	貳拾錢	壹錢五厘	貳拾一錢五厘
半年分（八冊）	一圓二十二錢	拾貳錢	壹圓三十四錢
壹年分（十六冊）	二圓二十八錢	貳拾四錢	貳圓五拾二錢

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず右誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと。用紙は最寄郵便局にて無料にて吳れます。郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增のこと（收入印紙謝絕）。最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▽廣告掲載料

申込期限 發行前月十五日

等級		
壹等	一頁參拾圓	（半頁廿四字三十二行）
貳等	一頁貳拾五圓	半頁十三圓
參等	一頁貳拾參圓	一行四拾錢（五號活字二十四字詰）

取扱所 博報堂。電報通信社。弘報堂。文明廣告社

明治四十四年十月八日印刷納本
明治四十四年十月十日發行 第七年第拾三號
本號に限り 定價金二十拾錢

不許複製

編輯兼發行人 野口竹次郎
印刷人 松本愷
印刷所 東京國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地
女子文壇社
電話 京 一六〇七番
振替貯金口座 壹七貳九番

特約販賣 東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、其外全國書店

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）